
百奇夜行で鬼天烈な。

留龍隆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百奇夜行で鬼天烈な。

【Nコード】

N9962Q

【作者名】

留龍隆

【あらすじ】

呪術、伝承、超能力、民間信仰。日常の中に垣間見える、異界につながるカケラを探せ 高校へ入学して早々、部活動勧誘の折に怪しい少女に目を付けられた目取真司は、翌日から彼女の在籍する「奇怪事件展覧列挙研究会」通称「きてれつ研」に加えられそうになる。

そして彼女が司に目を付けた理由は司の持つ異能力にあり、彼女自身も異能力者なのだと言いだした。しかし司には己の能力を悟られたくない、ある理由が存在した 世にも微妙な能力者が集う、

現代傳奇・怪異譚。

現在 全六章中 三章迄完結 月一更新中 #

「題目」「いかにも怪しい」と可は言って(前書き)

評価・感想は辛いものまで幅広くお受けしております。挿絵ありなので苦手な方は表示しない、をご選択ください。ではどうぞ。

一題目 「いかにも怪しい」と司は言って

突然目の前に飛び込んできた人物をかわそうとして、司はよろめき倒れそうになる。思わず壁に手をついたが、なぜかその人物はさらに詰め寄ってきて壁際へと司を追い込んだ。体が触れそうな距離でようやく見えた容姿は少々髪が短めなものの、見まごうことなき少女である。

> i 1 9 4 2 1 — 5 4 7 <

整った顔立ちの中、半分閉じたような眠たげな目はしかし瞳が大きく、十二分な目力を感じさせた。白磁のように白い肌は弱弱しげに映るが、病的ゆえのきわどく危うい美しさも含んでいる。展開についていけず戸惑う司は息を詰まらせ、次にどう行動に出るか悩むこととなった。

だが少女が柔らかそうなカーディガンにくるまれた指先で司を指し示した時、いくつもあつたはずの選択肢は一つにしぼられた。

「こんにちは。ぜひ我が部へお越しく下さい」

「……………ああ」

やはりそういう展開か、と。内心がっかりしたのをおくびにも出さず、ただ苦笑するだけに留めた司は寂しげにうつむいて、少女から視線を外すと同時にするりと間合いから抜け出た。

「まあ、考えとく」

司は笑顔で勧誘を真っ向から切り捨て、自分に声をかけてきた少女の方へ向き直るが、今度は胡散臭そうに眉をひそめる。その後、

少女の居る部屋の奥をじつと見つめて、口をへの字に、眉を八の字に曲げて息を漏らした。

「……げ」

部屋の奥に見えたのは、かりかりと黒板に爪を立てる、学ランを着た生徒の姿。

けれど周りの人々はまったく気にしていなくて、だから司はすぐにこの場を離れたくなった。

「どうか、しましたか？」

「いいやなんでも。えーと、ではこれにて」

悪寒にさいなまれながら、ポケットに手を納めると司は歩き出す。切り返しの素早さに驚いたのかぽかんと口を開けて自分を見る少女を尻目に、その場を立ち去った。

途中で振り返ると、すすけて古臭い空気の漂う廊下の向こう、少女はまだこつちを見続けていた。不気味さが増すのを感じてさらに速足で歩を進めた司は、階段を駆け下りて二階に向かおうとする。途端に視線へとこめられた力が強くなり、遠くから響く一言と共に圧迫感が背中にのしかかった。

「あなたもしや、普通なら見えないものが見える人ですか？」

無視して、三段飛ばしで二階へと降り立つ。

背後を二つの気配に追われているような気がして、そこで足を止めることなくさらに進んだ。わいわいと人でごった返す中に身を置くと、ようやく三階の寒々しい感覚から逃れることが出来た。おそるおそる振り向いてみても、誰もいない。司は冷や汗をぬぐうと、ぐるりと周りを取り囲む人の山を見やった。

そこに居るのは身を縮めてこわばった表情を見せる新入生に、親しげに声をかける人々。おとなしそうな文化部と思しき彼らでも、部のためならアクティブになるらしい。あちらこちらへと新入生を引つ張つてゆく元気な姿が見られた。司も新入生であるがゆえに時折勧誘を受けるが、その都度片手をあげて断っていた。そう、さつき三階でもそうしたように。

時は四月初旬。

様々な部活動が鎬を削り合い、新入生を奪い合う。今まさに、部活動勧誘シーズンのまっただ中である。

「……と言つても。どこにも入る気なくなつたから関係ないや」

運動部から文化部まで全ての部室を内包するクラブ棟の一階から三階までを一通り見て回つた司だったが、最終的に出した結論は帰宅部となることだった。特別に目を引くものもなく、興味を抱くほどのものはなかった、と。

「いやでも。目を引くことはなくとも、気持ち的に引くものはあつたか」

一階に降り、運動部の人々が色とりどりのユニフォームに身を包んで『さわやかな青春』という幻を押し売りしているのを横目で眺めてから、司は上体を反らして見上げる。二階も黒山の人だかりがうごめいていて、まだまだ勧誘作業はエスカレーターしそうだと思いつつ、そのさらに上を見やる。

すると急に、人口密度が低くなる。一階、二階と比べて明らかに人の気配が薄い三階を見上げていると、さっきの勧誘はなにか気のせいだったのではないかとさえ思えた。

だが柵越しに小さな頭がこちらを見下ろしていることに気付き、司はさっと視線を逸らした。部活の勧誘で、新入生の去り際にあん

な言葉を選ぶような、脳の芯までオカルトに染まった連中と付き合い方にはなれなかった。

しかし視線を逸らしきる寸前で小さな頭の背後に、学ランを着た男が立っているのが見えてしまう。目は合わなかったが、もうクラブ棟へ立ち寄ることはやめよう、と思った。

「……取り憑くとか、なんとか。厄介事は勘弁だよ。くわばら、くわばら」

歩幅を大きくとって家路に着き、家へと逃げ帰る。じつとりと湿った真綿のごとき視線がずっと背に張り付いてくるのを感じていたが、無視して逃亡した。

#

ところが翌朝、逃亡劇は終了した。

否、終了させられていた。

「目取真^{メトル}、司^{カズ}さんですね？」

いつも通りの登校風景の中、一人だけ異質さを滲みださせながら名指しで己を呼ぶ者がいたことに司は驚く。彼女は服装点検時の風紀委員もかくやと言わんばかりの仁王立ちで、校門のすぐ横に立っていた。

昨日、クラブ棟の三階に居た少女だった。

「……いや、それ読み方違う。ツカサ、だから」

オカルト人間にペースをつかまれてなるまいと、平静を装いながら司は訂正を加える。少女は首をかしげたが、本人の自己申告に従

い、呼び方を正した。

「訂正はいいけど、そもそもどうやって名前を」

「一年六組二十九番、西中学校出身、A B型で父母と三人暮らしのメドルマさんでしょう?」

「え」

方法を問うたのにさらなる情報を返答にされた。会話にならない上に、個人情報まで言い当てられている。ぞつとして、絶句した。

しばらくの間、呼ばれて立ち止まった司と呼びとめた少女の二人、その間だけ人が通ることもなく、時間が止まったような風景のまま時は過ぎる。悪い意味で目立っている自分がいやで、ともかくも場所を移そう、と司は少女に提案した。少女はあっさり引き下がり、了承しました、と言って自分が先導しはじめる。ペースはつかまれたまま、返還される気配はない。

早歩きする少女を追いかける司は、てっきりクラブ棟の方へ連れていかれるのかと思っていたのだが、向かう先にあるのは特別教室棟だった。

Eの字の形をした校舎の三画目に当たる部分がそれであり、二画目と三画目の接する位置にある階段を、少女はずんずんと駆け上がっていく。司は少女の白いソックスを視線の高さに置くように距離をとって、後ろに続いた。ちらりと視線を上げてみたりもしたが、スカート丈は微妙な位置を保つ金城鉄壁の構えを崩さない。軽く舌打ちして視線をソックスに戻す。

辿りついたのは二階の物理実験室で、不用心にも開け放してあった扉を抜けたところで、少女はようやく立ち止まる。司は内心どこまで連れていかれるのかと不安に思い始めていたのだが、なるほど朝の物理実験室は人気がないので話しやすくはあった。

もともと、少女が会話の通じる人間であるかどうかは、別の話な

のだが。咳払いして準備を済ませた司は、再び口を開く。

「……じゃあ、もう一度聞くけど。あんたどうやって名前とかを知った？」

移動はまだ終わっていないかった。実験室の奥へと進む少女は、司の話などかけらも耳に入れてはいない。不安が心中深くで渦巻き始めて、司は入学早々怪しい人物に目を付けられた自分の不運を嘆いて両目を掌で覆う。もう逃げたい気持ちで思考がいつぱいいつぱいだった。

そして目を向けると、少女は消えていた。

「……ええ？」

「こつちですよ」

ドアが開いた。なぜか黒板の横にある姿見が、そのままドアになっていた。近付いて見てみると『物理実験準備室』と書かれたプレートの上に『民俗学および奇怪事件展覧列挙研究会』とやたら達筆な字で書かれた紙が張り付けてあるのが見えた。見るからに怪しい研究会だ。

引き返そうか迷ったが、結局足を踏み入れる。内装は元々が実験準備室というだけのことであり、両側を棚に挟まれた八畳ほどの部屋だった。しかしあまり実験道具は置いておらず、真ん中の黒いテーブルの上にある本やスクラップといった私物、電気ポットと急須とお茶菓子、それらを囲むようにして置かれたパイプ椅子などが、生活感を振りまいていた。

「どうぞ、好きなところにかけてください」

「ああこれはどうも、ってちがう」

「何か不都合でもありましたか？」

司に視線を合わせることなく、パイプ椅子を見つめながら少女は言った。椅子の問題点として思いついたものでもあったのか、後ろにあった段ボール箱をごそごそとひっくり返しはじめ、中からクッションを取り出すと司に差し出した。

「すみません、配慮が足りず」「おいどいう意味だこれ」「他意はありません」「なお悪い」

司はドーナツ型のクッションを押し返して、立ったままポケットに手を入れて不機嫌さを表しながら少女に話しかける。

「あのさ、だからさつきから何度も言おうとしてんだけど。なんで名前とかを知られてるの、ってこと。あんたが情報を得た方法を聞きたくてここまでついて来たんだ」

「ああ。そうでしたね」

本当はさつきから聞こえてたとしか思えない反応を返されて、司は余計に不機嫌になった。ところが少女の方はそんな司の表情を気にしたところもなく、かといってからかっているわけでもなさそうで。なにやら真剣さを帯びた顔つきでこちらを見上げていたため、どうにも対処しにくかった。

「それについてお話する前に、確認したいことがあります」

「確認？ なんの」

「あなた、普通なら見えないものが見えるのではないですか」

悪びれることも無く昨日と同じ質問をする少女に対して、司の不機嫌指数は最高潮に達した。

「また、それが。オカルトに傾倒するのはそつちの勝手だけど、人を巻き込まないでほしいよ。名前その他を知られた方法については気になるけど、それ以上にそういう心霊とかに巻き込まれるのはごめんだ。本当に御免。もう帰るよ。」

「田所尚人」ただころなむと

「はあ？」

「五十年前、クラブ棟、化学部、実験事故」

「ちよ、ちよっと待って」

この子本当に頭のネジが外れてしまったか、もしくは電波でも受信したか、と心配になり、そんな人間と同室に居る自分の身も心配になる。しかし少女は澄んだ瞳でこちらを観察していて、先の発言にもなんらかの意図があったように思わせる。ほうっておいて逃げているのか、悪いのか。判断に困って、司はあたふたと手を上げ下げした。

「ええと……なに？ 突然なにを言い始めたのさ」

「だ、そうですが。会長、メドルマさんは嘘をついてますか？」

「んーん。嘘は言っていないっばいわね」

唐突に第三者の声が聞こえてきて驚く司が右側の棚に目をやると、内側からガターンと扉が開いてさらに驚かされた。心臓に悪い演出で登場したのはゆるくウェーブした肩まで届く薄茶色の髪、グレーのタイツに包まれたすらっとした脚だった。

身体を縮めて棚に収まっていたのは司とさして変わらない背丈で、おそらくは一六五センチ前後。彼女はにっこりと、いかにも女性的な微笑みを浮かべて髪をかきあげ、セーラー服とプリーツスカートについた埃をはたき落とす。

どういうセンスによるものか、前開きのセーラー服の中にはジャージを着こんでいた。

「ということ、本当に噂を知らない。それなのに田所さんに反応した。会長、メドルマさんは本物と見てまず間違いないでしょう」「よかった。今年は収穫少なかったものねえ。きちんとわかる子が一人でも居て助かったわ」

にこやかに穏やかに話を進め、二人そろって同時に司の方を向く。とうに氣勢も尽き果てた司はたじろいで、一歩退く。

「な、なんのことを話してんの？」

「うちの部活動勧誘で使ってたクラブ棟三階。東から四番目の部屋の、黒板の前。……あんた、なんか見えたんじゃ？」

にいい、と今度はいやらしい笑みに変えて、会長と呼ばれた彼女は司に詰め寄り顔を覗き込んだ。のけ反って逃れるが、昨日と同じく壁際に追い込まれ、どうにも身動きが取れなくなる。

「見えた、って」「普通なら見えないはずのものが、よ」

彼女の囁きにより、司以外の人間はまったく存在に気付いていなかったような、学ラン姿の生徒が思い出される。物悲しい表情で「かり、かり」と黒板を引つ掻いていた様子までもが、一度のまばたきの間にまぶたの裏に鮮明に映し出された。

「田所さんの幽霊、見たでしょ」

「なにも、何も見てないよ」

「本当に……？ ならあんた、どうしてさっき『心霊に巻き込まれるのはごめんだ』なんて言ったの？ 小野ちゃんが聞いたのは『普通なら見えないはずのものが見えるのか？』であって幽霊や心霊に限定してないはずなのに」

「う……それは」

すでに気持ちが悪くなるんでいたこともあり、返す言葉に一瞬悩んでしまう。黙ってうつむきこの場をどう切り抜けるか悩む司は、もはや雰囲気に吞まれてしまっている。

「あは。うーん、やっぱり我が部伝統の冷温リーディング勧誘法は便利ねえ。おまけにいい具合に田所さんがずっとあの部屋を占拠してくれてるから、『なにかが見える』って能力の中でも反応からある程度分類出来るし。ま、一番便利なのは小野おのちゃんの察知能力だけど」

「私の能力を備品みたいに言われるのはちょっと」

「ごめんごめん。備品よりよっぽど重宝してるわよ」

「……あまり意味が変わってません！ 大体、会長の能力も併用しなければ私だって確証は持てないですよ」

「じゃあ関係プレーの勝利ってことで」

いえー、と一人だけ嬉しそうに手を挙げる会長だったが、小野は不動だったためハイタッチは出来なかった。少しずつ顔の笑みを薄くして寂しそうにそろそろと手を下ろし、ちらりと司をうかがう。司は引いていた。

「こほん。というわけで、『民俗学研究会』あらため『奇怪事件展覧列挙研究会』へようこそ。モデルマくん」

「苗字嫌いだから、呼ぶなら司でいい。というか、だから、なんで情報を掴まれてるのかって」

「ついさつき会長が解答をおっしゃいましたが」

「……はあ？」

会長に向かって放った問いの答えは、小野の方から返ってきた。

腕組みした小野は滔々と説明して聞かせる。

「冷温リーディング勧誘法。冷温、つまりはコールド&ホット。ご理解いただけましたか」

「コールドリーディング、ホットリーディング、って……詐欺師か！」

「詐欺まがいのことでもして興味を引かないと、まともに話も聞いてもらえないと思いましたが。つい、出来心でホットリーディングを」

スカートのポケットから小野がするりと取り出したのは、生徒手帳だった。視認から一秒遅れで事のあらましを理解した司は、慌てて自分の学ランの胸ポケットを探る。糸くず以外に何も入って無い。

「おまえっ、最初の、ぶつかりかけた時に！」

「はて、なんのことでしょう？ 私はたまたまこれを拾ったから司くんの名前を知っていただけで、お返ししようと思って今朝の六時から校門でスタンバイしてただけですよ」

しらばつくれる小野は口元にわずかに笑みを見せる。司は小野から生徒手帳をひったくった。

「学ランなんて毎日洗わないから、落としたことにも気付かなかつたんですね。気をつけないといつまたホットリーディングの罠にかかるかわかりませんよ」

「ふつう、加害者が被害者に『これからは気をつけるよ』とか言う？」

「あと、コールドリーディングで使いましたが、『普通は見えないものが見える』って言葉は範囲広いですよ。未来が見えたり過去が見えたりよくわからないエネルギーが見える人もいるわけですから」

……まあ、物事を理解するにあたって、理解を容易くするため
にまず自分に近いものを無意識に当てはめて考えてしまうのは人の性で
すけど」

「ホント、なんなんだあんたら」

もはや思考することを放棄して、わめきながら解答を求める司。

小野と会長は顔を見合わせた。どちらともなく肩をすくめて、司
に向かって言い放った。

「どうも、異能力者です。ただ、私も会長も微妙な能力しか使えま
せんので……『微能力者』などと自虐してますが」

「……センスないよあんた」

ホームルーム開始五分前のチャイムが鳴った。

一題目 「いかにも怪しい」と司は言って（後書き）

一体誰がブタゴリラのポジションになるのか。

……冷静に考えるとこのあだ名ってだいぶひどくない？

しばらくは校内ですがそのうち学外活動とかも書く予定。主要キャラは六人、三：三でいい具合です。根暗と素クールと怪人とダメガネとあくまとバカの六人。……ろくなのがいない……

挿絵はサークルの相方が一晩でやってくれました。お忙しい中ありがとうございました。

ではまた。

二題目 「怪しくありません」と小野が答えた

「ではまた放課後にここにいらしてください。詳しい活動内容の説明などをしたいと思います」

「待った、まって。入んなきゃいけない流れなの、これ」

「出来ればそうしていただけると、私たちは嬉しいのですが。なんだかんだでこの研究会は慢性的な人員不足に悩まされていますので」

ぜひに、と告げて小野は部屋を出て行った。続いて会長も姿を消し、残された司はどうしたものか迷ったが、とりあえず授業に出た方がいいと判じて部屋をあとする。

四階建て校舎の三階に位置する司の教室の窓からは、グラウンドを挟んで向こう側に構えたクラブ棟を望むことが出来た。急ぎ足で駆け込んできた司は窓側最後尾にある自分の席に座り、「今日は遅かったな」などと前の席の男に話しかけられるのを曖昧な笑みでかわした。

「ちよつと、ね。校門のところで、捕まって」

「制服チェックか？ 確かにおめー、学ラン第二ボタンまで開けてっかなー。まだ入学してから日が浅えんだから、もうちょい服装整えといった方がいいんでないの」

> i 1 9 4 2 0 — 5 4 7 <

前の席に座る男はじろじろと司の服装を見据えてそう言うが、彼もまた学ランの中にはカッターシャツではなく柄モノのシャツを着こんでいるので明らかに校則に違反している。しかし走ってきたせいで息の上がついていた司は指摘するのも面倒に思えて、掌を振って適当に相槌を打っておいた。

前の席の男はふふんと笑って天然ものと思しきパーマのかかった髪をかきあげ、ぎっこぎっこ椅子を前後に揺らしながら話を続ける。

「ところでさーメドルマ」

「司でいい、って何回も言った」

「あーそうだっけ、すまんすまん。そんでさー司。おめーはどっか部活とか決めたか？ ほら、昨日は部活動勧誘だったろー」

「あつたね。でも特別心ひかれるものはなかったから、どこにも入る気ない」

そっけない返しをすると、前の席の男はきょとんとして、首を四十五度ほど斜めに傾げた。

「そんなの、もったいねー。せつかくの高校生活、おれらがティーンで居られる最高の期間だしよ？ 青春の謳歌イコール若さイコール今ここにしかないこの日この時」

「朝からテンション高いな……いいじゃん帰宅部でも。青春は大学行ってから考えるよ」

「んーなこと言っつてつと大学でひとりぼっちになるぞー。うちの兄貴はそんな感じで損な感じだもんよ。一緒にどっか入ろーぞ。実はおれ落語研究会に『きみは稀代のルーキーだ！』とか言われてスカウトされてさ」

こつちもついさつき不運にもスカウトされたところだ、などとは言わなかった。

この学校における研究会は公式の部活動よりも人員、実績が少ないために活動費もあまり貰えず、いつ消滅してもおかしくない、要するに同好会のことである。つまりとにかく人員を欲しているだけで、まず間違いなく誰にでもそう言っているんだよ、と司は優しく諭してやったが、彼は鼻を鳴らして司に指を突き付け説明を始めた。

いや、説明というより自慢だったが。

曰く、彼は中学の頃から地元のデイサービスなどで落語公演を行っていたらしく、近隣の中高では名が知られている少年落語家なのだ、とのこと。司は少し驚かされた。

「とうわけでどうだ？ 手取り足とり教えつからさー、共に笑いの道を極めないか？」

「やめとく。部活以外でやりたいことあるから。というか、なんできみと一緒が前提なの」

「えー、だつておれ、わりと人見知り」「嘘つけ」

けらけら笑う前の席の男だったが、担任である牛勿うしもちが教室に入ってきて号令をかけたので仕方なさそうに前を向く。が、司から見ても斜向かいの席の男とまた何かごにごによと話し始めており、牛勿から静かに注意を受けていた。そこでおどけるので、クラスが薄い笑いに包まれる。いいキャラしてるな、と司は思い、窓の外に意識を移した。

司の視界の下方左側、方角としてはだいたいの西の方にあたる校門から今頃入ってきた生徒が生活指導部に止められていた。セーター姿の男はスケボーに乗っており、教師を無視してすり抜けようとしている。根性あるなと思いつつ、視線を上に向けた。

ちょうどここは三階。窓の向こうに見えるクラブ棟の三階とは、同じ高さにある。右から部屋の数をかぞえていって、四番目の部屋を見つけると視線に力を込めてみた。目じりに力を入れてぎゅっとまぶた全体に力を入れると、もやもやとした気配だけは強く感じられた。

「なんだか、ね」

瞳を閉じた司は、あくびをかますと机に突っ伏した。

#

放課後になると、稀代のルーキー二人にはお迎えが来ていたので、司は逃げ道を阻まれた。

「お迎えにあがりました」

小野はぼうつとした眠そうな目でこちらを見上げ、手招きしている。それに対して授業中すっかり睡眠をとって眠気すっきりの司は、露骨に嫌そうな顔をして一步退いてみせた。

「なんだ、おめー入るところあったんか。おれ兼部してそっちも行こつかな」

冗談か本気か、迎えに来てくれた落研おちけんの人々の眼前でそんなことを言う前の席の男。違う、入るつもりなんてない、と言いかけた司の前で、小野は前の席の男をじつと見て、ぼそりと、至近距離の司に聞こえるかどうかという声でつぶやく。

「……………ない」

「え」

司がつぶやきを返す。人員不足などと言っていたくせに、わずかでも入部の意思を持った者に自ら「ない」と突っぱねる小野に、軽く引いた。とんでもない態度である。

「げ」

そして次に声をあげたのは、司のクラスメイトを迎えにきた落研

の会長だった。

「誰かと思えば、き、きてれつ研の……そうか、きみは、今年から女子校生」

「はい。それがなにか？」

クールに、表情を変えることもなく返した小野に臆したのか、落研会長は眼鏡の位置を正しながらじりじりと退いていった。

「いや、なにも。なにもない。行こう、前納^{まえの}くん」

「へ？ ああはい。んじゃ司、また明日な」

「うん。……ああ、あいつ前納^{まえの}って名前だったんだ……」

「なんか言ったかー？」

「なにも」

わだかまりを残すこともなく綺麗に別れ、一年六組の教室の前には司と小野が残される。司は大きく伸びをすると、学生鞆を肩に担ぐようにして持って、小野に宣言するように言った。

「……じゃ、帰ろうかな」

「お待ちください」

定型^{おやくそく}のパターンを一応踏襲した司のベルトをひつつかんで、小野は物理実験室の方へと引っ張った。

引っ張られつつ、司は小野に確認を取る。

「さつき、落研の会長さんがあんだのこと『今年から高校生』とか言ってた気がするんだけど」

「ええ、事実ですよ。一年三組出席番号五番。小野^{おの}香魚^{あゆ}香^かと申します」

「なんで新一年生なのにこんな精力的に部員集めしてるのさ」

「中学生の時分から『きてれつ研』には出入りしてありましたので私としては新一年生という感じではないのです」

理由は納得したが、またわからない言葉が出てきたので、素直に質問する。その間も司はずると引きずられてなされるがままであったが、さすがに人目が気になったのでちゃんと立ち上がった小野の横を歩くことにした。

「きてれつ……研？」

「奇怪事件展覧列挙研究会。略してきてれつです」

「なんでもかんでも略して四文字にする風潮、どうかと思うよ」

「私たちが決めたのではなく先代の会長が決めましたので。どうにもなりません」

嘆息を漏らす小野の憂いを帯びた横顔はなにやら辛薄そうな気がして、少しだけ可哀想に見えた。けれど自分が巻き込まれる必然性はない、という思いの方が強かった。

「これからどうするつもり」

「ぶ室で話を聞いてもらおうかと」

「研究会なんだから部室じゃないって」

「物理実験準備室。略して」「あんたも実は略すの好きだよね」

特別教室棟に入ると、グラウンドの運動部が発する喧騒などもぐっと小さくなり、棟全体に静謐な空気が漂うように感じられる。物理実験室を通り過ぎ姿見のドアを抜けると、中にはまだ誰も居なかった。

「そっいや、物理部ってこの学校なかったっけ」

「化学部あたりと仲良くしているのでこの部屋は必要ないそうです」

話していると、小野は椅子を引いてくれた。厚意に甘えて座らせてもらうと、続けて彼女はポットからお湯を注いで緑茶を淹れてくれた。さらに茶菓子までずいとお前に差し出され、予想外の厚遇に司は面食らう。申し訳なく思い肩を縮めると、小野はかぶりを振った。

「おかまいなく。お茶くみは一番下の新入りの仕事ですの」

「なるほど……ってあれ？　じゃあ入部したらこの仕事やるのって

……」

「まあその話はいいいではないですか」

「そんな下手くそな逸らし方されても」

緑茶をすすりながら司は苦笑いして、そのあとでお茶がすごく苦いことに気付いた。口直しに和三盆を使っていると思われる菓子をつまんで、上質な砂糖のほどける感触を楽しむと、それっきり、沈黙が落ちる。

引つ張ってきたわりに何を話すか考えていなかったのか、小野は悩んだような素振りを見せていた。司もこのまま失敗したお見合いのような空気の中に取り残されるのは嫌だったので、なんとか話題を考えた。

しかしぐるりと部屋を見回してみても、話題に出来そうなものは机の上に無造作に置かれたスクラップや、コンビニにおいてありそうな胡散臭い「怪奇事件集」くらいしかない。

「あー、おほん。この研究会って、結局なにをすることなのか」「あ、はい。奇怪な事件について調べて、その事例を展覧出来るよう並べておくところですよ」

「へえ、そのままだね」

「はい」

「……………へえ」

終わってしまった。なにも進展がない。ひよっとして小野はものすごく口下手か人見知りなのではと思った司が試しに沈黙を維持してみると、驚くほど何もしゃべらない。自分から話題を提供するのが苦手なタイプだと分析した司だったが、どんな話題なら食いついてくるかわからないのではどうしようもなかった。

「なによ、この失敗したお見合いみたいな雰囲気」

会長が現れたのは沈黙がはじまって五分ほど経ってからだだった。助かった、と思ったのは小野も司も一緒だったに違いない。

後ろには会長よりごくわずかに背の低い少年が歩いてきており、彼は司に気付くと軽く頭を下げてほほ笑んだ。くせのない柔らかな髪は襟足を少し伸ばしていて、背が低く小柄なことから相まって性別の判断を誤らせてしまいそうな外見となっている。さわやかな笑顔ばかりが印象に残る少年だった。

「きみ、新しくこの研究会に入る子かい？」

「はい、たぶん」

少年の問いにはつきりした口調で曖昧に答えたのは小野で、さっきまで黙っていたのはなんだったのかと司は心中でぼやく。そんな心中はつゆ知らず、少年は司に手を差し出した。

「はじめまして。僕は三年の踊場小太郎おどばたろうという。踊場と呼んでくれ

「はあ、どうも」

背のことを気にしているのか、やけに「三年」を強調した挨拶だ

った。そして司は入るつもりがあんまり無いにもかかわらず握手をかわしてしまったことに、なんとなくばつが悪くなる。

「そういえばあたしも自己紹介まだだった。同じく三年の口論義風鈴よ、よろしくね」

「え、あの」

「私はもう先ほど紹介しましたね。あとは二年生の方が二人、廉太郎さんとサワハさんという方がいらっしやるのですが」

「いや、あの」

「サワハは今日、店の手伝いだそうよ。廉太郎はスケボーに乗って遅刻してきたせいで生活指導部」

「普通の神経をしているならば馬鹿も休み休みやるべきだろうにね。あの男は毎日毎日日本当にご苦労様なことだよ、一度色んな人に頭を下げさせたい思いだ」

「あ、その」

「お二人の分もお茶を用意しましょうか」

「頼むわー」

「なら僕もお願いさせてもらおうとしようかな」

聞いちゃいなかった。踊場と口論義の分もお茶を淹れ始めた小野は司と二人にされた時とは違い生き生きとしており、そのことがまた微妙に疎外感を覚えさせた。

肩身の狭い思いをしつつお茶をすする司は、自分がなんでこんなことになっているのかと窓の向こう、遠くの空に問いかける。答えはもちろん返ってこず、むなしさの内に精神だけが空から帰ってきた。焦点を目の前に合わせると、三人に凝視されていたことに少しひるんだ。

「さて、それじゃ志望動機を聞かせてもらおうかしら」

「え、そんな突然……というか待て。一体いつ、自ら志して望んで

「ここに来たことになった」

「今さっきそう答えたはずじゃないか。入部するのではなかったのかい？」

「それ答えたの小野だよ」

言つて腰を浮かす司の正面に小野、斜向かいに踊場、一番奥の窓に近いところに口論義という並びがいつの間にか構成されていて、入口が一番近い司は下座にされていた。すでに、序列が示されている。恐れおののく司に口論義はそつと掌を差し出して、座るようにうながした。

「まあ落ち着きなさいな。とりあえずせんぶり茶でもどうぞ」

「せんぶりつて罰ゲームで使うあれか。どつりで苦いと思つたよ畜生」

「うん、確かに苦いといえは苦い。しかし体に対しては実に良い効能ばかりだと思つけれどね。うまい、もう一杯、なんてね」

「青汁でも飲めばいいよ。というか、だから、入部するなんて一言も言つてないんだつてば」

言つと、明らかに三人のテンションは落ちた。口論義に至つては「ええー」という発音通りの口の形を示している。正面に座る小野は、机に身を乗り出すようにして叫んだ。

「どうしても入つてくださらないんですか」

「くだらない」

「どうして入つてくださらないんですか」

「祖父母からの言いつけ。力は見世物にするな、つてね」

「ちよつと、あたしたちは見世物にするつもりなんかないわよ。真剣に研究してるの」

口をとがらせて司を指差す口論義。すると司も指先を向ける。ただし、正面の小野へ。

「そう？　でも真剣にやってるならもつとちゃんと会員集めればいいのに。さつき小野が教室に来た時にもさ、冗談かもしれないけど『入ろうかな』って言った奴いたんだよ。なのに小野はなんて言ったと思う。『ない』ってひとことだ。どういう基準か知らないけど募集してるくせに選り好みするってのはどうなんだ」

「それは別に『入れたくない』って意味じゃないわ。選り好みではなく篩ふるい分けって奴よ」

「はあ？　どういう基準の？」

「微能力の有無、です」

指差されていた小野が即答した。発言の意味はわかるが意図がわからず、司は首をかしげる。

小野は続けた。

「いえ、別段我が研究会は微妙なものだけを集めているわけではないので？　異能力？　普通の言い方に換えていただいても構いませんが」

「そこに首かしげたんじゃなくて。有無、って。わかんの？」

「はい。ぱつと見た瞬間に判断出来ます。先ほど司さんのクラスメイトに『ない』と言ってしまったのも、能力の有無を判じていただけです」

「……信じられない」

「幽霊が見える人に言われても困るわよ」

いたずらっぽく笑う口論義に言われてしまっが、確かに返す言葉もない。世の中にはいろんな人が居る、というだけのことなのだ。

「ちなみに今この研究会に在籍してる人の中では、踊場以外全員がなんかの微能力者よ。現代科学では原理を説明することは出来ない、けれどあたしたちがやろうとすればそれは起こる。そういう、微妙だけど確実に既存の法則から矛盾した力」

「口論義さんも、能力を？」

「うん。わりと使い勝手もいい能力。でも発動条件がいくつかあってねえ。今朝会った時にあたし戸棚に隠れてたでしょ？ ああしないと能力使えないのよ」

頬杖をついてくつくくと笑う。踊場もにこにこしていて、小野はかすかに口元を緩めた。

急に、自分が異質な空間に投げだされてしまったように感じて、司は足場がぬかるんだような不安感を覚えた。これまでの司は自身が幽霊を見ることの出来る異能力者であったためにそうした異常な世界に対してオープンに構えているつもりだったが、自分以外で異能力を持つ者に出会うことはなかったのだ。

「そんな連中集めて、どうするつもり？」

「ふあはははは、世界征服だ。……なーんてこと言えばカッコつくんでしょうけどね」

「あいにくと僕らにあるのは、単純な知的好奇心にすぎないのだからうね。これでお金を稼ぐつもりじゃあるまいし、好奇心の充足さがあるならばそれでいいのさ。世にはびこる奇怪な事件や、不思議なこと。そうしたものをもそのままにしておけず色々調べたくなる性分だっただけなんですね。原因究明、過程の記述こそがモットーさ。ただただ、知りたいだけ。僕は俗っぽいという字の方の『民ぞく学』にも興味があるんだ」

踊場は述べた。他の方がどういう字なのか、またそれらの間にとっという違いがあるのか司にはわからなかったが、二人の説明だけ聞

くと意外にもしつかりとした学術的な研究会のように聞こえた。

「ま、気になつたら籍だけ置いておくつてもアリよ。実際のところ好奇心の他にも目的を持つてここを利用して人もあるし。面白いことあつたらお互い知らせてね、ってわけ。うちの情報収集力は結構すごいから」

最後の部分を聞いて、司はぴくりと反応した。

「……そのへんに置いてるスクラップとかくらいじゃないの？」

「いやね、この電腦の時代にアナログだけで情報集めてるわけじゃない。データバンクは別に持つてるし、随時更新中。その閲覧も会員だつたらご自由にどうぞ」

「……………」

自分の抱える事情もろもろを思い出して、司はしばし悩んだ。己の力を秘匿したい理由。祖父母が遺した、いくつかの言いつけ。それらが頭の中をぐるぐると回り、容易に判断を下すことをためらわせていた。そんな心情を察したかのように、踊場が口を開く。

「僕らはきみを見世物のように扱うつもりはないし、周囲に向けて能力のことを吹聴するつもりもないよ。単なる協力関係だと、そのように受け取ってもらえればよいのではないのかな」

なおもだんまりを決め込む司に、小野も言葉をかけた。

「六人以下となると同好会としても活動出来なくなつてしまいます。ですから、名前だけでも置いていただけませんか？ 会費徴収などもありませんし」

「…………ん」。じゃあ、それに加えていくつか条件つけていい？」

「ものによりますが、なるべくご希望に添えるよう努力はいたします」

小野がはきはきと答えて、それでもまだ司には迷いがあったが。結局言いつけと目的とを天秤にかけて、目的の方に重きが置かれたと納得した。

「恣意的、また私的に力を使わせようとしないほしい。必要な時とそうでない時の判断は自分で下す。それと……変な村についての情報があつたら、欠かさず教えてほしい」

「犬鳴村とか、杉沢村ですか？」

「ちがう。実を言うと名前もよくわからないんだけど、とにかくそういう怪奇事件とかの起こってそうな村なんだ」

奇妙な申し出であることを理解している司はなにか訝しげな反応をされるかもしれない、と思っていた。だが、予想に反して三人はすんなりと提案を受け入れてくれた。なんらかの目的があるのは口論義や踊場、小野も同じなのか、互いに目くばせして理解を示した表情を見せている。

「わかったわ。その条件を呑みましょう」

立場上自分が言うべきだと思ったのか、口論義がそうしめくくり。

「では、今日からお互いがんばりましょう」「……互いの目的のためにね」

小野の言葉になにやら含みのある様子で踊り場が付け加え、手を打ちならした。

二題目 「怪しくありません」と小野が答えた（後書き）

なにやら色々腹に含んでそんな連中が集まって、ようやくスタート。

外見描写ないのでわかりづらいですが、最初に載ってた学ランパーカーの奴は司です。あしからずご了承ください。……「第二ボタンあけてるところじゃない」って？ 仕様です。手首の数珠も仕様です。ではまた。

三題目 「怪しくないけど危ないかも」と口論義が言う(前書き)

作中で色々説明してますが
決して超能力研ではない。

三題目 「怪しくないけど危ないかも」と口論義が言う

「んじゃ、詳しい活動内容について教えていこうと思うけど……その前に私たちがどういう微妙な能力を持つてるかお披露目しときましようか。活動内容の根幹にもかかわるし。あ、でもその前にちよつと休憩。飲み物買ってくるから」

席を立つた口論義はぼんぼんと踊場、小野の肩を順に叩いて部屋を出ていき、踊場はこぼんと咳払いすると立てた両肘を机の上に乗せ、重ねた手の上にあごを載せた。

「さて、口論義か小野くんか、どちらの説明からにするでしょうかな」

「その前にちよつと。踊場さんは能力持ってないんだよね？ なんて入会出来てんの」

「おや、意外なところから訊ねられてしまったな。そう大した事情があるわけでもないのね、スル しておいても構わなかったのだが。まあ要するに僕は、能力は無いが能力についての知識が多いのさ。先ほども言った通り民俗学を学んでいるが、派生して宗教や呪術といったものにも手を出しているのね。基本的に奇怪事件を？研究？して展覧列挙するのは僕なんだ」

「じゃあ他の人は研究してない？」

「多少はしてるよ。ただ、僕のように学術的な意味合いでの研究は、あまり。みんなは他の分野を専攻していると言っておくよ。……では、小野くんの微能力から先に説明させてもらうとしよう」

少し謎を残して話を切られたが、それ以上聞いても答えないだろうと思った司はうなずいておく。踊場は自分の右手に位置する小野を掌で指し示すと、再び咳払いして笑みをこぼした。

「といつても、もう半分くらいは説明してしまっているのだけでもね」

「能力を持つてる人間とそうでない人間を判別出来る、だっけ」

「それしか出来ないことが微妙たる由縁なんですからね」

なにか難しそうな事柄に突き当たったような顔でうつむいて、小野は頬を掻いた。

「いや、でも考えようによっちゃすごい能力じゃない？ 能力持つてることを自覚してない人に教えてやることも出来るんだから。微妙ってことはないよ」

「でも持つてるかどうか、しかわからないんです」

「……んん？ それって」

「能力の種類はさっぱり。でも異能力って、過去視とか未来視とか霊視とか遠隔視とか。何かを？見る？というものが圧倒的に多いでしょう？ だから相手の能力の種類を読むために、あの部屋の地縛霊である田所さんにどう反応するかを見て、まずは霊視タイプかどうかを判断するんです。反応がなければその他の能力の可能性を模索します」

「なるほど 微妙だ。しかし、地縛霊ねえ。田所さんそんなに未練とかあつたんだ」

「いいえ。自分の死も自覚していて恨みもないそうです。ただ、あの方はクラブ棟の中は自由に移動することが出来るそうです。…

…だからそのですね、運動部の、女子更衣室などにも」
「下心で居残ってるわけか」

うなづく小野は女子生徒代表としてのものか、少し身体に力が入って怒りの感情を貯め込んでいる様子だった。田所の気持ちもわかるような気がする司はその空気を気まじく思い、問いかけを発して

話題をそらす。

「というか、今のこの研究会のメンバーには、霊視能力者はいないわけ？」

「小野くんが加入する前に卒業した先代会長の赤馬^{あかば}さん、という人は見る力があつたらしく、田所さんと仲良くしていたものだよ。けれどあの人が卒業して今に至るまでのこの二年間は、霊視と呼べるだけの能力を持った者は一人もいない。気配を感じる人は居たようだけれどね」

「これまでここにいたのも、今いるのも、霊視以外のESP能力者が多いですしね」

踊場の答えに小野が続けて言う。そこにさらに司が問いをかぶせた。

「ESPって……超能力者のことだよね」

「俗に言うエスパー、サイキッカーというものです。Extra

- Sensory Perceptionの略でして、和訳すると『超感覚的知覚』です。定義としては既存の法則外の方法により外界の情報を得る力のことで、逆に外界に既存の法則外の方法で影響を与える力、つまり念力はPsychokinesisの略でPKと呼ばれています」

「パソコンで例えるなら入力と出力の方法が変わっているということだろうね。司くんの霊視や小野くんの異能察知は、感覚的なものだからESPに分類されるのではないかな。細かいことを言うならば、心霊などはまた違う分野・分類かもしれないが」

すらすらと話を進める二人を見て、本当に変な能力者と研究者の集まりなんだな、と司は妙に納得した。と、説明をするうちにふと疑問がわいたのか、目が合った小野は小首をかしげて司に問い返し

た。

「ところで司さんは、霊が見えるだけなんですか？」

「まあ、基本的にはね。取り憑かれることはあったから、霊媒体質ってやつでもあるのかな。やばそうな時はうちの婆さんに頼んで除霊してもらった」

「おばあさんはそういう方面に明るい人なんですか？」

やけに語尾を上がり調子にして、小野は早口でまくしたてた。司は祖父母と暮らしていた頃のことを思い返して、感慨にふけりつつ答えた。

「多分。よく話をしてくれる人だったけど、方言がひどくてわからない部分も多かったなあ。たしか『まぶい』がどうかがよく言っていた気がする……ま、二年前に肺炎にかかって死んじゃったんだけどね」

「あ……そう、ですか。それは、失礼しました」

「いや別に気にしなくていいよ。こっちこそ場の空気湿っぽくしてごめん。……ああそうだ。ちょうど、明るくネタとして提供出来る話題があった」

「ほう、なんだい？」

素早く反応した踊場が合いの手を入れて、今度は司が咳払いした。

「おほん。ほら、さっき小野が『判別できるだけ』って言ったじゃないか。……実は、同じなんだ」

「同じ？」

申し訳なさそうに肩を縮めていた小野が顔を上げた。司は半笑いで自分の目を指差し、ぼそりと言う。

「『霊が見えるだけ』なんだよね」

「……まさか」

「そのまさか。触れないどころか、声も聞こえないんだよ。実に、微妙なわけ」

「……微妙ですね」

おどけてみせた司にくすりと笑って、小野が言った。

場の空気が再びなごやかになったところで、踊場は腕時計を見やっつた。そして、そろそろかな、とささやいて、にこりと笑みを浮かべながら司に向き直った。

「さて、じゃあ少し質問タイムに入らせてもらってもいいかい？」

「質問？」

「きみの方の自己紹介を聞いていなかったのですね。あとからそちらが質問したければ僕らも答えるから、少し親交を深める意味合いでどうだい？」

「まあ、いいけど」

テキストに流されて司がうなずくと、踊場は胸ポケットから手帳を取り出してページをめくった。

「結構結構。では一問目から順にいこう。……いま、恋人はいるかい？」

「……いきなりプライベートな」

「まあ軽い気持ちで答えておくれよ。別段それ以上詮索する腹積もりはこちらとしても持ってないから。ちなみに僕はいない」

「私事です」

さらりと流すように二人は答えた。

「……いやな連携プレーだな……。いないよ」「今も昔もかい？」
「今も昔も」

ふう、ん、と息を漏らした踊場はページをめくり、そこから矢継ぎ早に質問を続けた。

「異性とキスした経験は？」「え、質問ってそんなのばっかなの？」
「僕は幼少の頃、保育士のお姉さんが最初だったかな」「私はないです」「またそうやって先手を打って答えざるを得ないようにしやがって……経験なんて、ないよ」「では同性とは？ 僕はない」「私もないです」「あるわけない」「異性と付き合う際に注目するのは？」「……性格」「男女間で友情は成立すると思う？」「するんじゃないの」「実はすごい年下好きだったりする？」「するもんか」

意味があるとは思えない質問ばかりが繰り返され、いい加減嫌になる司。にやりと笑って手帳を閉じた踊場は、「ご苦労様でした」と声をかけて席を立つ。踊場は部屋の入口まで近づくと、ドアノブを回した。

ひらひらと手を振りながら部屋に入ってきたのは口論義で、そういえばずっといなかったということは今頃になって司は思い出した。口論義はつかつかと部屋を縦断して自分の席に腰かけると、司に向けて声を飛ばした。

「あたしがいなかったこと、完全に失念してたたでしょ」

「そりゃ、そうなるよ。というか飲み物買いに行くだけでどれだけ時間を、」

「本当・嘘・嘘・本当・嘘・嘘・嘘」

「へ？」

片手で七まで指折り数えつつ、口論義はそうつぶやいた。

「これ、さっきの問いに対する司くんの答え。その真偽」

解説されて、口論義が口にした「嘘か真か」の解答を指折り数えて順に思い出した司は、途端にさあつと青くなった。そして理解が追い付いたにもかかわらず信じたくなくて、すぎるように確認をとってしまった。

「……えーと、これ、どういう、」

「あたしの能力は、トゥルル・オア・フォルス嘘発見器なの。虚言虚飾は看破して、相手の発

言の真偽を感知出来るのよ。ただ、発動条件が三つもあってねー。

ひとつ、『音声媒体で聞く』。文章におこした話じゃ感知不可。ふたつ、『本当のことを言わない』は嘘に入らないから感知できない。みつつ、これのために部屋を出てったんだけど、『相手があたしの存在を気にとめてない』こと。全部そろってはじめて発動可能」

「それで、答えにくい質問にしなければ嘘をついてもらうことができなから、あのように下世話な質問になったというわけなのさ。いかにも嘘と真が入り混じりそんな質問だったろう？ すまないね」

肩をすくめて小さく頭を下げる踊場の前で、みるみるうちに司は小さくなっていった。

「……み、見栄と、意地が……」

まるで、ひっぺがされてしまった。がくりとうなだれて、司は机に突っ伏す。小野はおろおろと手を上げ下げして、なんとか励まそうと言葉を選ぶ。

「お気になさらず、ご安心ください。……みんなやられてるんですよ、これ」

「能力の持ち主であるあたし以外はね」

「口論義も自分がやられたら僕らの気持ちかわかるだろうにね。まったくもってひどい女だよ、きみは」

「ほほほ。お褒めにあずかり光栄ですわ」

口元に手を添えて笑う姿は、まさに悪女のそれだった。司はせつなげな吐息を漏らして、頭を抱えた。

#

「『ごどくし』の噂って知ってる？」

ひとしきりからかったあとで二杯目のお茶に口をつけた口論義は、涙目で机に突つ伏した司に訊ねた。むすっとした顔を上げた司は口論義をじろりと一瞥して「将来、孤独死すればいいのに」とつぶやいた。口論義は涼しい顔でティーカップをソーサーに置く。

「そつちの字じゃないわよ。蠱毒師。虫が三つに皿一つ、毒の師匠と書く」

「ああ、それね……たくさんさんの毒虫同士を生存競争させて、最期に生き残った奴が誇る強い毒を使う呪いでしょ」

「そうそれ。でも広義の意味では犬を使って呪いの術を使う奴のことと同じく『蠱毒師』と呼ぶらしいのね。最近、そんな奴のことが噂になってるのよ」

噂？ と少し興味が出てきた司は眉根のしわを少し薄れさせる。

口論義の話は小野が引き継ぐらしく、彼女はスクラップをめくり始め、ある小さな記事を司に示した。

「なにに、『変死体発見、遺体には複数の歯型が見つかり……』
歯型？」

「歯型です。それも、明らかに人ではないものだから」

もちろん新聞記事にそこまで細かいことが記述されているわけはないのだが、ネットに広まっている噂では噛み痕は獣、しかも犬のものだと目されており、密かに話題となっているらしい。

「ガセネタじゃないの？ 普通の神経してる人だったら、噛み殺された死体を見て『ああ、食人鬼が来たな』とか思わないって」

「でしょうね。けれど、同時期にわんちゃんの子殺事件があったのです」

「……おいおい、いかにもおどろおどろしい話になってきたなあ」

少し引き気味になった司に、あくまでも淡々と小野は告げた。

「ここからそう遠くない森林公園をジョギング中だった男性が、遺体を発見したそうです。その犬は首だけが地面の上に出るように土に埋められており、死後三日は経っていたそうです。死因は……餓死でした。これは『犬神』作りの方法と同じ死に方です」

「話では聞いたことあるけど。たしかその埋めた犬の前に食糧を放置して、食べたたくても食べられない恨みを残して死なせることで強い邪念を作り出す呪い、じゃなかった？」

「そうです。そして犬の死亡時期の少し後に、この新聞記事の方は亡くなっています」

「まあ、だからといって直結させてしまうのは少し性急かもしれないけれど、しかしまったく関係性がないとも言いきれないだろう。

だからこそ僕らはこの真偽を問うべく、活動しているというわけなのさ」

踊場が締めくくる。司としても、気になる話題ではあった。姿勢を正して腕組みし、なんとしたものと考え込んだ。

呪い。文明が発達し、科学がオカルトを追い立て排斥した現代において、真つ先に生活から除去されたものと言つてよいだろう。しかし今でもその不可解な力にすぎり、他人へ危害を加えんとする人は、確かに存在する。

それは確かな理解を得られる因果関係や科学的根拠の下にあるものでなく、理の外を漂うわけのわからないものだからこそ虐げられた。けれど、求められるからこそ消えずに残っている、と言い換えることも出来る。

いずれにせよ司にとっては小野や口論義が持つ異能などより、よほど見知った事柄だ。良く知るからこそ、その危険性も熟知している。

「危ないよ」「危ないとしてもやらなきゃなんないのよ。ならもしあんたがさつき言つてた村のこと、危ないからって理由で探すのやめると言われたら、やめられるの」「……無理」「でしょ」

なおも『犬神』という単語に不吉さを拭いきれない司だったが、自分の目的のこともあつてか、どうしてもそれ以上強気には出れなかった。

「みんな、色々事情あつてのことです。覚悟は、しているのですよ」「覚悟、か」

「なににせよ放っておけないわけよ、あたしたちとしても」「そりゃ義憤つてやつ？」

「……んなわけないでしょ。司くんはテレビの殺人事件見て、逃走犯に対して『許せない』『やつつけてやる』とか思うの？ 単なる好奇心よ……あとは色々、プラスアルファ」

後半のつぶやきの際に口論義の目が歪んだ輝きを得ていたが、司は何も言わなかった。

「そういうわけだから、なにかしら情報つかんだら連絡ちょうだい」

口論義から差し出された携帯電話から赤外線通信でアドレスを取得し、司は登録する。試しに開いてみると、この部屋の入口にあったのと同じく達筆な字で『奇怪事件展覧列挙集』 会員以外はお引き取りください』とトップに載せられたサイトに飛んだ。

「うちの特設サイト。会員以外は基本的に入れないわ。その会員登録済ませるとアドレス送られてくるから、そのアドレスに情報を流すようにして。列挙集の中でただいま絶賛更新中の『犬神使い編』の情報板と、会員のグループ全体にメールが届くから」

「了解」

言われて、司はトップ画像のすぐ下にある登録画面を見た。ついでにしばらくスクロールしてみると、これまで首を突っ込んで研究した成果だろう、いくつもの事件が項目ごとにわけられて掲載されていた。たまに青字で「解決済み」と書いてあるものもあったが、六、七割は赤字で「未解決」と付いている。長々とスクロールするのに飽きて、司は登録画面に戻った。

「にしても結構情報量、多いね。一通り見るだけでだいぶ時間とられそうだよ」

「これでも信憑性の高いものだけを厳選し抽出しているのだけどね。昨今の世の中は情報の伝達速度が速すぎて、混ざりものなく純度の高い情報というものは噂として広まる前でなければ手に入らないのさ」

「ほぼ手に入らないってことか」

「その通りだね。予知能力でもあれば別だが。まあでも、我々には小野くんがいるのでね。彼女が加入してくれた去年からは、質の良い情報の入手率もぐつと高まってきているよ」

うつむいて拳を握っていた小野は司に見られていることに気付くと慌てて、なにやらもそもそと落ち着かなそうに椅子の上で動いた。ぼそぼそと控えめな声で、踊場の言葉に反抗する。

「そこまで頼りにされても、私は困るのですが」

「今回もなにかあったらすぐに会員メールを送ってね。あたしと踊場は外うるついでること多いし、すぐ駆けつけるわ」

「あまり頼りにされすぎると困るのは僕らも同じであるけど、ね」
「？ なにか情報収集のコツでもあるの」

「それについてはまたおいおい語っていくこともあるのではないかと思うよ。とりあえず、今日のところは司くんに入会してもらおうことも出来たし、これでおひらきとしておこうか」

「そうねえ。じゃあなにか情報つかんだら会員メールつてのと、毎日四時半ごろからこの部屋で活動、つてのだけ忘れないでね。じゃあ！」

車校行く時間だ、とぼやいた踊場が席を立つと、続けて口論義もバイト行くわー、と部屋を出ていった。ちなみにどちらも、校則では禁止されている。司はなんだかな、とひとりごちて、ケータイで奇怪事件展覧列挙集を開いた。

自分の欲する情報やそれに近いものがないだろうか、と一通りスクロールしてみるが、この場で探してもらちが明かないほどの膨大な量を見せつけられて辟易し、結局画面を閉じた。顔を上げると、出ていくタイミングを失っていたらしい小野が正面の席にちょこんと座っていた。

「帰ろうかな」

「では私も帰ります」

「チャリ通学？ 歩き？」

「駅までは歩きます。そこからは黄色い路線図をずっと辿って」

「同じ道のりだね。行こう」

部屋を出ると、物理担当であり司の担任でもある牛勿うしもちが鍵を持って待っていた。気をつけて帰ってください、と声をかけられて、「殺人事件の背後に見え隠れしてる呪術師を探そうと思ってます」などと言ったらどうなるかな、と司は考えた。考えるだけに、していた。

三題目 「怪しくないけど危ないかも」と口論義が言う(後書き)

車校。読みは「しゃこう」。自動車学校のことです。方言です。：
： ホントは方言ヒロイン出したかったのですが、名古屋弁は濁った音が多いので好まれないと思い、却下しました。でも方言っ娘ラブ。
ではまた。

四題目 「危険は憑き物」と踊場が付け足す(前書き)

いまさらですがこのルールは

あり・あり・無し(グロ・エロ・アットホーム)ですから。

四題目 「危険は憑き物」と踊場が付け足す

#

「つかさあー、メシにしよっぜっ」

うるさい声で目覚めた司は、前納のテンションにうんざりしながら目をしょぼつかせて時計を見た。昼休みに入ったばかりの十二時四十分で、目を落とすとノートの最後の方はミミズの死骸のごとくうねうねと波打っていた。自分が授業の後半ほとんど寝ていたことを、そこにきてようやく自覚した。前納に言葉を返す。

「今日は、お弁当持ってきてないし学食行くんだけど」

「なんだよちくしょー、最近付き合い悪いぞおめー。おれに一人メシしろってのかよ」

「今日はもう一人いるじゃん」

前納に言いつつ、蓮向はまむかじという斜め前に座る男を指差す司。途端に前納が不満そうな顔で歯をむき出しにしたところで、のっそりと蓮向は振り向いた。スポーツ刈りで制服をきっちり着こんだ、いかり肩の大柄な男だった。ちなみに大柄だが太っているわけではないその身体は、彼曰く柔道で身に付けたものらしい。

「……なんだ」

しゃがれたテノールボイスで答えたそいつに、司は笑顔で言った。

「昼ごはんを前納がおごってくれるって」

「おーいおい司、なに勝手に適当なこと言ってやがんだ」

「……おごってくれるのか？」

「なんでおれがテメエにおごらなきゃいけないんだ。おれはだなー、ただ司にメシ食おっぜって提案しただけだったの」
「……で、却下されたのか」「考え中って奴だっ。たぶん」

前納が言つと、蓮向はおもむろにごそごと鞆を漁り、次いでひっくり返して中身をぶちまけた。中には弁当箱があつたが、開いてみると中は空だった。いや、正確には乾いた海苔の切れ端などが付着していたが、少なくとも弁当と呼べるレベルの食べ物は入っていない。三人全員が押し黙る。

蓮向は、取り出した時と同じく緩慢な動作で弁当箱をしまつと、立ち上がって司を見る。

「……昨日洗いわすれた。私も今日は弁当がない。学食に行くか」

「あ、蓮向にはこの前おごつてもらつたっけね。お返しに今日はおごるよ」

「……いや、おごつたんだ。返さなくていい」

「そう？　じゃあまた今度ね」

「じゃーおれも学食行くよ！　たしかイチゴジャム入れた蕎麦つてのあつたじゃん、あれ食おっぜっ！」「挑戦は止めないけど引くよ」
「……引くな」「引くなっ！」

三人で連れ立って一階層下へ降りる。二階にある購買の近く、学食コーナーは教室二つ分ほどのスペースで営業しており、昼になると教職員もよく利用している場所だった。

食券を買うのは前納に、場所取りは蓮向に任せた司は、三人分の水を取りに行く。ところが人でごった返す食堂の中をお盆の水をこぼさないように移動するのはなかなか難しく、帰ってくる頃にはひとつのコップにはほとんど水が残らなかつた。悪いな、という気はしたものの、そのコップは前納のものになつた。

「おつまつせー。いやー学食とか購買のおばちゃんつーのは、よくこんな激戦が日々繰り広げられてつとここで働けるもんだよなどと言いつつ、司が『しすせそつどん』蓮向が『淡々麵』でよかつたよなー?」「うん、ありがと」「……おごつてくれるのか?」「おごらねーよ!」

三人がそれぞれ手を合わせ、ばらばらなタイミングで食べ始める。しばらくは無心に麵をすすり続け、空腹を満たすことだけを考える時間が続く。

「……というか、だ。前納、そのジャム蕎麦は、美味しいのか?」「意外にも『マズっ!』って言うほどの味じゃねっけどよー。たまにイチゴの果肉のぐにやって感触と特有の酸味があるってのが全体の風味を損ねてんなー」「まあ総合的に言う和不味いってことだよね」

入れ替わりの激しい食堂の中は慌ただしい空気に満ちていて、食べ終わったらさっさと出ていかななくてはならないような気にもさせられたが、三人は箸を置いた後もしばらくぐだぐだと駄弁っていた。担任の牛勿がちよいと頼りなげだとか、数学教師がよく古典教師のあとを尾行してるのを見かけるとか、クラスの女子で何某が可愛^{なにがし}いとか、健全な高校生らしい会話だった。

ふとそこで、司は小野の姿を食堂の入口に見た。だが彼女は食堂で食べるわけではないようで、すぐ手前にある購買にてパンらしきものを購入して去っていった。すると横に座る前納が司の視線を追っついて、手でひさしを作って目を細めていた。

「ん? なんか見えてつかー?」

「いや、研究会で同学年の人がいたから」

「あーあれ、はいはい、この前迎えに来てた奴かー。あれから三日経ってっけど、結局あの研究会入ったのか?」

「一応ね。民俗研究に興味あったから」

「……民俗研究？ 奇怪事件がどうかいう、怪しげなところではなかったのか？」

「学術的な研究もしてるみたいだったよ。フィールドワークもしてるとか。人数少ないけど研究会として認められてるのはそういうところが大きいんだ、って今のあの人、小野って言うんだけど、あいつが言ってた」

それらを聞いたのはあの日の帰り道だった。無言でしばらく歩くうちに沈黙に耐えきれなくなった司が「どこの中学だった？」などと当たり障りのない話題を振ったのが会話のはじまりだった。

しかし、あまり多くは話さなかった。というのも、突然話しかけられてかなり慌てふためいた小野は開口一番「すみません！」と謝ったのである。司はなんか自分が告白して振られたような光景に見えるな、と思い、周りの目を気にした。

目が合った全員があさつての方向を向いていて、涙で景色が滲んだ。ぐっとこらえて上を向き、「なにが？」と力を振り絞った声で尋ねてみる。と、小野はなおも慌てつつ答えた。

「私、その、あまり親しくない人と二人きりだと、あんまりうまく話せなくて」

「今朝、勧誘に来たときはすらすら話してたじゃん……」

「あれは、台本通りというか。教室にお迎えにあがった時も、聞かれそうなことを事前に予想しておいたというか」

そういえばちょっと棒読みだったというか、会話がかみ合わなかったというか。などと司は思い返し、小野のテンパリ具合に納得した。なら一緒に帰ろうなどと言わなきゃよかったかな、と苦笑いして言つと、即座に「しよっぱなから心象を悪くしたくない！」と切羽詰まった表情で返された。司は、自分の苦笑いが少し薄味にな

ったのを感じた。
回想が終わった。

「まあ、変な人の集まりだったけど、そう問題は無さそう。やっていけると思ってるよ」

「……それは、司も変な人ということになるのではないか」

「なんだとう？」

「んでさー、結局なに研究してんだ？」

前納に話を振られて、司は三日前に聞き及んだ『犬神使い』の話を思い出した。思い出して、もう一度目の前に居る二人に目線を与える。二人とは入学してからの二週間ほどしか付き合いがなく、オカルトちつくな話をするにはまだ信頼度が足りていなかった。

ということ、自分や会員が異能を持つことなどは伏せて。近隣で起きた殺人事件と、犬の虐殺事件。ふたつの関連性について自分たちが調べているということ、話してみた。

結果は、二人とも同じような反応だった。そもそもぐちゃぐちゃに噛まれた死体のことと餓死させられた犬のことなど、食後にするべき話ではない。口元を押えてえずいた二人は、ちよつと恨みがましい目で司を見る。

「どうかしてつぜ、そんな事件起こす奴も、調べる奴も」

「起こす方には賛成だけど、調べる方もそんなに駄目かな」

「……不謹慎、というものだろう。まさか、被害者の遺族に聞きこむような、下衆なマスコミの真似ごとはしていないだろうな」

「別に犯行の理由とかに興味があるわけじゃなし、そういうことはしないってさ」

イチゴジャムが沈んでいて血の色にも見える蕎麦の残り汁を見つ、司は答えた。前納は口元から手を離すとそれをあごに添え、苦

しげな顔をいぶかしげな表情に変えると司に問いかける。

「あん？ そらまた、へんな話だなー。たとえば推理小説とかニュースの事件にしたってよ、読者は動機が知りたくて見るもんだろー？」

「動機がなんなのか知りたいのは、視聴者が納得して安心したいからじゃないの。理由不明、原因も不明じゃ、自分の身にも降りかかるかもしれないから。いつだって人間が一番こわいのは、正体不明のものだから」

「……幽霊の、正体見たり枯れ尾花、か」

「あの研究会は枯れ尾花の追求が目的なんだよ」

「枯れ尾花じゃなくて本物の幽霊だったらどうすんだ」

「大して珍しいもんじゃないから、キャッチ&リリースだ」

水をひとくち飲んで司は席を立とうとした。そこへケータイがバイブ音と共に着信を知らせる。会員用メールだった。

#

「大して面白い情報もないから、ギャザー&リリースね。解散」

お茶をひとくち飲んで口論義は席を立とうとした。そこへ踊場が湯のみ片手に声をかけて押し留める。

「口論義、正確にはリリースに日本語のニュアンスでいうところの『解散』の意味は無いよ」

「うっさいわねシヨタ郎。言葉なんて通じればなんでもいいでしょうが。かたつむりをでんでん虫と言おうとまいまいと言おうとどうでもいいでしょが」

「かたつむり蝸牛考を読んで出直してきてもらおうか。柳田先生に謝れ。あと

僕は小太郎であつてシヨタ郎ではない」「身長一六〇超えた？」「まだ」「永遠、ね」「今なにやら悪意のあるニュアンスが伝わってきた気がするのだが」

部屋に入ってきた司は入口のところで立ちすくんだまま、二人のやりとりをぼーとながめていた。その様子に気付いた小野がお茶を淹れて司の席を示してくれたので、そろそろとそこに座る。またも一番下座である。ちなみにお茶くみは上手く出来なかったため解任させられた。

「……まあ普通、ほいほいと情報が集まってくるわけないか」

「私の方でも片っ端から当たってみてはいるのですが、どうにも」

やはり知り合いがいるところではそれなりに喋れるのか、つらつらと小野も現状を述べてくれた。ただ話題をこちらから振らなければ「対象に司以外の人を含めて」で話すことの方が多いのも事実だった。ちよつと寂しく思いつつ、お茶をすすってせんべいに手を伸ばす。

「こつちも知り合いに当たってはいるんだけどさ」

「何も入ってきませんか」

「少し畑が違う、というか事後処理の方が専門の人だから。あ、一応名刺預かってきたから、渡しとくね」

内ポケットに入れていた手帳に挟んでおいた名刺を、正面の小野に手渡す。名刺交換を執り行う企業戦士のように丁寧に受け取った小野は、書かれていた名前を見て首を傾げた。

「おてあらい……おお？」

「御手洗御御って読むんだ」

「偽名ですか？」

「本人は職業用の名前だと言ったよ。拝み屋やってるから結構その道に詳しい。ただ、詳しいからこそだろうね、邪術には関わるな
って忠告された」

「でも、関わるのでしょう？」

「うん。だから『わかった。ところで被い料いくらだっけ？』って
聞いたんだけど殴られた」

後頭部をさすりながらせんべいをかじり、司は笑った。小野もく
すりとして、お茶をすする。

「みんなはどうやって情報集めてるんだっけ」

「会長は噂に耳を澄ませて、その中から真偽を聴き分けて選別して
います。踊場さんはネットで情報を募ってますね。で、私はぶらぶ
らしています。もともと惹かれやすい体質なので」

「惹かれやすい……？」

「小野ちゃん、そっちは結局なんか見つかったの？」

踊場との言いあいをやめた口論義が、むすっとした顔で頬杖をつ
きながら言った。踊場の方はなにやら机に突っ伏してしまっていた
が、そちらには目もくれずに口論義が続ける。

「あたしたちの方はさっぱりなのよ。これってやっぱ、雇われ呪術
師の仕業であつてもうすでに東海地方からはトンスラされてるって
ことかしらね」

「私も特別なにか見つけてはいません。しかし、雇われの仕業なら
二件目を続けざまに行うような愚は犯さないでしょう」

「ああ、昼に送られてきたメールのあれね」

司が反応して、ケータイを取り出してみる。内容は二件目の殺人

事件についてで、今度の被害者も噛み殺され肉を食いちぎられた痕跡があるとのことだった。ちなみに横あいから画面を覗いて文章を読んだ前納と蓮向は、口元を押えるとそそくさとどこかへ去って行った。その後の行方は、杳として知れない。

口論義もケータイの画面を見ながら椅子の背もたれに身体を預け、ぎしぎしと船をこぐように体重移動させながらつぶやいた。

「というか、最初から二件やるつもりだったんじゃないの？ 餓死させるのに三日ってのは、ちょっと短すぎると思うし」

「……術者の方が死んだのだという見方はないのかい」

なぜか鼻声の踊場が突っ伏したままぐもった声を出す。口論義は眉をひそめて、「それもあるかも」と囁いた。

「人を呪わば穴二つ。呪いで攻撃するのも鍛えた右ストレートで攻撃するのも、同じようにリスクはあるものだからね。殴るのであればちゃんとした拳の固め方と殴り方を身につけなきゃこっちの骨が折れるように、呪いにも作用反作用の法則が存在する。反作用の受け流し方を知らなければ……」

踊場が言葉を切ると同時に、口論義がせんべいを二つに折った。折った半分は踊場の方に差し出され、じとつとした伏し目がちに口論義をにらんだ踊場は、噛みついてそれを受け取った。

「じゃあもう事件は終息してるかもしれないの？」

「いや、そうとは限らない。最悪、術者も無しにさまよう呪いとなつているかもしれない。そうなれば文字通りに鎖の解かれた狂犬だ、被害がもう少し続くかもしれないね」

「まあ事態がどうにか転がるか、鉞つば姫ひめがなんか見つかるまでは静観しておけばいいだろ」

「まさかり？　つてか、誰？」

司が振り向くと、入口のところには長身の男が立っていた。ワックスで逆立てた黒髪に黒縁メガネをかけ、指定の白っぽいセーターを着た、この会員の中では踊場に並んで真面目そうな格好の男だった。

「で、まさかりって、なに？」

続けて問うと、冷たい目をした小野が長身の男をにらみつけていた。

「……スケボーは取り返せましたか、廉太郎さん」

呼ばれて、男はきよんとした顔の後、にやにや笑って小野に近付いた。一八〇はありそうな長身を屈めて、ガラの悪い不良のごとくポケットに手を入れたままステップを踏む。

「あ？　ははーん。はーはーん。ひよつとしてまだこのあだ名は伝わっていなかったか？　そうかそれは悪いことをしたな。だがお前だって俺のあだ名をこうまで広めやがったのだから、おあいこって奴だと思っただぜ」

「どこがですか。どこがおあいこだと！」

珍しく声を荒げる小野から飛びのいた廉太郎は飄々とした態度で悠々と歩いて通り、司の隣の隣に位置する席に座る。そこは口論義にほど近い位置で、早速前に置かれた茶菓子に手をつけた。食べながら、司に片手を上げて見せる。

「よう新入りくん。なんだっけか、マルドメサカサとかいうんだっ

たか」

「逆さじゃなく司」

「じゃあマルドメと呼ばせてもらおう。俺の名は」「廉太郎さんといえます」「そう廉太郎……ちがう俺の名は」「かの有名な滝廉太郎さんとそっくりな外見をしていたために小学校で音楽の教科書が開かれた瞬間からそのあだ名になったとのことですよ」「由来までご説明ありがとうございます。だが今はこの通りメガネも変えて髪型もオールバックはやめた。そして俺の名は」「廉太郎くん勝手にあたしの茶菓子食べないでくれない?」「ああ、悪かったな会長。だが俺の名は」「堕メガネ、スケボーなら僕が生徒指導部に言っ捨てておいてもらったよ」「俺は堕メガネじゃねえ! つっ! か踊場テメエこのシヨタ郎くんよおなにしてくれやがんだ俺のスケボー!」「レンタロー、サワハの食べるか?」「微妙に会話を前に戻すなサワハ!」

急にやかましくなった。

そしていつの間にも司の隣にもう一人増えていた。

長い黒髪のうち、後ろ髪は全て束ねて毛先を上に向けバレッタで留め、サイドのもみあげの辺りは三つ編みにしているという少々風変わりな髪形。肌は小麦色で東南アジアのエスニックな雰囲気漂わせており、大きな鳶色の瞳と視線が合うと、にこっと笑って頭を下げた。着ているセーラー服の胸当ての辺りが緩い、というか胸当てをしていなかったため、司は内心もうちょい屈んで、とか思った。

「……あー、收拾つかなくなる前にご紹介しておきます。こちらのメガネの方が廉太郎さん、こちらのタイ人っぽい方がサワハさんです。どちらも二年生」

「だから廉太郎じゃないと……」

「ハイ。よろしくネ、マルドメくん」

サワハは胸の前で軽く手を合わせて挨拶してきた。司もつられて頭を下げたが、

「いや、マルドメ違うし」

とりあえず訂正しておいた。

#

「しかし今度はモノホンの呪術師探しなんてやっているのか。どうなることやら、だな」

どこからか取り出したみたらし団子をもぐもぐやりながら廉太郎はつぶやく。会員が全てそろった部屋の中はどうにも狭苦しく感じられて、司は肩を縮めていた。

「また冬の事件の時みたく俺が出張ることになるのは、正直御免こらうむるぞ」

「心配せずともきみの出番はないようにしてあげるつもりだよ。そもそも、きみは何につけてもやりすぎるくらいがあるからね」

腕組みした踊場はじろりと横目で廉太郎を見据えて言う。そんな彼の態度をせせら笑い、廉太郎は食い終わった団子の串をゴミ箱へと放った。

「甘いことを言うな踊場、人は人を食って生きるものだけ。強くなければ生きてはいけん」

「優しくなければ生きる価値がない、とも言っただろうこの単純生物」
「そうだ俺はシンプルに生きている。危ないものにはなるだけ近寄らず、万一近付いてしまったら相手を食ってでも生き延びる。そこ

で手が空いてればお前らだって助けてやる。だが俺の腕は二本しかないのだ」

「いやなら抜ければいい」

踊場が冷たく突き放すと、廉太郎は頭を掻いてそついうことじゃなくてだな、とぼやいた。騒がしくなったと思ったら途端にぎすぎすした雰囲気になったので、司は本当に居たたまれなくなってはらはらしていた。ところが、サワハも小野も大して気にしていないように、呑気にお茶をすすっている。口論義は笑って静観していた。すると、二人の会話に決着が出る。

「……要はいつもの確認だ。止めてもお前らはやめん。ならば、俺は危険が迫れば真つ先に会長を助ける。それだけは譲らんということを示しておきたいということだ」

「こちらもいつも承知の上だよ。けれどきみがいつ抜けるのも自由だ、ということは示しておきたかったということさ」

へっ、と笑って廉太郎は顔を背けた。くっ、と笑って踊場はうつむいた。じつとその光景を見ていた司は、ぼそりと小声で正面の小野に問う。

「なんなの、これ」

「大体、見ていればわかるでしょう」

小野に耳打ちされた。そして小野は廉太郎、踊場、と順に指差して、最後に奥に座る口論義を差した。一、二秒してことの次第を察した司は、また身を乗り出してぼそぼそと訊ねる。

「えー、その、一方通行？」

「会長は何も気づいていません。ただ、二人は本当は仲が良いんだ

ろくなー、と本気で思いこんでいらっしやるだけです」

「……面倒な。どっちがKなんだろう」

「いえ、どちらも自殺などはしないと思いますが……」

有名な三角関係の話に当てはめつつ二人が話していると、とりあえず廉太郎と踊場の間で話がまとまったのを見計らってか、口論義が手を叩いた。

「はいはい。じゃあ司くんを紹介してなかった会員の残り二名も集まったし、お互い自己紹介してもらいましょうか」

「その前にちょといい力ナー？」

司の隣でサワハが手を上げていた。はい、と指差して口論義が発言権を与えると、跳ねるように立ち上がって腰に手を当てた。いちいち動きが活発な少女である。

「……サワハ、犬さん見たかも」

「犬さんって、まさか犬神？」

司が聞くと、サワハはんーと首をひねって「ユーレイじゃない力モ」と言う。そして自分を指差し、なにやらジエスチュアをまじえて説明をはじめめる。

「あー。昨日夜仕事してたらネ、お客さん疲れたの人来たのよ。それだけならいつも通りいる人の一人だけど、ドーモ変だったから終わったあとちょっと？視て？みまシタ」

「……仕事？ 見る？」

「おう、そいえばマルドメくん会う初めてネ。サワハの家マツサージやってるよ。タイ古式マツサージ。それでそれでサワハ、遠く見えるのヨ」

ちよつとサワハが片言なせいで言葉の理解が追い付くのに時間がかかってしまう司。じき慣れる、と助け舟を出しながら、踊場が補足説明をした。

「彼女は自宅のマッサージ店を手伝つてる。そして能力としては、クレアウオヤンス遠隔視が使えるんだ。日本風に言うなら遠眼鏡、千里眼という奴さ。まあサワハもやはり能力には少し微妙な部分があるのだけど……その説明は今はいいだろう。続けよう」

「あい。踊場サンありがとネ。そんでえーと、サワハお客さん疲れてる見て、マッサージして、帰ってったんだけど気になったの。だからちよと遠く視てみたけど、そしたらお客さん血まみれだたヨ。慌てて追いかけて、路地裏いて、救急車呼んだね。……ダメだただね」

がつくりと肩を落として、サワハはうつむいた。感情表現が直接的で間に不純物を挟まないような奴なので、そういう態度をされると一気に部屋の空気も寂しいものになった。口論義は咳払いして、立ち上がると部屋の中を移動してサワハの肩を叩いた。

「自分を責めちゃダメよサワハ」

「はいね、わかてるよ。……ただサワハ視えたのちよとだけネ。茶色い毛、レトリバーより大きい身体、背中だけ視えてすぐどっか行つたよ」

なおもサワハはしよぼくれている。なだめるように接する口論義は、しかし頭の中では色々考えているようだった。目はあさつての方を向いていて、恐らくは今までの情報と照らし合わせて考えているに違いない。

「……んー、現状だとあんまりわかることが……そういえばあれよね、たしかサワハの能力って、」

口論義が言いかけたところで、司は頬に風を感じた。

左を見ると、ドアが開いている。だが誰もいない。たてつけが悪いのか、と思い立ち上がって閉めようとする。

すると　ぬるり、自分のすねの辺りを撫ぜるようにして何かが動いたのを感じた。藻が生え虫の死骸が浮くプールに裸足で飛び込んだような感触と、香ばしく腐りきった、濃厚な膿のような臭い。嫌悪感に耐えきれず口元を押えて、自分の足下を見る。何も無い。振り返っても部屋はいつもと同じだった。ただ、人の居ないはずの部屋から物音が聞こえた時のような気味の悪さだけが沈殿している。

既視感のある光景だった。否、いま感じているこれは視るだけのみならず聴覚以外の全ての器官が反応している。

そつだ。見るのではなく、視る。今更そんな対処法に気付いて、そして、

司は少し、遅かったと気付く。

くちゅ、くちゅ。

こねる音が響いていたのは、サワハの手首だった。え、と声を上げて手首を上げようとするが、動かない。下から引っ張られていると気づいて、首を曲げて手首を見ることにする。

じくじく、血が漏れ出していた。噛み傷の痕は人間のような楕円ではなく、そう、まさに犬のような、少し角ばった形をしていてじゅばつと一気に裂かれた。部屋の床にばたたた、血が飛び散る。

桃色の肉が露出して、繊維の細かい断裂まで見て取れたところで、司は目を逸らし聴覚からも意識を逸らす。

「ぎ……う、いいあああああつ、つあああああああつ！」

甲高い悲鳴を上げて、サワハは手首を押えこんだ。だがそこには既に犬はいない。次に噛みついたのは、齧りがいのありそうな足首だった。くるぶしまでの靴下しか履いていなかったために、素足をそのまま噛まれる。そのままだと、千切られる。ぶちゅぶちゅと、赤い斑点が床に散る。ごりり、真皮も筋肉も黄色い脂肪も貫いて、白い骨の表層を齧られる。神経に歯の先が触れるたび、痙攣しながらサワハが叫ぶ。

「え、どつ、これ、なにっ？」

「どいてー！」

懐に手を入れて、司は御守りを握りしめる。もう片方の手で困惑する口論義を押しつけ、御守りを抜き放ちながらよく目を凝らした。はつきりと今度は見えた。いたのは、白っぽい毛並みの柴犬。げつそりと痩せて肋骨が浮いた腹部と、脂肪をはいはたして筋だけが残った足。黄色みがかかった白に濁ってどこを見てもわからない瞳とだらしなく開いた口の端から、茶色いなんらかの液体がこぼれ出ている。床に落ちた液は血とまじりあって、表面に油のような汚い泡を浮かせてそれが弾けると悪臭を発していた。

御守り 御守り刀を、司は逆手に持つ。三寸ほどの刃は針のように鋭く細く、なんらかの仕込み刀と思しき品だった。それを振り下ろし、犬が無防備に晒していた首筋に突き立てる。思ったよりも硬い感触が肘まで伝わり、刃が半分ほど埋まっているのを見た司は、左手を振り上げて刀の柄頭に叩きつけた。釘に金槌を打つ要領で、刃はより深く突き刺さる。司は思い切り手首をひねって傷口をえぐると、今度は両手で自分の方へと引いて、傷口を押し広げた。

サワハとは違い、血も、何も、出なかった。ただ犬は歯を食いしばって刃先から逃れると、開いたままだったドアから尻尾を巻いて

出ていった。残された司はどつと尻から床に倒れると、震える指先で、懐に御守り刀をしまった。手先が狂って刺した指から流れた血の玉を、舌でなめとって飲み下す。

「サワハ、ねえサワハ！」

「さ、サワハさん！」

ショック状態で歯を打ちならすばかりのサワハは完全に気絶しているようで、口論義と小野の呼びかけにも応じない。自分の血の味でこみ上げてきた吐き気を押えながら、司は足を引きずって保健室に人を呼びに行った。

四題目 「危険は憑き物」と踊場が付け足す（後書き）

グロ注意。

……言っほどもなかったかもしれない

五題目 「お見舞いありがとネ」とサワハは笑う

保健室に運び込まれたサワハは即座に止血を施され病院に運ばれていった。口論義は付き添いのために同乗していき、残った司と小野、踊場、廉太郎の四人は「校内で犬に噛まれたりするのであるのか？」と学年主任の教師から質問されたが、どう答えたものかもわからず「野良犬が入ってきたのかもしれない」とお茶を濁しておいた。

物理実験室に戻ってようやく落ち着いた頃には、すっかり日も沈んで部屋の中もすみれ色で満たされている。ぶ室のドアを開ける瞬間には少しだけみんな肩をこわばらせたが、中には何も存在せず、ただ出ていく時の慌ただしさだけが物の散らかった光景として残っていた。

「俺たちは、なにも、出来なかったな」

噛みしめるような廉太郎の言葉は、四人全員の胸に重く響いた。

「……どうにも出来ないことだったのだろうさ。特に、きみの能力など本当に微妙だから少なくとも僕は期待もしてなかった」

「うるさいぞテムエ」

「それに、僕らはそれぞれがそれぞれの目的を持ってここに集っている。覚悟は各々出来ているのだから、気に病む必要はないはずだよ」

遠回しにはあるが少しだけ責任を軽くする言葉をかけて、踊場は椅子を引いた。

「それにしても、やれやれ。『クラリータの黒い怪物』にそっくりの事態じゃないか」

さつきと同じ位置に腰かけて、踊場はなにやら思わせぶりなセリフを吐いた。疲れていたが、司は気晴らしに話をうかがう。

「なに、それ」

「一九五一年、フィリピンで起きた奇怪事件さ。なんだかよくわからないものに噛みつかれるから助けてほしい、と当時十八歳だったクラリータという少女が警官に泣きついたことから発覚した事件だね、クラリータは必死に訴えかけたが、その証言が『男かも女かも外見すら知らない？ なにか？ に噛みつかれる』というものだったため、彼女が麻薬中毒におかされていると判断した警官はクラリータを警察署へ連行したんだ」

「たしかに、幻覚を見ている中毒患者としか思えない証言ですね」
「ところが、クラリータは警察署の一室に入ると『また今度はここにいる、黒いなにかに噛みつかれる、助けて』と叫び出して、警官が見ている前で実際に彼女の身体に噛み痕が現れた。もちろん、そこには何もいなかったという。触れようとしても彼女の身の回りには何もいなくて、透明の怪物が噛みついているかのように、ただ肌に噛み痕だけが現れたそうさ。……そういえば、世の中には一度ストープでやけどした人が火の入っていないストープに手を置いた際にもやけどを負うという、奇妙な事例もあるそうだけれど」

サワハの身に今さつき起こったことと、酷似している事件だった。けれど司はゆっくりと首を横に振って、踊場の説を否定する。

「脳の想像でやけどをするとか、見えない怪物による攻撃とかじゃないよ。他の人には見えなかっただろうけど、確かにあそこには犬神がいたんだ……げっそり痩せてて血肉を求め、飢餓の亡霊だった……動物が苦手な火、ひいてはそこから生まれる鉄の品である刀があったからこそ、今回は追い払えたけど」

役に立つこともあるもんだ、と司は内ポケットを服の上から押えた。

するとその時、バイブ音が響く。踊場はポケットからケータイを取り出すと会話をはじめ、その相手は口調から察するに口論義であるらしかった。踊場は二、三言言葉をかわすと少し耳元からケータイを離して「サワハくんは無事そうだ」と説明し、また会話に戻った。

司が断片的に聞き取れた内容からするとまだショックで眠っているらしいが、縫合はうまくいったのでそれほど傷跡が残るようなこともないらしい。もう少し早く？ 視る？ という方法に気づいていれば、と後悔していた司には、これは朗報だった。

「しかし飢餓の亡霊、かい。施餓鬼せがきでも行わなくては治まらないのかもかもしれない」

「踊場さん、ひとまずはサワハのいる病室の四隅に、盛り塩をするように言っというて。少しは悪いものが近付きにくくなるだろうからあとは時々、指を鳴らしてリズム取るのもいいかもしれない」

「弾指たんしか。そのあたりは彼女、音楽は好きだしよくやっているがね。特に気をつけるように言っておくとするよ」

「しかしそれでも、また訪れるかもわかりませんし……さっき名刺で拝見した、御手洗さんをお呼びするのはどうでしょう？」

「……被い料、部費でまかなえる？」

「ああ、そういうば、名刺をもらう際に冗談で被い料を訊ねたのですが」

小野の問いにうなずいて、司は右手の指を三本立ててその後ろに左手で作った輪を四度並べてみせると「プラス、実費」と答えた。口論義などはともかくとして、バイトもしていない司たちには少しお高いことだけはよく伝わる。ところが、

「こういう時に使わんで、部費なんていつ使う」

「いや廉太郎さん、そうは言うけど領収書のナントカ代、ってところどうするの」

「祈祷料三万円也と正直に書けばいいだろ。足りなければ俺も出す」

ふんぞり返ってこう答えた廉太郎に後押しされる形で、結局司はアドレス帳から呼び出した御手洗の番号におそるおそる電話をかけた。ぼそぼそと小声で話す司は畏縮した様子で、犬神の件について説明をした。

するとスピーカーホンを使っているのかと疑いたくなる音量が飛び出してきて、卓を囲んだ三人はびくつと身じろぎして司から離れる。どうやら忠告を聞かず犬神に関わったことについて叱られている様子で、司は平身低頭、自分のケータイに向かってぺこぺここと謝りながら話を続けていた。

五分ほどして通話が切れると、憔悴しきった司は三人に「特別に一人頭ワンコインで受けるって」と交渉結果を告げる。だが三人はお金の面がどうにかなったことよりも、人が叱られている気まずい空気から解放されたことについて安心していたのだった。

「……しかし、どうしてサワ八さんが狙われたんでしょう」

「さあね。けど、不審な点がある」

小野の疑問に、司が自分の疑問点を付け加えた。椅子にもたれて横目でサワ八の座っていた席を見やり、そこで自分が視たものについて、語った。

「サワ八さんは『茶色い毛並みの、レトリバーより大きい犬』って言うってたよね。でもここでさっき視えたのは、白っぽい毛並みの柴犬だった。サワ八さんは霊視できないんだし、これって生きた犬に

よる二匹目の可能性も否定出来ないよ？ 一匹をずっと使役し続け
て恨みと憎しみでどろどろにさせるのは、術者にとつてもリスクが
大きいと思うし。思念が載りすぎて制御不能になったら、それこそ
自分が食い殺されかねないんだよ」
「……当然の結末でしょう」

頬をひくつかせながら、小野は静かに言った。

呪いは人の法に拠って裁かれることはない。もちろん本当の邪術
を扱えるような人間はそれほど多くはないはずだが、いずれにせよ
悪意を以て人に思念を向けることは、見えない刃をちらつかせるこ
とに等しい。

人の法律に記載されていないなくとも。この世の法則において、他者
の不幸を望むものには、相応の結末が待つ。

今さらながらそんなことを思い、少し感慨にふけて。司は、す
っかり暗くなつた室内を見回して、自分の荷物を手に取り立ち上が
つた。

「御手洗さんは今日仕事あるらしいから、明日の午前中に直接病院
に出向いてくるって」

「では本日は解散ということにして、私たちも明日また病院にて集
合するとしますか」

「明日、土曜日だったか？ ああ、なら了解だ。それと、サワハの
荷物は俺が届けておこう」

「被い料は明日徴収ということにしておけばいいのかい」

「うん、それでいいと思う」

それぞれがなんとなくはなしに肩に重さを感じつつ、その日はそこで
解散という流れになった。

翌日、病院の最寄り駅のホームに降りた司は、隣の車両から出てきた小野と出くわした。白いワンピースに緋色のカーディガンを重ねた服装は自分の「量販店のパーカとジーンズ」という格好よりは洒落つ気があって、なんだか負けたような気分にはさせられた。

地下から地上へ出るまでの間、連れ立って歩いてはいたものの会話はなく、微妙なやりづらさを感じながら病室を訪ねる。見舞い品のリンゴを片手に、ドアをノックした。

患者衣のサワハは左の手首足首に包帯を巻いていること以外はさほど異常は見られず、また？視た？場合でも変わったところはない。本人いわく健康そのもの、とのことだが一応建前の上では「犬に噛まれた」としてあるため感染症などがないか検査しているらしい。

ただ、ひとつだけ部屋の中で異常と思われたのは、サワハの身体ではなく。四隅に施した盛り塩の頂点が少し黒く変色していたことだった。視線に気づいたのか、先に来ていた廉太郎と司の目があう。だが司の視線はすぐに下にずれた。

「どうした」「いや……あ、廉太郎さん？」「誰に見えるんだ」「廉太郎さん」

廉太郎は青い作務衣を着ていたため、一瞬他の病室の患者がいたのかと思っただけらしい。

「だいじょぶよー。ケガ痛くないね。それと司くん、昨日助けてくれたありがとうネ」

「そんな、感謝されるほどじゃ。まあ、なにせよ大事に至らなくて何よりだよ」

「うん。無事でよかたヨー。あ、レンタローそのリンゴって」「あいよ」

窓際の戸棚に腰かけ器用に皮をむく廉太郎は司たちにベッド脇の並んだ椅子に座るよううながして、少しすると司たちの分もリングをむいてくれた。ありがたくそれを頂戴しながらも司は盛り塩から目が離せず、結局五分もしないうちに自ら塩を取り換えた。

「……塩、黒くなってるようだな」

「効果はあったってことだけど。同時に、効果が必要だった、ってことだね」

「御手洗さんとやらが来るのはいつだ」

「一時。だからもうそろそろだと思っ」

しかしドアが開いてやってきたのは食事で、これがまたいかにもおいしくなさそうなものだった。がっかりした様子でサワハは「トムヤムクン食べたいー」と駄々をこねた。結果、残ったいくつかのおかずを小野が食べさせられる羽目になった。もぐもぐといやそうにしなびたサラダを食べつつ、小野が時計を見た。

「御手洗さんもそうですが、会長と踊場さんも来ていませんね」

「ケータイで列挙集見たらいくつか更新されてたし、踊場さんはまだ情報収集じゃないかな。会長も二人目の現場に寄ってから来るって話してたから、噂の真偽を確かめるとか」

「敵を早く見つけられるといいんですけど」

「見つけて、どうするの」

「司さんはどうしますか」

問いを問いで返されて、なんだか一方的だなあと思ったが、よく考えてみて、けどやはり思いつくことは二つくらいしかなかった。

「もう二度とこういう邪術を使わないよう、使えないようにする。」

そのうえで、ある村のことを知ってないか、もしくは出身者だった
りしないかを、聞く」

「ああ、村を探すのが目的だと言っていましたものね」

うなずく司。だがここ数日、列挙集と首っ引きになって情報を調べ
続けたのだが、なにひとつとして有力な情報は見つからなかった。
大抵見つかるのは「連続殺人事件被害者たちの怨念が残る村」だの
「入口にドクロの岩、鳥居、その先にある廃村」だの「この先日本
国憲法通じません」だのといったよくある都市伝説系の話で、司の
探す情報に合致するものはなかった。

「どついう村なんですか？」

問いを重ねられて、どう答えたものか迷う。

思い出されるのは、日本人の思い浮かべるような田舎の風景だ。
そこには都会のように様々な物に溢れかえることもなく、ただ必要
なものだけがあるように見えて、

一番要らないはずの？人の悪意？が、今にも溢れだしそうな村だ
った。

「……一見、普通の村だよ。法律も通じるし、気のふれた奴が連続
殺人を成し遂げたりもしてない。ただ……独自の、土着の因習とか
そついうのが、深く太く根付いてた。覚えてるのはそれだけ。村の
名前もどの辺にあつたかも、さっぱりなんだよね」

「故郷、なのですか」

「そう。そんで、因習とかそついうのに深く関わっていた村の奴は
すべて、呪術師だった」

小野の表情が固まる。司は脅かすように言ってしまったことを少

し悪かったとは思ったが、言いなおすつもりもなかった。

否。むしろ、言いなおすとしたなら。村の構成員すべてが呪術師なのだと、そう言いなおすべきだとさえ思っていた。表面的にはただの村、人柄のいい人間たちを装っていた彼らは、その大半が腹の内に黒く淀んだ澱おりのごとき悪意を持つ、呪いの伝道者だったから。

「ということは、その村には呪術師が何人もいるのですね？」

固まった表情に緊迫した空気をまといながら、小野は隣の司に顔を近づけた。妙なほどの食いつきに驚く司だったが、それはそこ、こんな研究会にいるのだからと自分を納得させうなずきを返す。

「職として人を呪う人は少なかったらしい。でも、この時代で生活の中にもあれほどの呪術性を重視するのは、今から考えると異常としか言えない」

当時の司はしつけやしきたりが少し厳しい、くらいにしか考えていなかったが、こうして現代における？普通？の暮らしにまみれてしまった今では、その空間は異常としか思えなかった。

「でも、戻んなきゃいけないんだよね……そこにちょっと忘れ物してきちゃったみたいで」

苦笑いを浮かべてあごを掻いた司は、心底めんどくさそうな顔をした。

小野はただ神妙な面持ちで「見つかったら、私にも声をかけてください」と言った。行くつもりなの、と司が言つと、こくりと首を傾けた。

「私は呪術師の先に目標があるのではなく、純粹に呪術師かれらを探して

「……へえ」

司は、理由を聞くのをやめておくことにした。無言であっても冷たく研ぎ澄まされた表情が雄弁に語っており、それを見た司は「各々が様々な思惑の下にここにいる」との意味を、ようやく理解した。

「そういえば、サワハ。お前まだ？レンズ？をつけてあったりはしないのか」

「ん？ んーん。レンズひとつだけよ、あとつけてないヨ。とゆるーかつけるしてたら言うね」

「そらそうだ。しかしもうちよい、犬神の容姿とか周りに術者がいなかったかとか、細かい情報がほしかったものだけ」

「無理ヨそんなん。夜目サワハ利かないし」

「念写とか使える奴がいればな」「レンタ口漫画読み過ぎネ」

ぶつぶつと二人で話していた間、廉太郎とサワハも何事か話してんでいた。そこでレンズ、という単語の意味がわからなかったため、司は首をかしげる。サワハはにっこり笑いながら指先で輪をつくり、自分の片目に押し当てた。

「レンズあれよ、サワハの微能力。サワハ遠く見えるケド、条件あるね。まず、透視は出来ないことヨ。だけど左の手でさわったところ、レンズ置いとける。そんで片目閉じるで左手かざすと、レンズから遠く見えるの」

「……えーと」

「不可視のカメラを設置出来るんだと思っつけ。で、発動条件が片目を閉じて、開いてる方の目に左手をかざすことだ。もう片方の目を開けると効果が切れる。一度使ったらレンズはその場所に固定されて、効果が切れたらもう使えないがな」

「ストーリーカーに便利そうな」

「誰でも考えるとは思いますが口に出すのはいかなものかと」

「だれでも、つてことは小野も考えた？」

「考えてません！」

じろつと横目でにらみつけられ、鳥肌がたった司は軽口をやめておいた。

「……でも、微能力って言ったから。やっぱり微妙なところあるわけだ」

「いえす。サワハレンズのぞいてる時、すっごい視力落ちる。距離遠いほど見えなくなるネ」

「意味ないじゃん」

「ふっふー、ところが研究重ねたサワハびっくり仰天。その欠点克服したネ」

ひょいと廉太郎に向かって手を伸ばしたサワハは、メガネを奪い取ると自分の眼前にかざした。まさか、と頬をひくつかせてあまりにもくだらない解決策を予想した司は、二秒後に予想が的中してしまつてがっくりした。

「視力落ちる、ならメガネで視力矯正ヨ。ちなみにオペラグラスのぞくすればもつと遠く見えるね」

プライベートを守るべく、うかつにサワハにふれられることは避けねば、と心持ち後ろに司は退く。サワハは残念そうな顔をしたが、すぐにいたずらっぽく笑つて、左手を伸ばした。手首に巻かれた包帯が少し痛々しく見えたため反応に遅れ、額にタッチされてしまう。

「ぐあ、しまった、もうお風呂もトイレも行けない」

「おう、昔のアイドルさんね？」

「いやアイドルでもお風呂は入ってたでしょう」

小野の的確なつつこみにサワハはころころと笑った。ふと司は「こんな研究会にかかわったせいでケガしたのに」とサワハを案じるような、自分たちを貶すような思考を浮かべてみたが、彼女も彼女でまたなにか目的があつてのことだろう、と即座に自分の思考を掻き消す。

ただ、サワハがそんな陰惨なものに興味を示す人柄に見えなかつたためにそうした思考が浮かんだことも、また事実だった。

と、ドアを開けて病室に入ってくる者がいる。どきりとして身をすくめる司は、振り返る直前に視界に入ったサワハがまったく怯えていないのを見た。

「やあ、サワハくん。つつがなく息災かい？」

入ってきた踊場はダウンベストにネルシャツを合わせた格好で、右手にはバスケットに納めたマスクメロンをぶらさげていた。サワハが目を輝かせる。司は小野と顔を見合わせて、駅前の見舞い品屋で共同購入したリングオを見やる。値段の差が激しく、なんか負けたような気持ちにさせられた。

「踊場サン。ども昨日はお見苦しいとお見せしましたネ」

「いやいや、気にしなくてもいいよ。むしろ防護策もなく調べ回らせている僕らにこそ、落ち度があつたといえるのだからね。本当にすまなかつた」

「赤馬さんがいた時の安心感、というよりも油断みたいなもの俺らの中に染みついてるのかもしれないな。卒業した人に頼るわけにもいかないが、なにか方法を考えねば」

「金に糸目をつけないなら、今日お世話になるっていうその御手洗

さんをお願い出来るのだけどね。あいにくと僕らは部活動ではなく同好会レベルの扱いで、降りる費用は少ない。それに学生の身の上下ゆえ個々人としてもさほど潤沢な資金があるわけではないからねえ」

じゃあそのメロンは一体、とつぶやきを漏らしてしまったのは司のみで、小野は司から目を背けて口を真一文字に結んでいた。踊場は笑って「実家から贈られてきたのさ」と返してきたのでそれ以上は何も言えない雰囲気だった。つつこんで聞いてはいけない事情があるらしい。

「口論義も今は情報収集と同時に、対抗策などを探しているそうだな」
「策っていうけど。素人が術を使おうとか、そういうんじゃないよね」

「難しいものは使えないですし、使いません。私たちがだって現代に伝わる術がどれほど過程を失伝しているか、間違った過程の術がどれほど危険かくらいは、知っていますから」

「必要に駆られれば危険なものを使うことはあるが、僕らもリスクは負いたくないからね。何事にも適当さというのは大事だよ」

「ならいいんだけど。そういえば、踊場さんは今日なにしてたの？」
「僕かい？ 僕は犬神使いについてももう少し詳細な情報を募っていたよ」

メロンの入っていたバスケットの底に敷いてあった布を取り払うと、ノートパソコンが入れてあった。この隠し方になんの意味が、とは思ったものもはや指摘するのが面倒に感じて、司は黙って立ちあがった画面を見た。サワハのベッドを囲んで五人でのぞきこむとかなり狭苦しかったが、我慢して間を詰める。

「といっても、今回の事件についての情報はあまり得られなかったのだけどね……とりあえず信憑性の高そうな会話ログをピックアップ」

ブしてみた。そうしたら、少々先の話に戻る形になって申し訳ないんだが、『犬神使い』の術についての情報が寄せられたよ」

「術について？」

みんなで固まっているため小声で話す司に、踊場は大きくうなずく。上からのぞきこんでいた廉太郎のあごに頭突きをかます結果となったが、謝る素振りも見せず説明を続けた。

「思えば、世間に伝わっている犬神の作り方はあまりにもお粗末だと思わないかい？ 埋めて絶食で恨みを残して殺す。そんなことをすれば犬が恨むのは術者自身に決まっているだろう？」

「まあ、そうですね。ならば顔を隠して実行し、写真で術の対象としたい者を見せつけながら、という手をとるのはどうでしょう？」

「うん、写真でも対象者の毛や爪でもいいけど、媒介として関連性を持ったものを使うのは確かに有効だと言われているよ。実際『夜に爪を切ると親の死に目に会えない』などという伝承は、日本人が自分の肉体の一端にさえ靈性を信じておりそれを他者に取得されることは自分の一端を握られることだとの認識があつたためなのだしね。けれどそれは『正確な方法ではない』……わかるだろう？ 正確ではない方法は、呪詛を己に返すこととなる」

「天に唾する者には因果応報というわけだ、なっ！」

さっきの仕返しか、後ろの廉太郎が踊場の頭頂部に強烈な頭突きを放つ。踊場が勢いのままキーボードに突っ込んだために、画面に「くあwse d r f t g y ふじこi p」と意味のわからない言葉の羅列が打たれた。画面から顔を起こした踊場は、涙目で顔をしかめる。

「いたたた……それで、だ。要は、この犬神使いはちゃんとした呪術師である可能性が高まってきたということだよ。三件も連続して行う辺りは少々不審なところだけれど、少なくとも術者に呪詛返し

が来てるわけではないみたいだから、ねっ！」

背後に振り抜いた踊場の肘打ちはひよいとかわされて空を切る。廉太郎はにやにやと笑いながらベッドのそばを離れて、今度は踊場のメロンにナイフを入れた。まな板もなしに、空中で器用に刃を進ませている。

「レンタローも踊場サンもケンカするケガするダメよー。特にレンタロー、あんた強いから手出すのダメね、踊場サンよりもっとダメ」
「やられっぱなしでいると言うのか。そんなこと言う奴にはメロンは渡さん」

「いや僕のメロンだろそれは。なぜきみが我がもの顔でカットしているんだい丸メガネ」
「全国のロイドメガネ保持者に謝れ。あと俺のメガネそんなに丸くないし」

さくさくと手際よくペティナイフでカットしていく廉太郎をしばらく踊場はにらみつけていたが、刃物を持つてるところに殴りに行くのも双方危ないと判じて、そのまま画面に目を戻す。

「……情報は徐々に集まりつつある。よって、これから僕らは恐らく本物の呪術師とやり合うことになるだろう。それは、そのメガネはともかくとして、それぞれが各々の事情の下に望んで臨むことではある。けれど おっと、この先は口論義のセリフなのでね、そのように心して聞いてくれ」

少し背筋を正した司たちに、息を吸った踊場は、よく通る声で代弁した。

「『会長のために働け』。以上だ」

五題目 「お見舞いありがとネ」とサワハは笑う（後書き）

Name: サワハ

Hobby: 和風小物集め・子供と遊ぶこと

Weakness: トムヤムケン

Specialty: 『白猿ハヌマーン』のモノマネが異常に上手
いが忘年会でしかやらないと決めている。あと家業のタイ古式マツ
サージ。

Skill: ? グラフィティレンズ 気色食む目? 設置型の微能力。左手の力場を付ける
ことでその対象に付随する遠隔視。ただし発動時に対象からその場
所へ貼りつくため常に付いて回ることは出来ない。

Notes: 「サワハ」の発音は「短歌」と同じ

……: 端役からプロフィール書くという暴挙。

六題目 「まじないも呪いだよ」と司がつぶやいた

「サワ八さんがあんな目に遭ったっていうのに、よくあんなこと言えたもんだよね」

「会長とサワ八さんは、研究会ぬきにしても、仲がよろしいそうですから。ああいうこと言っても通じるのでしょう。それにサワ八さんも、目的を持ってここにいるそうですし」

病室を出て駅まで戻る道中、またも司と二人だけになると小野はぎくしゃくしてあからさまに態度が変わり、言葉尻が小さくなって少々会話しづらくなる。横を歩いているためでもあるのだろうが、極力目を合わせないようにしていることもがうかがえた。

「あ、そっか……二人だけだと居心地悪いんだっけ。ごめんね気付かなくて、じゃあここらへんで」

「いやっ、その。あまり司さんにはかり気を使わせるのも、それはそれで心苦しい、のです」

「んー？ でも二人だけになることあんまりないし、そこまで気を使ってる覚えもないよ。廉太郎さんなり踊場さんなり、知り合いの人が場にいればちゃんと会話もできるし。まあメールの返信はけっこう遅いから、そこだけ気を使ってるけど」

「……すみませんね、私人差し指でしか操作できないので。どうしても遅くなってしまうって」

「冗談だよ。そんなに待ってないし」

司は笑ってみせたが、小野はなんとも形容しがたい、怒っているのか悲しんでいるのか判然としない表情を浮かべてぷいとそっぽを向いた。軽口叩くのも時と場合を考えるべきだったかな、と少し司は反省した。

「とりあえずこれ、会長にも渡しに行かないとね」

話題を変えるべく、司はポケットから小さな巾着袋を取り出す。

無地の赤い袋で、中には紙片と推察される感触があった。ちらりとそれを一瞥した小野も、カーディガンのポケットに手を入れる。

「しかしこれ、本当にいただいてしまって、よろしかったのですか」「無料配布つてわけでもなかったし、気にしなくていいんじゃないかな。それに御手洗さんも言つてたでしょ、『気休めのプラシーボ効果みたいなもんだから』って」

「プラシーボ、ですか。しかし、開けてはいけないと言われると、なんともはや」

「御守りはもともと開けてはいけない、つてなってるもんだよ」

地下への階段を下りつつ、司は電灯の光に袋をかざした。当然、中身が透けて見えるようなことはなかったが、手にしてほんとりと温まるような気がして、大事そうにしまう。小野はポケットから手を出して、とたとたと階段を駆け下りると券売機へ向かった。司は定期の範囲内なので、巾着袋をしまったのは別のポケットから財布を取り出した。

「……呪いも、半分は思いこみで現実に肉を付ける、と御手洗さんはおっしゃってましたね」

券売機に向かい千円札を押し込み、戻され、しわを伸ばし、戻され、と繰り返しながら、小野が後ろで柱に背をあずけている司に言った。

「人間は何にでも理由と原因を求めたがるから。呪われてると思い

こみ、口に出せば言霊も乗る。自分が信じる自分の世界は簡単に真つ暗になり、自然と物事も悪いところばかり目につく。詐欺師とエセ宗教がリーディングで突くのはそういう、誰もが抱える漠然とした不安だ」

詐欺師、リーディング、という単語のところだけスタッカートがついて、小野の背中に突き刺さる司の視線は強くなった。苦笑いを浮かべつつ小野が振り返って、一瞬だけ顔を合わせると、司はもう笑っていた。

「そして思いは力を成して力は形を為して形は影響を及ぼす。良くも悪くも」

「サワハさんも、思いこみであんなことになった、と？」

司は定期を、小野は切符をそれぞれ通して、さらに地下へと下る。時間帯としても人影はまばらで、ホームで電車を待つ人も少ない。

「それはないよ、それだけは断言できる。ただそうになると、今度はサワハさんの方になんらかの原因があることになるかな」

「原因」

「呪われるだけの要因、だろうね」

一メートルほど距離を置いて立つ小野は、司の言葉に顔を上げたが、視線が合うとすぐにうつむく。

「これは別にサワハさんが人から嫌われる人間だ、って意味じゃなくってね。肩がぶつかっただけで殴りかかってくる人もいる世の中だし、誰かから恨みを買うなんて簡単なんだよってこと」

「……やりきれないですね。けれどそういうことならば、サワハさんと犬神使いは、接触していなくてはならないのでは？」

「だから、わりと近くにいるんだと思うよ。犬神使いは」

司の発言にまたも小野が顔を上げかけたところで、電車がうなりをあげてホームの向こうから走ってきた。

#

乗り換えせずに五つほど駅をすぎると、会長の家の最寄り駅にいた。二件目の現場を回った、と会長からメールが入った時にはすでに御手洗による被いの儀は終わっていたため、自宅に戻っていてもらったのだった。

駅から少し歩くとマンションや雑居ビルの多い中で一軒だけぼつりと異彩を放つ日本家屋が見えてきて、「あれなの？」と司が問うと小野はうなずいて、言葉を続けた。

「私はここの喫茶店で待っているのです、司さんだけで行ってきてください」

「え、ここまで来たのに？」

「私にはあの家、少々敷居が高いので」

何か以前にまずいことでもしたのかな、と司は思ったものの、もしそうならば余計に深く立ち入って聞く事情でもないのです、首肯した司は一人で家まで近づき、ケータイで電話をかけた。

入ってよろしい、との返事が聞こえると同時にかちりと鍵の外れた音がして、門扉の引き戸を開けた。玄関まで二メートルほどの距離を飛び石が散らしてあり、その上を歩いて渡ると口論義が姿を現す。普段着にしているのか、なぜか浴衣姿で、不思議そうな顔をする司に気付いたらしい口論義は髪をかきあげて「これ家着」とつぶやいた。

「いらつしゃい。あがんなさい」

「お邪魔します。でもこれ渡しに来ただけなんだけど」

「ああそう？　じゃあお茶とお菓子だけ持つてくるわね」

長居させるつもりらしかった。なんだか田舎のおばあちゃんに似たノリだなあ、とテレビで培った偏見による感想を抱きつつ、司は上がり框がまちを踏んだ。奥の方へ消えていった会長は若干疲れ気味なのか足取りにおぼつかないところもあったが、あまり気にしないようにして待つ。戻ってきたら渡そう、と思いポケットから赤い巾着袋を取り出しておいた。

「司ちゃん、麦茶で別によかったー？」

「おかまいなくー。……って、司？　ちゃん？　つてなに、なんなの」

「いやね、学生服じゃなくて私服を見るの初めてじゃない。普段と違うからなんとなく気分よ、気分の問題」

よくわからない思考だと思った司だが、逆らわずにお茶とついうの乗ったお盆を受け取る。口論義は司の横に腰かけると、浴衣の着崩れを直して湯のみに手を伸ばした。

「サワハには犬神、憑いてたの？」

現場にまで情報を集めに行ったりししながらも、気にかけてはいたらしい。お茶に口をつけるより先にそうつぶやいた口論義に、司も即座に返答した。

「いや……一応、狙われてはいたけどそこまで執念深いものではなかったらしいよ。御手洗さんがきれいさっぱり？　縁？　を断ち切ってくれたから、しばらく悪い気に近寄らなければ徐々に影響下からは逃れられるって」

「そう」

お茶を冷ますためか安堵によるものか、ほうと溜め息をついて口論義はお茶をひとくちすすった。そんな彼女の眼前に、忘れないうちにと司は赤い巾着袋を差し出した

「で、これが被いの時に御手洗さんがくれた御守り。開かないように。でもこれ三つしか作れないらしくて、そしたら廉太郎さんと踊場さんが『ひとつは会長に、だって会長なのだから』だって。ちなみにもうひとつはサワ八さんに、最後のひとつは小野が受け取った」

「なるほど、ね。まあサワ八と小野ちゃんが受け取るべきなのはわかるけど……それ言ったら司ちゃんこそ持ってないとダメじゃないの？ 霊媒体質でもあるんでしょ？」

「こつちにきたら、この前みたいに刀で追い払うから大丈夫」

巾着袋を入れていたポケットから、メスのように細い小刀を取り出す。するとちよいちよいと指で示して、手にとっていいか、とジエスチュアで尋ねる口論義。司はおもむろに刀を差し出した。

きし、と音を立ててヒノキと思われる鞘から抜くと、刀身はわずかな曇りを帯びた鈍い輝きを晒す。柄にほど近い辺りには細かく丁寧に九字を刻んであり、かつてはしかるべき使い道の下にあったのだろうことが推察された。

「山に入る時、獣を追い払うために金物を持ち歩くべきだ、っていうのは本当だったのねえ」

「古い品みたいだから、あんまり荒っぽい使い方はしたくないんだけどね」

返してもらって、またポケットへしまう。ようやくお茶に手を付

けた司の前でつまようじに刺したうしろをかじる口論義は、片手のうちで赤い巾着袋をこころもてあそんだ。

「現場行つてきて、なにか見つかった？」

「なーんも。あたしが細かいとこ探すの苦手だからかもしんないけど、きれいさつぱり。血の痕跡もきちんと消されてたし、犬の毛一本見つかなかったわ」

「幽霊なんだから毛が落ちてたりはしないと思うけど」

「そういえばそうね。ただ、近くの店の人の話聞いてたら、あの日現場にはたしかに、疲れた男の人が入っていくのみたんだって」

「へえ」

「でも現場から出てくるのも見たっていうのよ」

「……え？」

「店の人、警察にも同じこと話したらしくて、目下捜索中だそうよ。その、サワハがマツサージしたって男の人」

「じゃあ、サワハさんが？ レンズ？ をつけた男が死んだんじゃないかって」

「サワハが？ レンズ？ をつけた男こそが、あの二件目の殺しの犯人ね。二件目は、犬神の犯行なんかじゃなかったのよ。あたしも昨日の夕刊見て気付いたんだけどね……記事の情報が一件目の時は『複数の歯型』だったのが『頸部への裂傷』だけになってたの。よつぽど背が低い相手ならともかく、直立してる成人男性という、急所の首を狙いにくい奴を相手取るなら。犬はサワハにした時のように、すぐ噛みつける低いところから攻撃して、首を狙えるよう引きずり倒すはず」

司の視た犬神の容姿と、サワハが視た犬神の容姿が食い違っていた理由がようやく判明した。

おそらく、サワハが視たのは？ レンズ？ をつけた男が、背を丸めてその場から立ち去ろうとした瞬間だったのだ。犬神の一件が頭に

残っていたサワハは、思わずその姿を大きな犬だと勘違いした。

「日本の警察は事後の行動力に関してはまだまだ高水準だから、さほど間をおかずに捕まるんじゃないかしらね。ともかく、二件目は犬神は関係ないただの殺人事件だわ。ホント、余計な手間とつちやった！ 早く犬神使いを見つけないと」

「となると、一件目が起きてから昨日までで、サワハさんが接触したこのある人を洗ってく作業かな」

「そうなるわね。なにかのきっかけで、サワハに対して害意を持ったと見なすべきだから。けどあいつ店のお手伝い含めると不特定多数の人間と接してるから、順番にあたるだけでも一苦労だわ」

やれやれと肩をすくめる口論義に、苦笑いを返す司。けれど口論義はつられて笑うようなことはなく、隣の司に流し目を送りつつ、上体を逸らして後ろに手をついた。

「本来の目的もあるけど。サワハを傷つけられてるのに、このまま黙ってらんないのよ」

奥歯を噛みしめた表情は、小野が時折見せる表情に少し、似ていた。

「……でもそれは、司ちゃんには関係ないか」

「え？」

「ちがったかしら？」

突然しゅんと感情がなりを潜めた口論義は、司に向き直ると人差し指で額をこづく。

「本音言つと、昨日もきみには犬神を視認できたようだし、協力を

仰ぎたいと思う。でも半分以上私情が入ってきてるから……降りたければ降りても構わないわ。降りたからって情報提供をやめるなんてのもない。協力関係だからね。むしろ昨日サワハを助けてもらった分で、ずいぶん借りができちゃってるもの」

たしかに司は、さっきの口論義のように怒りに燃えることができないほどサワハと親しいわけではない。まだ昨日会ったばかりで、赤の他人より少しは知ってる、という程度でしかない。

とはいえここで降りるほど、非情なつもりはなかった。……先に選択肢を与えることで平等性を意識させ良心に訴えかける、という心理操作を受けたような気もしたけれど。

「なまの情報が欲しいしね。乗りかかった船から降りて泳ぐ気はないよ」

「そ。じゃあ今後ともよろしく」

にやっと笑う口論義を見てるとやはり人を使うのに慣れていることが感じられたが、今はそれでもよかった。司にとってはこの一件も、本当に危険な領域に踏み込むための、足がかりにすぎないのだから。

「あら、メールね」

テレットテター、となにかの効果音と思しき着信音が発せられた浴衣の袂からケータイを取り出し、口論義は画面をためつつがめつ覗きこむ。

「会員メールだわ」

ほれほれと画面を見せつけられて、発信者の名前が「踊場シヨタ

郎」となっているのが確認できた。言われて、司もケータイを手取る。病院にいる間サイレントにしていたので、着信に気付けなかったのだ。

「なにになに……二件目の犯行は人間によるものでは断定、ってこれ今話してたやつじゃない。踊場の奴も情報遅いわね。情報板も書きこんでるみたいだけど」

そのあとにも少し文章が続いていたようだが、口論義はすぐケータイをしまった。つられて司もしまいこみ、手持無沙汰になった右手でいろいろをつまんだ。口論義はというとあごの先をつまんで、首をかしげている。

「んん？ 踊場は情報板に書きこんでるってことは家に帰ってるみたいだし、廉太郎は土曜の午後は道場行ってるし。ここに案内してきたのって、もしかして小野ちゃん？」

「あー、うん。家の前まで来たんだけど、入らずに引き返した」
「ふうん、そう。なんだ」

なんだ、のあとになにか言葉が続きそうに思えたが結局口論義はなにも語らず、お茶の最後の一滴を口の中に落とすと、湯呑みを置いて立ち上がる。

「おかわり要るなら持ってくるけど」

「いやどうぞおかまいなく。というか、玄関先なのにだいぶお邪魔しちゃったから。そろそろお暇やすみさせてもらおうよ」

「そう？ 悪いわね、なんか急かすようになって。いろいろくらいしかないけど、またいつでもいらっしやい。あと、これありがとう、って御手洗さんにお伝えしといて」

口論義は巾着袋を振ってみせた。立ち上がって、土間で靴の爪先をとんとんと叩いた司は、返事をしつづなずいた。

「わかったよ」

「ところで御手洗さんとはコネクションができたと考えていいのかしら」

「うーん、まあどうなのかな。あの人、それ渡してくれたのもそうだけど、基本的にお人好しなせいなんだかんだ怒りながらも最後まで面倒見てくれる人だから。一度知り合っちゃえばけっこう太めのコネができたと言えなくもないかも」

「……よくそんな良心的な性格で、詐欺師と本物が入り混じった才そカルト業界で生き残ってるものね」

「兼業っていうか本業で、カウンセリングもやってるから。どっちかっていうと『憑かれた憑かれた』って言って来る人の中でも、そちを求めている人が多いらしいんだよ」

「……世も末ねえ」

「憑かれたか思っても、口にしなきゃひどくはならないのにな」

そんなことを話しあつて、司は口論義邸をあとにした。

#

往路を少し戻り、先ほどの喫茶店『アーガイル』の前に着く。ドアに嵌めこまれたガラス窓から中を覗くと、奥の席にちよこんと腰かけた小野が、西日を浴びながらカップを口へ傾けているのが見えた。

ドアベルの音が頭上から背後へ流れていくのを耳にしつつ、司は店内に入り込む。カウンターのの中ではさるぼほの頭巾のような帽子をかぶった背の低い女の人と、中肉中背の仏頂面をした男の人、二人がせわしなく動いており、司に目を留めると席へ案内しようとし

だが、手を振ってそれを断ると小野の正面に移動する。

「あ、司さん。おかえりなさい」

「いやおかえりではないと思うけど……だいが長居しちゃったから待たせたね。こんなことなら連絡して、先に帰っておいてもらえばよかったかな」

「さほど問題はありません。元から、今日の午後は家に戻らずその辺をぶらぶらと歩きまわる予定でしたので」

「犬神の情報を探して？」

「情報を探して、というわけでもないのですが……ええと、なんといいですか」

言葉を探す小野。スムーズに会話するにはまだまだ経験値が足りないことを自覚している司は何も言わず、小野がまた話してくられるのを待った。その間にカウンターから男の方が出てきて注文を尋ねたので、司はアイスコーヒーを頼む。

「とりあえずこれから、私は現場周辺を回ろうかな、とっています」

「そっか。こっちはどうしようかな……足で探すことには賛成なんだけど、実はすでに一件目のところと犬の遺体が発見されたところには一人で出向いたんだよ。で、二件目は人間による犯行の線が強いつてさっき踊場さんからメールが来たわけで。犬神探しのためなら向かう意味があんまりない」

「一件目とわんちゃんの場合には、なにかありましたか？」

「ううん。なにが起きたかもわからないうちに死んじゃったからだろうね、一件目の現場には幽霊の痕跡すらなかった。犬の遺体の場所には、恨みが積もり積もってたけど遺体が供養されたから次第に怨念も薄れてきてる感じだったし。犬神自体も力は弱まってるはず」

「でもこのままだと、犬神使いの勝ち逃げになってしまうのでは」「残念ながら」

珈琲用に置かれている角砂糖をひとつ取り上げて、端からかじる司。がつくりと肩を落とす小野は自分の前に置かれた紅茶に手を伸ばして、角砂糖ひとつ入れるとゆっくりと、時間をかけて、飲みほした。

「……許せません」

「そりゃあね」

「不条理です。悪逆無道が、このまま放置されてよいのでしょうか」

手にしたティーカップが、強く握りしめられる。小野の中で弾けた感情がなんなのか、司にはまだ詳しくわからないが、非道なことに素直に憤ることができるのは、いいことだと思えた。

「……方向性をまちがえなければだけど」

「なにかおっしゃいましたか？」

「特になにも。事情は人それぞれ、考え方もまたしかり、と思っただけ」

「人を呪う人間の考えなど理解が及びません」

つつぱねる小野に、司は少し思うところがあった。

思うまま、口にする。

「さつきも話したじゃん。人は簡単に人を呪う、って。小野は誰も恨まず呪わず、罪だけを憎んで生きて来れたの？」

「方法として呪うことと、思いとして呪うことは、また意味が違うでしょう。殺したいと思うことと、実行してしまうことの間、大きな差があるように」

「いや。物理的な殺人とちがって呪いが法で裁けないのは、そこに差がないからだよ。呪いは最悪、思うだけで実現してしまう。生き霊くらいは知ってるでしょ？ ただ思うだけでも呪いは成立する。より強めるための装置に過ぎないんだよ、儀式や道具は。本当に強い力があれば、睨むだけでも呪いになる。相手に害意を感じさせれば、それがマイナス方向へと思考を惹き寄せて悪いことが起こり易くなる」

司の言葉を聞いて小野は黙り込む。別段追い詰めるつもりでこんなことを話したつもりではなかったのだが、一つの方向からしか物事を見ないままでは、人は人を呪いやすくなる。どういふ事情の下に小野が呪術師を追うのか司は知らないが、同じ存在になってしまつて良いことはひとつもない。

「ならば誰も、人を呪うことを裁けないではないですか？」

「小野は裁く気で追つてんの？」

病室に居た時の逆転だった。問いに問いを返して、司は運ばれてきた珈琲を口に含む。正直口論義のところでもお茶を呑んできたので水っ腹になつている気がしたが、そこは角砂糖をかじつてごまかした。

うつむいた小野にそれ以上声をかけることはせず、司は左手にある窓の外を見やる。うごめく人並の中には、ごくたまに幽霊もまぎれこんでいるはずだ。けれど生者と差がないように視えてしまう司は、滅多なことを口走らないように気を付けて、この？普通の？社会では生きてきた。

人と違つたということは、人と違つた世界を見ているということである。

「思いこんで口に出せば、世界は自分が望む通りの見方の角度を示

すけど。裏を返せばそれは多角的な見方を示してくれないってことだよ」

「……なんだか、宗教じみた物言いですね」

「あいにくと特定の宗教を信奉するつもりはないね。それに誰もが呪いあつてるこの世の中で、一人だけ聖人君子になれとか言うつもりもない。ただ自分が人を呪うにあたっては、相応の覚悟をして。責任が伴うんだってことを覚えておいた方がいい」

「……………」

口論義はサワハが傷つけられたことに憤っているだけだった。しかし小野の表情は、時折寒気がするほど冷たく、硬く、凍りつく。並々ならない事情の下にそういう顔をしているのであることは司にも想像はついたが、リスクは知るべきだと、そう思った。塞ぎこんだ小野が何を考えているのか司には計り知れないが、同じように小野も司の考えを知ることはない。互いに、自分の内を開示しない限りは。

小野は左手で右腕をぎゅっと押さえ、どこか懇願するかのような顔つきで、司に言った。

「では…………ではどうすればいいんです。呪い返すことは、そんなにダメでしょうか？ 司さんは、色々呪術師を知っているから、そういうことが言えるのですか？」

「……ちがうね。死んだ人が視えるんだよ？ 老衰以外で死んで、恨みつらみを辺りへ振りまく少年もいたし。嘆くだけ嘆いて、話を聞こうともしない母親もいたし。もう一度現世に戻りたいと、こっちの身体に入ってくる奴らもいた。他人を呪うのは、そういう連中だけで十分だと思う。そいつらには、もう失うものが何もありません。思いだけしか持たないならばそれを燃やし尽くした方がいい。でも生きてる人はだめだよ、失う物が多すぎるはずだから」

人を呪わば、穴二つ。たとえそれが正当防衛であっても、他者を害するために？まじない？を？呪い？へ変換した時、人が大事なものを取りこぼすのを司は幾度も目にした。そのたびに御手洗に、教えられた。『恨むも憎むもしょせん人には止められない、だけど呪うことだけは思い留まれ、留まれなくても思いだせ、手放したくないものはないのかと』

「……それとも、今自分の近くにあるもの全てが、呪いを成就させることに比べたらどうでもいいものなの？」

「そんな、ことは」

「じゃあやめた方がいいよ。人を呪わば穴二つ、っていうのは、踊場さんの言葉を借りるなら作用・反作用の法則だ。呪えば呪った分だけ術者も蝕まれて、大事なものを失ってる。そしてそれはたいいてい、取り戻すことは叶わない」

締めくくり、司はカップを空にすると立ち上がる。残る小野はカップの底をじいっと見つめて、どうしようもない自分の気持ちが悪くなるぐると心中で駆け回るのを押えた。

「……呪術師、なんて……」

言葉の終わりは、形にならなかった。形に、しなかった。

六題目 「まじないも呪いだよ」と司がつぶやいた（後書き）

さあ、恒例になるのか！キャラ紹介欄だ！

……書くことないわけではないよ！

Name：口論義風鈴

くわんぎふうりん

Hobby：読書（と言いつつ読むのは月刊ムーおよびホラー漫画、しかも知人にまず勧めるのが「サユリ」「ミスミソウ」（絵描き）ただしベクシンスキーみたいな絵を描く）

Weakness：和菓子全般（手から出せたらいいのとぼやく）
Specialty：ブラウン管テレビの電源が入っているか否かを消音状態であつても部屋に入る前に察知できる

Skill：？トータル・オフ・フォールス虚言看破？言葉の真偽を察知する。ただし音声媒体で・対象が口論義を強く意識していない時のみ発動する。また「本当のことを話さない」は嘘に入らない。

Notes：「ふーりん」と呼ぶと烈火の如く怒る。

七題目 「拳の方がおしゃべりだ」と廉太郎が断ずる(前書き)

犬神使い編終了。

次回からは俗信編です

あと今回は切りどころわかんなかったものでちょっと長いです

七題目 「拳の方がおしゃべりだ」と廉太郎が断ずる

#

小野を置いて独り地下鉄に飛び乗った司は十分ほど揺られて、辿りついた駅に降り立つ。

すぐに表に出て、街の喧騒と日差しの陽気を避けるように、建物と建物の間を縫って歩いた。その先にあったのはカビと生ごみの臭いが微かに漂う路地裏で、同時に司にとっては嗅ぎ慣れた臭いが一歩踏みしめるたびに埃とともに舞い上がる。

そして角を曲がって奥を覗きこむと一層、臭いは強くなり。進行方向を探るように突きだし、壁に添えていた掌が、ある一線を越えた瞬間にぞぶりとぬるま湯に沈む感触を覚えた。進むことをはばかられたが、感覚に対して自覚をうながすことでそれを制するように努めた。

「……幻だよ」

司の靈感は視覚以外は閉ざされている。ゆえに嗅覚や触覚が何かを感じ取ることはないはず、なのだが。犬神がサワハを襲った時もそうであったように、霊体に近付くと二つの感覚がざわざわと反応するのを感じるのだ。

これについては御手洗によると「靈感と第六感はまだ別のものがあるため」で、おそらくは閉ざされた四つの靈感を補うために防衛本能が第六感を機能させているのだという。そして普通の第六感はそのこそ？勘？としか言えない形で作用することが多いが、司のように五感のどれかが幻覚を感じることで危機を知らせることもままあることだそうだ。

「幻、だ」

言葉で自覚をうながす。これも一種の言霊である。目を閉じ、親指を手の内に握りこんで臍下三寸、丹田と呼ばれる位置に力を入れて深呼吸することで、掌の感触も鼻につく悪臭も嘘のように消え去った。逆に言えばこれから先で地縛霊による霊障などの危険が待ち受けていてももう第六感は頼れないということだが、今は気にせず進むことにした。

その先にあつたのは二件目の現場　つまり犬神の関与しない事件の現場。起こってから日が浅いためか、まだ封鎖されていて立ち入ることは出来ないようになっていた。角から首を出して見回すと、人影こそ今は見えないが、警察などに見つかって話しかけられることは避けたいという心理が働く。

近くのビルから探そうと、足音を立てないようにして非常用の階段を上がる。金属製だったために高い音がかん、こん、と一定の間隔で響いたが、下まで届くほどではなさそうだった。

(三、四、つと)

階数をかぞえつつ昇り、いつしか周りの低い建物より少しだけ抜きん出る。そこで下を見るが、ブルーシートに覆われた現場は容易に中を窺い知ることにはかなわなかった。代わりに、隣の建物との境目、塀の隙間に、現場を覗くことが出来そうな部分を見つける。戻る時はあまり音を気にせず、さっさと降りた。

塀に詰め寄ると、一部に木目が崩れたものと思われる大きめの穴があつた。いちおう辺りを見回して、背後にビルの住人が近寄ってきていないか確かめてから、司は穴を覗きこむ。狭い路地裏は小さな穴からでも十分に見渡せて、左右に視線を走らすと、どうやら穴の前に薄い生垣があるということもわかった。穴は枝葉の陰に隠されて見えないのだろう。

三人ほど、まだ何か調べることがあるのか鑑識らしき人影もいたが、目を凝らして探す。ほどなくして、司は目当ての人物を見つけた。鑑識の人々が気にも留めない、つまりは司にしか視えていない存在。

電柱にもたれるようにしてぐったりと力なく座り込んでいる中年の男は、司の視線に気づくこともなく、自分の亡骸が倒れていた位置を睨み続けていた。

(……恨んでるね、たぶん)

殺された瞬間のことを回想し続けているのだろう。ぶつぶつと動く口元は円を描く視線が地面に書かれた文字をなぞっているかのように、同じ言葉を呟き続けていた。恨みの妄執は路地裏の幅いっぱいにまで膨らんでいて、放っておけばそのうち周りに無差別な害をもたらしてもおかしくない。

先ほど小野には『犬神探しのためなら向かう意味はあまりない』と言った司だが、それでもしらみつぶしにはなるだろうとの予想を立ててここに来ていた。なんらかの情報をその男が持っていないと制限らなかったし、犬神の痕跡などを見つけられる可能性も零ではなかった。

ところがいたのはしらみどころか吸血鬼で、潰そうにも司は杭も聖水も持っていない。元よりその気もない。けれど、こちらに害意がなくとも向こうはお構いなし、そんなことはよくある話だ。

(なんか危ない雰囲気。やっぱり第六感に従って逃げればよかったかな)

ううん、と小さくうなづいて、司は男から視線を外そうとする。

とたんに、砂を踏みつけたような乾いた音が聞こえて、自分の視覚だけが木目の穴から路地裏に引きずり込まれそうになるといふ奇

妙な感覚に襲われる。踏みとどまろうと体重を後ろに傾けようと
して、身体の自由が奪われていると気がつき、

「やばっ、これ、かなしばり」

慌てた時にはすでに遅い。男が頭をもたげる。

「こわい　こわい　ばけもの　けだもの　まっかちが
だめ　とまらな　けだもの　だめだ　こわい　こいつか
みつ　く　けだ　もの　だめだ　もう　ちが　ない　し
ぬ」

がちがちがちがち。がちがち。

うるさいと思っただけなら自分の声、および自分の歯が鳴る音で、けれどそれを感じるより先に認識したのは穴の向こうから見られていたという感覚で、後ろにかけた体重が力学的に作用する瞬間に司が見たのはじつとりとこちらを見る中年の男の目玉だった。いつの間にか、穴から食い入るようにこちらを見つめている。

目と目が合う、というか。さっきまでなら、物理的に司の眼球と接触しかねない位置だった。

「う、わ」

悲鳴のひとつもあげられない。荒い呼吸は、全力疾走したあとのようにせえはあと肺腑から口までを往復している。立ち上がるのも億劫で、司はずりずりと尻餅をついたまま後ずさった。男はまだこちらを見ている。見続けている。次第に落ち着いてきて、恐怖心よりも驚かされたことへの苛立ちの方が大きくなった司は、これ見よがしに頬をゆがめて大きめに舌打ちを響かせた。

「……自分でしゃべればいいのに。わざわざ、無理やりさせるとか。変態」

悪態をついていると肘が曲がって、大の字で寝そべることになる。呼吸が落ち着くまではこうしていようと思った司が首だけ曲げて自分の足下の方、穴の位置を見ると、いまだそこには男の眼球の色合い、黒々とした闇が渦巻いていた。

「なに。なんか用、なの」

用がなければ？口寄せ？なんかしないと思ったが。一応形式として、そこは訊ねておいた。

そう、司が先ほど男にやられたのは、霊媒術 憑依である。一般には？口寄せ？として恐山のイタコなどが有名だが、要は死者の言葉を現世に還すべく一時的に身体と精神を同調させる術である。

もちろんやろうと思ってやったことではない。霊媒体質であるのに修行などでそれを御する術を得ようとしなかった司は、強い意志を持った霊体に接すると一方的にそれを「させられる」ことが多いのだった。

「たしかさっき言われたのは……ばけもの、けだもの、かみつく……で、死ぬ。か。死ぬ瞬間のことを伝えたいのはわかったけど。つまり、仇をとってほしいって、そういうこと？」

うなずいたのか、首を横に振ったのか。男の目玉が一瞬、木目の穴から消える。どちらであっても、司にはどうにも出来なかったが。

「気持ちはわからないでもないけど……あいにくと呪いの成就に手を貸せるほどの力は無いよ。それに、やるなら止めない。でも出来る範囲でしか干渉しない。そういうスタンスでやってるから」

司が片手を振って断る姿勢を見せると、男からはたじろいだよう
な、なんだか弱気になったような空気を感じた。この程度でひるむ
とは思っていなかった。正直な話呪いも大したものにならない、
そんな予感がした。

いずれ強い霊障などが起こるようになればこの男の作りだした呪
いの？場？も拝み屋か何かに消されるだろうな、と思いつつ、司は
上体を起こして腰を上げた。そこで、背後から漂う臭気と、ぞわぞ
わと肌が粟立つ気配を感じ取る。？この場？つまりこの男の霊に対
する第六感の警告は、すでに払いのけた。にもかかわらず感じる感
覚はつまり 振り返る前に、穴の方を見た。

男の目玉はすでに穴の前から消えている。地縛霊なのでそこまで
遠くへは逃げられないだろうが、出来得る限り逃げたのだろう。

そしてそれはもちろん、司の態度によって引き起こされた行動など
では、なく。

「……嫌になるよ」

ポケットに手を入れ小刀を抜きながら振り返る。逆手に持った小
刀は司の前腕部で隠れて見えないようにされ、いざという時に不意
打ちで振ることが出来る。

ビルの横にある狭いこの空き地がさらに狭く感じられるような、
圧迫感を伴う威圧。とたとたと地面を踏みしめて、犬神が 司の
眼前まで歩いて来ていた。激しくえずいており、もう吐くものなど
ないその身体から絞り出すようにして唾液と胃液の混ざりものを垂
らしていた。濁った瞳は司ごしに、背後の穴を見ていると思われる。

「でも、なんでここに」

突き刺したことを恨んでいたんだろうか、と犬神の背にあるはず

の、自分がつけた傷を見る。けれど毛並みに隠されている地肌の傷の有無などわからず、諦めて立ち向かうことに神経を集中させる。

今回はサワハを襲っているところを背後から一突きしただけだったが、今はそのように注意を引いてくれるものもない。戦闘技能などほぼ皆無である司は、攻撃の機を得るためには自分の左腕でも差し出す他ない。覚悟と責任で腹をくくって、距離を測るように左半身で構えた。

すると犬神はそっぽを向いて、鼻を鳴らすと口の端から液をこぼしてすたすた歩き空き地から出ていった。なぜ逃げ出したのか、わけもわからず。刃物に臆したのだろうとあたりを付けてはみたものの、拍子ぬけした司はわざわざ構えまでとった自分がなんだか恥ずかしくて、左腕をぶらりと下ろしたあともそのままの姿勢でしばらく突っ立っていた。

だがすぐに身をすくませ、またも緊張の糸が張り詰める。その理由は背後からの視線で、しかしその視線と司の視線がぶつかり合うことは二度とない。

「あ……」

穴の淵からこちらへ突きだされていたのは指先で、すぐに引込む。それが何を示すのか頭で理解が追いついた時には無音の世界に空白だけが残されていた。

踵を返して空き地を飛び出し、鑑識の人々が居たことも忘れて現場へ踏み込む。制止を振り切って角を曲がり、穴の向こうにあった場所を目にした司は。

男がいなくなった路地裏に、犬神の姿も無いということを確認して、膝の力が抜けた。

踏ん張って、崩れ落ちることは避けた。

(やられた)

背後から肩に置かれた手を振り払い、司は路地裏を走りだす。鑑識から逃げるためというよりも、あれほど積み重ねられ空間を呑みこんでいた怨嗟の念がほとんど消されていたことを、認めることが難しかったからだ。

直感的に犬神の仕業だろうと推測したが、そもそも犬神、ひいては犬神使いは恨みの無い相手を襲うほど暇ではないはずだ。

ではなぜなのか、疑問はそこに終始する。結局のところ、犬神が人を襲う理由から探るのが、一番の近道だったのかもしれない。そんなことを考えて、やはり怨恨だろうと考え直して、

「サワハさんと、一件目と二件目の被害者と。共通して恨みを買うような何かが、あるのかな」

走って走って、路地裏をぬけて大通りに面したところまで逃げ、地下の駅構内に飛び込んで。環状になっている路線の図をながめながら、ポケットに手を入れ財布を探り考える。恨みつらみ。共通項。普通の殺人事件であるなら、無差別という可能性を考慮し最初からこのような思考は放棄するのだろうか。思いだけが理由であり原因であり手段となる？呪い？に関しては必然性を持って「恨まれるなにか」という共通項が存在するはずなのである。

環をなすように、被害者同士を繋ぐなにか。ぐるぐると迷走する思考を抱えつつ改札を通り抜け、右回りで走る電車を待ち、ふっと思い当たる。

「……ミッシングリンク？」

A B C、のアレを思い出したのは、あの連続殺人で用いられたのが鉄道案内で、今まさに司が路線に居たからだろうか。

襲われたサワハ。消された、二件目の被害者の霊。そもそもなぜ

二件目の被害者が消されるのか。呪いはどこを向いていて、犬神使いはなにを考えているのか。ミッシングリンクは、繋げることが可能なのか。

「わかるはずだよ、だいぶ情報は集まってきたら……」

言い聞かせるようにして、司は列車に乗り込む。ようやく見つけた尻尾を、つかんで手繰り寄せたかった。もう少しだと、自分の頭の中で確信の音が響く。そしてその確信は、二件目とサワハの間に無かったはずのラインが、「同じ犬神に襲われた」という一点でわずかながら浮かび上がったことに端を発するとも思っていた。

逆を言えば一件目との繋がりは本当に何も見つかっていないのだが。そこに頭を悩ませて、

「ん？」

一件目と、二件目とサワハ。無意識に行っていたそのグループ分けに、なんらかの意味があるような気がして、

「……けどもしそんなグループ分けがあったとして、じゃあ犬神使いはどんな妄執にとりつかれて、」

自分のつぶやきが、確信へと接続されるのを感じた。

それを確証へ至らせるべく、司は急ぎケータイを開いてアドレス帳から目当ての名前を探す。だがよく考えてみて、相手が通話やメールを簡単には出来ない状態であることを思い出した。次の駅で電車を降り、左回りに乗り換えなくてはいけない。

目指すのは、サワハの病室。

#

一方そのころ小野は喫茶店を出て、とぼとぼと独り歩いていた。あてどなく歩くのは嫌いではなかったが、頭の中で反響する司の言葉が足取りを重くして、気がつくともあまり知らない通りの中で動きを止めていた。

呪い、呪われ、堕ちていく。呪術の仕組みは理解していたはずだった。だというのに、誰かから面と向かって指摘されることはこれほどの重圧を伴うということに、正直驚いていた。

小野と違う世界を見つめてきた司の瞳には、これまで出会った人々の中に宿っていたものとはまた違う凄みがあった。怖気づく、とは言わないものの、気圧された。だからだろうが、雰囲気にもまれ、司の言葉に引きこまれた自分の不甲斐なさを責めたくなくなるような心地がしていたのは。

「それでも……」

ここで止まるわけにはいかなかった。小野の中での結論はだいぶ前に出ている。それは呪術を、人を呪うことを、一番忌み嫌う小野だからこそその結論だ。

一番恐ろしいもので、遠ざけたいものだと思うからこそ、それを武器とする。

呼吸を押えて目を開いて、歩く道を選ぶ。ずっと前から行い続けてきたことをいまさらやめるつもりなど毛の先ほどもありはしない。通りを蹂躪するように闊歩し、人気の少ない道に入り込んでいく。まだ日が出ている時間帯だから、少し影の濃い場所へ。

小野には司のような霊視も、口論義のような真偽を察する耳も、踊場のような情報集力もない。それでも歩き続けることには理由があった。明らかな確信の下に、小野は道を選び続けている。

最悪の場合、というよりも。むしろ次善のさらに次の策として、小野は自身が犬神に襲われることも手掛かり入手へのアプローチと

してはやむなしと考えていたからである。もちろん他人に恨みを買うような真似をした覚えは（それほど）ないのだが、サワハが襲われたことで、犯人がいまだこの近辺に潜伏していて、大きな恨みがなくとも犬神を差し向けるかもしれない可能性があることが示唆されていると思っただのだ。

「しかし、どうしたものでしょう」

きよろきよろと辺りを見回して、どこか怪しいところがないかと探す。だが邪推すればほんの少しの暗がりですえも何か意味ありげにそこにくすぶっているように見えてきて、小野は徐々に細かく探すことをしなくなっていた。

直感に従い、司に異能を見出した時のようにごくごく自然に。ありのままの思考で、周囲に臨む。しばらくそうして歩き続けて、幾度か時計を確認するうちにふっと、それは現れる。

行動がもたらしたのは、不運か、奇運か。幸運ではないことだけは、確かだった。見えてきたのは直角に折れ曲がった道の角、その頂点に面した入口を持つ、廃屋だった。一見すると雨戸が閉じられているだけの二階建て一軒家だが、重苦しい空気が赤さびた門扉の向こうで淀み溜まっている。

まさか、と思う気持ちがかもしかして、に変わるまでにさほど時間は要らなかった。くぐもった、なにかの鳴き声が微かに家の中から届いたためだ。

「我ながら、そしていつものことながら。こういう惹かれやすさは嫌になります……けれどここで焦って単独行動をとるのは実に危険ですよ。だれか、連絡を」

こぼしながらケータイを取り出し、先ほどまで会っていたからか最初に思い出した司に電話をかける。だが地下鉄に乗ってサワハの

病院へ向かっている最中のため、繋がらない。続けて廉太郎にけるがこちらも不通。道場にいるためまず電話を身に帯びていないだろうとの予想はついていたらしく、落ち込まず連絡を重ねる。

結局通話出来たのは踊場だけで、内心がっかりしながらも小野は堀に背をあずけて踏み込む時が来るのを待った。その間、背後にある一軒家は不気味な静けさを保って、這い寄る宵の闇に少しずつ黒く染め上げられていった。

暮れはじめると早いもので、いつの間にやら、逢魔が刻だった。

#

「あー、それサワハ言った力モ。でもそれがなになの、って……あー」

司の言葉を待つまでもなく、自分で答えに辿りつくサワハ。自論が確証に近付いたことを悟った司は、溜め息と共に椅子の上へたどりこむ。

「……言葉って、」
「言霊って怖いわね」

あのあとやはり気になったのか、サワハの様子を見に病室を訪ねていた口論義に横合いから言葉を付け足されて、深くうなずく。これにて浮かび上がったいた繋がり線はほぼ確定的なものとなり、いよいよあとは大詰め、と言いたいところだったが。

「でも、こればかりは どうにもならないんだよね」

「犬神使いを見つけたこと？」

「うん。それに 一件目と二件目の被害者を、呼び戻すことも」

答えて肩を落とす司。どうにもこうにも、そればかりは運だ。おそらく警察は見つけ出すまでにそう時間を取らないだろうが、捕まってしまうえば接触は二度と叶わず、司たちが望む情報は一切得られないままなのだ。

慰めるように、口論義は肩を叩いて司を自分の方へ振り向かせる。

「まあ、不意にエンカウトすることもあるものよ。特に……あの子は惹かれやすいから」

にたりと笑みを頼いっぱいに広げて、獰猛な笑い声を口の中にて噛み殺す。そんな口論義の様子に若干の恐怖を感じ、司は問う。

「ひかれやすい、って、前もそんなことを」

「小野ちゃんよ、小野ちゃんのこと。……ねえ、司ちゃん。あなたはあの子の微能力、どう思う？」

「どうって、すごいなあ、としか」

右斜め上を見て誰でも言えそうなことをつぶやいた司に向かって、サワハもこくこくと賛同の首肯を示す。口論義は笑みを強めて、二人にこう言った。

「そうじゃなくてね。ほら……普通に考えて学校に一人いるかいなか、っていう異能力者を、ほいほい見つけ出しちゃうのよ。変だと思わない？ そんな簡単に見つかるものかしら」

「でも見つかったから、こうしてここにみんな集まってるわけでしょ」

「そ。逆説的に述べるなら　　そういう輩が多い所に、あの子はい

自信たっぷりに言い放った口論義の自論を拝聴した司は、前後の文脈から、なんとなく口論義の言わんとしていることがつかめてきた。

「惹かれやすいつてこと、か」

「あの子は放つとけば勝手に事件の渦中に進んでく、爆発物感知センサーみたいなもんなの。たぶん変なものを見つける能力のせいで異常に対する警戒心が弱くて、境界を認識しづらいなと思う。普通の人なら無意識に避けて通るところでも、あの子は平気でスキップしてくわ」

まじめな顔でスキップする小野を想像して、ないな、と断じた司は、何の気なしに時間を確認しようとケータイを取り出す。すると着信履歴に「小野香魚香」と表示されており、タイミングぴったりだな、と思った。

「どしたの？」

「小野から電話あったみたい」

「噂のすれは禿げ？」

「意味わかんないよサワハさん。噂をすれば影、だってば」

「タイミングいいって言うか……なんかあたし嫌な予感しかしないんだけど」

院内だからと律儀に電源を切っていたらしい口論義が病室を出て待合室にて電源を入れると、こちらも着信履歴に「小野」と表示されている。司と顔を見合わせて、どちらともなく外に出た。二人で廉太郎、踊場の両名に電話をかける。コール二回で出た廉太郎に司が着信がなかったかと問うと今それを見たところだと返された。ついでに呆れたような、嘆き声が耳を突く。

《……前もこうだった。その前もだ。連絡が途絶えたと思ったら、面倒事に巻き込まれてやがるんだ！ ああもう、勘弁してくれよ、俺は冬の一件のように出張るのは御免だ、と言ったはずなのだぜ！》
「そんなのこっちに言われても」

隣の口論義はというと最初に「踊場？」と通話相手に訊ねた後はふんふんと話に相槌を打つばかりで、司には情報が入ってこない。途中でそのことに気付いた口論義がスピーカーホンにすると踊場の声が漏れ出る。声が聞こえたのか、廉太郎が小さく舌打ちしたのも漏れ出た。

《……で今は病院から右回り四駅、二番出口から出たところにある雑居ビルを左折した先の、住宅街にいるというわけだよ。見るからに古くて雨戸が閉じきった家さ。……正直僕は戦力にならないし、立地がどうも悪いのでね。不気味なだし早めに来てくれるとありがたいね》

「わかった、すぐいくわ。ところで、立地って？」

《ああ、曲がり角の頂点の位置というのは良くも悪くも気が溜まり易いということだよ。道を往来するのはなにも、生きとし生ける者だけではないのだからね。部屋の隅に埃が溜まるように、気の吹き溜まりにもなる。溜まったそれがもし人の怨念などで染められると》

ガツツと大きな音が飛び出してきて、口論義が片目を閉じつつ耳元よりケータイを遠ざける。司との通話越しに聞いていた廉太郎にもなんだ、大丈夫かと訊ねられたが、司には答えようがない。口論義は受話器に向かって踊場の名を何度か叫んだが、再びの異音の後には通話自体が切れてしまう。

かけ直しても、当然繋がらなかった。歯噛みして、ケータイを閉じる。司に向き直って、ケータイを握る手ごと自分の口元に近づけ

ると、廉太郎に指示を出した。

「……廉太郎、あんた今ので二人の位置は大体わかったわね？」
《病院から四駅、二番出口から住宅街、廃屋っぽいところを探せばいいんだろっ》

「よし。じゃああたしたちも向かうから、あんたもなるべく早く来なさい」

通話を切り、司の手を取ったまま走りだす。駅への階段をとんとんと駆け下りて、定期を使って改札を抜けて。ホームに続く階段で靴がすっぽぬけた口論義は周りの人間が驚くほど大きな舌打ちをかました。

「演出過多よ、電話といい今といい」

とぼやく口論義がいらいと地面を爪先で叩くのを横目で見つつ、ホームに吸い込まれてきた列車に乗り込む。駆け込み乗車した口論義と並んで窓に移る自分たちの姿を眺め、なんとはなしに進行方向を見やる。

「司ちゃん、御手洗さんって、今から呼び出せる？」

「無理。次の仕事場だ、って出雲に行っちゃったから呼びもどして暇ないよ」

「タイミング悪いわね」

爪を噛み、口論義は白いチュニツクの裾をまくってカーゴパンツのポケットに手を入れた。

「踊場は術とかに詳しいし、小野ちゃんも自分のことは自分でなんとか出来るとは思っけど。長時間耐えられるとは思えないし、踊場

の話によると場所が危ないらしいし」

「時刻もちょうど、逢魔が刻だしね。向こうに有利な条件が揃いきてる」

「でも犬は飼い主のところへ返されて供養されたんでしょ？ それならある程度呪いが薄まってもいいはずじゃない」

「……だから、前に立てた仮説が真実になったんじゃない？ 今いる犬神は二体目なんだよ、きっと。種類が同じならよほど見慣れないと見分けつかないし、だからさつき遭遇した時も、背中を突き刺した憎い相手を気にも留めずにスル　した」

憎い相手と言いつつ自分のことを指差して、司は言う。口論義は釈然としない表情だったが納得はしらしく、その後も互いに暗い硝子に移りこんだ相手の姿を見つめながら会話をかわし、走行を続ける列車は少しずつ速度を緩めていく。

「なら、犬神使いが二件目の被害者の地縛霊を掻き消したのはなんだったの？」

「二件目の人は、自分が追われる要因を作った奴だったから。そしてサワ八さんを呪ったのは、襲ってしまふ要因を作った奴だったから。……とんだ身勝手。とんでもない、こあくど蟲悪党だよ」

「まったくくだわ。ホント、あたしたちそんな奴のために貴重な休日を割いたんだから、対価に見合うだけの情報でも持つてくれなきゃ割に合わないわよね」

「割に合っても、許す気は起きないよ」

司ははっきりとそう口にした。その言葉自体が断罪の意味合いを持つように、口論義には聞こえた。やがて一つ目の駅に着く。扉は開いたが、客の乗降は少なく、すぐに列車は動きだす。

「……死んで未練があるわけでもないのに。まだやれることがある

のじ」

軽くうつむいた司の表情は、硝子に映った像では見えなくなったので、口論義は直接顔を見ようと横を見る。

「まだ誰かに関わられるのに、呪うなんて」

同じくらい目の高さにあった司の顔は、ちらりと口論義に瞥くれて、ふいとあさつての方を向いた。

けれどその一瞬で見せた瞳のぎらつきに、口論義は気圧された。唇に司と話していた時の小野が、そうであったように。

口論義に後頭部を向けたまま、司はぼつりと、心底うんざりした声を発する。

「死んでも許せないよね」

#

「ぐぐぐぐぐぐぐ！！」

ケータイを持っていた左手首に噛み痕が現れたのを見て、踊場は地面に転がった。一瞬遅く、空中に投げられていた携帯電話が地に落ちてガツツと音を立てる。

「お、踊場さんっ」

「来るな！」

小野が駆け寄ろうとすると、叫んだ踊場の左腕がぶんぶん振りまわされている。低い位置でのその動きは、犬神が首を振って肉を

食い干切ろうとしていることを示唆していた。

「きみも、食われるぞ！」

「で、でも！」

恐怖を感じつつも小野は臨戦態勢に入り、犬神がいると思われる空間へ鋭いローキックを繰り出す。しかし爪先は空を切るばかりで、踊場の苦悶の表情は一切変わらない。やはり司の小刀のような代物でもなければダメなのか、と焦りが高まっていく中、小野は御手洗にもらった御守りのことを思い出した。

ポケットから取り出したそれは小さく震えていたが使い路はわからず、小野はどうしたものかと短く思案をめぐらし、ともかくも投げつけてみる。すると御守りは空中で何かに当たって跳ね返り、地面に落ちた。踊場の左腕もぱたりと地面に落ちる。離れた、と思い小野が駆け寄ろうとすると、

一拍置いて、耳をつんざくようなぎゃあぎゃあという叫び声が、御守りのある位置から響き始めた。声と言っても人間のものではなく、もつと甲高い、なんらかの動物の叫びに思われた。

耳が痛むほどの音量に閉口、というよりも何をしゃべっても自分の耳にすら届かず、小野は助け起こした踊場に声をかけることもままならない。

「どっくに、いけば」

とっさのことで、門扉の内側に。危険域に踏み込んでしまった矢策に気付き、出ようとした時には門扉が外側からものすごい勢いで閉じられた。一メートル半はある門扉は小野では飛び越えることも出来ない、だというのに犬神の方は飛び越えるつもりなのか、門扉に向かつて体当たりを続けている。見えない犬神による激突で軋む金属音に門扉の耐久性の低さを感じ取った小野は踊場を引きずって

石畳の上を後退した。

恐慌をきたしていた踊場は家まであと二メートルのところであるとか立ち上がり、前庭の中でどこか隠れられそうな場所を探す。小野も左右を見渡してなにか見えそうなものがないか探したが、両側は生えのさばる雑草の海しか見えず、やがて門扉が蝶番の部分から壊れ、倒れる音が響いた。

前庭を門扉から玄関まで貫く石畳の上には、両側から雑草が幾数本も突きだしている。そのうちで門扉に程近い雑草が、風にあおられたようにぶるりと動き、折れた。不可視の犬神の拳動が、折れる雑草によって小野たちにも目視できるようになる。

「もうしょうがないです、家の中に逃げましょう!」

「しかし小野君! ……ああ、くそ、仕方ない!」

他にどうしようもないと悟った踊場は小野の提案に乗り、石畳を駆ける。と、小野が一足飛びにつかんだドアノブが回された瞬間に家の中に言い表せない狂気を感じた。だがもう止まれない、他に逃げ場は無い。

家全体に震動が伝わる勢いで音高くドアを閉めた踊場は、鍵をかけた直後に、閉めた時よりも大きな音を立てて犬神がぶつかってきたせいで驚き、足下にあつた何かの細長い板につまずいて倒れる。

その後も連続して激しい激突音が響いたが、急いでドアに寄つた小野、次いで立ち上がった踊場が押えていることもあつてか、ぶち抜かれてしまうような気配はない。

辛抱の時間はそう長くはなかったが、踊場と小野の体感時間としてはいつまでも続くように思われて。必死に押えていた力がゆつくりと腕から抜けていくのを感じた頃には、すでに犬神の体当たりは終わっていた。息を切らして二人は膝から崩れ落ちたが、少しの安堵を見せた小野に対してうつむいた踊場は足下の板を見つつ厳しい顔つきを崩さない。そして、小野を尻目にすぐ立ち上がって奥に進

もうとした。

「お、どりば、さん？」

「この家、大体の窓は雨戸で覆われていたようだが。もしかすると雨戸が脆くなっている場所、もしくは閉まっていない場所などがあるのかもしれないよ。油断した直後に襲われる、などというお約束をこれ以上踏襲するわけにもいかないのでね、僕が奥を見てくるよ」

言いつつ、踊場は奥を指差して、けれど視線は小野の左の方を見つめていた。首をかしげかけた小野だが、その視線に思うところあったのか、ただうなずきを返す。それを見た踊場は、指差していた手で内ポケットを探り、空いた片手で手招きした。小野が適当に、言葉を返す。

「でもお約束、を言うのなら単独行動も危ういのでは？　そもそも、ここは敵の根城である可能性が高いのですし」

「……それもそうだね。では二人で見に行こう」

玄関はドアの上部にある長方形の曇りガラスから注ぐ光の他に光源はなく、薄暗い中に埃が立ちこめていた。土足のまますつと上がり込んだ小野は、進行方向のすぐ左手にある階段を無視して、踊場の後ろに続き廊下の奥へ進もうとして、

がたん、背後の物音に、二人が振り返らない約一秒間。致命的な隙を、襲撃者は見逃さない。

二人がさつきまで居た土間の脇にあった靴箱の中に隠れていた小柄な男は、手にした包丁を腰だめに構えて突っ込んできた。ぬらぬらと、濡れたようにべたついた輝きが、またたきの間に小野の右腹部に迫る。ようやく小野は動き出したが、もう振りかえることは間

に合わない。男の頬に、下卑た笑いが現れる。

「ふっ！」

が、呼吸を計った小野はついに後ろを見やることを一切せず、上半身を前かがみにして息を吐きつつ放つ後ろ蹴りで男の下腹部に踵を叩きこんだ。ぐげえええ、と悶絶して倒れ込む男の視界が最後に捉えたのは、屈んだ小野の向こうで催涙スプレーを自分に向ける踊場の姿。

「ぎあああああああああ！」

唐辛子をふんだんに使ったスプレーの気体が眼球の表面を覆い、許容量寸前の痛覚への刺激に耐えきれず、男は包丁を取り落として右手で下腹部を、左手で目を押えた。

「……いや、小野君。実によい動きだったよ。さすがはまさかり

「そのあだ名で呼ぶのはやめてくれませんか」小野は靴の爪先で包丁を蹴り、踊場のいる廊下の奥へ滑らせた。わずかに足を掠めたのか血がついたそれを見られて、心配させないようにするためだった。

「ああ、これはすまない。あまりに切れ味鋭い蹴りだったのでついね

ちらりと視界の奥、玄関の床に転がる板を見やって、踊場は白々しいセリフを吐いた。

……いかに空き家でも堂々と板が転がっている光景に違和感を覚えた踊場は、その板の出所について思案し、自らのすぐ脇にあった靴箱の存在に思い当たった。「もしかして靴箱の中の板を抜くことで、何かを入れているのでは？」と。

そして犬神使い自身がそこへ隠れている可能性を考慮し、まだそこまで思索が行きついていないと思われた小野に視線で示すことで、迎撃の準備を整えたのだった。

「しかし、手招きするのでついていきましたが。相手が出てくる前に靴箱の戸ごと蹴り飛ばす手もあったのではないですか？」

「……んん。でも、もしそこに犬神使いではなく、犬神の術を成すために殺された犬の遺体があったら。遺体を壊されたことで怒り狂った犬神がきみを襲うかもしれないと思ったのでね」
「なるほど」

不満げに口をとがらせかけた小野は、すいと表情を戻した。踊場はベストのポケットから百円で買った結束バンドの束を取り出すと、ダメージを受けた部位を押える男の手を引き剥がそうとした。ところが暴れるので、延髄に肘を落としてから両腕を背中へ回し両手の指同士を二本ずつまとめて縛り、動けないようにした。

「はてさて、これにて事態はそれなりに收拾を……っと、ここで油断するのもまずいのだろうね。考えてみれば表を駆け回る犬神にはなんの対処も出来ていないのだった」
「どうでしょう」

「ふむ。口論義が来てくれれば、あいつの持っている御守りである程度追い払うことが出来るのではないかな。出来ればサワ八君の分も持ってきてくれるといいのだが」

「ということは、とりあえず待機ですか」
「いや、その前にさっきも言ったように、雨戸に穴が無いか探した方がいいとは思っけね」

言って、おもむろに腰をあげかけた踊場の背後で、男がうめき声をあげた

「おや。やはり僕は非力なものだねえ。全力で延髄打ちを叩きこんだつもりだったのに、意識が残っているとは」

驚いた風に踊場が言うと、男は聞こえているのかいないのか、がちがちと歯を震わせ始めた。なんとなく不気味で目を逸らしかける小野だったが、その前に限界まで見開いた男の目玉と直に視線を合わせてしまう。昼に司と目を合わせた時とは違う、人間的なものではない怖さがそこには宿っていて、背筋が固まる。

「踊場さん、早くいきましよう」

「うん？　しかしこのまま放っておくと、立ち上がって後ろ手でドアを開けられてしまうかもしれないしね。動けないように、もう少し催涙スプレーでも浴びせておこうか」

「それは、そうかもしれませんが。でもお気をつけて、まだその人の自由を完全に奪ったわけではありませんから」

「だからこそ、これから安全かつ完全に封殺するわけだ」

いったんしまいかけた催涙スプレーを取り出し、男の眼前にかざす。真っ赤に充血した目からうかがい知れるのは憤怒の感情だけで、けれどそれゆえにどこか奇妙な気がした。

人間的な反応なら、ここで反抗心と共にわずかでも恐怖が滲むはずなのだ。

「　こいつ、」

そこに気付いて、差し出しかけた手を、踊場は引っ込める。

その動作に応じたように、男が跳ね上がってスプレーを握る指先に噛みつこうとした。あまりの力に奥歯が砕けて、じゃごりり、という聞き慣れない音がして、口腔内にあふれた血をだばだば漏らし

ながらも床に接吻した男の口はにたりと笑みをかたどる。

次いで、踊場が放ったサッカーボールキックを顔面で受け止め、玄関の方へ転がった。だが本人の申告通り非力な蹴りはさほどダメージを与えておらず、それどころか手ごたえとして得られたのは「当たる前に男は後ろに跳んだ」という嫌な感覚だ。

それに加えて、踊場は距離を離してしまった。追撃に移らなかつた。そのことが致命的なミスとなる。

芋虫のごとく這いつくばった姿勢から、背筋が悲鳴をあげるほど上体を反らして男は両腕に渾身の力を込める。

「ぎぎぎいぎぎつぎぎぢぎぎぎいぎぎぎじぎぎ」

もはや人が発しているとは思いたくない異音が口からほとばしり、それに合わせて指先を縛る結束バンドも軋みをあげる。

だが限界が先に訪れたのは、男の指の肉だった。血流を止められて膨れ上がり、腸詰肉のようになった指先の皮膚、皮下組織、筋肉が、ぞりゆりと結束バンドによって削ぎ取られる。爪の根元まで削げて、血管の脈動、組織の断裂が露わになる。おまけとばかりにペキペキ軽い音が響き、骨が脱臼、あるいは折れたことまでもがわかった。

「う……」

常軌を逸した行動に気分が悪くなり、口元を押える踊場。だが彼の陰にいたおかげでそれを直視せず済んだ小野は、踊場を押しつけて三步の間合いを詰めると躊躇なく下段足刀を打ちこんだ。しかしタイミング悪く、結束バンドから解き放たれた左腕が軌道を逸らし、命中したのは床に転がる板だった。

「くっ」

素早く、接地した左足刀を軸にあまり足を開かないよう小回りで右へ渦を描き、後ろ回し蹴りを叩きこんだ。男はそれを跳躍してかわすと、四つん這いの姿勢から噛みつきを敢行する。小野が回避したため顔面から玄関の壁にぶつかりそうになるが、片手を突き出して自分の突進を押しとどめた。壁には、指先から流れる血が五筋の線を残す。ぞつとして、小野も動きが止まりそうになる。

「奥へ、逃げるぞ！」

催涙スプレーを構えたまま、踊場がえずきつつ叫んだ。その声で我に返った小野は眼前に迫る男の身体を突き飛ばして、踊場の横を抜けると廊下を駆ける。踊場は催涙スプレーのガスを使いきる寸前まで玄関へと吹き付けつつ、その後を追った。

廊下の先は両側に部屋があり、どちらの部屋も雨戸が閉じられているために玄関先とは比べ物にならない、完全な闇だった。瞬時の判断でドアが頑丈そうに見えた左の部屋へ飛び込んで、二人はドアを押さえつける。姿の見える、実体のある人間による体当たりは、先ほどの犬神によるそれとは違い一撃ごとに生々しい重みを身体の内に残された。

「やばい……」

つぶやく踊場は元から非力であり、小野も的確に急所を蹴り飛ばせるような技術を持つだけなので、力では成人男性に勝るはずもない。おまけに保身、自らの身体を顧みることを一切しなくなった男の攻撃は普通の成人男性より遙かに重く、ドアフレームが歪みかけていた。

「くそ、早く……早くだれか」

背中越しに伝わる威力に息が詰まる踊場は、懸命に踏ん張っているが一撃のたびに数センチずつ、後退させられている。

黙って両腕に力を込める小野も、先ほど犬神の体当たりを押えた際の疲労が溜まっていて、長い時間で長く持ちそうになかった。

しかも。

「……光？」

暗闇に慣れてきた小野が一筋の光を見つける。室内の様子が少しだけ見てとれて、何も家具がないためわかりづらいが、ここがリビングであるらしいことがわかった。

同時に。

その光が、雨戸の一部の割れ目より差しこんでいることもわかり。さらに。

雨戸からがりがりとして表面を引っ掻く音がして、その割れ目が少しずつこじ開けられていることも。

「あ、ああ、あ……」

小野が壊れないよう、破られぬよう祈った瞬間　雨戸が、欠壊した。

#

疾走する犬神が、埃を吹き散らして小野の方へと進む。見えないけれど、それでも室内の空気が怨念で満たされたのを肌感じて、まぶたを閉じようとし

雨戸の割れ目から鋭い光がまたいたのを見て、その動きを止めた。

「……間に、合った！」

注ぎ届いた鋭い光は、司が投擲した小刀の刀身が反射したものだ。空中で動きを止めた小刀は、自分が重力に従わないことがおかしいと今気付いたように、力なく落ちる。その刀身は御手洗の御守りを貫いた状態で転がっており、二つの効力で犬神は退けられていた。

司の目には、薄暗い室内で倒れ伏し、目をぎゅっと閉じて身体を震わす犬神の姿が視えている。ついでに視界の奥にドアを押える小野を見つけて、無事かどうか確認する。

「にしても、？見ざる？か……なるほどね。だから、三つしか作れない、とか言ってたんだ」

走ってきたせいか乱れた呼吸を整えつつ、司は背筋を正す。その後ろには、ようやく追いついてきた口論義が膝に手をつけて、やはり笑っていた。

とたんに安心してしまい力が抜けて、ドアが跳ねるように強く押し開かれる。小野は弾き飛ばされ、踊場は壁とドアに挟まれた。四つん這いのまま部屋に入ってきた男は、新たな闖入者である司と口論義を睥睨して、赤く赤く染まった瞳をぎゅるぎゅると蠢かせた。

「気をつけてください！ この人が犬神使いで、」

「ああ、わかるよ。……やっぱり。取り憑いてるんだね」

すでに満身創痍の身体を引きずって、なおも敵意と犬歯をむき出しにして自分たちを見る男に、憐れみを投げかけるように司は言った。とりつく、という言葉には理解を示すことのできなかつた小野と踊場だが、ともかくもまずい状況に変わりないことだけは、雰囲気

気から察する。

男はゆっくりと司の方に近付き、後ろ足を屈めると跳びかかる態勢に移る。

「さて。どうもそいつはこつちを狙うことにしたみたいだけど……つまりそつちが、一匹目か」

つぶやきを漏らしひとりごちた司が重心を後ろに傾けた。この行動を受けてか、男が、否、犬神が。ついに因縁の相手へ跳びかかるうとスタートを切る瞬間が訪れる。

と、男の背後、玄関の方から破碎音が轟く。驚きに振り向いたのは小野と踊場で、司と男は身じろぎこそしたもののそれ以上動くつもりがない。廊下の奥から、足音と声が近づく。そしてカツつと音を立て、からからと回る風車が壁に突き刺さった。足音の主が、投げたらしい。

「おい小野、無事か？ あとついでにどっかのチビ」

現れたのは道着に袴姿の廉太郎で、メガネの位置を正しながら、部屋にずいっと踏み込んだ。

部屋の中の空気がぴりつと乾いてとげとげしいものになり、男もそれに反応したのか司から意識を逸らし、廉太郎の方をわずかに気にする素振りを見せ始める。司はともかくとして、小野、踊場、口論義の三人は、どこかその空気に安堵を感じているように見受けられた。

「……ふん、無事と言えば無事のようにだが、だいぶ疲れてるな」

男から目を離さず、わずかに左掌を上げて半身に構え、臨戦態勢に入る廉太郎。すかさず司が小刀に手を伸ばそうとすり足で移動を

始め、男の注意をそちらから逸らすべく小野も廉太郎に言葉をかける。

「廉太郎さん、その人が、」

「あー、いい、いい。皆まで言わんでも大体わかる。要するにこいつが親玉で倒せば終了なんだろう？ とっとと片づけて帰ろうぜ」

「人の話を聞く気はないのかいきみは」

「俺が全面的に間違ってる場合は聞く」

今日は間違つてないだろ？ と主張しつつ、左掌を少し高くした。踊場は不服そうににらむ。

そんな二人のやりとりを見つつ、男は身構えて、わずかに前に出した手で距離を測る。話を続ける廉太郎の隙をうかがう。それらの行動を一向に意にしない様子で冷静に眺める廉太郎と、格の差は歴然と言うか、それゆえに当然の帰結と言うべきか。

しびれを切らして跳びかかった男と、廉太郎の交錯は、まばたきの間の出来事だった。

獣の躍動。襲いかかる男は噛みつきより先に、右の掌底を浴びせかけようとした。

左腕を内側へひねりながら跳ねあげることでその攻撃をいなした廉太郎は、そのまま拳を男の胸に叩き込む。息が詰まったのかあごが開くが、人間の肉体が持つ本能的な行動か、同時に両腕が縮められて攻撃が通りにくくなる。

ならばと繋げて、右のフック。斜め上から打ちおろす軌道で体重を載せた一撃が、縮めた左腕による男のガードの上をすりぬけ鎖骨を砕く。男が顔をしかめた……だが、いまだ最大の攻撃である？ 噛みつき？ は残されている。両腕の間から、あごを限界まで広げた男が、牙をきらめかせた。

牙が迫る。廉太郎の首筋へ。迫り、迫って、切迫し　そこで、潰えた。

男は、廉太郎の胸にぶつかる形でフローリングの床へ倒れた。

「
倉内流？ 鍵戒？」

……先のフックは、それ単体で決め技と相成るものではなかった。あの一撃は鎖骨を砕くことで相手の戦力を削ぐことも目的ではあったが、それ以上に相手の左腕が行うガードを自らの右腕を曲げることで手前に引き寄せ、側頭部をガラ空きにすることに意味がある。そして自らの左腕と廉太郎の右腕により視界の左側へ死角を作られた男は、無防備に晒すこととなったこめかみの急所へ廉太郎の右ハイキックを喰らい、倒れたのだ。

「獣のごとき動きだろうと、所詮人間の身体なら対処は同じなんだよ」

蹴りを放った足を下ろした廉太郎は、にやりと笑ってそう言った。

#

小刀が貫いていた御守りを男の額に当てると、憑依していた一匹目の犬神の力が御守りの方を狙うのを感じた。司が慌てて部屋の隅に向かって放り投げると、それを追う犬神が御守りに向かって吠えかけているのが目に映る。そこでドアが開き、口論義が部屋に戻ってきた。

「結局あの御守り、なんだったのかしらねえ」

「三猿、だと思っよ。多分あの中には？ 申？ って書かれた紙が入ってるだけ」

口論義の問いに司が答えると、部屋の壁にもたれてうつむき、首

をとんとんと手刀で叩いていた踊場が（どうやらさつきドアが開いた時に鼻を打つたらしい）興味深げにうなった。

「ふうん。どこかの民話で似たような話の憶えがあるね。山から下りてくる猪に農作物を荒らされて困っていた村人がある高僧に対処をお願いしたところ一枚の紙が入った袋を貰い、『中を見るべからず、これを畑に掲げるべし』と言われるんだ」

「あー、それから猪が来なくなつて、不思議に思った村人が袋を開けると中には？戌？って書かれた札だけが入つてるだけ。それで開けられたことで効力が消えたからまた猪が来るようになった、つてやつよね」

「犬猿の仲、つてよく言うもんだし。罔として狙わせるために持たせてくれたんだと思う」

ついでにこれは御手洗の遊び心だろうが、犬神に先ほどぶつけた際に発した効力から三つの御守りは「見ざる、言わざる、聞かざる」に則り、それぞれ目、口、耳を封じるものが入っていたと推察された。

「三枚のお札、の昔話なら全部使つてようやく鬼婆から逃げおおせらつて運びだったがな。二枚で済むとは大したことがない」

登場の際に投げた風車を片手の中で回しつつ廉太郎がぼやいて、視線を床に滑らせる。その先で倒れ伏していた男が正気に戻ったのか身震いして、のっそりと起き上がる。その際に床に手をつこうとしてぎゃつと奇声をあげ、指先の痛みに驚いた様子だった。

次いで、自分が司たちに囲まれていることに気付くと、ますます慌てた表情を見せてあとずさる。ドアの近くまで尻を擦るようになつて退して、自分の置かれている状況を理解しようと努めた。

「……さて、そんなわけで本日の主賓が目を覚ましたようですが」
立ち尽くす司の横で女の子座りしていた小野が言うと、全員の視線が一拳に集まる。野太い声で反応した男は、声音も困惑の色に染まっていた。

「……うえ？ ああ？ な、なんだ、おまえら、なんだ……」
「いやどうも初めまして、犬神使いさん。わたしたちはあるお被い屋の一門に所属する者でして、本日はあなたの使役していた犬神を被うために参上した次第です」

さらっと大ウソをついて微笑んだ口論義には疑念しか抱けなかったのか、目を白黒させながら男は司たち四人の顔を見比べる。だが誰も男に対しては冷やかな態度を向けていたので、結局は会話を続けている口論義に視線を戻すこととなる。

「い、いぬがみ？ 使役？ なんのことだ？」
「またまた、おとぼけになって。……あなた以外で、いったい誰が隣の部屋で犬を餓死させたというんでしょう。それに隣の部屋だけじゃない。最近、森林公園でも同じことをしたはず」
「知らない……俺はただここに住み着いてただけで、」
「いいんですかそんなことを言っつて。 また、取り憑かれますよ？」

口論義の一言で、男は身をすくませた。口にはせずとも、行動が饒舌に語る。

憑依。それはまさに、人の形をしたけどものであり、ばけものであり、かみつき、こころす。

二件目の被害者に口寄せさせられて司が知った状況と、符合する。

「……一件目はたぶん、本当に積もり積もった怨恨とか、そういうことでやったんでしょ。でもあんた、二件目から先では怨恨ですらない、保身と独善のための殺人をしてたんだ」

司に断言されて、男は口ごもる。けっして目線を合わせようとはせず、床を見ながらぱくぱくと口を震わせるだけ。

男を無視して、司は二件目以降、サワ八までに起こったこの一連の流れの、真相を語る。

「言葉は力だよ。自分で意識して信じて口にすれば、言霊が載って現実に還元される……二件目は、犬神にやらせたものじゃなかったけど、確かにあんたがやった。さつき小野たちを襲ってた時みたく、犬神に取り憑かれて噛み殺したんだ」

そして、突然に憑依状態になった原因は。

「人を呪った自分の弱さを、受け入れられなかったから。本当に呪いが実現したことで……あんた、怖気づいたんじゃないの？ そこに、運もタイミングも最悪なことに、あるマツサージ店の店員が仕事中に声をかけたんだ。『お客さん、つかれてますね』って」

疲れてる。つかれてる。憑かれてる。

先の、見ざる言わざる聞かざるにも似た、ただの言葉遊びだ。けれど大きな不安を抱えていた人間にとつては、これ以上ないほどの爆弾にも似た言葉である。心のどこかにあった、自分も犬神によって害されるかもしれないという恐怖感が、人を呪わば穴二つという教えが、この言葉で浮き彫りにされてしまった。

そしてその恐怖をなぞるように、男は口にしてしまったのだろう。「憑かれてる？」と。

「だから、二件目の被害者とマツサージ店の店員であるところのサワ八さん、この二人の間にあった共通点は『最近恨みを買った』つてところしかなかったんだよ。まあ、逆恨みにもほどがあるけどね。そしてそのあとサワ八さんが襲われるわけだけど、これの前にあんたもう一度、人を襲ってる。いや、襲い直した」

「……一件目の被害者、その幽霊、ね」

口論義の言葉に司はうなづく。そう、それゆえに、司が訪ねた際、一件目の現場には幽霊も何も残っていなかったのだ。先ほど、二件目の現場で被害者の幽霊が掻き消されてしまったように。犬神に襲われて、現世から消え失せた。

「つまり、呪い直したんだね。二件目の際に一瞬だけど憑依されたのは、自責の念に駆られて自分を恨み呪ったからだ。そこから今度は呪い直して、一件目の被害者に……おそらく、『お前を呪うことがなければ』とか身勝手なことを思って、怨念を飛ばした。それに応じて犬神が動き、自分から離れた。その事実を知って 恨み続ければ、自分を取り憑かれることはもうないんだ、とか思ったの？」

小刻みに首を震わしかぶりを振る男は、もう言葉を語ることはなさそうだった。部屋全体に響き渡り隣の小野がびくりと跳ねるほど大きな舌打ちをした司は男に詰め寄り、

「甘えない方がいいよ。まだ生きてて、誰かに関われるくせに、呪うとかね」

ささやいた。

「生きてるくせに おこがましい」

がくりとうなだれ伏した男は、もう抵抗する気力も、反論する言葉も、持ちあわせていないようだった。

「……さて、解答合わせはほぼ正解だったみたいだし。あとは必要なことだけ聞きだして、しかるべきところに引き渡そうよ」

ころりと態度を変えて小野たちに向き直った司は、いつも通りの呑気な表情でポケットに手を入れ、あくびを噛み殺した。

司の態度の豹変ぶりに少し驚きを隠せていなかった口論義もその一言で我に返り、ああ、と嘆息を漏らして男に近付いた。憔悴しきつてうなだれる男には生気が感じられず、人を呪わば、という言葉の意味を真に迫って感じさせられる様相を呈していた。

それを見て、こっちはなるまい、とその場の誰かが心中で決意を新たに引きしめた。

「……じゃあ、いくつか質問を重ねさせてもらうわよ、犬神使いさん。まずあなたがこうして犬神を使役しようとしたことについてだけ」

問いに移ろうとした時、ぎぎい、ドアが開く。

この部屋のドアはすでに開いている。開いたのは、先ほど口論義が踏み込んだ、犬神作成のために飢え殺された犬の遺体がある、隣の部屋のドアだった。そこから流れ出てきた嫌な臭い、第六感の働きの、ぴくりと反応したのは司だけではなく。

御守りを執拗に攻撃し続けていた犬神が、ドアの向こうに宿る深淵なる闇を凝視している。だが司も、誰も、そのことには気づかず、奇妙な事態に首をひねって、肝心の犬神使いからも意識が離れた。

「ポルターガイスト、ですか？」

「いや……」

小野の問いかけにどう答えたものか司が迷っていると、口論義がよろけた。

犬神に突き飛ばされ、尻餅をついた。同時に、犬神使いの男の首筋が、潰した果実の汁が飛び散るように辺りへ血を振りまいた。

「あ……」

という声はその男の最後の悲鳴か、それとも状況を把握するにいたったその場の誰かのつぶやきか。司が抜き放った小刀を振るって犬神の左目を切り払った時には、男の瞳孔が開きはじめていた。傷は気道よりも頸動脈の方が深いらしい。

「いかん、このままじゃショック死するぞこいつ！」

廉太郎がハンカチを取り出して傷口にあてがうが、その程度で止まるものではない。血だまりが拡大されるにつれて男の命の鼓動が小さくなっていき、ひくひくと頬が痙攣して、男は恍惚とも絶望とも取れない奇妙な表情を残したまま、その命を終えようとする。

司はその脇を通り抜けて小刀を構えたまま隣の部屋に飛び込み、突き刺さるような西日を避けるべく片手で目を押えた。そう、西日、堅く閉ざされていたはずの雨戸の一部が開いており、そこから誰かが逃亡したあとがあった。窓際に寄って左右を見ると、雑草の海中、右側の表通りに面した方向へと誰かが通った痕跡が残る。

「待て、待て、ちょっとっ！」

草むらを掻き分けて壊れた門扉の外へ抜けるが、夕闇に包まれる住宅街のどこにも、人影は見えなかった。なおも走りだそうとして、姿すら見ていないのだから視認してもそいつが逃走犯だとはわから

ないことに気付き、立ち止まる。

「逃した……」

手近な位置にあつた壁を殴りつけ、司は夕闇に落ちる住宅街の中、ひたすらに悔しさを噛みしめた。

どこかで、犬の遠吠えが聞こえた。

#

「……や」

「どうも」

なんとなく、昼食を取る場所としてぶ室に立ち寄っていた司は、同じようにここを訪れた小野に片手をあげて挨拶した。いつもの席つまり司を下座として向かいに座った小野は、購買で買ってきたと思しきサンドイッチの封を開けつつ器用に片手でお茶を淹れていた。

「こつちにも一杯もらつていい？」

「どうぞ」

相変わらず二人だけだと会話があまり続かず、なんだかなあと思っている、小野が両手で抱えたサンドイッチをちまちまと食しながら司を見た。おにぎりの合間にかじっていた沢庵をぼりつと音を立てて食べた司は、飲み下してから、残っていた一切れを「ほしいの？」とつまんでみせる。

「いえ、そうではなく。しばらく昼に集まったりはしないとお話があつたのに、なぜいるのかと思ひまして」

「……なんかいてほしくなかつたみたいに聞こえるんだけど」

「け、けっしてそんなことは」
「いいよいいよ、出てって侵入禁止の屋上で食べるよ……」

のそのそと腰をあげかけた司を押しとどめようと、小野は両手を突き出して座るようジェスチャで示す。半分以上冗談だったにもかかわらずそこまで必死になられてしまうとむしろ罪悪感が芽生えて、再び座った司はアルミホイルに包んだ自家製の沢庵をすすつと小野に勧めた。断るのも失礼だと思ったのか、おとなしくそれを口に運ぶ小野。サンドイッチの付け合わせとしては正解だった気がしないのだが、意外と気に入ったらしく頬をほころばせる。

「だいたい、それを言うなら小野だってわざわざここに来てるわけ
で」

「お茶を淹れたかったからですよ」

「あ、そう」

「はい」

途切れた会話の合間を縫って、もつくもつくと食事を進める二人。短い付き合いだがもうそうした空気にも慣れてきたようで、以前感じた居心地の悪さは司の方には無くなっていた。

小野はどうなのだろう、とちらりうかがってみるが、偶然にも目が合ったためバツが悪くなり結局確かめることなく目を逸らす。黙々と食べ続けて、おにぎりがなくなると司は湯呑みに手を伸ばした。空だったそこに、すかさず小野が緑茶を注いでくれる。

「あ、どうも」

「いえ、どうぞ」

息を吹きかけてから口の中に流し入れ、ほうと深く息を吐く。正直、傍から見ていたら老境に入った二人組にしか思えないだろうな

あと客観的な視点を持つてみたりする司だが、唐突に小野が口を開いた。

「先日の件は、残念でした」

「犬神使いのこと？」

「はい」

心底惜しそうに言う小野は、自分のマグカップに手を添えじつと水面の波紋を見つめていた。司は湯呑みを置いて、今度は自分で急須を傾けつつ、小野に言葉を返す。

「仕方ないよ。あれはたぶん、追いかけたけど捕まらなかった、あの逃亡犯が呪詛返しを行ったんだ。いや、自分に来たものを返したわけじゃないから……むしろ、在るべき形に、犬神が最も恨むべき対象であるはずの犬神使いの方へ、力の道筋を正したって方が正確かも」

「結果、使いは死に絶え。残されたわたしたちはまた手掛かりを失ったわけです。本当になにもかもきれいさっぱりと」

「みんなも続いて外に出てきて、それから部屋の中に戻ったら、犬神使いの死体も、血痕も、犬の遺体も、こつぜんと姿を消してたもんね」

異常な事態ではあったが、受け入れざるを得なかった事実。司たちが部屋に戻ると、全てはなかったかのように、夢幻のごとく消え去っていた。唯一残っていたのは廉太郎が止血を試みて血に浸したハンカチだけで、そこに染みついた血痕だけが現実の出来事である証左だった。

ちなみにその死体消失も先ほど述べた逃亡犯による仕業ではないかと司は疑っているのだが、当然真相を知る術は無い。

「異界にでも吞まれたのでしょうかね、あの呪術師は」

小野は溜め息でマグカップの表面を満たす。その溜め息に込められた感情はひたすらに失望や侮蔑を表していて、どこか寒々しい。死者が出たことよりも手掛かりの方が重要なのかな、とは司は口にしなかった。

「……小野の最終目標ってさ」
「はい」

代わりに気になっていたことを問う。あの日、喫茶店で向かい合っただけのように話していた時。司は小野の中に、一種の危うさを感じた。それはこのように寒々しい感情の発露で、司の気持ちを底冷えさせる、他を塗りつぶそうとする黒い感情の脈動のように思われた。

「もしかしてだれかを、呪うことだったりするの？」
「ちがいます。あの日も言いましたが？呪う？のではなく？呪い返す？のです」

左手で右腕を押えた小野はあっさりと、そしてきっぱりとそう返した。そしてまっすぐに司の目を見て、ひるむこともくじけることも無さそうな目で、堂々と問うた。

「軽蔑しましたか」
「べつに……。覚悟があるならだれでもやると思うし。止めないし勧めないよ」

「一番、ずるい物言いですね」
「ずるくない生き方をする必要性も必然性も感じないから。ただ、ひとつだけ言っておくと、呪いが実現して小野の思念でだれかが害

されたってわかつたら……小野のことは嫌いになると思うよ」
「どうぞ自由に」

不敵な、傲岸不遜な、作った真顔で斬って捨てる。司が本気でその口になっているとわかつていてなお、小野は揺るがなかった。

それは犬神使いの末路を目にすることで、未来図が正確に描けるようになったからかもしれない。人間にとっては、既知のものよりも未知のものの方が恐怖、あるいは脅威に感じるものだから。現実を見ることで、むしろ吹っ切れるきっかけとなったのか。

もしくはあの悲惨な末路を以てしても、小野には「この程度か」という印象しか与えられなかったのかもしれない。そう考えて、司はすこし残念に思う。

だが何を残念に思ったのか、我がことながら判然としなかった。ただ思考ではなく感情として湧き出たものだったので、五秒もすると忘れてしまった。

「まあでも、今は……いいや」

つぶやいて、お茶をすすった。

すると部屋のドアが開いて、ひよっと黒い毛先が現れる。天を突くような、バレッタで止めて毛先を空に向ける髪型はなんだかパイナップルの葉を思わせて、司は少し笑えた。

髪の主であるサワハはドアの陰から目だけをのぞかせて、水平にきよるきよると移動させて小野と司を交互に見る。そして何事か自己完结したのか。一言を残して、すくっとゆっくり消えていった。フェードアウト、と小野がつぶやいたのが聞こえた。

「……おう、わたし邪魔だったかな？ あい、お二人サンゴゆっくり」

「ゆっくりじゃないだろサワハ。良からぬことをしてたわけでも

あるまいに、なぜ俺たちが引かなくちゃならないんだ。……いやむしろマルドメと鉞姫まろひめの方が良からぬことをしてたかもしれんか。空気が読めなくて悪かったな、帰るわ」

「ホント今すぐ帰ってください。あとそのあだ名やめてください」

言い合いをしながら、サワハと廉太郎が部屋に入ってきた。彼女の手首、足首の怪我はもうすっかり癒えたようで、ばたばたとぶ室の中を駆け回る元気があった。廉太郎は席につくとどこからか大福を取り出して皿に並べ、時折「埃が立つ」とサワハに注意を飛ばす。そこに、「暑くなってきたから」という理由で最近はずジャージの中に着込まなくなった口論義も現れ、なにやら呆れたような笑みを浮かべた。

「なあに？ 結局みんな集まってるの？」

「おお会長も来たのか。人数分大福を用意しておいてよかったな。」

おいサワハ、一応お前の快気祝いだ、なんか言っとけ」

「ん？ エート……ご迷惑たくさんいっぱいおかけしましたネ。今は元気ヨ、心配ないない」

「ほほうそれは重畳だ。僕の方も噛まれたケガは癒えたのでね、ようやく左手に包帯などというありがちなキャラ付けから逃れられたよ」

ふつといつの間にか廉太郎の背後に立ちつくしていた踊場は、大福をもぐもぐとほおばりながら廉太郎の頭の上で頬杖をついた。うつとしい、とはたき落とされるが大福はすでに口の中で、五個並べてあった大福は四個に。

「……おい踊場あ、テメエなに突然現れて大福食ってやがる」「きみは人数分あると言ったじゃないか」「テメエの分を俺が頭数に入れていると思ったのか？」「いや自分の分を数えていなかったのかと

思ったのでね」「どこまで馬鹿だと思ってるんだ」「馬鹿だと思ってるわけじゃない、馬鹿にしてるだけだよ」

口クでもない上にしようもない、上級生だろうかと疑いたくなるような会話を繰り返す二人を見て司はなだめに入るかそれとも放置して楽しむか判断をしかねる。小野は静かに騒ぎを見ているだけで、止めるも放置もなく無視の意向を示している。口論義とサワハは茶々を入れていじりまわし、やがて二人がそれに憤慨して。

騒々しくも？普通？の学校生活に戻ってきたのだなあと、司はひそかに笑い。

「まあ今は、それで」

つぶやいて、二人をなだめに入ることにした。

犬神使い編：終

七題目 「拳の方がおしゃべりだ」と廉太郎が断ずる（後書き）

というわけでもまだこの話はしばらく続くので次は俗信編です。ネタが尽きるまではまだ余裕がある……はず。あと半年くらいは書けるはず。

しかし長かった。どうも戦闘シーンが入るとそこに辿りつくまででも嬉々として文字数増やしてしまうので困りものです。前作は剣でばったばったする奴だったので今回は肉弾戦ばかり取り入れてみました。ところがワンピース姿でも蹴り技使うヒロインに比べて、主人公ポケットに常時小刀という中二病。もちろん凄まじいナイフ使いだっただか暗殺一族出身だったとかそんな設定はないです。ないっतरらない。突然九字を切りだすとかもない。……あれ、これ主人公？

俗信編からはゴールデンウィークです。なにやら投稿日時と作中時間がかぶりつつありますが、問題はありません。時事ネタはないはず。だと思いたい。どんだけ自分に自信ないんだ私。

そしてキャラ欄。

もはや私が設定忘れないためのものになりつつあるのは気のせい。たぶん、きつと、おそらく。

Name: 「俺の名は、あg『廉太郎以外に名乗るべき名はないよ』
by 踊場

Hobby: 掃除・倉内流の鍛錬・和菓子作り

Weakness: グミの実

Specialty: 中指が第一関節だけ曲げられる

Skill: ? 回天竺? オートジャイロじつは今回の話に登場済み。この技名と、

作中描写の中でどこかおかしい点に気づくと能力がわかる、かもし
れない。

Notes: 会員の能力名は全てこいつが名付けている。

八題目 「ペーコンレタスバーガーひとつ」とサワハが頼んで（前書き）

今回は息抜き。日常です。

八題目 「ペーコンレタスバーガーひとつ」とサワハが頼んで

「ゴールデンウィークはなんか予定あんのかー？」

四月某日天候は雨、学食にて。司の正面に腰かけた、学ランの中に着込む派手な柄のシャツと飾りじゃなく人工でもない天然パーマが特徴的な男である前納^{まえの}は、気味の悪い亀ゼリーの混入したラーメンをすすりつつ問うた。司はちらと彼を見やり、かけそばをすする際に邪魔な前髪をかきあげた手を止めた。

「そうだね、途中に平日あるけどサボって十連休にしようかと思ってる」

「いやおれそういう予定聞いたつもりじゃなかったぞ。どっか出かけたとか、そういう予定」

「今のところはないけど……あ、ちょっと待て」

そばをすすり、斜め右上の虚空を見上げつつぼんやりと思い返す。はたして、ゴールデンウィークにはきてれつ研の活動はあっただろうか、と。

「……なにか予定があったか」

司の隣に座る、スポーツ刈りで制服をきっちり身にまとう、いかり肩の大柄な男がつぶやく。ちなみに大柄だが太っているわけではないその身体は、彼曰く柔道で身に付けたものらしい。

そんな、口調もぶつきらぼうで粗野な印象だがその実まじめな男、蓮向^{はすみかい}はチャーハンをかつこんでいたレンジの動きを止め、もっさもっさと口を動かしながらじっと司を見た。

「うっん。あるといえばあるかもしれないや」

「……そうか。私も柔道部の、短期合宿などが予定されている」

「なーんだよー。蓮向はともかくとして、司も予定あんのかよー。」

映画でも観に行こっかと計画練ってたってーのに……期間限定で『ロンリーなおれ@ゴールデンウィーク』ってな感じにメルアド変えちまうぞ」

「変えたら登録しないよ」「私もだ」「おまえらいつ氷点通り過ぎたんだよ……超つめたい」

ふてくされる前納は自棄になったようにがふがふとラーメンをすすった。傍から見ていただけでもグロテスクなそのラーメンをすする根性には司も感嘆しなくてもなかつたが、正面にその光景を据えられて、正直吐き気がしているのも事実だった。分量で比較するなら圧倒的に文句過多だ。

「……んぐんぐ。しっかしさ、実際のところ一日くらい空いてっだろ。映画観てメシ食ってテキストに遊んでくぐらいはさ」

「ぜんぶ前納のおごりって言うなら考えなくもないけど」

不敵に笑って言う司に、前納は苦笑いを浮かべて大仰に肩をすくめた。

「うへ、おれ貢ぐ君にはなれないよ。っつーかおまえどこの性悪女だ、ぜんぶおごりはないわ」「……おごってくれるのか?」「なんでもデメエみたいな野郎におごんなきゃいけないんだよ!」

半ば恒例と化してきた感じも否めない蓮向とのやりとりの後に、前納はまた司に向き直った。

「そーいや、結局きてれっ研に残ったんだなー、おまえ」

「他にやることなかったしね」

「おれと共に笑点を目指すつもりはなかったん？」

「あいにくと発想力に自信ないよ。うまいこと言えるほど語彙も話題もないし」

「……別段話題が少ないことを気にせずともよからう。その文ひとつを深く掘り下げればいい。ところで司、口を使わず肉體言語、柔の道ひんぎを目指すつもりはないか」

お茶をすすりつつ横目で司を見た蓮向はそう言ってみたが、司の反応はかんばしくない。それを見た正面の前納に机の下で脛でも蹴られたのか、蓮向は無表情のまま軽く後ろに跳ねた。

「おめーは何をいまさら勧誘してんだ。でもそうだな、ひとつを深く知ってれば長く語れるってことは確かだぜ。蓮向なんておれと話題が合うのは日曜朝枠の番組についてただだぜー？ 話題、乏しいつたらないぞ。それに、ひとつに集中しないで『そういうええば』ええば』つってあっちこっちに話題跳ぶのも考えもんだろ」

「……そういうのは女子に多いと聞いた気もするが」

「なにっ？ いやいや、おいおい、蓮向よー、そんなん言ったらおれ女子を敵に回しちゃうだろー。司にも言っとくけど、おれフェミニストだからな。誤解なきようよろしく頼む」

「え、マゾヒスト？」

「いやそこまで下手には出らんねって」

露骨な言い間違いに気を悪くした様子もなく、前納は笑った。そこで昼休み終了五分前のチャイムが鳴り、学食からの人気が薄くなっていく。遠ざかる足音に遅れないように、司たちもそれぞれの食器をカウンターの向こうに片づけて速足で三階に上がる。

「やべー、六限の英語おれから当てられっかも。次の放課の間に司、

和訳見してくれ」

「放課つて、ああ授業合間の休み時間のことね……べつにいいけど、また？」

「漢字と計算の勉強してたらやる時間なくなっちゃったんだ」

「……おまえ、また麻雀なぞをやっていたのか」

「なんで速攻バレんだよ。しょーがないだろー、先輩に誘われつと断れないんだよ。亡国遊戯とまで呼ばれたゲームだぜ、やめられない止まらない」

よくわからない釈明をしつつ前納は司の前を駆け上がり、彼を先頭に三人が教室になだれ込むと既に教卓には古典担当の瀬古が立っていた。彼女は時計を見上げて、ぎりぎりだよと三人に声をかけた。「亡国遊戯について語っていたらつい」とどうでもいい情報をつぶやいた前納に瀬古は「ああ、ブルース・リー？」などととんちんかんな答えを返した。

#

六限が終わり、雨天のために薄暗いぶ室に顔を出すと、入口からもっとも近い（すなわち下座）の司の正面を定位置とする少女が机の上でせつせと何かを作っていた。

肩に届くくらいの、短めの黒髪はつやかに。その下にある整った顔立ちの中、半分閉じたように眠たげだが大きな双眸そつぱうは、十二分な目力を感じさせた。また白磁のように白い肌も表情と合わせて弱しげな印象を映すが、病的ゆえのきわどく危うい美しさも含んでいる。

服装はセーラー服ではなく男子のカッターシャツを着てその上からカーディガンを羽織り、プリーツスカートは丈が長めで膝裏が見え隠れする程度。すらりとした脚を覆うのも灰色のソックス……と、地味めという言葉でコーティングされ色気もへったくれもないのだ

が……つい先日まで「セーラー服の中にジャージを着こむ」という
気のふれたような服装を見慣れていたためか、これくらいシンプルな
な方が司には好ましかった。

「……それによく見ると、顔立ちはきれいだしね」

「わ！ い、いたのですか司さん」

「いたよさつきから。何つくってんの？」

集中していたのかドアが開く音に気付いていなかったらしい少女、
小野香魚おのあゆかは机の上に置いていた白い布を、司の方に広げてみせた。

「照る照る坊主です。本日もですがゴールデンウィーク中も、五月
二日から雨降りらしいので」

「そうなんだ。行楽日和になるといいね」

「ですね。けれど雨降りもそれはそれで風流というか、楽しもうと
思えば楽しめるのではないですか？」

「んん、どしゃぶりでなければ、だけど。屋内施設とかは天気関係
ないし雨の方が客入りいいのかな？ 屋内といえば、ボーリングつ
て天気か景気が悪いと流行るって噂があったような」

「ピンを弾き飛ばすことでストレス解消にはお手頃で、湿度が高く
て汗をかきたくない時でもできるスポーツだからでしょう」

「一理ありそう」

戸棚から取り出した温泉まんじゅうを机の上で広げる司に感じて、
小野もお茶の準備をする。何も言わずとも手順ができてくることで、
二人きりにもだいぶ慣れてきたと感じられて。

無理に話題を探すこともないか、と前納たちと話したことはあてに
ならないと結論付ける司。

「でも晴れてないときできないこととかあったっけ？」

「ゴールドデンウィーク中も個人的に噂や場所など、なにか探して歩こうかと。特にきてれつ研としての活動は、ないようなので」

「しらみつぶしに?」

「ええ」

小野は自身の持つ、異能察知の微能力でなにか変わった者、場所がないか探しまわるつもりなのだろう。だがそれはしらみつぶし、というよりも藁の山で針一本を見つける、の方が比喻としては正鵠を射ている。

「そっか。ならこつちも個人として暇を持て余してるので、どうせだからついてこっかな」

「構いませんが……大丈夫ですか?」

「なにが?」

「いえ、その。実を言いますとわたし、異能察知の微能力のために危険域にもすんなり踏み込んでしまう性質を持っているのです。能力者を発見できるというのは、普通は異変として察知して無意識に遠ざけようとするものにも不用意に近付いてしまう、ということの裏返しでもあるらしくて」

「なるほど」

口論義から前に聞いた説明ではあったが、お茶をすすりつつ司は初めて耳にしたような態度を取った。しかし、それがなぜ司に大丈夫かと問う理由になるのかは皆目見当がつかない。小野は司の要領を得ない表情に気付いてか、手元で照る照る坊主製作を再開しながら続けた。

「ゆえに、わたしはただふらふらと歩くだけでも危険に巻き込まれることが多いのですよ。妙なところに迷い込んで妙な連中に追われたり、しばらく霊障に悩まされるようになったり、喧嘩沙汰に巻き

込まれたり、怪しい男の人たちに連れてかれそうになったり、電車内で痴漢にあつたり、背後で突然ケータイのカメラのシャッター音がしたり」

「後半が少し気になるんだけど」

それ単に小野の容姿が整ってるからじゃないの、と言ったが、反応は淡泊で息を吐きつつ首を小さく横に振るだけだった。

「それほどではないはずですよ」「あ、完全否定じゃないんだ……」

もっと恥じらったりするなど面白い反応を期待していただけに、司は少しがっかりする。

「なににせよわたしと行動するとロクな目に遭いませぬよ。現に、会長とサワハさんは一度ずつ被害に遭っています」

「なんか二人ともちよいガード甘めだもんね」

「だからお気を付けください。司さんも被害に遭われるかもしれませぬよ」

「……ないないそれはない。どこのモノ好きの話なの、隣にもっといい子いるのにわざわざこっち来るとか」

「そうですね？ 司さんなら喜んで突貫する人もいそうに思われますよ。……まあそういうわけなので、あまり二人で行動するというのはいただけないかと」

何気なく、思ったままに口にしたためかひやりとした言葉だった。きっぱりとした物言いに閉口する司は、廉太郎から耳にした小野についての話を思い返しながらばそぼそつぶやき、目を逸らした。

「それなら、小野自身は危険に遭ったらどうするんだよ」

「五、六発も蹴りを入れれば、武術で二段以上を取得している人間

が相手でもないかぎり倒せます。でもそういう荒事は、司さんには少々難しいでしょう？」

まさかぬ
「鍼姫に言われたらうなずかざるを得ないよ」

「……それ次言ったら首刈りますよ」

とたんに表情を曇らせ、机の下で司の脛を蹴る。どうやら廉太郎の語ったあだ名は小野本人としては相当気に入らないらしい。不用意に口にしないように慎んだ方がいいと判じて、司は口を両手で押えた。

ちなみに鍼姫、というのは廉太郎と同じ道場に通っていた頃の小野の通り名で、文字通り鍼がごとく一撃必殺の蹴り技を誇った彼女を恐れた他の門下生が付けたものらしい。と、最近廉太郎に聞いていた。

急所を容赦なく的確に蹴り抜く彼女の名？小野？を？斧？ともじり、さらに一ひねりして本人にバレないよう暗号名にすべく？鍼？に落ち着いたのだという。蹴り技に限定すれば、体格もリーチも差がある廉太郎とさえ互角に渡り合えたそうだ。

「まったく。変なあだ名をつけてくれたものです。だからわたしもあの人が髪型とメガネを変えて中学・高校デビューしようとした際に、あとを追いかけて？廉太郎？のあだ名を普及させることで復讐したのでですよ」

「結局あの人の本名なんなの？」

「友達から親どころか親類縁者、ハトコにまで廉太郎と呼ばれるそうですから。本名などもはや無きに等しいのだと思います」

「ちよつと哀れだね」

名前がないのは、ねえ。と一人なにやらうなずく。司のうなずきの意味が解らない小野は首をかしげて「先にやったのは向こうです、自業自得です」とうんざりした語調で言った。曖昧に笑いながら司

は小野が作り続けていた照る照る坊主に目をやる。

現在小野の手の中で顔を描かれていた坊主は、眉根がわずかに角度をつけられ怒った顔になっていた。

「じゃ、話を戻して。実際、多少危険って言っても霊障とかの場合にはこつちにとつて専門分野だし。足手まといになるほどじゃないと思うよ。そもそも、霊体には蹴り、効かないでしょ」

「効かないのでしょうか、見えませんから無視し続けます。ラップ音もポルターガイストも真っ向から否定し続けて生活してみましたところ、一カ月も経てばほとんど出なくなりましたよ」

「度胸ありすぎだよ」

「生きている人の方がこわいでしょう。先日の犬神使いしかり」

司にとつてはこわいというよりうざい、なのだが。その辺りの見解の相違は見えている世界の違いに起因すると思ひ、長々説明するのもいやがられるだろうと考えた司は黙っておいた。

そうしてふつと二人ともしゃべらない空白の時間ができたところに、計ったかのように入室してくる者がいた。

「よお。つてなんだ、まだ会長は来てないのか」

一八〇近く上背のある男がドアの隙間から顔を出している。小野がさつきまでの話題を思い出したのか、いやそうな顔をして犬歯を見せた。

一世代ほどさかのぼった古めかしい顔立ちに楕円形フレームの銀縁眼鏡をかけ、短い黒髪はワックスで整えられている。長袖のカッターシャツの上にグレーのセーターを合わせ、ボトムスは腰穿きなどをすることもなく長い脚を誇示し、男はナリだけならば真面目な優等生に思われた。

「まだ来てないよ、廉太郎さん」

「……つまらん。せつかく蓬まんじゅうを持ってきたのに」

だがその男、廉太郎の実態は素行不良で生徒指導部からマークされるほど、奇行の目立つ変人である。昨日も登校の際にローラーズルーゴーゴーに乗ってくるという愚行に及んだためにペナルティを課されたはずだった。司はまさかと思いつつ伏し目がちに廉太郎をにらみ、問う。

「昨日の一件についての反省文は提出できたの？」

言葉の終わりまでに廉太郎は口をへの字に曲げてうつむき、ああ、と肯定にとれる返事をした。司が自分の思考が杞憂に終わったと安心しようとした瞬間、

「ああ。あのあと昼休みから五、六限をサボって茶道部の集う礼法室の畳にて惰眠を貪ったのちに家庭科室で料理部と歓談しながら蓬まんじゅうを作っていたせいで書く量が倍に増えた」

気にし無さ過ぎで、無神経な発言が飛び出したのだった。すかさず小野が照る照る坊主を投げつけ、廉太郎が片手で跳ね返す。坊主頭はちやぶんと司の湯呑みに着水し、机に水滴を散らした。

あー、あー、とうめきながらハンカチで拭こうとする司を尻目に、二人は言い合いを始める。一所懸命に作ったのに、小野は照る照る坊主を完全に無視していた。気のせいか表情を描いたインクがにじみ、泣いてるように見えた。

「あの、一人で自爆するのは構いませんが、きてれつ研まで活動停止になりかねないバカなまねはよしてくださいませんか」

「仕方ないだろう。畳が新しかったから寝転がりたくなっただんだ。」

そんで起きたら小腹がすいてて甘いものが欲しくなっただ」

「欲望おもむきすぎでおもむくまま動きすぎです！」

「欲求を押さえつけたらなにかいいことでもあるのか」

「まず社会に顔向けできるようになりますよ。理性くらいしゃんとしてください。だいたいあなた倉内流で精神鍛錬などは行っていないのですか」

「やってたが途中で師匠が『お前向いてないわ、ここまで性根叩き直せたい僕もう満足だわ』てなことを言っただけで放棄された。だから俺これ以上先の技は教えてもらえないのだけ？ マジ不満足だわ。おかげで欲求不満だわ。俺もつと強くなりたいのに」

「もうこの近辺であなたの相手が務まる人いないでしょうに。それ以上強くなつてどうすると」

「敗北を知りたい。が、戦いに赴く時に上昇志向を失って退化し屑になつた俺と戦わせるのでは相手に申し訳ない。だから一日前よりも十時間前よりも百分前よりも千秒前よりも。常に俺は自分を磨いて前の自分よりも強くし続けにやなんのだ。相手への礼儀に則つて」

「……………」

思ったよりもまとまな答えが返ってきたせいか小野が言い負かされた。論点はどこを旅しているの、と思いつつ司はハンカチを絞って滴らせたお茶を湯呑みに戻し、さりげなく廉太郎の定位置に押しやってから口を開いた。

「なんでもいいけど、回り回って会長に迷惑かかるだろうと思うことはやめといた方がいいんじゃない」

「そうだな。今度から気をつけよう」

あっさり結論を出すと、廉太郎はようやくドアの位置から動いて小野の隣に腰を下ろした。小野は言い足りない様子で廉太郎をにら

んでいたが、何も気づかない様子でお茶を飲み干し怪訝な顔をした彼を見て少しうっぷんが晴れたのか、そっぽを向いて司と自分のお茶を注いだ。

「……脳みそ筋肉の人とずる賢い人には、善悪じゃなくて損得で話をした方がいいよ」

新しい湯呑みに入った緑茶を受け取り司がぼそぼそとささやくと、小野は納得しかねるのか口を真一文字に結んで鼻を鳴らした。その音を遮るように、机の上にタッパーが置かれた。

「さて、お前ら蓬まんじゅう食つとけ。例によって踊場の分はないが、あの野郎は放つとくと俺の分に手を出すからな。いないうちにたいらげようぜ」

わははと笑って自分の分をひとくちで口に納める廉太郎。小野も怒り続けるわけにもいかず、溜め息を漏らしてからタッパーに手を伸ばす。司もひよいと口に含んで、しっかりと味がさらりとほどけて舌の上に余韻を残す、餡子独特の甘みを味わった。香りがほのかに後味を引き締めてくれて、よくできていることに感心した。

三人がお茶をすすり、ほうと充足感に満ちた息を漏らすと、廉太郎は濡れて滲んだ照る照る坊主に目を留め、指先でつまんで持ち上げた。

「ところで小野、お前なんで照る照る坊主なんざ作ってたんだ」
「ゴールデンウィークの間もぶらつく予定なので。雨降りには困るからですよ」

「ほう。だが予報では二日以降雨がやむ日はないぞ。それに雨といえば、最近妙な噂があった」

「妙な噂？」

「？フォッグマン？のことがい？」

突然声がしたと思えば、大きな背もたれのついた会長専用の椅子がぐるりと回転して、さわやかな笑みを浮かべる少年が室内に出現した。一六五センチ前後の司よりも少し低いくらいの身長、くせのない柔らかそうな髪は襟足を少し伸ばしていて、小柄なことと相まって性別の判断を誤らせてしまいそうな外見となっている。

学ランを第一ボタンだけ開けた制服姿はまだ中学生と言っても通りそうなものだが、その実彼は高校三年でこの場においては一番の年長者である。

「……あれ、ドア開いた音しましたっけ」

「忍者か teme は」

小野と廉太郎が同時に言うのと、肘かけについた左腕で頬杖をつき、右手でつかんだ蓬まんじゅうをほおぼる少年、おどりは踊場は面白そうに三人を見やった。

「あ、つか teme また俺の作品食いやがったな！ どうすんだ、会長の分は外せないからサワハだけ無しってことになるぞ。この悪人め、サワハに泣かれて会長に怒られる！」

「いやいやよくご覧よ。僕はたしかに蓬まんじゅうをいただいているが、タッパーにはまだ二つ残っているはずだよ」

「なにふざけたことぬかして……あ、ホントだ」

横目で見て確認して二度見した廉太郎は首をかしげた。踊場はますます面白そうに笑みを強め、蓬まんじゅうを腹に納めた。

「ふう、ごちそうさま」

「なぜだ……あーそうか。お前自分の分を別に持ってきてただ

けか。ははあ、ははーん。なるほどな！ ようやく俺がお前の分は作らないってことを学習したようだな……わはははは！ いやはや安心した、俺はもしかしてお前には学習能力ってやつが無いのではないかとひそかに憐れんでいたのだぜ。だが可哀想なお前も、やっ自分の身の程ってやつをわきまえられるようになったわけだ。めでたいことだな。実にめでたい！」

後半にいくにつれ饒舌になり舌がよくまわる。ところが廉太郎にぼろくそに貶されているにもかかわらず踊場は涼しい顔をしていて、蛙の面に水というか、次第に廉太郎も様子がおかしいと気付き始めた。すると頃合いだと思っただのか、踊場は立ち上がって小野の背後にある屑かごに近付くと、振り返って己を見る小野と廉太郎にくずかごを振ってみせた。

「たしかにこの場に蓬まんじゅうは五個だったよ。で、僕が持ってきたものは何かという。ここに捨ててあるものがヒントになるのではないのかな」

五月五日にはまだ早いだけだね、と注釈を添える踊場の視線の先にあつたのは、柏の葉だった。がくりと廉太郎は脱力した。

「……なんだ拍子ぬけだな。お前が柏餅食ってたってだけのことがよ」

「いや、だから僕はごちそうさまと言っただろう？ 一応作り手であるきみに感謝の意をこめて言葉を送ったのさ。つまり僕は、たしかに蓬まんじゅうをいただいたのだよ」

「わけわからん」

思考放棄して司の方向に引き直り、同意を求めるかのように両手を広げた。だが司はなんとなく踊場の真意を推察できていたので、お

ずおすと、確認を求めるべく踊場に声をかけた。

「ひよつとして。廉太郎さんが食べちゃった方が、柏餅だったりして？」

「大正解だよ司君」

笑いを堪え切れない様子でくそをそつと下ろした踊場は、片手で口元を押えながら会長椅子へ戻り、ぐるりと回って司の背後へ来た。廉太郎はまだわからないようで、その隣の小野は窓の外を見て、なにか感づいたように肩をすくめた。

「わけわからん。俺はたしかに緑色のまんじゅうを食ったぞ」

「あははは。だからそれは緑というだけだろう？　ひとくちで飲み下してロクに味も確かめていなかったのではないかな？　……さあ最後のヒントをあげるよ廉太郎。よく考えてごらん」

引っ張るだけ引っ張って、溜めるだけ溜めて、踊場はにたーっと笑いながら言った。もはや笑みにはさわやかさなど欠片もなかった。

「最近、雨[、]続き[、]で[、]じ[、]め[、]じ[、]め[、]して[、]い[、]ない[、]か[、]い？」

「……はあ？」という形をとった口が、きっかり三秒後に「はああ！？」に変わった。席を立った廉太郎より先にドアを開けて外に逃げた踊場は、笑い声をたなびかせてどこかへと走り去った。「待てクソ野郎カビまんじゅう食わせたのかテメエ！」と唸り声をあげた廉太郎もばたーんとドアを蹴り開けて走り去り、残された小野と司は、ドアがゆっくりと閉まるのを見てから、またお茶を淹れなおした。

「……そうそうカビるわけじゃないじゃんね、今まだギリギリ四月なの

に」

「踊場さんも踊場さんです。からかうためだけに柏餅を用意して、着色まで済ませて入れ替えるとは」

「どんだけ仲良しなのあの二人」

「一週回った犬猿の仲ですよ」

「なにになんの話？」「ナニがなになの？」

ドアについた靴の跡を見つつ入ってきた二人の少女、口論義とサワハは、遠い目をする二人に声をかけた。小野と司は顔を見合わせ、苦笑いし、どちらともなく「友情の話」と答えた。

それに対し何を思ったか、サワハは「ベーコンレタス？」とつぶやいた。

八題目 「ペーコンレタスバーガーひとつ」とサワハが頼んで（後書き）

サブタイトルの深読み禁止。

次回より、俗信や都市伝説をからめた物語の幕開け。

テルテル坊主のものは紙の箒をもった娘の人形を吊るす中国の「掃^{サオ}晴娘^{チンニャン}」。

日本ではお坊さんを指す語「聖^{ひじり}」から「日知り」ともじってあの坊主の形になったそう。

九題目 「ヌアペンボーラン」とサワハが言って

「最近この辺で？フォッグマン？とかというのが話題になってるらしいのよ」

「おう、こわいよネそれ。蛙男」

「サワハさんフォッグじゃなくフォッグです」

蓬まんじゅうをかじりながら歩く口論義とサワハに追従して進む小野と司は、普段駅と学校を行き来する際には使わない道を歩いていた。夕暮れ時、ぶ室を閉める時間になっても廉太郎と踊場は戻ってこなかったため、会議の場所を移すべくサワハの自宅兼マッサージ屋に行く途中なのである。

「フォッグ、つまり霧男、ですよね」

「ええ。こないだの犬神使いの一件は、表向きただの野良犬による事件だと思われてたみたいだから……世間ではそういうのよりセンセーショナルなもうひとつの事件が注目されてて、その首謀者と目される男のことをネット上では？フォッグマン？と呼んでるそうなのよ」

小野からの問いを受けて答え、まんじゅうを嚙下する口論義。ゆるくウエーブした肩まで届く薄茶色の髪をかきあげると、ケータイを取り出してきてれつ研の情報保管庫であるサイト『奇怪事件展覧列挙集』を覗き始めた。

司とさして変わらない背丈の彼女は、つい先日まではセーラー服の中にジャージを着こむといふかなり風変りな格好をしていたのだが、だいぶ温かくなってきたからか最近は少し違う格好になった。

セーラー服は放棄して、男子のカッターシャツの上から、ジャー

ジを着ている。下は丈の短いプリーツスカートに紺色のタイツだ。……ジャージさえなんとかすれば、艶やかな表情と流し目の似合う美人なのだが。そう思いつつ、司は春の風に翻るスカートの裾に視線を落とした。しかし振り返る気配がしたので、すぐに顔を上げて口論義と目を合わせる。

「で、サワハは知ってたみたいんだけど。二人はこの名前、ネットとかで見ただ？」

問いかけに小野は首を縦に振り、司は首をすくめた。二人の反応を見つつ口論義がにこにこ嬉しそうに笑みをこぼすのは、まんじゅうの味に感じ入っているのか自分が求める不可解な事件に遭遇したためか。両方だろう、との予測は付き合いの浅い司でもたった。

「ウワサ、方々で流れてるね。出るの雨の日、こーみよーな話術で人攫い。捕また人みんな、変な体験させられるのコト、って」

奇妙なカタコトで発言したのは口論義の隣、司の前を歩く彼女、サワハ。

長い黒髪のうち、後ろ髪は全て束ねて毛先を上に向けバレッタで留め、サイドのもみあげの辺りは短く三つ編みにしているという髪形。肌は小麦色で東南アジア系のエスニックな雰囲気を漂わせており、大きな鳶色の瞳の下、表情豊かな顔は少し赤みがさして血色がよい。

そして着ているセーラー服の胸当ての辺りが緩い、というか胸当てをしていない、というなかなか際どい格好が目立つ少女だった。

「……ごめん、まだ付き合い浅いから、すつと理解できないや。だれか翻訳を」

「がーん。マルドメくん、サワハと間に隔壁を建築中？ ひどい。」

寂しいネ、受け入れられないのサワハは孤独」

「ごめん今のも理解に苦しむ」

「他者理解の努力を惜しんではいけません。出来る限り自分で解読してあげてください」

「……小野ちゃん、翻訳から解読に変わってる。読み方不明の古代文字じゃないんだからそこまで難易度高くないわよ」

と言いつつ、口論義がサワハの言葉を訳すように説明をはじめた。東区連続誘拐監禁事件。この街の近辺で起きていた事件は、当初そのように味もそつけもなく、ゆえに事件の印象も視聴者に残らないという極めて地味な、それでいて微妙に夕子の悪さを感じさせる名前を与えられていた。

だがその事件の首謀者と目される男 『彼』に？フォッグマン？との異称が刻まれた時から、今までと一変して事件は誰もが知るものとなった。名前のインパクトから人々が関心を持つようになり、多数の人々によりその事件の異様さが語られるようになったからだ。

「でもまずその呼称の由来から説明するわね。霧男ってのは別に、お天気の良い日に現れるからってだけじゃないの。ロンドンじゃあるまいし、日本の平地じゃ霧なんてあんま出ないしね。ではなぜレインマンと呼ばれなかったかという……帰ってきた被害者の語るその男の姿に対する証言が、ことごとく違ったからよ」

現時点までに起こった誘拐監禁事件は五件で、そのどれもで、ある。犯人とされているのはある時は小太りの男、ある時は背高のつぼの男、ある時は中年の男、と性別以外の共通項が見当たらない男どもであり、だというのに事件内容は導入部である被害者への誘い文句を除き、全て細かいところまでそっくり同じだというのだ。

「つまり男の容姿が霧のごとく変幻自在、ってこと？」

「そゆことヨ。たぶん、犯行をパクって猿真似るの人がたくさんなのカモ」

「それは無いのではないでしょうか？ 微に入り細を穿つほど丁寧
に再現するには、それこそ最初の犯人から犯行手順を聴きださなければなら
ないのですから。わたしとしてはたくさんのフォッグマンがいて、彼ら
がグループで犯行に及んでいるのだと推測しています」「あたしも小野
ちゃんに同意。で、肝心の彼らが何を行っているか」と

誘拐監禁、である。それも連続している。

フォッグマンは雨天の日に現れ、言葉巧みに五人の女性を誘いだして狭い場所へ案内し、そこで数時間にわたり拘束して解放する、という意図のよくわからない犯行を繰り返していた。

だが連続して事件が起これば周囲も警戒し、なんらかの処置を取るものだ。それら対策をくぐりぬけて達成されていく犯罪は、実害はさほどはなくても『自分たちの領域をいつの間にか侵されている』という気持ちの悪さがべったりと残る。薄気味悪さを感じつつも、司は疑問に思った点を口論義に質問した。

「ていうか、ふつう事件内容が同じならそうそうみんな引つかからないんじゃないの？ 警戒するだろうし」

「司くん、知らなかったくせによく言うわね……それに、ことがそう簡単に防げるなら、振り込め詐欺はとつくになくなってるわよ。

逆に言えばフォッグマンの怖いところは振り込め詐欺と同じで、巧みな話術で警戒心を解き、被害者の心理を誘導しちゃうってとこ」

「頭イイの人たち、集まてるのカナ？」

「そんな気がするよね」

「ただ目的があまりにもつかめないのですよ。そもそも事件性が薄いものでして、拘束されている、と被害者が気付くのはフォッグマンによって案内されてのち、かなり時間が経ってから。しかもその

気になればいつでも出られる程度の、監禁よりも軟禁と形容すべき状態だったそうです」

口論義から引き継いで、小野が説明を続けた。

「一件目はネットカフェの個室シアター。二件目は市内のあるアパートの一室。三件目がカラオケ、四件目でホテル、五件目では、まあ、歓楽街のサービス施設と、いいですか」

「ごによごによと語尾が縮こまっていったが、司にもだいたいこのことを言おうとしているかはわかった。すかさず司はフォローをいれた。

「言いにくいなら無理しなくても」

「へ？ マッサージ店ちがったの？ それとも……小野ちゃん、お仕事でサワハたちのしてるは言いにくいものだな……」

「あ、いえ、その。サワハさん、このマッサージ店というのはですね」

「はいはいあんま掘り下げない。サワハ、あんたもホントは半分くらい知ってて言ったでしょ」

「バレた？」

わりと普通のイントネーションでつぶやき、ふつと笑ってサワハは髪をかきあげた。小野はバツの悪そうな顔をして無意識なのか司の方を向いて、慌てて目を逸らした。司に話の続きをうながされ、小野は咳払いで催促に応えた。

「とにかく、少人数で閉じこもるタイプの個室で、全ての事件が起こってたと」

「……ええ。加えて言うのなら被害に遭ったのは若年層の女性ばかり

りで、警戒はますます強まっているとのこと。その甲斐あつてか、この五件までは三日と間をおかず連続して行われてきたそうですが、ここ一週間は何も音沙汰なしです」

「軟禁の状態は、どんなだったの？」

「ドアおよび鍵が開かないように接着されていたようですね。ただ、それ以外は何も。外部との連絡手段も断たれておらず、被害者が身体の自由を奪われることもなく。しばらくフォッグマンと会話して気が付いたらいなくなっていて、どうしたものかとしばし時間を潰したあとで軟禁状態に気付くというものだそうです」

「なるほど、さっぱりわからない。いま聞いた情報だけだと、『意味不明な状況に焦る女の子を見るのが好き』っていう性癖の持ち主だとは思えないや」

「そんな性癖こそ意味不明ですが……世の中は広いですからね。司さんもお気を付けください」

「だからこつちには来ないって。たぶん」

ちょうど話が途切れたところで前を歩いていた口論義とサワハが足を止め、あとを追っていた小野と司も立ち止まる。司が前を覗きこんで見ると、通り沿いのバスの停留所には四、五人ほど並ぶ影があった。後ろを見れば腕時計を見てから走ってくる影もあり、間もなくバスが来るのだろうと考えられる。

口論義は開いていたケータイの展覧列挙集を熱心にスクロールさせており、横から小野もちらちらとそれを覗いていた。手持無沙汰の司は行き先にある停留所を数え、サワハに質問した。

「サワハさんの家までバスでどれくらい？」

「十五分くらいだネ。停留所八つ目。そーそ、マルドメくん。今日はずち、トムヤムクンとホイライヌンとガイヤーンだヨ。食べてく？」

ぐつと親指を立てて自分の後ろを指すポーズをとって、サワハが言った。司が腕時計を確認すると、たしかに時刻は夕食にほどよい頃合いにさしかかっていた。

「そんな、今日はじめて行くのに、ごちそうになっただけなの？」

「食べてくはマルドメくんだけちがうよ。会長サンも小野ちゃんもだからネ、一人増えてもいいの別に」

「ならお言葉に甘えさせてもらうけど。ところでホイライなんかと、ガイヤー、とか言うのは、一体なに？」

きびすを返したサワハはあっぱはと笑い声をあげて、前方に見えてきたバスを指差して口論義の袖を引っ張りつつ、司に答えた。

「ホイライヌンがコウモリでガイヤーンがザリガニよ」「え」「ウソ言わないの」

小野と一緒にケータイを見ていた口論義がサワハの胸に突っ込みをいれた。

ジョークとはいえおそろしいメニュー発表があつたからか、司は微妙に周囲の視線が自分たちに集まっているのを感じた。が、しかし様子がおかしい。あきらかに眉をひそめている者も見受けられて、ひそひそ声が聞こえてきた。その中には、「きてれつ研の……」という囁きも混じる。

「？」

「大丈夫ですよ、司さんのことを言っているわけではありませんから」

ちよいちよいとつついて自分に注意を向けさせる小野がそう言った。だとしてもきてれつ研と聞こえた以上は、自分に無関係と思え

ないと食い下がってみる司。すると小野は財布からバスカードを取り出しつつ、「冬にいろいろあったのですよ」と答えにならない解答を出した。

「……そういえばこの二人と平日、ぶ室以外の場所で一緒にいるのって初めてだけど……」

「わたしは冬の時点ではまだ中学生だったのであまり認識されませんでした。お二人は在校生でしたので。先代会長の赤馬さんともども、少々有名なのです」

口論義の場合服装が、サワハの場合は日本人離れした顔立ちが、さらに言うなら二人ともそれなりに容姿が整っていることが目立つ要因である気もしたが、あまり言わないでおこうと司は思った。

ぶしーと音を立てて止まったバスの扉から、人影が吸い込まれていく。流れに乗って小野も乗りこんでいったので、司はあとを追いかけた。

#

サワハたちが一家三人とスタッフ二人で回しているのだという店は『タイ古式マッサージ サワダ』と形作られたネオンが無駄に煌々と輝いているビルの二階にあった。一階のアパレル関係の店を素通りして階段をのぼった四人は、二階のドアにかかっている『ヌアペンポーラン!』と行書体で書かれた札を横目で見つつ、サワハ一家が住まいとしている三階の部屋に向かった。ちなみに対面の部屋には、一階の店の主が住んでいるという。

ただいまー、おじゃましてーす、お邪魔します。声をかけながらあがっていく三人に続き、踏み入れる司。表札にはしっかり「沢田」とあった。

「待て待て、待って」

「どつたの、マルドメくん」

「今さっき二か所ほど突っ込みどころが」

「又アペンポーラン、はタイ語でタイ古式マッサージのことを表してるのよ」

「会長ちがう、それより少し前」

「ひよつとして、バスで盗撮被害にでも遭いましたか……」

「小野もちがう、もう少しあと」

「ただいまヨ、おとーさん」

「おう、ヨーヤク帰った力、美鈴みすず」

「ほら今あつたよ、突っ込みどころあつたよ」

なにがなんだか、と言った風な表情で司に向かって首をかしげる三人。加えて一人、奥から玄関へ現れた、あごひげをたくわえ、長い黒髪を額を見せるように後ろへ流しひとまとめにした大男が、どうやらサワハの父親らしい。

アロハシャツから覗く浅黒い肌の色はともかくとして、顔立ちは日本人らしさがある。サワハとも似ているが、彼女の持つエスニックな雰囲気を作る要素としてはそれだけでは足りない気もした。

「……あ、そつか。つまりお母さんの方が」

「ところで美鈴、美幸みゆきまだ終わらないイ？ 仕事まだしてるカイ？」

「おかーさんまだお仕事ヨー」

「あ、やっぱり突っ込みどころだった」

いったん納得しかけた思考が、サワハ父によってまた逸らされた。いかげん不審に思ったのか、小野が表情を曇らせた。

「……先ほどから何をおっしゃっているのですか、司さん」

「いや……だってみんなずっとサワハサワハって呼んでたから……」

話し方もカタコトだし、てつきり東南アジア圏の人なんだと思っ
た」

「その呼び名は最初、サワハ言い間違いしたからなのヨ。自己紹介
で噛んだので、みんなワタシを『サワハ』だと思ったのヨトよ。沢
田美鈴・純日本人。が、正解」

「長ーく、タイに一家でいすぎたのヨトが失敗だたな。美幸、私、
日本語へタに。美鈴生まれたも日本語教えられなかった。すまない
ね」

「いいヨいいヨ。キャラ作るのしなくて済んだカラネ」

「ははははは」

「あははは」

サワハ一人ならばなんとか耐えられるこの喋りも、両側から浴び
せかけられると本格的に頭の中で処理が追い付かなくなり、なんだ
か身体を揺さぶられているような、自分が異国に来たような、奇妙
な感覚を司は味わった。

「あ、頭が、重いような」

「……そのうち慣れるわよ。それより、ここで食べられるトムヤム
クンは絶品だからね。楽しみにしとくといいわ」

「トムヤムクン食べるといっしょに会議ヨー。ぶらちゅむー」

奥に駆けて行くサワハ。すれ違う形で、片手をあげて微笑んだサ
ワハ父はサワハ母を呼びに行くのかドアを出て下の階に下りていっ
た。現実を受け入れなくては、とよくわからない諦めに似た思いを
抱きながら、司もそつと靴を脱いであがらせてもらった。

奥のリビングは赤や橙を基調とした暖色でコーディネートされた
インテリアが並び、手狭な空間ではあったものの圧迫感などはない
過ごしやすい部屋になっていた。低いソファに腰かけた三人にサワ
ハがハーブティーを出してくれて、それを呑み終えた頃には食卓に

トムヤムクン、アサリの香菜蒸し、鶏肉の炭火焼が出てきた。謎だった二つのメニューの正体が良く知る食材でできていたことに、司はちよっぴり安心した。

「じゃ、いただきますカナ」

サワハの両親はまだ仕事とのことなので、四人だけで食事をとることにする。いただきますしよう、と小野がつぶやいて手を合わせ、口論義も箸を持ったままだが手を合わせていただきますと早口で言った。司もそれらにならない、箸を取る。

香辛料が日本のものとはちがうのか、トムヤムクンは辛いだけではなく複雑な味わいだった。魚介類のうまみが出ていたりとか、コクの中にある奥が深いとか。司は料理漫画などで見たセリフでも並べてみようかと思ったが、手を止めてわざわざそんなことを喋る気にはならなかったということがなによりも味の良さを示していた。

とはいえ辛いことには違いなく、汗をかいた四人。デザートにとサワハは冷えたタイ風のおしるこを持ってきてくれた。ココナッツミルクとサツマイモが甘みのベースとなったそれは、だんごと共に呑みこむと喉の奥でじんわりとやわらぐ素朴な味を示す。

最後にまたハーブティーを淹れてもらい、四人でほうと溜め息をついた。

「……で、今日なにに来たんだっけ」

「フォッグマンについて話し合うのでしょう」

「ああそうか」

すっかりくつろいだ気分になっていた司を対面に座る小野がたしなめる。しかしそう言う彼女自身もソファに深く腰掛けて、眠たそうな目でハーブティーに口をつけていた。

「でもさ、ここまでで集まった情報だと、もちろん変な事件ではあるけど超常現象や呪術が関わるものには思えないよ？」

「そうかしら。被害者の話では『フォッグマンが突然いなくなっていた』とあるのよ。このあたりがきな臭い。なにかさせられたのか、監禁中どうしていたのか、と問われると、彼女たちは途端に押し黙って『よく覚えてない』と証言した……怖い思いをしたから記憶を封じられた、というよりも霞がかってて思い出せない、というのに近いそうよ」

「全部五人の狂言っていう可能性は？」

「それも考えられなくはないでしょうが。けれど」

いったん言葉を切って、小野は展覧列挙集を自分のケータイで開くとそこに記載されているフォッグマン事件についての詳細をとうとうと述べた。

「連れていかれて、部屋に通され、テーブルをはさんで向かいに座って雑談に興じながらテレビを見たり音楽を聴いたり。取りとめの無い話を続けて、途中フォッグマンが一時間に一度のペースで三回トイレに立ち、戻ってきた時には被害者の左隣に腰かけ。そうして話し続けて、気がついたらフォッグマンがいない。またトイレだろうと思ってしばらくは適当に時間を潰し、待ち続けて、ようやくおかしいと気づいて部屋を出ようとするとドアが開かない。ここまです。ここまで細かい点が、すべて五件に共通して起こっているのですよ。面識もない五人がこれらの行程を完璧に模倣し証言するというのは、少々難しいのではないのでしょうか」

「たしかに……ってどうかそんな細かい情報どこから」

「踊場サンはどこからかともかく情報拾ってくるのコトよ。知るの詳しくするはあぶないよ、って追い払われちゃうからどこから集めるはわかんないケド」

「なんかこわいなあ。でもやっぱ、呪術ありきの事件ってわけで

もなさそうに思えるよ」

司の隣でサワハが肩をすくめた。斜め前で足を組み、頭の後ろで手を組んだ口論義は、机の上に放置していた自分のケータイを一瞥してふうと鼻で笑う。

「ま、あたしたちが確証バイアスに陥っている可能性も否めないわね」

「なにそれ、確証バイアスって」

「反証を潰さずに、自分の仮説に肯定的な情報ばかりを見ることよ。見たいものだけ見て、それ以外の、仮説に対する反証は『例外的にそういうこともある』で済ませること。占いは当たるのが普通だと先入観で思いこんでたら、外れた時は『そういう日もある』で済ませるでしょ？ あたしたちはそれぞれに追ってるものがあるから、変なことがあるれば結びつけたくなくなっちゃう。それが確証バイアスに陥ってるのかも、って言うてんの」

「つまり、こじつけ」

「そうね。でも実のところ、ここ最近起こった事件で追えそうなものといったら、近くで起こってるこの事件くらいしかないのよ。あところという風に他人をだまくらかして踏み込むようなことをする奴は、ちょっと気になるっていうか」

「自分たちの身も危ないかもしれないもんね」

「そ、そんなとこよ」

うわずった声を出して、口論義もティーカップに手を伸ばした。

静まった室内にはこち、こち、やけに大きく柱時計の音が響く。何気なく司が見上げてみるとすでに八時過ぎで、今からここを出ても家に帰ったら九時を回っているだろうなと計算した。

「では概要も説明しましたし、今後はフォッグマン事件を追うとい

うことで方向性は決まりですね」

「異議なし。というか小野ちゃん、それ会長であるあたしのセリフじゃない？」

「ですね」

「夏終わたら会長の二番手決めるの時ネ。ワタシとレンタ口はやる気ないないだから、やっぱ次の会長、小野ちゃん？」

きよろきよろと三人を見回すサワハは、司に目を止めたあとで、口論義に向き直る。視線でバトンタッチが行われたのか、口論義も膝に頬杖をついた態勢で司に目を止めた。

「司くんやる気あつたりしないの？」

「めんどくさいから、いいよ。あ、それと小野なら会長似合いそうだし」

「自分の理由にとつてつけて推薦しないでください」
「だって他に理由ないし」

胸を張って宣言すると、小野は呆れたのか額を押えた。サワハは足をぱたぱた振りながらこころごとく笑い、口論義は苦笑いを噛み殺していた。

「じゃ、とりあえず本日の会議は終了！ 明日からは各自情報集めに精を出すこと。あと勉強に自信が無い人は、ゴールデンウィーク明けにある中間に向けて勉学にも励むといいわ」

「げ」

サワハと司のうめき声が重なった。顔を見合わせた二人を見て、小野が憐れみをこめてぶつと吹き出した。すぐさま司がきつと睨みつける。

「二人まとめて一笑に付すつてのはひどいんじゃないかな、小野」
「あ、いえ。二人まとめて、ではないのです。サワハさん現代文以外は成績良い方ですから」

「え、じゃあ笑われたのはこっちだけ……」

ますますもってひどい話だった。

「ちなみに自慢じゃないけどあたしと踊場も成績悪くないし、小野ちゃんも入学時の成績は五位以内に入るらしいわよー」

「ちなみにメガネなのに、レンタルは成績ずんどのどん底ヨ」

「いや、メガネなのに、って。ステレオタイプな形式を現実には当てはめないであげようよ」

とりなすように司が両手を突き出すと、小野と口論義の目線が一局集中して司に襲いかかった。

「司さんは学ランのボタン開けてることが多いですし、素行不良という括りで言うところの成績悪い人間のステレオタイプに思えますが」

「廉太郎くんもたまたま指定のセーター以外の時があるし、登校時には変なもの乗ってくるし。素行不良の典型よね、司くんと同じく」

「……まともにセーラー服着てるの見たこと無いあんたらには言われたくないよ……」

「ほっとけ。ジャージはあたしのポリシーなのよ」

「セーラーはごわごわして重い感じがして、動きづらいので」

そのうちこの研究会、服装の乱れが原因で活動停止させられるのではないかと思えてきた司だった。と、ぴんぽろばんぽろと電子音が鳴り、腰を上げたサワハがキッチンの方に駆けて行く。壁に埋め込まれたモニターの表示は四十五度と出ており、どうやらお風呂を

わかしていたらしい。

「お風呂わいたネ。どーする、最初入るは誰からカナ？ はい、じやーんけーん、」

「いや入らないしもう帰るし」

片手を振ってきっぱりと断った。キッチンからリビングに面したカウンターに顔を出して、サワハは下唇を突き出しつまらなそうな顔を見せた。

「えー？ マルドメくんお泊り用意してこなかったノ？」

「そんな話、今日一度も出てこなかったじゃん」

「明日から連休よ？ そんで夕方から友達の家を訪ねるって時に、お泊り会じゃないわけないでしょ」

「会長は用意してたの？」

「や、このうちにお泊りセット置いてあるのよ。プチ家出用」

傍迷惑な、と司は部外者ながら思わざるをえなかった。正面を見て小野はどうなのかと視線で問うと、「朝道場に寄った際に、汗をかいた時のための着替えを取ってきてます」とのことだった。

「帰る今日中なら、お風呂だけデモ入ってくか？」

「自宅の風呂の方が落ち着くから。遠慮しとくよ」

「そう？ もつたいない。風呂あがりにはサワハにマッサージしてもらうと天国なんだけどねえ」

「五分で百円ですけどね」

「銭湯のマッサージ機みたいな値段だね……」

そのうち機会があればお願いしてみよう、と司は言って、サワハの家をあとにした。

連休が、はじまった。

九題目 「ヌアペンポーラン」とサワハが言って（後書き）

ようやく話が転がりだしました。新たな相手の登場です。

ゴールデンウィークでも休暇無しのブラック研究会に所属してるんだが司はもう駄目かもしれない

十題目 「事件よ來なさい」と口論義が命じた(前書き)

また暗い話に突入するのにノリだけは完全に学生テンション
この落差どうなるんだろう

十題目 「事件よ來なさい」と口論義が命じた

「ダメだ。もう俺の中にある言葉は全て出しきってしまったのだぜ」
「早く書きあげてください。あ、錯覚の錯の字が措置の措になつてますよ。あと栽培の栽も裁断機の裁になつてますし、完璧の璧の字は下半分が土ではなく玉です」

「も、もういやだ！ やつてられん！」

「自業自得だというのにいまさらきみは何を言っているんだい？」

「あほネー、レンタロー。せっかく連休あるの、反省文書くのゴトにぜんぶ使うノ？」

「黙れサワハ！」

「廉太郎くんこそ黙って集中なさい」

「……はい」

先日、犬神使いを追っていた時に司と小野が訪れた喫茶店「アーガイル」に、きてれつ研の面々は集まっていた。窓に面した角の席に座り、廉太郎を五人で取り囲むように。

囲まれた中で頭を抱える廉太郎の前には、昨日踊場を追って校内を駆け回った際に鉢植えを壊したためさらに増え、とうとう通常時の三倍の量を書くよう義務付けられてしまった反省文の原稿用紙が鎮座していた。四百字詰めにして、九枚である。

「ぐぐ、だが三分の一はお前の責任だぞ、踊場！ お前が三枚書け！」

「いやに決まっているだろう面倒くさい」

「そもそもなぜだ。なぜお前には反省文が課されてないんだ！ 俺と一緒になつて校内を走りまわっていただろうが！」

「僕の素行が良いからではないかと推察するよ」

「ウソをつくな腹黒シヨタ郎！」

レコードの針からはじき出されたジャズの流れる、ゆったりとした時間をかき乱すように、廉太郎は頭を掻きむしって机に突っ伏した。意外に大きな音がしたので、カウンターのの中から頭巾をかぶった女性店員が怪訝な顔をして様子をうかがっている。

「……連休初日から反省文書くために集まるとか、どうなのこれ」

溜め息で手にしたグレープフルーツジュースの入ったグラスを曇らせる司は、温かで穏やかな天候に恵まれ行楽日和になった外を見つめながら、ぼそりとそう漏らした。

「ていうか小野、照る照る坊主を一所懸命作ってたけどさ。晴れちやうと、フォッグマンとの遭遇率ってぐっと下がるよね」

「……それはわたしも昨夜気付きました。迂闊でした」

紅茶の入ったカップを傾けていた小野は、口をへの字に曲げて無念そうに顔を曇らせる。

「まあともかくも、これ提出してこないことにはぶ室も使えないらしいし」

「書くの早くするよレンタロー」

「ぐぐぐ。だ、だが考えてみたら連休中はぶ室を使う意味なんてないだろ。連休明けまで猶予をくれてもいいじゃないか」

「やれやれきみは本当に怠け者の典型だね。今やれすぐやれ甘えるな」

「踊場あ！ テメエいい加減にしゃが」

「はいはい早くやる。会議すら始まらないじゃないの」

あー、うー、と口だけ動かして発音せず、氣勢を削がれた廉太郎

は再び原稿用紙に向かった。

しかし時折小野や口論義から漢字の間違いなどについて指摘が入り、そのつど溜まっていくストレスが一定値を越えると踊場に八つ当たりをしかけては口論義に止められる、というパターンをその後も数回にわたり繰り返し。

三時間が経過して正午を回った頃、廉太郎だけでなくその他の五人もぐったりと疲弊しきった空間の中心に、なんとか九枚の反省文ができあがっていた。司の前にある空のグラスはその数を三つに増やしており、小野や口論義の前にもカップが増えていた。申し訳なさそうに、廉太郎が肩をすぼめた。

「……なんかすまん、みんな」

「本当にすまないという気持ちで胸がいっぱいなら、たとえきみを注視する公衆の面前でも、土下座くらいはできるのではないかな」

「それは御免こうむる」

「畜生でも恩は忘れないというのに、きみは礼をつくし恩人に厚く遇す術も知らないのかい？」

「んだよ。この前も冬の時も、ピンチになったら駆けつけてやったはずだぜ」

「それがきみの仕事だろうに。当然の職務遂行について礼を言うことほどバカなことは無い、と僕は思っているのですね」

「お前ぜったい上司とか向いてないぞ、職場の意欲がどんどん減っていくのが目に見えるようだ」

「職場？ 上司？ おやおや。きみくらい職場や上司という言葉とかけ離れた人間を僕は他に知らないよ。むしろ一人さみしく起業して失敗してどん底に落ちるのが目に見えるようだ」

「うるせえとつとくたばれ踊場」

「黙ってさっさと寿命を迎えなよ廉太郎」

互いにぐったりと背もたれに寄りかかり、天井を見上げながら悪

口と喧嘩を叩き売りしあう様は傍から見ているかなりシニールに思えたのだが、指摘できるほどの体力は残り四人の誰にも残っていないかった。

誰ともなく、ぐう、きゅう、と腹から音色を響かせた。廉太郎も踊場も口をつぐんで、腹をさすりさすり携帯電話で時間を見る。

「……ああ腹減った。もう正午過ぎなのだぜ。とりあえずメシ食いに行かないか」

「……ここは軽食しか置いていないようだね。移動してきちんと食事について、僕も賛成以外の意見を差し挟む余地をもたない」

二人の口論にもここで決着がついたと見えて、おもむろにがたがたと立ち上がる。それに続いて四人も力なく立ち上がり、幽鬼のようにふらふらと、各々のお代を置いて店を出て行った。

ドアベルのからころという高い音に混じって、さるぼぼのそれに似た頭巾をかぶった女性店員がありがとうございますー、と頭を下げつつ言うのが聞こえ、ドアが閉じると共にその言葉と、ジャズの響きが断ち切られた。

「カラオケでも行きますか」

「なにその普通の高校生みたいな連休の過ごし方」

近くのファミリーストランに入り、定番メニューとして有名なドリアやスパゲティをたいらげた司たちはようやく人心地ついて、これからどうするかについて話し始めた。小野はジェラートをすくっていたスプーンを置くと、正面に座った司に腕組みしてみた。

「いえ、普通の過ごし方をするのではなく、ですな」

「じゃあ異常な過ごし方すんの？」

「やりたければどうぞお一人でご自由に」

「冗談だよ。話の腰折って悪かったよ」

午前中に溜まった疲れも、食事によっていくぶんか薄れてきた午後一時現在。司はドリンクバーのエスプレッソを少しずつすすってカフェインを摂取しながら、小野に話の続きを促した。小野もドリンクバーで注いできたアップルティーを飲み、眉間に寄せたしわを薄れさせると提案の詳細を語った。

「昨日までに調べた結果、五件のフォッグマン事件はどれも密室で行われていたわけですが。その中で一件だけ、おかしな点があったわけですよ」

「おかしな点、っていうと？」

「昨日司ちゃんが帰ったあと三人でちょっとカラオケに行ったのよ。フォッグマンが監禁に使ったカラオケに、ね。で、その時に話を伺ったわけ。監視カメラとかどうなんですか、って。店の人は通路やホールなどでは稼働してますって答えたから、続けて個室についても聞いたの。そしたら、たまに警察の人がパトロールに来ているので個室にはつけてないって言ったのよ」

「それが、どうおかしいと言うんだい？」

デザートに頼んだチョコレートケーキにフォークを突き刺しながら、踊場が問う。口論義は自分の耳を指差しながら、にやりと笑って説明した。

「話を伺ったのは、小野ちゃんよ。それを物陰に隠れて聞いてたあたしが微能力で看破したんだけど、結果は『個室にはつけてない』の部分かウソだとわかったわ。つまり、そういうこと。その他の四件 ネットカフェの個室シアター、アパートの一室、ホテル、歓

楽街のサービス施設。これらの場所で監視カメラの有無については『無い』との回答が出た中、カラオケだけは監視カメラが回っていたわけよ」

「ちよつと待つてくれないか口論義。きみひよつとして一人で歓楽街などに出向いたわけではないだろうね？ しかもそんな……いかがわしいところに……」

目に見えてうろたえる踊場。口論義はわけがわからないという顔でそんな彼を見つめ返し、なおも慌てる踊場に廉太郎が咳払いを届かせた。

「会長の虚言看破は一人じゃ使えないことを忘れてないか？ それと、無駄な心配はするな。俺がガードしていたからな」

「なに？ そうなのかい……それはどうもありが、いや待てやつぱりきみがいればそれはそれで別種の危険が及ぶ気がしてならない」

「ばあか。そんな場の雰囲気にかこつけてことに及ぼつとするかよ」
「ふん。さかりのついた犬の言葉など信用できないね」

「お前だつて似たようなもんだろ。どうせそのうち場の雰囲気でカッコつけてことに及ぼつとするんだろ」

「おや、なんだいそのどや顔は。一世一代の掛詞かけことばがうまくいったと思つているのかい？」

「なんだと teme エ」

「……あの、みんな置いてけぼりなんだけど。二人で話すのそんなに楽しい？」

横合いから司に言われてはつとした二人は「別に」とハモつて顔を見合わせ嫌悪感を滲ませながらそつぽを向いた。司は呆れ半分楽しさ半分といった面持ちで口論義の方を向いて、応じた口論義は止まっていた話題を再びはじめた。

司はそのあと小声で小野に「あれで気付かないってどうなの、会

長」と話しかけ、小野はその言葉に首を横に振り「男性はみんなあんな感じだと思ってるようです」と憐れんだ声音を出しつつ廉太郎を見た。

「おほん。つまり、カラオケにはフォッグマンの姿が映っていたわけ。当然映像は警察の方についてるんでしょうけど……ここであたしたちが考えるべきことは、なぜその他の点では徹底して自分の犯人像を隠すようにしているフォッグマンが、一件だけ姿をさらしていたのか、よ」

「すっかりうつかりしつかりちゃっかりド忘れしてたと違うかな？ もしくは姿見せつけるを一件だけやっというて、印象を固定するの
コト」

ドリンクバーで色々混ぜた結果、不気味な茶色に濁った液体をおいしそうに飲みながら、サワハがわりとまともな考えを口にした。口論義は一瞬あっけにとられたもののすぐに真面目な顔に戻り、携帯電話を開くとメモ帳に「印象固定による捜査かく乱のため、またはうつかりしていた？」と仮説を打ちこんだ。

隣からその画面の文字を呼んでいた司は、けれど、と前置きして五人から注目を集める。

「そういう目的にしては見つかるリスクが高すぎる気がするけどなあ。だってカラオケでの出現って三件目でしょ？ 一件目で姿を晒すなら、まだ警戒がはじまってないから問題ないけど。三件目ももなれば捕まる可能性も高くなるんじゃないの？」

「あれだ、リスクを冒して実行することに快感を覚えるような、タチの悪い犯人なんだろ。今のところの俺たちの推論じゃ？ フォッグマンは複数犯？としてあるんだから、一人くらいそういうメンバーがいたって可能性はある」

「そりゃ可能性は捨てきれないけど、複数犯だからこそ、暴走思想

な奴を実行犯には数えないと思うよ。個人の行動結果が全体の活動過程を停止に追い込みかねないなら、メンバーから外して切り捨てるはず。一応、リスク冒す前に法を犯してるんだから」

「いえ、話しかけて同意を得た上で連れて行くのですから、扉を接合して監禁状態にする手前までは法を犯しているとも言いきれませんが。そういう事情もあつてこそ、警察も捕まえづらい犯行と言えるのですから」

「というかだね、見つかるリスクは高く犯行を阻止される可能性は高いとしても、だ。リスクを冒して快感を、という犯行にしては、法を犯しているレベル自体があまり大きくないためにスリルもいまひとつなのではないのかな」

「そのへん、変態サンならわかんないヨ。サワハたち思う快感とあの人たち思う快感、ぜんっぜんちがうから」

考えるほどによくわからない事件だった。情報も少ない上に、辿りついた事件の結末がもしも「よくわからない性癖のよくわからない変態愉快犯数名による逆放置プレイでしたハアハア」などというオチだったら、ゴールデンウィークを潰してまで追った自分たちの労力を思つて死にたくなること必至だ。

連続していた犯行が止まってすでに一週間が経過しており、司が開いた展覧列挙集のリンク先にあるニュースサイトなどでも「沈静か、潜伏か」「警戒網突破できません」「連続軟禁厨、更新停滞中」などと書き込みがなされて騒ぎが下火になりつつあり、新しい情報もあまり入っていない。

「この事件、あたしたちが犬神使いを追つてた頃がピークだったっばいからね……」

つぶやいた口論義も深く溜め息をつく。六人とも、この事件には手のつけようがないかもしれない、と思い始めていた。調べるほど

に意図不明な点が出てきて、進んでも進んでも道に分岐が現れるよ
うだ。

しかし。

「……けど他に近場で追える事件はありませんし」

「やれやれ、進む道に変な輩が潜んでいないことを望んでやまない
よ」

その意志だけは、六人に共通していたので。追うことをやめ
るわけには、いかなかった。

それぞれが様々に持つ事情のため。不可思議なことには片っ端か
ら首を突っ込んでみなければ、追いつけることはできない。

追いつけなくてはならない、とそう思っていた。

六人全員が、他人からしたらどうでもいい、自分にとってのみ重
要で、捨てきれない事情を抱えていた。

「やるしか、ないんだよね」

#

ネットがあてにならなくなれば、いよいよ足を使う他は無い。ど
この古い刑事ドラマだ、と廉太郎から不満の声があがったものの、
六人はもう一度五件の現場を回っていくことにした。しかし大人数
で行動しても怪しまれ警戒されるので、ファミレスを出たところで
グループ分けを行う。歓楽街などに踏み込む方は何が起こるかわか
らない、ということで戦力を回すべく、廉太郎と小野が行くことにな
った。

すると小野が、そわそわしながら微かに聞こえる声で司に言う。

「……司さんは、こちらに来てくださいますか」

「へ？　なんで」

「皆まで言わせるおつもりですか」

「え……いや、廉太郎さんいるし、そういうのは」

「は？」

「……、」

聞き返されて、固まってしまった司。小野はじとつとした目で、いぶかしむように司を見た。

「……なにか勘違いしていませんか。歓楽街も先日一度回ったのですが、わたしたちではあまり大したものが見つけれなかったからこそ、司さんと呼んでいるのです」

「え」

「ですから、霊視でなんらかのモノを見つけていただけなにか、とわたしはそういうことを言っているのですよ」

何を考えていたのやら、と嘆息する小野に向けて、司は焦り顔に笑みを張り付けた。

けれど笑みは少しずつ乾いていって、剥がれおちて遂には消えた。表情をくもらせた司に不思議そうな顔を向けた小野は、司の弱弱しいつぶやきを耳にすることとなった。

「……あんまり人に視ろ、って言われるの、好きじゃないんだけどね」

「？　それは、どういう」

またも聞き返すと、司は口に出してしまっていたことに驚いた様子で、しどろもどろになりながらも困り顔に笑みを繕った。

「いや、いや。なんでもないよ、なんでも」

本人が言う以上突っ込んで聞くわけにもいかず、とりあえずなにかの琴線に触れたことだけはわかったので、小野はごめんなさい、と言った。ますます困った顔をする司は一步退いて、しばし言葉に迷ったあげく、小野と同じようにごめん、と言った。

「……おいお前ら。話がまとまったならさっさと行こうぜ」

「あ、うん。じゃあ行こう、小野」

「は、はい」

切り替えは早いのか、ころりと態度を変えて司は歩き出す。小野もそのあとを追って、廉太郎と三人で一件目の現場であるネットカフェにまで赴いた。

個室シアターも完備しているだけがあり、ネットカフェは誰か一人が身分証を出して会員証を作らないと利用できないようだった。会員証を作るのが面倒だと発言した司は、その作業を廉太郎に任せた。実際に名前を書くのが面倒というのもあったが、それ以上に廉太郎の本名を見てみたかったからでもある。ひよこひよこことカウンを覗くように動く司を、男性店員は面白いものを見るような目で微笑みながら見据えていた。小野がそんな店員をじっと見ていた。わくわくしながら後ろに陣取った司の気配はしかし、武の道にて殺気などと相対し続けてきた廉太郎には簡単に察知された。廉太郎は後ろを向いてぎろりと司をにらみつけると、一八〇近い大柄な身体を駆使して視界を阻んだ。一六五センチほどしかない司はこの防御をかいくぐることはできず、ついに本名を見ることは叶わなかった。

「ていうか、廉太郎さん本名で知られるの嫌なわけ？」

「嫌なわけないだろ。もう数年呼ばれてないしな、誰かには知ってほしいさ」

「じゃあなんで隠すの」

「その？誰か？は少なくともお前じゃないんだよ」

「……なにそのロマンチスト発言」

「男はいつでもいつまでもロマンチストだ」

司には理解しかねる思想を語った廉太郎は、すれ違う女性を避けながら指定された部屋のある三階へと上がっていく。料金は一人頭いくら、ではなく部屋一つごとでいくら、となっているようで、階段を上がりながら「あとできっちり割り勘な」とも廉太郎は言った。だが「反省文作成の手伝いでとんとんでしよう」と小野に言われて黙った。

三階の階段から非常灯の見える奥まで進み、右手にシアタールームがあった。ちょっと薄暗い部屋は中に入ると外の音も聞こえない。ドリンクバーもあるので、一日映画漬けになれそうな環境だな、と司は思った。同時に、やらしいことにも都合良いな、と思ったがそれは口にも態度にも出さなかった。

腰に手を当て部屋を見回した廉太郎は、天井の隅にある黒い半球状の物体を見つめながら、司に背を向けたままではそりと囁いた。

「監視カメラもここのはハリボテらしいぜ。少し暗めの照明といい、外に音の漏れない密室環境といい。やましいことするにはうってつけだな」

「すぐそういう考えに結びつけるのはどうかと思うな」

自分の考えを読まれたように感じて生まれた内心の焦りを隠しきり、臆面もなくさうさうと言ってのけた司。この反応が予想外だったのか、廉太郎は怪訝な表情を浮かべて両手を広げながら振り返った。

「なんだ、マルドメは少しも考えなかったのか？」

「ちよ、やめて捕まえないで襲わないで」

「この手はそういう意味じゃねえ！ 肩をすくめただけだ肩を！」

「ああそう……ならいいけど。あいにくと、ここでなら一日映画漬けになれそうだな、とか思ったただだよ」

「ちっ、純情気どりが。ロマンスでも見ちまったら、行きつく結果は同じだと思うがね」

「そんなことないでしょ」

やましいことは一切考えてませんよ、と。表情だけはそうアピールして、純朴という体面をなんとか取り繕うことに成功したと思しき司は部屋の中を見渡して、なにか見つからないかと探し始める。廉太郎はまだ司の態度に怪しいところがないかを探していたが、やがて目を逸らすとしゃがみこんで床のほこりをふーつと吹いた。

「……そういや、なんか視えたか」

「今のところなにも。そもそもこの事件、霊的なものが出てくる気がしないし。物的証拠探した方がいいよ」

「はてさて。警察の手が入ったあとじゃ何も見つからんと思うができるだけ探してみるか」

廉太郎がソファに近付き、部屋の中の物色をはじめた。それに付き合おうとする司だが、振り返ると小野がいない。どこへやら、と思っただアを開けて顔を出すと、階段からこのシアターにくるまでにあったDVDやBDのコーナーで立ち止まっていた。

「なにやってんの」

「え？ ああ、その。観たい海外ドラマのシーズン2があったので、パッケージだけでもと思いました」

見つめているのは、なにやら兄弟で悪魔や悪霊被いの旅をする感じのドラマだった。つい先日は本物の悪霊被いをやったのに、と思わなくてもない司だったが、タイトルとあらすじは知っていたのでうなずいておく。

「海外ドラマって結構長く続いてるやつ観ちゃうと、しばらくハマりっぱなしだよな」

「まったくです。抜けだせないといいますが、完結するまではハラハラさせられ通しで」

「うちは母親が韓流ドラマに手を出したから、そっちの方よく観てたけど。そうやって言うとかっぱり『おばさんくさい』とか言われてさ、弱ったもんだよ」

「ははあ、そういう、ものですか」

「小野は韓流とかはあんまり？」

「まあ……そうですね」

少し歯切れの悪い様子で、小野は笑った。続けて、辺りを眺めて言う。

「それにしても個室シアターでドリンクバーもあるなんて、いいですね。一日映画やドラマ漬けになれそうです。この作品はシーズン6まであるので、一日では消化しきれないでしょうが」

「……あーうん、そうですね」

本心からそう語っていると見受けられる小野の目に見つめられると、司はなんとなく、やらしいことにはかり思い至った自分を恥じた。ついでに廉太郎も恥じるべきだと思った。

「ドラマもいいけど、映画とか。そうだ、メロドラマとかロマンスものは観ないかな？」

「ロマンス、ですか。有名どころはともかく、最近のものはそれほど。むしろアクションなどの方がわたしは好みでして、CGもワイヤーもなしのとある映画であった、四分ぶっ続けのシーンなどは鳥肌がたちました」

拳をぎゅつと握って語る小野に、もう司は何も言えなかった。

そこで背後からなにやっつてんだ、と廉太郎に声をかけられて、司はかぶりを振ってなんでもないと答えた。それなのに首をかしげて近付いてきた廉太郎に苛立ち、八つ当たりで拳を突き出したが、ガードすらされずに腹筋で跳ね返され余計にみじめな気分させられた。

「なんだよ、なんかしたか俺。ところで特別あの部屋、変わったところはないようなのだぜ？ 警察に回収されたって可能性も否認ないが、他の部屋と見比べても壁とかに傷があるわけでもなし、きれいなもんだった」

「……結局、そんなオチですか」

「そのようだな。ん、ところでなんだ、そのパッケージは」

「観たかった海外ドラマのシーズン2です」

「鉦姫のくせに、アクション映画以外も観るんだな」

「失礼なことを言わないでください蹴り折りますよ」

「怖えよ、どこを折るんだよ！」

「心体しんたい」

「おっかねえ」

笑いながらローキックを避ける廉太郎と、むきになってそれを追う小野。きょうだいのような仲睦まじい光景を眺めてみじめな気分を忘れようと切り替える司は、とりあえず何もなさそうであるということを展覧列挙集に書き込みしておこうと思いい立ち携帯電話を開く。

「っと、しまった。電池切れかあ」

昨夜はサワ八宅から帰ってきて風呂に入りすぐ寝てしまったため、充電をし忘れていたのだった。二人のどちらかに携帯電話を借りようとしたが、他人の機種など扱いにくいだけだと気付き、余っているパソコンスペースでも借りようと適当に空いたところを探す。人が来たら番号ひとつ間違えてましたと言って逃げられるように、両隣が空いたところを選ぶことにした。

ゴールデンウィークということもあつてかネットカフェは盛況で、三つ並んで空いているスペースはなかなか見つからなかった。三階にはどうも見当たらないので、二階にまで降りる。するとちょうど三つ並んだ空きスペースを見つけ、真ん中に入り込んだ。

「これなら片方が埋まっても、もう片方まで埋まって逃げられなくなったりしないよね」

誰にともなく言って、向かうと、パソコンは電源が点きっぱなしだった。もしかしてトイレに立っているだけだろうか、と一瞬不安には思ったものの、表にあった札は「空席」となっていたため気のせいだと断ずる。

そうなつてくると他人の動向が気になるのは人の性で、インターネットを開くついでに司は履歴の部分を見えることにした。ずらりと並ぶ履歴に、乾いた笑いが漏れる。

「ダメだよ、ちゃんと履歴もキャッシュも消しておかないと」

つぶやきながら、検索履歴などを辿ってみた。人の恥部を覗いているようで、背徳感が

などと言えたのは、一秒前までだった。

「……なに、これ……」

並ぶ履歴は、自殺サイト。掲示板。死に至る方法。仲間を集う会。幾重にも重ねられた、絶望と諦念へ誘う道筋だった。思わずうしろを振り返ったが、誰もいない。まだいるかもしれないと思い、靴のかかとを踏みつぶしたまま一階へ降りたが、今降りて行ったような人影はない。考えてみれば自分が降りてきた際にも一階へ降りて行く人を見ていないのだから、当然なのだが。

(……けど、あそこは……)

どうしようもないほどに、真つ暗な情念がひしひしと感じ取れる空間だった。死に迫る道筋を己で見極めるべく、歪んだディスプレイ越しに見ゆる世界の形が心配としてあの場に染みついていた。嗚咽を漏らしそうになり、どうしようかと惑いつつ、結局、司は。

(……でも、何もしない、何もできない)

と、自分で自分を、結論付けた。

諦めと、無関心で 胸を満たして。深呼吸の後、二階のスペースへと戻る。逃げ帰るように、上の階へ。一階のカウンターにいた店員の視線よりも、さつき感じ取ってしまった黒い思いに司は見入られていた。

スペースに戻ると、ディスプレイには未だ煌々と、黒地に赤文字の無機質な画面が映されていて。居並ぶ死を連想される発言の道に、けれど司は興味をひかれて、ついつい辿ってしまう。

履歴の最後にあった掲示板には、『夕べから奇異』という人物、つまりこのスペースで検索をしていた人物と『七無』という人物の会話が残っていた。三週間ほど前に立ったスレッドをさかのぼ

ると最初は他にも人がいたようだったが、二人のあまりにも真剣な会話に興を削がれたように次々と立ち去って行って、最後に二人が残っていく様子がうかがえた。

「タベさんはしたいことをするべきですよ」「したいことがわからないんです」「ではまずしたいことを見つけたいんですよ」「うう……自信がありません」「落ち着いてゆっくりやればいいんです慌てないで」「ネタにマジレスかっこ悪い」「ネタをネタと見抜けない奴は（ry）」「みなさんはしたいことなど無いのですか？」「話題転換かよ」「逃げんな七無」「私はとりあえず逃げてほしくないです 私自身は逃げたりしてしまうでしょうが、みなさんには逃げてほしくない タベさんは今向き合おうとしています 逃げずに」「長文ワロタ」「今北産業」「ネタに マジレス かっこ悪い」

ひたすら続く第三者による挑発、怒りを煽る発言の中、ぽつぽつとタベが語る言葉に七無は真摯に耳を傾けていた。そうしていく内、次第に人は減っていき、一週間ほどするとその場はタベと七無の二人だけが会話を繰り返す空間となっていた。

もちろん見ているだけで発言をしていない人間などは残っているようだったが、発言をしない、というよりも場の雰囲気吞まれて『できない』という方が正しそうだった。

すると他者の発言がなくなった辺りから、七無の発言に、妙なものが混ざりはじめることに司は気付いた。

「終わらせたいのですか」「はい ぜんぶ」「しかし一人で終わることに意味はないですよ」「止めるんですね」「そうではありません」「じゃあなんですか」「あなたはぜんぶとおっしゃった」「それがなんなんですか」「募ればいい 人を そうでなくてはぜんぶではありません」「それは」「あなたと同じ思いの人は他にもいます その人たち含めてぜんぶ ではないでしょうか」「私の中の

ぜんぶ です 私の人生についてです」「それもいいでしょう でもあなたは一人じゃない 同じ思いでいる人がいて その人たちも同じ終わりを求めていることを考えてあげてくれませんか」

スクロールする手が徐々に早くなっていく。この会話の結末がどうなるのか、このスペースをあとにした人がどうなるのか、司は恐ろしく思いながらも気になって仕方がなかった。

そしてまた、それ以上に。ここにいた夕べという人の会話相手である七無が、恐ろしくて仕方がなかった。いとも簡単に相手から自殺の意思を引きずり出し、助け幫助していく。

二週間前の会話にまで追い付いた。

「その人たちで ぜんぶ です」「同じ思いの人と共に行くべきですか」「あなたがそうすべきだと思うならそれがぜんぶ です」「ぜんぶ は人員を選ぶべきですか」「本気の人であればそれがぜんぶ の構成には相応しいです ただ できれば女性のみが望ましいかと」「場所についてはどうでしょう」「峠など なるだけ俗世との境目がよろしいかと思われます」「移動手段は」「なんでもいいです 車でも」

ともすればこの会話の流れに司も引きずり込まれそうで、ようやくそこで理解する。この空間スペースに満ち満ちていた黒い念は、この七無によって振りまかれたのだと。元からあったとはいえ夕べの持っていた考え、思念をここまで膨らませたのは、全て七無だったのだと。会話はいいよ、本日の記録に入った。

「私は終われるのでしょうか」「ひとりでは終われませんが みなさんは一人じゃなく ぜんぶ です ぜんぶが集まる時になれば終われます 私も協力します」「七無さん 終わる方法はどうすればよいでしょうか」「ぜんぶ で方法についてもお考えください 私は

みなさんの自由意思を奪う気はありませんので ただぜんぶを構成するのは 以前も書きましたが女性のみが望ましいかと」「いろいろありがとうございました」「いえ 私もいずれ ぜんぶになろうと思っておりますので」「ありがとうございます」「では」

「さようなら」

その発言を最後に、タベは掲示板とこのネットカフェを去って行った。

最後まで読み切つて放心状態になった司は、唾を呑み下してから座イスの背にもたれかかり、うっかり触れてしまったパンドラの箱をにらみつけて頭を抱える。集団での自殺をほのめかすようなこの文章は、さすがに見過ごしておけないレベルのものだった。

「……会員証作るところで幸いだった。このスペースの利用者だった人の登録時の身分証に書いてある住所とか、個人情報警察に辿つてもらえばいいよね」

それでうまく解決するとは到底思えないが、司にできるのはその程度だ。むしろ、自分としては過干渉すぎるとさえ感じた。

階段に向かい、再び一階に降りて、あくまで平静を装いながら司は暇そうに空中を眺めていた男性店員に「出て行った人いませんか？ いた？ いいなこの人、と思ったんですけど、ちよつと声かける前に行っちゃって」と訊ねた。店員は跳ねるように司に向き直り、笑顔を浮かべた。

「出て行ったのは、お客さんたちが来た時に入れ違いで降りてきた女性だけですけど」

「え、それは、もうお支払いも済ませて？」

「はい。233の部屋の。あ、これ言っちゃダメか」

「2、3、3……?」

おどけた様子で男性店員は言ったが、司の表情はみるみるうちに硬くなっていった。

233は階段近くにあつたのだが、降りてくる際にちらつと見えたスペース内には女が一人、画面に向かって真剣に将棋を指していた。まだ、支払いを済ませているはずがないのだ。

司の反応に気付いていないのか、店員はさらに続ける。

「ま、今日は朝から他に誰も出て行っていないんで、見間違えはないですよ。みんなゴールデンウィークなのに、行くところないんですね」

その言葉にぎくりとして、司は訊ねる。自分の入ったスペースの番号を、思いだしながら。

「あの、245つて、今日だれか使っていましたか……」

「245? いえ、今日はまだ誰も」

きよとんとした顔で言い返されて、司は完全に、あてが外れた。

(おそらくその女性 『タベ』は、さつき小野と一緒に廉太郎さんのカードに頼った時みたく?代表者のカードに頼って入る客?のふりをしてここに入ってきたんだ。カードが要るのは入場時だけ、出る時は支払いだけすればいいんだから)

タベは司と同じように、三つ並んで空いたスペースに入ることによって言い訳が可能な状況を作り、カードを作ることなくここを利用していったのだ。

これでは店員や警察に伝えたところで、意味が無い。むしろ司に

よる悪質ないたずらだと言われてしまいかもしれない。

意味の無いことに時間を割いた、と苦笑いを浮かべ、あとずさりしてその場を去ろうとする司。そこへ三階からどたばたと足音が聞こえてきて、店員と一緒に階段の向こうを見上げるとメガネがずり落ちた状態の廉太郎が四段ほど飛ばしてずしんと着地してきた。

「電話があつたぞ、マルドメ！」

「え、ちょ、誰から」

「会長からです！」

背中に張り付いていたのか、廉太郎の陰から姿を現した小野が答える。店員は暴れないでください騒がないでくださいと対応に忙しいそうだが、完全に無視した二人はシアター四十五分の利用料金をきっちり支払って、店の外に飛び出す。

「急ぐぞ、まただ！」

「え、あの、どういいうご用件で」

「また監禁です！」

周囲の目がこちらに向くのも気にせず、小野がそう叫んだ。突然の展開についていけず、思わず司は首をかしげて、

「……えええ？ ぐえっ！」

そのまま首根っこを引っ張られて、二人に駅まで引きずられていった。

十題目 「事件よ來なさい」と口論義が命じた（後書き）

小野が言っていた四分ぶつ続けの〜という映画の題名は九話で食べたモノの名前。戦闘シーンやばいよ、たぎるよ

悪魔被いの方はエクソシストではありません 映画ではなくドラマです

……なにこの元ネタ当てクイズ。

というわけでGW編ようやく起が終わりましたこれより承に入ります。

意外と俗信に触れないのもうGW編でいい気がします

以下、いいかげん誰得なキャラプロフ欄

なんだろ、得するようにスリーサイズでも書けばよかったのかな
87/71/88とかそんなんだけど

廉太郎のことだけど

Name: 踊場おどりば小太郎

Hobby: 民俗学研究とそれに伴う旅 廃墟画像収集

Weakness: 羽生蛇蕎麦（学食にある）ドクペ（購買にある）

Specialty: 超魔界村エキスパートモード装備変更なし三機のみで完全クリア・名古屋撃ち

Skill: ? ロアス・アーク俗信の運ぶ音？微能力ではなく、長年の研究により手に入れた膨大な知識。しかしだいたい偏っている。最近はドロケイとケイドロの全国分布について調べている。

Notes: 実は一時期廉太郎を本名で呼んでやろうと粋なはからいをしたのだが呼ばれても本人は気づかなかつた。これも現在の陰

悪な仲を形作る要因のひとつである

ではまた

十一題目 「その人物、奇妙につき」と小野が後ろ指さす（前書き）

今回は短め 次回か次々回が長くなる予定。

十一題目 「その人物、奇妙につき」と小野が後ろ指さす

「うーん、ありや監禁たあ言えないような気がしないかね」

薄汚れた白衣を着た男が、片手はポケットにもう片手は頭に置いた妙なポーズで、横の口論義に同意を求めるかのようにあごをしゃくってみせた。口論義は何も言わず、目の前にある住居 段ボール製の壁にブルーシートの屋根をかぶせられた居住空間 を睥睨していた。

反応が無いことに寂しそうな白衣の男はきつい三白眼を細め、長い黒髪をたくわえた頭をぼりぼりと掻いてフケを散らしつつ口論義の横から少し離れると、くあーと大口開けてあくびをかました。

「しかしなんだね、きみたちが雁首揃えておれなんかのどこに来るとは珍しいね。またなんか面倒事？ さすがに引退した今はあんま助けてやれないよ」

「ご心配には及びません。今年度は霊視ができる人間が入ったので、^{あかば}赤馬さんのお目目をわずらわすほどのことはありませんわ」

白い長そでのブラウス姿で腕組みした口論義を振り返りつつ赤馬は懐から紙マッチを取り出して、ふん、とやたらめったら長く音を伸ばして適当な相槌を打つ。同時に白衣のポケットからはゴールデンバットを一本抜きだし、人差し指と親指でつまんだ吸い口部分を押し潰してから、静かに火を点けた。

「こういう生活だとモノモライってやつも意外と厄介だからね、患わすことが無いってんならそれに越したことはないよ。ありがたやありがたや」

「目を患うのは嫌なのに、肺を患う原因になるものはいいんですか」

「ひひ、目を患うのは単なるリスクだけだけどね、おタバコにはリスクだけでなく味を楽しめるってなりターンもあるからね」

「味って言いますけど赤馬さん、その銘柄以外吸ってるの見たことないんですけど。いろいろ味を楽しむなら銘柄変えたりしないんですか」

「わりと味なんて変わるもんサ。保存状態にも精神状態にも左右されるよ。ま、数ある銘柄の中でこれ吸ってる理由は単に安いのと名前が気に入ってるだけなんだけどね。きみ知ってるかね？ 黄金バット。おれ小さい頃に紙芝居屋のおっさんであればつか魅せられてね、ヒーローってつたらアンパンでも仮面でもウルトラでもなく、骸骨なんだよね」

「……黄金バットに紙芝居屋って、あなた本当はいくつですか」

疲れた様子で溜め息をつく口論義に、赤馬は「コウロギとコウモリって発音似てるねー」と節をつけて歌うと深くゆっくりゴールデンバットをふかした。

「ていうか赤馬さん、あなた進学したんじゃないんですか」

「とつくにやめてしまったね。なにやらおれの方向性とは、ちと違った場所だったようだね」

「で、今は河川敷で生活している、と」

「ここの方がおれの性しよにも方向性にも合あってたのサ」

わかるかね？ と振り返って紫煙をくゆらせる赤馬はわりと長身のはずだが、少し猫背であるために口論義とほぼ目線の高さが一緒だった。煙草の先端に点る火が怪しく揺らめくを見つつ、口論義は鼻を突く臭いからわずか距離をとって返した。

「多少はわかります。あなたが一つところに長くいないのは昔からですし」

「ならば、やはりそれが真実だね。少なくともおれときみの間では、サ」

赤馬は口論義の横を過ぎて風下に移動した。相変わらずよくわからない奇人だと思いつながら、口論義は川の向こうに立つマンションを見上げて、まぶしかったので左手でひさしを作った。警察がうるうるしているそこには、今頃踊場とサワ八が乗り込もうとしているはずだった。

「どうしたね、おれの家より向こうの方がお気に召したかね」

「まあ監禁されるのなら、たしかにあちらの方が生活環境として断然いいですけど」

「これでもマイホーム、中は住みよい空間にしてるよ。ひどいこと言うねきみは」

二人して見やる、河川敷の向こうにある六階建てのマンション。ものものしい雰囲気にもまれるそこには、ついさっきまたもフォッグマンが現れたらしい。ただ、今回は途中で被害者が異常に気付いたため、長時間に及ぶ事件などにはならず。フォッグマンが逃亡して、今に至る、ということらしい。

「まだ雨も降っていないのに現れるとは思わなかったですね」

「もうじき降る頃だけだね」

「？ それはどういう」

「ん、あーまあアレだ、こういう暮らしたからかね。多少湿気に敏感なのサ、おれは。一時間もすりゃあ夕立が降ると思うよ。きみらもその前には帰った方がいい」

置いてあった空き缶の中に川で水を汲んで、赤馬は肺腑に溜めこんだ残りの煙を全て吐き出し、口論義を指差した。

「しかし、帰れと言われまして」

「なら夕食でも食べてくかね。材料費ワリカンなら考えなくもないよ。踊場くんたち現場近くをうろつろしてるけど、どうせ今日のうちは警察が離れるこたあないだろうしね。サワ八くんの？レンズ？をあの辺に貼り付けておいて、のちのち観察でもすればいい。……しかしフォッグマンとやら、本当に追いかけるほどの価値があるのかねえ」

吐き切った煙が霞んで空に溶けるのを名残惜しそうに見つめ、赤馬は口論義に問う。口論義はすらすらと、先ほど皆で出した結論をそのまま告げる。

「わかりません。が、不審な点がある以上は看過できませんので」「ウソはよくないね。きみ、自分だけが虚言を見抜けると思ってないかね」

ところが発言を切って捨てられ、じろりと視線で射すくめられて、口論義はひるんだ。しかしそれは一瞬のことで、視線を外してぼりぼりと頭を掻く赤馬はどっこいしょと草の上に座り込むと、口論義と目を合わせずにまたゴールデンバットに口をつけてから言った。

「……ま、きみや、他の会員が追ってるものに辿りつく可能性はゼロじゃないし。きみの事情についても皆ある程度は納得の上のことだろうから、おれはこれ、きみが自分の事情ばかり考えてるのを糾弾する意味で言ったわけじゃないんだけどね」

「では、どついう意味で」
「そのままの意味サ。裏をかくことができると、自分が裏をかかれる可能性を考えなくなるんじゃないかね。野球と同じだね、攻撃だけでなく守備もきちんと考えなくちゃなんないよ」

短くなつた煙草を両手でつまみ、小さく振りかぶつてスイングする。口論義はその言葉に焦るような、戸惑うような感覚を覚えさせられてやきもきした。彼女はけつして赤馬のことが嫌いではなかったが、どうにもこの見透かしたような、遠くが視えているような態度には対応に困ることが多かった。

「……まるで未来が視えてるような言い草ですね」

「少し先は見えてるよ。きみより一、二年は先までね」
「嘘」

「本当。だつておれはきみより一年か二年は先に生まれて生きてきたんだ、わずかな差だけどその分深読み先読みができるってもんだね」

にやつと笑つて、スイングのままに投げた吸いながらを先ほど水を汲んだ空き缶の中へ放り込む。じゅつと火が水に溶け落ちる音がした。赤馬は座つたまま、後ろ手について首をごきごきと鳴らして口論義を呼ぶ。

「口論義くん、そろそろ頃合いだと思つよ。夕立が来るまで、お茶でも呑んでいくかね」

「頃合い？ と言いますと」

「廉太郎さんと小野さんと……ああ、残り一人は新しい会員か。相変わらず人員少ないね、きてれつ研は。まあ大きくなりすぎた集団は内部腐敗が進むしね、六人くらいがちょうどいいのかもしれない」

腐敗の前に自壊するから、といやな自論を述べ、また赤馬はひひと低い声を震わせた。

背後から河川敷へと階段を降りてきた三人の方を見もせず、笑い続けた。

「……三人ともごころうさま。とりあえず、この中で会議させてもらうことにしましょうか」

口論義は三人を迎えて、目がしらをつまんだ。湿気た空気が、空から降りてきているような気がした。

ガスコンロで沸かした湯で淹れたお茶は、お世辞にもおいしいと言える代物ではなかった。

ヤニ臭く、狭い段ボールの家の中にはぎゅうぎゅうと七人が押し込められ、互いに身じろぎすると肘がぶつかり肩がくっつく。

寝袋を隅に追いやり、中央に小さなちゃぶ台を囲む六人は、輪から外れて電気ポットを抱えるように座る赤馬を見つめていた。赤馬は片手をあげて司を見返すと、視線をちゃぶ台に落とした。

「やあきみ、粗茶の味はどうだね」

「客に出したあとで粗茶って宣言する人は初めて見た……」

「どのタイミングで言っても粗茶であることは変わらないね。それにしても、ふん。きみか、口論義くんの言ってた『靈視の
できる奴』というのは」

「視えるだけで他は特にできないけど」

「そうかね。だが視えるだけ、と言っても、憑かれやすい性質ではあるようだ。それにポケットに物騒なものを入れているね。御守り刀？」

言い当てられて、司は怪訝な顔をした。隣の小野が「赤馬さんも視える方なのです」と説明してくれたので疑問は氷解したが、にやにやと笑いながらこちらを見るその目には居たたまれない心地にさせられた。見透かされているようだった。

「だがきみ、視えるようだが、特定の宗教や教義を持つているわけではなさそうだね。だから身を守る術も知らず、民間療法レベルの対処しかできず、難儀してそうだ」

「そういうもの持つつの、好きじゃないから」

「ふむ、そう主張するならそうなんだろうね。ああ、そういえばまだ自己紹介していなかったね。おれは赤馬あかば実乃里みのり。きてれつ研の先代会長を務めていたよ」

「司、です。どうも」

「苗字は？」

「呼ばれるの好きじゃないから」

「ん？ 名乗るのが、ではないのかね？」

何気なく浴びせられたセリフに司はやや反応が遅れて、言葉に詰まる。赤馬はその様子をじっと眺めて何事か考えているように見えたが、やがてすいっと目線をずらして、司の隣に座る小野へ向けた。

「きみといい、その司くんといい。相も変わらず面白奇妙な人間しか集まらないね、きてれつ研は」

「あなたに言われたくはないのです」

「おれ、そんなに奇妙な奴だったかね」

「普通の人ではありませんでした」

「赤馬さんは卒業間近で退学食らいかけたこともあったしな」

小首をかしげて言う赤馬に、小野と廉太郎が続けざまにつぶやいた。味も色も薄い茶をすすりながら赤馬はとぼけた顔をして、「やだなあ冗談ばかり」とでも言いたげに肩をすくめた。

「ま、いいサ。昔のやんちゃは廉太郎くんも棚上げしてるし、置いといて忘れさせてもらおう。そんなことよりするべきは今の話だね。」

きみたちは今、フォッグマン事件を追ってるんだね？」

「ええ。色々と不審な点が多いので。なにか、我々の追うものへ直結するものがあるのではないかと疑っている次第なのですよ」

踊場が答えて、口論義とサワハがうなずいた。赤馬は段ボールのドア部分を少し押しして外を見やり、雲が張ってきた空と、その下にあるマンションを見つめた。まだ人でごった返して、近づけそうにない。

「なるほどね。しかしおれも時間がある時に、フォッグマン事件については調べていたんだけどね。この事件、さほど靈的なものは関わらないと見えるよ。背後に何か目的のある団体などがあるわけでもなさそうだしね」

「そなの？ 頭良いの人が集まってると思ったノニ」

「うーん、そうした組織はあるだろうけど団体ではないと思うね。そのせいもあり、目的がどうにもつかめない。だが、今日の一件はこれまでと違い、失敗という大きな動き、揺れが出ている。くわしく知ることができれば、目的へ向かい一歩進むことができると思うよ……サワハくん、向こうの現場近くに？ レンズ？ は設置できたかね」

「あい、ばつちりヨー。現場入るするは無理だから、出入りしてる人の背中に貼っつけたね。あと事件あった隣の部屋ベランダに、落ちてたのボール投げて『取らせてください』ってずかずか上がりこむして仕切り越しに手伸ばしてレンズ置いてきたよ」

「とりあえず二か所は見えるのね。じゃ、廉太郎くん、サワハにメガネ」

「はいよ。つつかさワハ、お前いかげん自分のメガネ買えよ」

「やーよ。めんどくさい」

ぎゃーぎゃー言い合いを繰り返した後に廉太郎から黒縁のメガネ

を受け取ってちょこんと鼻の上に載せたサワハは、右目を閉じ、開いた左目の前に左手をかざした。ふっ、と一瞬空気が留まり、渦を巻くような気配がして。いつものサワハとは違う少し静かな雰囲気、司はごくりと息を呑んだ。

「おう……見える見える。視えてきたネ。感度りよーこー、ハイビジョン」

「どつという風に視えてるんだろ？」

言葉の抑揚が普段よりも抑え気味になったサワハを不思議に思い司が聞くと、彼女はそのポーズのままちゃぶ台に頬杖をついて、えーと、と説明をはじめた。

「んー、マルドメくん幽霊視えるは、どんな感じ？」

「どつって、普通。普通の人間と変わらない感じで、だから他の人が誰も反応してなかったら、ようやく『ああこいつそうなんだ』ってわかるだけ。あとは危ない領域に踏み込む場合は、第六感で変な臭いを感じしたりいやな感触が肌に残ったり」

「じゃ、サワハのとはだいぶ違うネ。サワハの、視えるってゆーよ『解る』って言うノカナ？ 部屋間取り2LDK、南側窓、東側隅に三インチテレビ、が壁から五十度の角度であって、並んでるDVDのタイトルル右からスピード、タイタニック……なんてネ。情報細かいまで頭に流れ込んでくるの。えっと、喻えるするなら、すーっごい細かい描写してるの小説を、頭からお尻までゼーんぶ暗記してるのコト、カナ？」

よくわからなかったが、とにかく細かいところまでよく見えるのだろうということはわかった。むむむと真剣な顔つきでぎゅっと目をつぶったままの表情をキープするサワハは、空いた右手でちゃぶ台を叩いてなにやらリズムをとっていた。ついで、ひよこひよこ

その場で右に揺れたり、左に揺れたり。見ていて、司は何かに似ていると思つて小野に耳打ちした。一瞬、小野はくすぐったそうに身をすくめた。

「レースゲームでドリフトする時とか、よくああいう風にならない？」

「ああ……ありますね。身体を傾けてもゲーム内の車体に影響があるはずなのに、ついついやってしまいます」

「うー、うー。レンズ付けた警察の人、レンズの前立ってる、邪魔、どいてヨー」

「どうやら？レンズ？はサワハの身体動作とはなんら関係なく、固定された視点であるらしい。」

同じように左右に身体を動かす口論義がドア部分からマンションを見上げ、背後のサワハに問うた。

「何か、見えないの？」

「んー……見たとこフツー。変わってるとこないだネ。争ったあとがちよこつとだけ、あとはフツーな、独り暮らしするの人がいそうな部屋っぽい。変わったものも無いヨ」

「変なモノがあるとか、内装が気味悪い部屋だったら、呼ばれた女も入らないか長居はしないかどっちかだろうしな。あからさまにおかしな空間演出はしないだろ」

「とはいえ今回は短時間でバレて不成功に終わったわけなんだから、なにかしらこれまでの場所とは違う要素があったんじゃないかしら」

「しかし会長、こんなところで報告するものなんだが、俺たちが行った個室シアターも変なところは一切なかったのだけ？ それに場所ごとの違う要素とか言うが、そもそも俺たちが見出せた各場所の共通項は『二人きりになれる密室である』ってことだけじゃないか。それとも、会長の方でフォッグマンを追える手掛かりになりそうな

ものとか見つかったか？」

「いや……今のところはまだ何も。あとアパートは回ってないんだけど、あそこはピッキングで鍵こじ開けてフォッグマンが勝手に使ってたみたいでね、」

「あ、なんか入ってくるの男が来たよ！　すごい剣幕で怒てるネ。割れたお皿とか指差して泣いてるのコト、可愛いそー」

驚きの声をあげたサワハの説明は口論義が語ろうとしていた部分を代弁していた。

「……今回もピッキングで不法侵入した上で、女性を連れ込んでたみたいね……まあそういうわけだから、アパートマンションは踏み込むことも難しいし、なによりフォッグマンの自宅とかそういうわけじゃないから証拠も手掛かりも見つけられなさそうなのよ」

「しかし今日はしくじったわけだろう。ならばこれまでとは違う点要素としてフォッグマンの手掛かりなどが落とされている可能性もあるのではないかな」

「ガラスの靴でも落としてるってのか？　あつたとしても、とつくに警察に拾われてるだろ」

皮肉る廉太郎を噛みつきそうな目でにらみつける踊場だが、言うことはもつともだとも思えたので怒気を失い鼻を鳴らす。進展があるかと思いきやさっぱり、という状況にじれる六人の中、サワハは「視点、チャンネルベランダからに替えるね」と言って右目を開け、また閉じた。

「んー、んー、ん。こつちからも変わるとこないないだネー」

「……予期してはいたけど、不毛な戦いになってきたわ」

「手掛かりも動機も背景も不明ですからね。話術といいピッキングといい、無駄な技術を持った変質者、というだけのことなのでしょう

うか」

会長と小野がうなだれる。司はしょげる二人を見て自分も少し気落ちするのを感じながら、何の気なしに、まだ曇っているだけの空を見て言った。

「雨が降ってなかったから失敗したのかなあ」

「はい？」

「いや、フォッグマンはいつも雨の日に現れて、誘い文句はともかくとして部屋に入ってからパターン化した行動を順守したって言うてたじゃん。今日は小野の照る照る坊主のおかげか晴天だったし、そのせいで失敗したのかと思ったんだよ」

「パターン……」

「ひよっとしたら、大して変わったところのない普通の部屋、っていうのも実は普通であることに意味があったり、なんてね」

普通が一番、などと笑って言う司をぽかんと見つめていたら、『共通項』という言葉と司の主張とも言えない思いつきが、小野の中で不意に結びついた。それから己の顔が移りこむ緑茶の水面を見て、膝立ちになって発言する。

「あの、会長、踊場さん」

「なあに？」 「なんだい？」

「もう一度。もう一度、情報を集めて共通項を洗い出してみませんか。いえ、今度は場所などについてだけでなく、天候や状況といった環境面から、被害者同士のリンクまで」

「小野、急にどうしたの」

「司さんの言葉で思いついたのですよ。パターン、共通項、今日の失敗。加えて言うなら、大して変わったところのない普通の部屋……もしかしたらフォッグマンはわたしたちが気付いていないだけで、

じつは一定の規則の下に動いているのかもしれませんが。その規則の内の一つが、司さんの言うように？雨天であること？なのかも」

「いやでも、それがつかめたとして、どうするのさ」

「わたしが異常のある場へ惹かれやすいことをお忘れですか？」

胸を張る小野を見て、司はまさか、と口の形だけ動かした。しばし黙っていた赤馬はひひひひひ、笑い声をあげ、指を鳴らして小野を指差した。

「……面白いね。規則性を割り出し、それに基づいて小野くんが行動する。さすれば異能察知の微能力により遭遇率にプラスアルファの補正がかかった囹役と成り、犯人に近付けるかもというわけだね」
「あくまでも、規則性が見つかれば、の話ですけどね」

「すごすごとまた座り込んだ小野は、そう言つて頬を掻いた。赤馬はそんな態度を謙遜と捉えたのか首を横に振り、やや実年齢より老けて見えるその顔を喜色で満たした。

「相も変わらず面白奇妙で愉快的研究会だよ、ここは。おれも進学なんてしないでもう一年残ってみればよかったね」

「……赤馬さん、あんた一回留年してただろ……」

「卒業間近に退学になりかけたこともあったしね。だが二度ダブるといふのも面白いと思うな。あ、ダブるではなくトリプるとでも言うのかな」

笑い転げる赤馬を横目で見つつ、廉太郎は苦笑いを浮かべる他なかった。小野と口論義と踊場は早くもこれまでの情報をメモに書きだして共通項を探りに入っており、司もその作業に参加しようかと腰を上げた。

「……ねえみんなー。サワハもっ視るしなくていいノー」

「いえ、細かい点までお教えいただきたいので、もうしばらくチャネルはそのままです」

「あう」

サワハもそのままの体勢で室内の実況をはじめ、既にながらりと書かれた共通項一覧の端に述べられた状況やモノの配置が書きこまれていった。

「ん？」

その一覧の中に少し、司は引っかかるものがある気がした。

しかし小野に「司さんも穴がないかどうか、点検をしっかりとお願いします」と言われたことで、ひっかかりはどこかへ流されていた。

十一題目 「その人物、奇妙につき」と小野が後ろ指さす（後書き）

以下、やっぱりどうでもいいあとがきだったんじゃないですか中身何ありませんよ

嫌煙家の方は以下を見ないほうがいいかもと言いつつ別に喫煙家でもない私です

アルムのモミの木といい、歌の中ではなぜ人間以外の生物の方がよくモノを知っているんだらう
というわけでゴールデンバット。……黄金バット思いだそうとしてC3POを思い浮かべた子はいねが 秘密のマントの中に連れ去られるよ あれだけ象徴的に晒しといてなにが秘密なのかわかんないけどな

赤馬は外部顧問にして、立ち位置は前作主人公。そして留は明らかに喫煙者キャラを優遇したり人間的に優位なキャラに置きたがるの法則。……だって上位キャラ以外で煙草吸うのってアクション映画で最初にやられるチンピラとか雑魚不良だもの（偏見）
ジタンとかバットとか選んでるのは好きな作品の登場キャラが吸ってるからです。本当は葉巻とか吸わせたいけどそれ明らかにボスキャラだしアンダーザブリッジ民が吸うなら安いやつだろという理由でバット。じつは部屋の隅でシケもくを作り上げる地味作業やらせとくつもりでしたが、さすがに不憫なので割愛しました。
しかしあれですね、喫煙者キャラが好きな理由、ホントは行動描写が常に一定でやりやすいからだと思（ry

さて。

やっとヒロインの欄がきた……

Name：小野^{おの}香魚^{あゆか}

Hobby：今は門下ではないが倉内流の鍛錬・カポエイラ・CD
シヨップめぐり

Weakness：モロッコヨーグルト

Specialty：空腹でなくとも自らの意思で「ぐぐ」とお腹
を鳴らせる

Skill：？^{スーパーナチュラル}超常決戦？異能力者かどうかを一見して察する能力。
たとえ本人が無自覚であっても見抜く。逆に言うと偽物も見抜ける、
超能力番組殺しの魔眼。口論義のそれとは違い、テレビなどの媒体
越しでも見抜く。ただし何の能力かはわからない。副次的効果とし
て、異常へのハードルが下がることにより異常のある領域や能力者
に無意識に近づきやすくなる。

Notes：「大野」がクラスメイトに二人も居て彼らと呼ぶ声に
反応して恥ずかしい思いをすることがよくあるため下の名前で呼ん
でほしいが誰も呼んでくれないことに内心苦悩している。名前を呼
んで、はじめはそれだけでい（以下略

次回からフォッグマン事件の核心に近づいていきます。

十二題目 「追い込みを、はじめよう」と踊場が宣言した(前書き)

GW編おわりかけ。

十二題目 「追い込みを、はじめよう」と踊場が宣言した

しとしと降り始めた水分は、狭い室内を満たして蒸すように、隙間からじくじく沁み込んできていた。そろそろ帰るべきだろう、と折り畳み傘を取り出したサワ八と口論義が最初に外へ出て、踊場も自前の傘を掲げた。小野は踊場の横に入った。

廉太郎は近辺を見回して骨が何本か折れた傘を発見し、なぜか誇らしげにそれをさして歩く。少し嫌だったが他に方法も無く、司はその横に入って、後ろで手を振る赤馬に会釈を返した。

だが駅に着く頃には、廉太郎との身長差もあいまって横から吹き付ける雨にさらされ、司はすっかりずぶ濡れになっていた。仕方ないので犬のように身体を震わせて、廉太郎に水滴を浴びせてやった。

「なんだなんだ、せつかく横に入れてやったのに」

「あんな傘の骨折れてる方をこっち向けてたでしょ。おかげでほとんど傘の意味なかったよ」

「早く言えよ」

「言ったのに聞こえてなかったんだよ」

「そりゃそうだろ。雨音に耳を傾けてたんだ、俺は」

たたんだ傘を駅の片隅に放置して、廉太郎は澄まし顔だった。かすかにいらつとした感情を頬ににじませた司は、頭の上にも載った水滴をタイルの床に散らして言い返す。

「ポエミーなこと言ってないで反省してほしいんだけど。これ、同じこと会長にやったら男として完全にアウトだよホント」

「なに、それは真か。っていうかお前、なんでそこで会長が出てくるんだよ」

「会長からの好感度下がったら困るんじゃないの？」

「困るに決まってるんだろ。いや、だから、なんでそういうの知ってるんだよ」

ずいっと進み出て、険しい顔になる廉太郎。小野から聞いたという話を語ればどんな反応が返ってくるだろうかといわずら心が頭をもたげたが、廉太郎の陰で立てた人差し指を口元に当てている小野を見てやめておくことにした。

「廉太郎さんも踊場さんもわかりやすいから」

「ばかな。あの野郎はともかくとして、俺は巧妙に隠していたはずなのだぜ」

「そこはほら、隠しきれないくらいの感情だったんじゃない？」

「そうなのか？ …… そうかもな、うん」

適当にはぐらかした司の答えに自分で解答を見出したのか、しきりに廉太郎はうなづく。

司を先頭に改札を抜け、階段を降りていく。先にホームで待っていた三人に合流し、小野が階段から降りてきたと同時にホームへ停まった列車に、ぞろぞろと乗り込んだ。降り出した雨と祝日の夕方という時間帯のせいか、少し車内は混んでいて空いた席は少ない。六人は散り散りに分かれて、司は小野と二人で腰かけた。

「ふう、ゴールデンウィーク初日からやたら働くことになった……」

「けれどこれで少しは、事件の全容に迫ることができそうです」

「ま、それはそうかもね。今日の日中は快晴になったりしたけど、今は雨降りだし。フォッグマンの出現条件は整いつつあるよ。あとは、鬼が出るか蛇が出るか」

それから、帰り路が途中まで同じである司と小野は、各々の最寄駅で下車して帰っていく四人を見送りながら、最後尾車両の片隅で

ちんまりと座りこんでいた。小野はおもむろに携帯電話を取り出してみたりするが、走行中の地下鉄ではネットに繋ぐこともできず。溜め息と共に手持無沙汰になった右手を、ぼいと横に投げだした。ほすん、着地したのは司の膝の上で、ん、と反応する声をあげた司から、小野は慌てて距離をとった。

「？　なんかあった？」

「いえ、気を悪くされるのではないかと思ひまして」

「別にちよつと触ったくらいでは怒らないけど。でもそういう配慮をただだけつてことは、そろそろ他にだれかいけない状況にも慣れてきた？」

とられた距離よりも少し多めに、司は小野の方へ寄った。小野はおずおずと司の様子を伺うような所作は見せたものの、別段嫌そうな顔はしない。ただ左手で右腕を押えて、うーんとうなった。

「だいじょうぶ、みたいです」

「そっか。じゃ、ようやく親しい人間として認めてもらえたのかな」「なんだかそつという言い方だと、わたしがやたらと相手に格付けをしているように聞こえます……でもそつですね、たぶんもう、一日中二人だけで行動しても、おそらく支障はないかと」

「あ、そつ？」

そこで司は前納たちとの会話をふと思い出し「なら連休中に映画でも観に行く？」と訊ねようとして、映画というフレーズから先ほどの個室シアターを思い出して、さらには廉太郎との会話であった「やましいことにはうつつけ」というセリフも思いだして、そうこうしているうちに小野のセリフで誘いの言葉の出鼻をくじかれた。

「もともとわたしのこれは、引つ込み思案とか恥ずかしいとかでは

なく、どちらかという警戒に近いものですから。司さんが害意の無い人だとわかったので今は平気です」

「……警戒……」

「ええ」

うすく微笑んで言う純朴そうな小野に、口に出しかけた言葉を投げかけるのは躊躇われた。特に、廉太郎との会話を想起しながら言うものではないと、自制する気持ちが生まれていた。

「どうかしましたか」

「なんでも……うん、なんでもない。いやあ、警戒はしておくに越したことはないと思うよ、はははは。はあ」

空笑いがむなしく響いた。そんな司の意図がわからず、小野が首をかしげたところで、列車は速度を落とし始め、次の駅へ着く準備をはじめ。降りるのであるう人々が、わずかに身じろぎするのも見えた。

「警戒しすぎるのも難ありだとは、自分でも思っているんですけどね」

「なんか警戒しちゃう理由でもあるの？」

「それなりに。警戒と一口に言いますが、内側にあるのはいろいろな理由です」

「ひとつじゃ、ないんだ」

「はい」

口調が重たいものになる。あまり踏み込むような話題ではなさそうだが、と感じた司は話題を変えようと思案しつつ正面を向いた。真っ暗なトンネルの闇の中に浮かぶガラス窓には並ぶ司と小野が映り込んでいて、その中の小野は司の目を射抜くように見つめていた。

口を動かして、小野は司に自分の意図するところを伝えようとしていた。司は今度こそ目をそらすわけにはいかず、その目を見つめ返して、居ずまいを正した。

「しかしその内のひとつは、もう憂慮する必要もない状況になりました。だから、ここで司さんにお尋ねしておきたいことがあります。……カノエ・ミフネという名に心当たりはありませんか」

「カノエ」

「字はわからないのです。その読み方しか、わかっていなくて」

期待を込めた視線が、ガラス越しに司へ届いていた。落胆させたくなくて、司は遠い記憶までさかのぼってその名を探したが、頭の中のどこを探しても見つかりそうになかった。幼少の頃、祖父母と暮らした記憶の中にも、見当たらない。

「……いや、あいにくと聞き覚えないや」

「そう、ですか」

無念そうに、小野は顔を曇らせて下を向く。視線が逸れたのをいいことに、司もあさつての方を向いた。

だから小野の顔を目にすることはなかった、のだが。続いて聞こえた底冷えがするような刺々しく凍てついた声音は、表情を想像させてあまりあるほどの寒々しい印象を司に与えてきた。

「では、その名を覚えておいてください。それが かたき 仇。わたしの追う呪術師です」

正面に視線を戻し小野の顔を見ようとした時には列車はホームへと入り込んでいて、明るいガラスの向こうに映る司と小野の像は薄れ消えていた。横を見ると、膝の上で拳を握った小野が語りかけて

くる。

「家族の方やお知り合いなどからでも、話の上で耳にしただけの情報でもかまいません。もしなにか情報が入りましたら、お願いします。わたしに、ご一報ください」

「けど小野、」

「ではまた明日」

まだ小野の降りる駅ではなかったはずだが、ぱつと跳び出して閉まりかけた扉の向こう、ホームへと降り立つ。動きだした列車の中で腰を上げた司は、ゆっくりと元の位置へ腰を下ろした。そうしているうちにホームの雑踏の中へ、小野は歩いて消えていった。

夜。適当にありあわせの材料で自炊した夕食を済ませ、風呂からあがって部屋の布団に寝転がった司は枕元に置いていた携帯電話を手に取り、展覧列举集にてここまでの事件のまとめを見ておこうと思いついた。

その際に、カノエミフネという名が気になり、試しに展覧列举集の検索に打ちこんでみる。すると該当する項目はあるにはあったが、全文が『調査中』となっており具体的にどうい奴なのか、なにがあったのか、さっぱりわからなかった。

「あんまり出歯亀みたいなことすると、嫌われるかな」

ひとりごちて、展覧列举集から普通の検索サイトへ跳んだ。そして昼にネットカフェで開いたサイトの名前を検索し、？夕べ？と？七無？の会話に続きが出ていないかとスレッドを探す。幸いにも書きこむ人数が二人ということもあってか、まだ終わったり消えたり

していなかった。

そして、新たな書き込みがあった。

「ぜんぶ の選定が終わりました」

文面から察するにこれは夕べのものだ、と司は思った。しばらくすると七無からも書き込みがあつて、「ご苦労様でした。全てが円滑に進むことをお祈りします」と励ましの言葉がかけられていた。これに対して夕べから「少々手間取ることもありましたが 協力者の男性は除いて、やはり女性のみで行うことにしました」とある。

（そういえば女性だけで行う方がいい、とかアドバイスされてたっけ）

こう思い返して、小野や口論義やサワハが誘われたりしないことを司は祈る。

スクロールしてみるとその後も二人のやりとりは少し続いて、男性がいない状況が好ましいと念を押す七無と、なんらかの過程で男性が協力していて、その彼らを除いて決行する方法について夕べが問う、という内容が綴られていた。

あとは、昼の書き込みにもあつたように場所は峠が、加えて時間も夜半過ぎて二時ごろが良いと七無からのアドバイスがあつて、新しい書き込みはそこで止まっていた。携帯電話を投げだしてごろりと大の字になつた司は、今読んだ内容を反芻しながら天井の蛍光灯を見上げて、静かに目を閉じた。

（自殺つてのは、どうにもね……対処しづらいというか、なんといつか）

どうせ死んでしまつても、そのうちのいくらかは霊体となつてこ

の世をさまようことになる。ならば生前とあまり状況は変わらない、いやむしろ悪化とさえ言えるのだ。なにしろ霊になってしまえば司のように視える人間以外には、干渉することすらおぼつかないのだから。

（おまけに、集団自殺）

群集心理。踏みとどまれるところにいる人間が、集団となることで踏みとどまれないように自分と他人を追いこむ。それは自死でありながら、司には殺人につながる行動のように思えた。

またそれを幫助した？七無？が、とても恐ろしい存在に感じられた。

「一週間もしたら、女性ばかりで集団死、なんてニュースになっちゃうのかな。……女性ばかり、かあ。ん？」

自分で口にした言葉に、司はまたもどこか引っかかりを覚える。喉元まで出かかっている言葉があるように思われたが、頭の中で何と結びつけた言葉なのがわからないせいで引っかかったまま出て来ない。

自分の考えを正しく認識するべく再びスレッドを開いた司は、しかしそこに綴られる文面を見て、指が止まった。ここの書き込みであれば、この自殺を考えている人間に言葉を届けることはできる。それならばたとえ微力であるにしても思い留まらせる言葉を書き込むべきではないか、と考えて。

一分ほどの逡巡の後に、司はまた携帯電話を閉じた。

（……………これ、止めるべき、なのか？　なんか違う、気がする）

この？タベ？という人物も他に方法がないほど追い込まれている

という点では、恨みを晴らすべく他者を呪い自分の情念を燃やし尽くそうと足掻く亡霊と、なんら変わりないと思えてしまったからだ。自分の存在を認識されず追い込まれた亡霊と、自分で存在を認識できず追い込まれた人間と。その二つにさして違いはないように思えて、次いでそれが名を捨てた自分と重なった。嫌な気持ちになって、司は横になる。そこで玄関の方で鍵が開く音がしたので、長く垂らして寝転がったまま引っ張れるようにした電灯の紐を引きタヌキ寝入りをはじめた。

背を向けた廊下側のドアが開き、司の様子をつかがう視線が足下から頭まで廻った。無視を続けると、ドアは無言で閉じられる。

#

翌日もまた、六人は喫茶アーガイルの最寄り駅までやってきていた。夕方の四時ごろ、司が改札を抜けて階段を上がると、構内に設置されたベンチに腰掛けた廉太郎が携帯電話で通話しながら片手を上げた。服装は道着に袴で、少しは周囲に合わせると思わないでもない。

「土曜は道場で稽古あるんだよ。着替えるのがめんどかっただけだし、別にいいだろ」

と、通話が終わったのか、近付いてくる司を横目で見つっ廉太郎はそう言った。司はげんなりした表情を向けながら腰掛ける廉太郎を見下ろし、閉じる瞬間の画面に「クソヤロー」と表示されていたのを確認した。

「まだ、何も言っていないよ」

「目でものを言ってただろうが」

「あ、そう。でもそもそも、サワハさんのお見舞いとか、その他学

外で見かける時、廉太郎さん大体道着か和装のような気がするんだけど」

「それがどうかしたか？」

「目立つ」

「無個性に埋没してる奴ゆえの言い分だな」

「いいじゃん。パーカ好きなんだから」

「パーカとか帽子の着用を好む奴は外部の視線を気にするためにそういう視線を遮るものを好み、また誰かに嫌われたくないっていう強迫観念から八方美人でいるが情は薄いために裏切ることが多い」と心理学の統計で出てるらしいぜ」

ぎくりとした司は自分の着ている七分袖で紺色のパーカの裾をつかんだ。と、そこでにやにや笑う廉太郎の顔が視界に入り、からかわれていたと気付く。司は無言で向こうずねを蹴り飛ばした。廉太郎は涼しい顔で口笛を吹いていた。

「効かんわ。こちらら日々ビール瓶で叩いて鍛えてんだ」

「なんて無駄な努力を」

「今お前の攻撃無効化して無駄じゃなかったことが証明されたじゃないか。けどまあそう怒んなよ、俺もさつき踊場の野郎に似たようなこと言われてむかつとしたからついやっちゃっただけなんだ。お前も誰かにリレーすりゃいい」

「さつきで。やっぱりあの『クソヤロー』って通話相手、踊場さんだったんだ」

「他にそんな呼び方されるべき性悪がいるか？」

「今日の前にいる、って言うっていい？」

そんな益体も無い話をしているうちに、小野が階段を上ってきて現れる。小野はブラウスを着た上からサスペンダーをデニムのハーフパンツまで伸ばし、レギンスとミュールを穿いていた。普段はワ

ンピースやスカートなどおとなしい印象の服装が多いので、なにやら司の目には新鮮に映った。

おまたせしました、とキャスケットを押えて言う小野に、少し考えた上で司は言葉をかける。

「あれ、なんか今日雰囲気ちがうね」

「……安い軟派の常套句みたいなこと言いますね」

「でも似合ってると思うよ？ うん、活動的な感じで」

「普段は活動的じゃないということですか？」

「いや活動的でもそうじゃなくても、結構なんでも似合つなあと」

「あの、司さん。言葉を重ねるほどに軽薄な印象を受けるのですけど」

からかい半分ではあったが、半分は本音で褒めたつもりだったの
で司は少し傷ついた。にやにや笑いをまだ続けていた廉太郎も、顎
に手を添えながら屈んで小野を見た。品定めするような目だった。

「ほほう。中身が鍼まきかりでもラツピング上手く整えりゃ見れるもんだな」

「……廉太郎さん今日わたしワンピースじゃないので思い切りハイ
キック打てますけどいいんですか屈んでて。今の間合いでその高さ
だといいい具合にこめかみに当てられますよ」

「うわあぶね、あつぶねっ！ やめるその靴微妙に先端とがってん
だろ抉えぐる気か！」

失言のために廉太郎が追いまわされるのは、いつも通りな感じだ
った。司は笑ってそれを見て、少し落ち着く。じつは内心、昨日聞
いた打ち明け話のために小野とうまく接することができるか心配だ
ったのだが、それは杞憂であったと判じることができたためだ。

しかし、ちらりと小野と目が合う。軽口をたたく際には服を見て
いたためわからなかったが、少し戸惑っているように見える目だっ

た。

(……完全に気にせず済んでるわけじゃ、ないんだね)

それでも普段通りの振る舞いをできるよう努めてくれている小野に、司は感謝したい心持ちになった。その心情の変化に司は自身で驚いて、次いで、昨晚嫌なことを思い出したせいで自分も戸惑い、焦っているのだろうと思った。

「おまたせヨー」

気持ちに折り合いをつけようとあがいていると、今日はいつもの凝った髪型ではなくポニーテールにしたサワハが、裾を縛った半袖の黒いシャツとスキニージーンズに身を包んで歩いてくる。足下はかっぱらかっぱら、音を立てる雪駄が目についた。

逃げ回っていた廉太郎も柱の陰から顔を出して、サワハに声をかけた。

「よおサワハ。昨日と変わらずテキトーな格好だな」

「適当イイこと？」

「そりゃ、時と場合と場所によりけりだな」

「時と場合と。あー、TPOのコト？」

「……ん？ 今なんか正しいゆえに違和感があった気がするのだけ」

「気にする良くないのコト」

「ああよかったいつも通りだな、いてっ！」

妙な納得をしている廉太郎の背中に前蹴りを浴びせて、踏み痕を残した小野がやっとサワハに気付き、服装をじっと上から下まで見つめる。数秒で結論を出し、司に同意を求めるように振り向きながら告げた。

「いいと思いますよ。ねえ？」

「あははは。小野ちゃんもちよつとボーイッシュ格好、似合てるヨ」
「ありがとうございます。サワハさんも活動的でよくお似合いですよ」

「おう、褒められた褒められた」

照れた笑みを浮かべて、おばさんくさい所作で片手を振り「やーネー」とサワハがつぶやく。司は「自分が褒めるとサワハさんに褒められるのはいいのか……」と小野に対してやりきれない気分になったが、サワハの乱入で悩んでいた気持ちがつつとどこかに消えていたので、仕方ないかと溜め息をついた。

「……じゃ、行くか。天候も、そろそろ頃合いだろうしな」

「そうしますか」「うん」「了解よー」

蹴りの衝撃でずれた眼鏡を元の位置に戻し、背中を押える廉太郎を先頭に四人は動き出した。地下鉄で移動するのはこの四人だけで踊場はバスに乗ってくるそうなので、司たちは先にアーガイルへ向かうこととする。

「近いんだから会長の家でもいい気がするけどなあ」

「それは、少し厚かましいようにも思えますし」

「え、でもこの前訪ねた時はいつでもいらっしやいって言われたよ？」

「社交辞令というものでしょう」

きつぱりと小野に言いきられると確かに自分が厚かましいようにも思えて、司は「反省します」と答えた。ところが小野はその対応には「いえあの、そこまで言わなくとも。会長は……その、良い人

ですから」と慰めなのかなんなのがよくわからない答えを返してきて、その言葉尻は雨水を跳ねあげる車の走行音で掻き消された。

地上では雨が降りしきっており、街全体に染み込んだそれはビル群を灰にけぶる色合いに仕立て上げている。司は持参したビニール傘を掲げて進み、小野やサワハもそうした。

廉太郎は一人、蛇の目傘を差して口笛を吹いている。

「……………」

半透明のビニール越しでも目立つ彼を振りかえり盗み見て、他人のふりをしたくなつた司は歩幅を広くとる。すぐに小野も横に並んできて、ああ逃げたかつたんだなと親近感を覚えた。

そのまましばし歩き、橋を越えたすぐのところに、アーガイルが見えてきた。店の前には赤い傘を差した口論義が立っていて、司たち気付くと手を振る。

「先に、中入つてればよかったのに」

「ところが司ちゃん、今日臨時休業みたいなのよ」

革のサンダルで足下の水たまりを蹴る口論義は、湿気のためかしんなりした毛先をいじくっていた。わりと大きく跳ねた水が、彼女の穿く白いキュロットスカートにまで届きそうになる。

「機器の故障だって。残念だけど他に行くしかないわ」

「また昨日のファミレスか？」

「ドリンクバーも二日連続するは飽きるカモねー」

廉太郎とサワハが愚痴をこぼすように言うと、口論義は所在なさにげに肩をすくめた。その動作がいかにも年長者の風格を漂わせて、若草色のキャミソールに薄墨色のドレープカットソーをまとった格

好も、雨天の中で良い意味で浮いている。

「でもこの近所の他のファミレスとか喫茶店は長時間居座ると嫌な顔されるのよね」

「会長の家は？」

「あたしの家？ …… っていうのは、ちょっとね。この人数だと手狭だし…… そうそう、今日はお父さんも帰ってきてるから、うん」

なぜか小野の方を一瞬見て、口論義は幾度か小さくうなずいた。親がいるからという理由には司も思うところあったのでそれ以上の追求はせず、ドリンクバー目指して元来た道を歩き出したサワハを追って、全員で移動を始めた。

司の後ろ、殿しんがりで並んだ小野と口論義は、少しの目配せのあとに一言だけかわす。

「いい具合に、雨降ってるわね」

「はい。あとは追うだけかと」

昨日の間にはぼ済ませた、被害者たちの共通項・失われたリソクの洗い出し。それら情報により割り出した、小さく些細なフォッグマンの規則性。

いよいよ本日は、小野がその規則に基づいて行動することで、核心に迫る。

「今度こそ、なにかに繋がるといいですね」

「繋げてみせる、と信じましょうか」

角の席を占領した五人は、ウエスタンシャツに褐色のベストを合

わせた踊場が「開拓時代か」と廉太郎からのツッコミを受けつつや
つてきたのを見てから手早く注文を済ませる。

届くまでの間に机の隅にスペースを作り上げ、踊場が昨日のうち
にまとめあげた資料を置いた。そこにはフォッグマン事件の詳細な
全容が調べ上げられている。それも五件のみならず、昨日起きたば
かりの六件目についてまで、である。

「ホント、どこから仕入れてくるのこんな情報」

「知りたいかい？」

「……やっぱいいやめとく」

目の下にくまを宿して虚ろな目で笑う踊場を見ていると嫌な予感
しかしないので、司は丁寧に辞した。

広げられた資料の中には、被害者の連れ去られた状況、フォッグ
マンと共に行動した室内の様子、会話内容、会話時間、などが事細
かに記されている。その中からまとめあげた情報の一枚を、踊場が
取り出して読みだす。

「さて。こうして我々はフォッグマンの出現条件や目的を割り出す
べく、被害者の状況などからその行動の規則性を割り出さんとして
きたわけだけれど。結論から言わせてもらおうと、目的についてはさ
っぱりだったわけなのだよ」

左から右へ、視線をスライドさせて読みつつ踊場は断ずる。それ
については皆も承知のことなので、それぞれからうなずきが返され
るのみだ。踊場はわずかに紙から顔を上げて皆の反応をうかがって
から、続ける。

「だが目標、というていどの小目的。それと思しきものは、少しだ
け見当がついた。いや、目標というのも正鵠を射てはいないのかな

……」

「早くしろ踊場。俺は道場行ってきたとこだから疲れて腹へってんだ。メシが運ばれてきたらお前の話を聞く余裕はないぞ」

「別にきみに話しているわけではないのだけどね。まあ言うこともわからないではないし、さっさと済ませてあげよ。……調べたところ、フォッグマンは犯行の最中、音楽を聴いていることが多かったらしい」

「どこのどなたのどんな音楽なのカナ？」

「単調な繰り返し、それでいて気分への鎮静作用がある曲さ。自分でイヤホンで聞いていることもあれば、入った部屋の中でかけていることもあったらしい。メロディーを聴きだしてもわからなかったからマイナーな曲だと思いインディーズなども当たってみたが、どこにもそれらしき曲はなかったよ。恐らくはフォッグマンが自ら作り出した曲だろう。歌詞も多少は入っていたようだが、そのどれもが暗く、やたらと終わりを暗示するような内容となっていたらしい」

「具体性は無いものの不気味な内容であることに、司は嫌な心地になつた。」

「お冷の中で氷がからりと動き、踊場は目線をそちらに落としながら、窓の外を指さす。」

「ところで雨音にも鎮静作用がある、という話くらいは知っているのではないかな？ つまり、これは二重の鎮静作用なのさ。また単調な繰り返し曲は聴く者の思考を鈍化させ、反抗する気力を削ぐ。その上で、暗い歌詞をも聞かされる。更に言うのなら毎度毎度、フォッグマンは誘う際の文句を除いて部屋に入ってからのパターンが同じ」

「口論義、もうわかつたろう」

「識閼下投射法ね」

「なんですか、それ」

「サブリミナル効果って言えばわかるかしら。映像や音楽などには

んのわずかずつ、認知しづらくらいの音や絵を織り交ぜることで刺激を与えて、無意識下にその印象を認識させて被術者の行動に反映させるって奴」

「わかりやすく俗っぽい説明をするならば、簡易版の催眠術というものだよ」

「催眠？」

問う司にうなずいたのは机に頬杖ついた口論義だった。どこか憂いを帯びた、なにか嫌気がさしたような表情で、お冷をあおって小さく溜め息をついた。また引き継いだ踊場。

「フォッグマンは毎回同じ会話をした。それは、パターンを外れるわけにはいかなかったからだろう。またその会話の中で時折、小さな命令などをしたそうだ。そして被害者たちはおおむねそれに対して、『反抗する気力自体が湧かなかった』という」

「……フォッグマンがやってたのはただの監禁じゃあ、ないの。おそらくはその相手になんらかの暗示を与える、催眠実験なのよ」

十二題目 「追い込みを、はじめよう」と踊場が宣言した（後書き）

次回、GW編終幕。だれかのかくい。

その次は六月に入り、学習合宿編、の予定。

十三題目 「危険な手なのだけ」と廉太郎がぼやく(前書き)

GW編最終章前篇。

十三題目 「危険な手なのだぜ」と廉太郎がぼやく

「本当に？」

重ねて確認を取る司に口論義はうなずきかけるが、踊場がうなずきの形を成す前に「いや、可能性のひとつとしてそういうものも考えられるということだよ」と早口に遮った。その反応にはっとした様子で、口論義はあらためて、踊場の言葉の方に向なずいてみせた。

「……そう。可能性のひとつ、ではあるわ。でも一番高い可能性だと思っ」

「と言ったところで、その催眠実験の先にどういう目的があるのかわからないというのが問題なのだけだね。まあ、それについてはまた調べればいいだろう」

「捕まえたあとで、ですか」

口論義と踊場が、今度は力強くうなずいた。そこで「そこそことサワハが自分の肩かけ鞆を探り、近辺の地図を出す。さらに赤いメーカーも取り出して、キャップをきゅぽんと引きぬいた。

「じゃ、はじめるヨ。小野ちゃん困って探すはどこそこ？」

「ふむ。そうだね。僕の調べたところ、これまでの事件で被害者が声をかけられたのは雨の日、人気の薄い場所のようだよ。人目にくのを恐れているのだろうね」

「んあの俺でも予想つくわ。範囲どこまであるんだよ」

「もちろんそれだけでは広すぎるだろうね。ただ他の共通項としては、被害者女性たちは皆若年層で、どこか家に帰りづらい事情を持った人物ばかりだったという。たとえば家出中だったり、親と喧嘩していたり。まあこの二つの理由は相互に関連性が高いと言えるけ

れど」

「……あん？ まさか、話しかけられるのを待ってたつてののか？」
「五月でも雨が降れば結構冷えるものだよ。若年層ともなれば所持金もそう多くはないだろうからね、口八で一宿一飯にありつける場所を望んでいたというのは、言葉にこそしなかったらしいけれどほぼ確定なのだろうさ」

というわけで、と前置きして、踊場は二か所の駅を指し示した。

「夕刻、人通りの多いこの時間に紛れてフォッグマンが獲物を見定めている可能性は十分ある。小野君には被害者の服装に似たものを着てきてもらったし、これよりこの駅近辺をうろついてもらい、それを僕らが尾行することでフォッグマンを捉える。という方向性で行くだけけれど」

地図から顔を上げた踊場はじろりと廉太郎をにらみつけた。わけがわからないという顔で小首を傾げた廉太郎に、踊場は人差し指を突き付けた。

「その人目につく格好はどういうことだい」

「道場行った帰りだつってんだろ、耳遠くなつたのかよ」

「今すぐ適当な格好に着替えてきてもらおうか。小野君が連れ去られそうになつた際、一番早く動いてもらうことになるのは戦闘しかり柄の無いきみなんだよバカ。そのきみが一番最初から警戒されそうな格好してるってどういうことだいアホ」

「なんだと、お前だつて時代錯誤の格好してやがるくせに。拍車をついたブーツはどうした」

「いいから着替えてきてちょうだい廉太郎くん」

「ぬ、会長が言うなら仕方ない……だが踊場も着替えるべきだと思うのだけ、俺は。なんて言うんだつたか、そう、フロンティア精神

に充ち溢れすぎだろ」

最近世界史で習ったばかりの単語をぶつくさと口にしながら、廉太郎は布袋を手にトイレへ消えて行った。残った五人で額を寄せあい、地図に覆いかぶさるようにして駅の位置を見やる。

「……んー、どっちも都市部の駅だけど、どうかしらね」

「こっちの駅のが通りから死角なるは多い場所と思うネ、連れ去るやりやすいよ」

「ですが雨天ならば傘を差している人ばかりですし、視界が狭くなっていますから。それだけでもかなり目撃される確率は下がっていると思いますよ」

「あと死角が多いとしても、そこって大通りから一本入った歓楽街だよな。相手がいるならともかく、相手を探してる最中の女の子が入るかな」

「奥までは入らず出入り口で相手を捕まえようとするのではないのかな？」

ああでもないこうでもないと話しあいが続き、そこへカツタシヤツとサマーセーターに着替えた廉太郎も合流して、さらに続く。

だが時間帯がそろそろ帰宅ラッシュに近付いてきたので、暫定的に決めた駅周辺の数か所から、小野の判断で選んでもらうことにした。彼女が選んだのは駅から呑み屋が連なる通りまでのちょうど中間点で、そこは帰宅ラッシュの直前にして雨天である現在は、エアポケットのように人気ひんげがなくなっていること請け合いだ。

そわそわと口論義が時計を見上げて、次に小野と視線を合わせた。

「……じゃ、いきましようか」

「はい」

短いやり取りの中、二人の間でなんらかの意識が共有されたらしい。三步後ろで踊場がそれを見て、何か言葉をかけようとあげかけた手を、すっと下げるのが司には見えた。

#

灰色の街にはさばさと、瑞々しい原色の傘が花開いている。

ちらほらと人気を感じられるようになってきている通りの中、小野はシャッターの閉まった店の庇の下で雨宿りをしている、ちよつと不機嫌そうな顔の少女を演じていた。とはいえ元々表情の変化具合が希薄なので、遠くで見ていると普段となんら変わらないように司の目には映った。

三十メートルほど離れた位置にある喫茶店に入った司と踊場は、窓の向こうでじつと獲物がかかるのを待つ小野を見据えて、温かいコーヒーをすすっていた。小野がじろつとこちらを見た気配がして、寒い思いをしている彼女に対して司は申し訳なく思った。

「小野君にはトランシーバーでも持たせておけばよかったかもしれないねえ」

「踊場さん、さっきケータイ持たせてたじゃん」

「念のためGPS機能のついた奴をね。ただまあ、なんというか。じれったくはないかい」

「そりやそうだけど。いちいち小野が『こちら変化なし、どーぞ』なんて言わされてたら気味悪がつて誰も近付かないよ」

「……確かに。このメンツの中には遊びそうな人間が二名ほどいるというものだ」

廉太郎とサワハが交互に小野へちよつかいを出すさまがありありと目に浮かんだ。

「しっかしホントに大丈夫かな。小野は相当強いらしいけど、それでも気になる」

「心配はいらないと思うよ。犬神使いの折には相手が霊体ということもあって対処に難ありだったが、人間相手なら彼女はめっぼう強いのでね。加えて廉太郎もいる。あいつは頭は空だけれど、だからこそ迷わない。ゆえに強い」

「そんなに強いのか？」

「強すぎたそうだな。小野君と同じ中学に居た頃は、相当暴れたらしい。あまりに目に余るので倉内流にて鍛錬を積まされた結果、だいぶ更生して現在のアホなあいつが出来上がったそうだけれどね」

「アホって」

今日廉太郎と最初に会った際に廉太郎の携帯電話で踊場の名が「クソヤロー」と登録されていたのを思い出して、二人の行動があまりにも似通っていることに司は呆れ笑いしか出て来なかった。見られることのないように、口元を隠して笑みを消す。踊場は外を見据えたまま、カップに手を伸ばして暗い面持ちで口の端を開いた。

「迷わないのは、強さに繋がるよ。良くも、悪くも……そう、悪くある時もある」

踊場はそう繰り返して、残ったコーヒーを飲み下した。外の様子にできる限り注意を払いながら、けれど言葉だけは司に向けている。声音が、真剣さを帯びた。

「きみは 迷いなく目標を定めることはできているかい？」

「目標って、きてれつ研に入ってきた理由、とか？」

「そういうものだね。……あいや、別段詳しい理由を聞きたいわけではなくてね。ふと気になっただけさ。僕の周囲にはどうにも、目標や道筋のブレそうな輩が多いから」

誰のことを言っているのだろう、と司は思ったが、踊場が自分の理由を聞かないということが「互いあまり踏み込まず会話しよう」との意であると理解したので、あえて尋ねるような真似はしなかった。

少し考え込んで、司は思った。こうしてまた、不可思議な事件に相対している自分の目的。

答はすぐに出た。それは追い求めるあの呪術師の村に対する目的意識が行動となって現れた結果であり、目標と行動の間には何も迷いや逡巡は無い、と。

「んー、目標と、そこまで行きつく目的はしっかり定まってるつもりだよ」

「そうかい」

「うん。でもそういうこと聞くんことは、踊場さんはなんか目標定まってるの？」

聞き返せば、踊場は司より意識を逸らして黙り込む。なにか思うところあつてのことだと判じて司も黙っていると、踊場は長い沈黙の後にようやく「いや」と否定の意を述べた。続けて小さくうなだれ、韜晦とうかいすることなくつぶやいた。

「僕が一番、ぐらついている。なにせ、他人の目標に左右される目標なのでね」

「……会長のこと？」

「鋭いね。でもあいつに頼まれてのことではないよ。僕が……僕自身がただ、だいたい昔に迷った代償を支払い続けているだけなんだ。そして口論義は、今も少しだけ迷い続けている」

「あんなに真つすぐ進んでるように見えるのに？」

「そうでもない。今回のこれも、口論義が目標に到達できないから

こそ行っている、代替行為に等しいのさ。すべて、迷いだ。きみの目にも、いつかはあいつの迷いが映る時があるかもしれない。だから先に頼んでおく。あいつのこと、嫌わないうであげてくれ」

司の目を見て、懇願に似た頼みごとを言った。困惑する司は、返答より先に問いが浮かんだ。

「どうして今、突然」

「今回の一件では、あいつの迷いが顕著に表れていたためだよ。前はむしろ小野君の方が不安定だったが……それは事件の内容が彼女の目的寄りだったからだろう。なにせよ、これ以上は口論義と小野君双方の理由に触れてしまうから言えないのだけれど、とりあえず気持ちの隅においてほしい。あいつが迷い、弱みを晒すことがあっても、嫌わないうであげてくれないか」

まっすぐに言う踊場に　具体的な内容に触れないまま言うのは卑怯だ、と司は思った。

でもそれ以上に踊場の真剣さが伝わってきて、無視するわけにはいかないだけの重さを伴って心に響くのを感じていた。できるかどうかわからないことを約束するのはあまり好きではなかったが、押しに弱い司はうなずいてしまう。踊場は苦笑いを浮かべて、ほっとした様子で「ありがとう」と言った。

少し気が抜けて、二人は小野の方を見る。状況に変化はなく、廉太郎と口論義とサワハからも特に連絡などはなかった。司は肩の力も抜いて、角砂糖を口に放り込んだ。ついでに正面の踊場に口の端を釣り上げて相対し、踊場が戸惑っている様を観察した。

「……にしても、真面目な話をしてくれたあとでこういうこと言うのなんだけど、すごい必死だったね踊場さん」

「いやまあ、その、なんだ。あいつは昔から暴走しがちなのでね、

放っておけないのだよ」

「昔って、じゃあそんな頃から好きなの？」

「ぐっ！」

息が詰まった音をかなり大きく響かせ、踊場はカップに手を伸ばす。横目で司はその行動を見て、「間繋ぎに飲むのはいいけど、そのカップもうコーヒー入ってないよ」と声をかけ、踊場の手は空中で止まった。

「……あのだね、きみ。まだ一カ月ほどしか付き合いがないというのに、そういう話題は」

「一カ月ほどしか付き合いの無い奴に、さっきあんな重そうな話題振っというてよく言うよ」

窓の外のどこか一点を見つめ視線すら微動だにしない踊場は、司に呆れ声で言われて首筋からすーっと顔を赤く染めた。廉太郎の時とはまた違う反応を司は面白がる。

「が、そうこうしているうちに、踊場が目を細めて視線をぎゅっと絞る。口論義でもこっちに歩いて来ているのかと司も同じ方向を見るが、小野と似た格好の少女が歩いているだけだった。」

「ちがう、そっちじゃなく手前だ」

言われて手前を見ると、レインコートを着た大柄な男がいた。彼は小野の方へ向かっている。

「……これは」「ヒットしたかな？」

急いで携帯電話を手に取り連絡しようとする、二人がアドレス帳を開く前に電話がかかってきた。踊場には口論義から、司には廉

太郎からだった。

《食いついてきたぜ。だがまだギリギリまで泳がせておく……そっ
ちでも準備はしとけ》

「準備つても、なんの」

「雨天だと効き目が薄れるかもわからないが、司君はこれを持って
おくといい」

口論義も廉太郎と同じ内容を話しているのか、廉太郎の言葉を聞
いていたかのように踊場が司に拳を突き出す。掌を出すと拳が開か
れ、落ちてきたのは催涙スプレーだった。これを武器に足止めしろ
ということらしい。

「でもこれこつちに渡しちゃったら、踊場さんの武器無くなるって」
「安心してくれて構わないよ。前回の反省から装備を追加した」

ポケットにまた手を差し込み、黒いボールペンを取り出す。踊場
はテーブルに置いてあった紙ナプキンにその先端を近付けると、ス
イッチを軽く押しこんだ。ビチッと音がほとばしり、ナプキンには
黒く焦げた穴が開いていた。

「……ボールペン型スタンガン……」

《あんだって？ おいマルドメ、あの野郎またそんな危険物仕入れ
てやがるのか？》

「全身凶器に仕立て上げている武装人間に比べればおもちゃみたい
なものさ」

《……参るぜ。そろそろあいつを危険性の高い人物として警察に通
報しなくちゃならん。もしくは黄色い救急車》

「過剰正当防衛がスタンダードという奴よりはよほど安全性は確か
だよ」

《なあ、正味な話、あいつ自分の危険性認識してんのかね？》
「しかしどうせ最初に手が出るくせに、どうしてあいつには無駄に口がついているんだらうね」

互いに相手のセリフは聞こえていないはずなのに、ほとんど会話として成立しているのがある意味おそろしかった。けれど無駄話をしていようと真剣に会議を行おうと、平等に同じように時は過ぎる。大柄な男は、小野に接触し始めていた。肩に手を置く、たちの悪いナンパを思わせる素振りであり小野は嫌がっている。廉太郎に聞こえないように通話口を遠ざけながら、司は一瞬顔を歪めてぢつ、と紙が裂ける音に似た舌打ちをかました。

《ちつ、もうなんかヤバげな感じなのだぜ。おいお前ら！ 一応用意しとけよ！》

司の方で通話が途切れる。と同時に、五十メートルほど向こうの通りの角から廉太郎が駆けだし、小野に詰め寄る。窓越しだというのに、待てやこらああああ、という怒声がびりびりと空中を伝播してきた。向こうの方にいた小野に似た格好の少女が、怒声に驚き逃げて行く。

「僕らも出よう」

踊場に言われて席を立ち、二人して外に出る。ちなみにこうなることは予期して、料金は先に払っていた。

男は廉太郎の存在に気付くと身をすくませてから翻し、踊場と司のいる方へと走る。迎え撃つ二人はこれに対し何気ない通行人のフリをして道をあける、と見せかけて二人同時に足を出し男をすつ転ばせた。顔をアスファルトですりおろしたのではないかと思われだが、油断なく武器を向けつつ男に近付く。

「……うつつうつつ！」

突如として、大きなうめき声があがった。これにひるんで一瞬二人の前進が止まった隙に、男は立ち上がり片手で顔面を覆いながら逃げ出す。踊場が先に硬直が解けて、ついで司、廉太郎の順で追う。歓楽街の間にある狭い道を次々に選んで、男は逃げて行く。狭い道は曇天と相まって薄暗く、ともすれば男を見失ってしまいそうになるが、懸命に追いかけた。たまに人通りのあるところに出ると、周りの人間がどうしたことかと物珍しそうに四人を見てきた。

が、男は道に慣れているのか、追っても追ってもほとんど距離は縮まらなかった。じわじわと距離と体力の奪い合いが続いて、追っている側の司たちが精神的には追い詰められはじめた。

やがて最初に踊場の体力が尽き、司の前で壁にもたれてリタイアした。肩で息をするというよりも息を殺してしまっていて、喋ることもままならないのか手を振ってジェスチャで先に行けと示す。仕方なく進もうとすると、少し目を離れた隙に男が網かご状の大きなゴミ入れを蹴り転がしていて、司は慌ててその場で跳んだ。

「ぐげっ」

ところが司の身体で隠されゴミ入れが見えなかったらしい廉太郎が、背後で轢かれて倒れる。どうすべきか少し迷うが、廉太郎も追い払うようなジェスチャで司に前進を促している。ならばこれも仕方なしと判断して、司は男を追う。あっという間に一人になってしまっていた。

「あんの野郎！」

悪態をつきつつ路地裏から出ると、右手に走る男が見つかった。

すぐに追跡を再開すると、男も緩めかけていた足を再度全力に切り替える。まだあれだけの力を出せるのか、と正直もう息があがりはじめていた司は齒噛みした。

直後、コンビニのゴミ箱が目には飛び込んできた。するとそこにはどういふ廻り合わせか、昨日廉太郎が駅に捨て置いたはずの、骨が折れた傘が乱雑に突っ込まれていた。考えるほど余裕はなく、司は走りながらそれを逆手で持って引き抜き、勢いをつけぶん投げる。うまい具合にゆっくりと三回転半して、柄の部分が男の足の間に挟まり、二度目の転倒の間に稼いだ時間で距離を詰める。

さすがに観念したのか、男は地面に横になったままやめろ、やめろと叫んでいた。何をやめろというのかわからず、司は男に催涙スプレーを突き付けながらレインコートのフードをはいだ。そこにあつたのは、擦り剥いた頬を押えながら片手を突き出して降参の意を示そうとする、気の弱そうな目じりの下がった少年である。司とさして年齢は変わらないだろう。

「……で、あんたどういう理由であの子に手を出してたんだよ」

「ちがう、ちがうんだ！ 俺はただ、善意で」

「雨に打たれてた女の子を家に誘うのは善意じゃなくて下心だよ、フォッグマン」

その異名を出されると、男の手が少し下がり、動きがゆっくりになった。やはりそうなのか、とどこか失望の混じった表情で、司は額に手をやった。こんなオチで、おしまいか、と。

「なんで色んな人にちよっかい出してたのさ」

「それは……ただ、違うんだ。今日のことに関しては、本当にフォッグマンの犯行とかするつもりじゃねえんだって」

「じゃあなんなんだよ」

「こんな時にあんなところろついてたら、あの女の子も、他の奴ら

と一緒に殺されちまうかもしれないから……」
「殺され……？」

物騒なワードが現れたことに、驚きを禁じえない司。これまでの
は全て予習に過ぎず、フォッグマンの本当の目的が誰かの殺人にあ
ったのだろうかなどと考えて。

「そーだぜ、だから俺、昨日もわざと時間ずらして、晴れてる時に
やって失敗させたんだ」

ふてくされた少年のつぶやいた言葉のいくつかが頭の奥に滑り込
み、司の中で他の言葉とつながろうとするのを感じた。他の奴らと
一緒に。

「……殺す……？死ぬ？？ まさか、だよね」
「おーい」

低い声に振り返ると、廉太郎たちが連れ立ってやってきていた。
さらに増援が来たことに、少年が呻く。なにせ、増援は四人もいた
のだ。

四人。そう、小野を除いて、

「お手柄、マルドメくん。さすがネ」
「でかしたわね」

サワハと口論義も、追い付いて来ていた。

悪い予感が、古傷のようにじくじくと司の腹の内では自己主張しは
じめていた。

「……この人お願い。たぶん、フォッグマンの実行犯だから」

「え？ もうそんなとこまで聞き出せたの？ ていうか、司ちゃん
どこ行くの？」

「ちよつと……小野一人にしちゃったから」

つばやきを返すと頭の中で最短の道を考え、ひた走ることのみに意識を集中する。駆けだして、また狭い道を巡る。傘もささずに走る身体に打ちつける雨が肌まで通って冷たさを身の内に宿し始めていたが、気にせず駆ける。

すべて杞憂で終わってくれることのみを望んで、失望のうちに全部終わることを願って。走って、走り続けて。行きでかかった時間の半分で辿りついた時、その願望は正に打ち砕かれようとする瞬間だった。

(いやな予感、第六感だったのかな)

言葉にして口にすることはできないほど呼吸荒く胸を押えた司が目にしたのは、連れ去られようとしている小野だった。六人の女性に囲まれて、白いハイエースに押し込められそうになっている。女性たちはあくまでも表面上はにこやかで、それゆえに周囲を歩く人間もさほど違和感を感じていないらしい。

けれど小野の瞳は虚ろで、どこを見ているのか焦点があやふやだった。駆け寄ろうとして、女性たちに阻まれる。そこから先の段取りは一切考えていなかった司は薄っぺらな笑みを浮かべて無言の圧力の下に制止をかける女性たちに、どう切り返すか考えて。

いちかばちか、演技することにした。

「……あの」

「はい」

冷たい声に、見抜かれているのではないかと心が折れそうになっ

た。かといつてもう退くわけにはいかず、司は小野と知り合いであると気付かれないように注意を払いながら、とうとう賭けに出る言葉を口にした。

「　　？夕べから奇異？という方のスレッドを見てたものなんです
が」

#

「……くそっ！　出やしねえ」

廉太郎が乱暴に電源ボタンを押し、無機質な留守番電話センターの音声を掻き消す。雨の降る中で傘もささずに立ち尽くす四人は、周囲から奇異の目で見られながらも手掛かりを探していた。ただ一人、骨の折れた傘をさしている少年は、頬の擦り傷を押えながら恐る恐る四人に追従していた。

「しかし、ここの壁の辺りに残っていた赤い液体と臭いは僕の催涙スプレーのものだ。司君がメッセージのつもりで残したのだろうが……正直これだけでは『まずいことになった』ということ以外は何もわからないというものだね」

落ちていた司の携帯電話と小野のGPS携帯電話を拾い上げて、踊場は悔しそうに言った。

「マルドメも電話はつながらんし、こいつは大して役に立たんし」
「はあ、まことにすいません」

廉太郎の剣幕に押されて少年は思わず敬語になってしまふ。ぶつくさと文句をたれながら、廉太郎は少年を指差した。水滴がついて

鬱陶しいので眼鏡を外しているのだが、素の目つきがあまり良くないためか、廉太郎の目に射すくめられるたびに少年はおびえていた。

「さっきの話がホントなら、お前覚悟しておけよ。人の生き死にに加担しちまったかもしれんのだからな」

「まじっすか」

「マジだよ。まさか被害者にまだ災難が降りかかってたなんざ、思いもしなかったぜ」

「……というか、わざわざ被害者さんに似た格好してこんなところついてたなんて、みなさんはどういう関係の何をしているグループで、」

「あんま深く知ろうとするな。身が危うくなるぞ」

片手を突き出して追求を制した廉太郎はうまく説明のステップを省き、圧力をかけるだけかけてから踊場、口論義、サワハの三人と輪を成して話をはじめた。

「要はこいつ、ただの実験のために駆り出された捨て駒だったってことだろ？」

「そのようだね……ああくだらない、くだらない奴のせいではないことになってしまった」

「すみません」

「謝るするくらいなら、するしなきゃいいのに。ばかネー」

三人にぼろくそに貶されながら、少年は肩幅を縮めて小さくなっていた。口論義は壁に背を持たせかけて灰色の空を眺め、自分たちがかなり見当違いの方向を追っていたことに嘆息した。踊場がその横に寄り添いながら、状況整理を始める。

「目的は次の行動にあって　六つの事件は、実験のための実験に

して準備でもあつたとはね」

少年の言い分によれば、フォッグマンは全員ネット上で雇われた愉快犯にすぎなかったのだという。目的は明かされることなく、ただ「配布された音楽を雨の日に流しながら」「指定の言葉を指定のタイミングで指定の場所で言い」「相手の反応に応じて選択肢から言葉を選び直し」「時折簡単な命令を挟んで相手が従つか確認しろ」とのことだったらしい。

その先にあつたのは、実験結果を元にして行われる恐怖の本番。

「……して、そんなくだらない実験で、きみは一体いくら貰ったんだい」

「いやあ、そんなにもらつてねつす。二万くらいつす」

「本当は五十万エンとかもらつてたりするはないの力ナー？」

「あははは、ないです、ないです」

「へえ……いい御身分ねえ。そんな仕事で五十万もらえるなんてあたしだつてやりたいわ」

虚言看破で発言の真偽を見抜いた口論義の発言に、少年は固まった。だが少年を驚かせるためだけに口論義が能力を使うはずもなく、さらにこの金額から推測をはじめた。

「一応犯罪、だけど安全度はそれなりに保障された仕事。で、五十万もらえる。黒幕はよほどの酔狂か、金の有り余ってる大富豪かつてとこよね」

「人物像よりも着目すべきはおぞましいまでのその目的だと思っね。フォッグマン事件はただの催眠実験で、段階を踏んで行きつく先が……まさかこんな大問題とは」

踊場と口論義が言葉をかわしていると、首を横に振りながらサワハが間に割って入った。

「答え探しあとあと。そんなんに必死なると時間なくなったら、それこそ笑えないのコト」

「だが追いかける手立てもないのだよ？」

「ん、そうでもないヨ？」

サワハが言うと、四人から注目が集まる。頭を掻いてから顔に滴った雨水を拭い、サワハは片目を閉じた。そして開いたままの目の前に、左手をかざす。あ、と廉太郎が声を漏らした。胸ポケットに手を当てると、先ほどしまった廉太郎の眼鏡がない。サワハの口がにやっと笑みをかたどる。

「ぶつちやけ、マルドメくん私生活覗き見しちやあーかとも思ったケド。正解だったのはあとにとつといたことだったネ」

「……おいまさかお前、先月入院した時に能力説明してからマルドメに触ってたが。冗談抜きでマジにレンズ設置してやがったのか」

感づいた廉太郎が問いかけると、間の抜けた声でサワハはピンポイントとつぶやいた。

そして眼鏡をかけ、かざした左手の向こう側に、彼女のみが視認し得る世界を見出し。脳内に鮮明に映し出される情報を取捨選択しながら、司の現状把握に努めた。

「んじゃいくヨ。追跡、開始」

ぐぐつと、視界が移動する。そこは車内のようで、スモークガラスの向こうにはどこまでも続く壁が見えた。隣には小野が眠っているのか首を傾げた状態で司に向かって倒れ込んでおり、その向こう

のガラス越しには追い越し車線をクラウンが走り抜けていくのが視えた。

サワハの視界が正面を向く。頭上を看板が過ぎ去ろうとする。

「緑の看板……？ 鳥森、って地名カナ。まつすぐな道……」

「その地名ならすぐそこよ。でもまつすぐな道って……ああそっか。現場こゝからならすぐに高速に乗れるものね」

「なに、もう高速に乗っちゃまってるのか？」

「そだね。三重県の方にずーっとすーっと進んでってるヨ。乗ってる人は隣に小野ちゃん、あとは知らない女の人たくさん」

「……その女性たちというのは」

「被害者たち。そっなのね？」

確認をとるべく口論義が少年を見やると、彼は静かなうなずきと共に、罪悪感でいっぱいと言いたげな表情をみせた。終わってしまったことをとやかく言っても仕方がないが、口論義は一言「最悪ね、あんたも」と吐き捨ててからがしがしと濡れそぼった髪をかきあげた。

「まさかこんなことになるなんてね」

「だがどうする会長。追いかける方法がないぞ」

「こつなりゃタクシー拾うしかないでしょ。お金が心配だけど」

「へい、ツクツク！」

サワハがレンズを発動していない方の手をあげた。三輪の車なんて日本じゃそうそう来ないだろ、とサワハを除く三人は思った。ところが、口論義たちから三メートルくらいの位置で止まる車があった。

けれどそれはキャラバンだった。ヒッチハイカーかよ、とサワハを除く三人が思いながら、ワイパーで雨を拭ったフロントガラス越

しに運転席の人間を見ようとした。ぎー、とゴムのすれる音がしてパワーウィンドウが開かれ、雨の中に車内から煙が放たれる。

「あれ、きみらそんなところで雨に打たれて何してんのだね」

乗っていたのは、空き缶の山を後部座席に積んだ赤馬だった。

#

ハイエースに乗せられた司と小野はじわじわと移動させられていく。司の肩に寄りかかっている小野はぐったりしており、意識はあるものの身体が上手く動かないようだった。腹部を片手で押えているので司がどけてみると、ブラウスの隙間から肌が赤くなっているのが見えた。電流斑だろうか、と司はあたりをつける。

「すみませんが彼女には少々手荒なことをさせていただきました」

助手席に座る女性が言う。歳は二十代半ばといったところか、薄茶色でカールしたショートボブの髪の隙間に、青白く瘦せた顔が見え隠れしていた。質素で飾り気のない白いチュニックと、黄土色のフレアスカートを着ているが、その地味な服の印象にさえ埋もれ消えてしまいそうに思えるほど、生気のない顔色である。

ぼそぼそと喋る声音にも張りが無く、見えるか見えなかわからないくらいに細い糸のように、ゆらゆらと車内の空間を漂うばかりだった。

「以前にお会いしました際にはこのようなことはなかったのですがね。日にちが経つにつれ精神に変調をきたしたのやもしれません……ところで、あなた様はわたくしと七無^{ななし}さんのやりとりを見ていらした一人なのだそうですね」

「あ、はい」

「わたくしは夕べから奇異という名であるスレッドを進行させておりました、加良部雪と申します。短い間ではございますが以後お見知りおきを。あなた様のお名前はなんとおっしゃるのですか？」

「えと　丸留司。です」

とつさのことで司は、廉太郎が呼び始めた名前を名乗っていた。加良部はふむふむと不思議そうにうなずいて、後部座席を向いていた首を正面に据え直した。その横顔を二度三度と見て覚えた司は、確証こそ持てないものの、やはり会ったことがあるように感じた。加良部とは、昨日訪れたネットカフェにて出会っているのだから。同じ245の部屋を使い、すれ違って。

加良部の方は何も気づいていないらしく、ルームミラーに映る司の顔を見向きもしない。ただ平坦な声で、平凡な答えを返してきた。

「マルドメさんですか。良いお名前ですね」

「どうも。でも、いきなり参加する形になってしまいましたすみませんね」

「……そうですね。実を申しますと本来この道程には、そちらに居る橋本さん」

と言つて、加良部は小野を手で指した。被害者の服装に似せたことによる効き目は、こんなところで表れてしまったらしい。思い返してみると、出現したフォッグマンを追いかける直前に、司は小野に似た格好の少女を道の向こうに見た気がした。どうやら小野は、その橋本さんと間違つて捕えられたらしい。

そこで小野がぎゅっと、司の袖を引いた。……司は何も言わず、その手に自分の手を重ねた。

「彼女をお連れすることでおしまいとなる予定だったので

ね。しかしマルドメさんは我々の立てたあのスレッドをご覧になっていらつしやった御方のようですし、七無さんの条件にも合致しております。よって、この往路のみの旅に同行することになんら問題は発生いたしません」

簡潔にそう述べて、加良部は深くシートにもたれた。長く、浅い溜め息がすうつと漏れる。

退廃的な、気だるい雰囲気車が車内を支配していた。誰もがそれに則って退屈そうに見せているかのように、司には感じられた。どの人物も顔色に生気がなく、苦しさに胸を圧迫されている悶絶の表情を浮かべている。

そうした辛さが感じられないのは、ルームミラーに映る加良部だけだった。皆一様に死人に近い色合いの顔を晒している中で、彼女だけが異質だった。まるで、もう生きながらにして死蝻と化したかのような、行き着いてしまった表情を見せていた。

「ごゆるりとお寛くわんぎくださいな。これでおしまい。そう？ぜんぶ？がおしまいになるのです」

濁りきった瞳は動かない。生きている人間の中でこれほど死を見越した目を見たのは、司としても初めての経験だった。それゆえに危うさを知らせる第六感が、皮膚の表面そこかしこに、ひどく濁った汚らしい泥がへばりつくような感覚を覚えさせている。

とはいえ命の危険を知らせるその感覚から逃れたくとも走行中の車内から逃れる術があるはずもなく、司はその幻覚を「失せる」との一言で掻き消した。……皮膚の内外を這う悪寒が消えたあとも、蔓延する淀んだ負の気は消えてくれなかったが。

そこから意識を逸らすためにも、司は加良部に話しかけた。うるんな目つきの加良部は、若干疲れた色をかすれ声に孕ませてはいたが、律儀に丁寧ていねいに司に応じた。

「どこまで、走るんですか？」

「ああ……そうですね。けれど、どちらまで行くとして結局は同じです」

「おなじ？」

「ええ。方法の差異も些事にすぎません。わたくしたちの行き着く場所は、息つける場所は、今やこの世のどこにもないので。しかし七無さんのお言葉を無視するわけにもいきませんので、道の先にある峠に位置を定めようかと思っておりますよ。？ ぜんぶ？ であるみなさんのご意思にも、よりますが」

ぜんぶ。加良部は車内の女性たち、一言も語ることなくただ望洋している彼女らを、そう呼んだ。それはあのスレッドにて七無と話し合っていた「同じ思っている人」であり、すなわち 加良部と共に集団自殺を行う仲間のことである。

（フォッグマン事件は、全てを実行に移せるか試すための実験であり 同時に実行に移す際の下ごしらえでもあったんだ）

司はそう推測した。

フォッグマン事件。催眠実験。それは今ここにいる？ ぜんぶ？ を作り出せるか試すためのものであり、作り出せた場合は？ ぜんぶ？ で実行に移ることができるようにするための下準備でもあったのだと。

（ちらつと見たただけだから確実にそうだとは言えないけど、たぶん合ってる。この？ ぜんぶ？ の人たちは ）

車内を見渡して、女性たちの顔と頭の中に浮かべた写真の顔が脳内の画像と一致するか確かめる。その顔を以前見たのはちらりと一

瞬、しかも一度だけだったとはいえ、見たのはついさっきのことゆえ容易に判断はできた。顔は全て一致している、と。

踊場の持つてきた被害者女性たちの資料にあった、被害者たちの顔写真と一致している、と。

(くそ。赤馬さんのとこでやった被害者たちの共通項洗い出しの時にも、昨日の夜スレッドを開いた時にも、妙に感じてた違和感……これだったんだ。フォッグマン事件も、七無のスレッドも、どちらも対象者が女性に限定されてること)

事件の後に、被害者たちはこう語った。「いつの間にかフォッグマンはいなくなっていた」「いつ出て行ったかわからない」「霞がかつていて思い出せない」と。おそらくはその空白の時間こそがしつかりと催眠にかけられた瞬間のため、忘我の状態だったのでは、と司は推測した。そしてその催眠とは、フォッグマンたち、そして加良部が深層意識下に植え付けた命令である。

命令とは言っても「共に死のう」などといったものではない。そもそも、人間には己の命を守ることが本能として刷り込まれているのだからそんな命令は土台無理な話なのだ。だからそこにあつたのは、踊場たちが言っていたように「反抗する意識を失わせる」ことにより、施術者であるフォッグマン、ひいては黒幕である加良部の意に賛同させること。

俗に言うところの後催眠暗示である。ただ、後催眠は一定の条件下で発生する無我の状態、いわゆるトランスに入らなければ発動しない。無意識下に刻まれた暗示は、通常の意識下では思い出すことすらないはずなのだ。ではそのきっかけは

「雨、か」

「どうかなされましたか、マルドメさん」

「いえ、何も。今日も雨降りだな、と思って」

「左様でございますか。ええ、雨ですね。とても快い、心地良い雨の日です」

暗示は、暗示をかけられた時と同じ条件下になった際に現れることが多いという。それ故に仕掛けた後に解除しなければ日常生活の中で支障をきたし、果ては人格の崩壊まであり得ると、雑談中に踊場と口論義から話を聞いたことがあった。

フォッグマンが犯行時に雨天を選び続けた理由。それは雨のリズムとイメージにより自動的に発動する後催眠により、被害者の女性たちを意のままに操るためのものだったのだ。

（それら実験を行う場所を公共の場から他人の家まで幅広く用いたのは、あえて犯罪とすることで街中、もちろん被害者たちも含んだ街全体に警戒させてなお、催眠が有効か試すため。わざわざ監禁にしたのも、そういう意味かな。警戒させることが目的で、別にどんな犯罪でもよかったから）

ついでに付け足すなら、逃げる途中で家主が帰宅してしまった場合、鍵が開かなければ時間稼ぎになるからだろうと司は思った。あれは閉じ込めるための監禁ではなく、フォッグマンたちが出払ったあとで後催眠をかける際に、家主と遭遇しないために用意した加良部の策^冊だったのだ。

事件の全貌は、裏側までようやく見透かすことができた。

が、時すでに遅し。司と小野は敵地の真ん中に入り込むことで真相を手に入れたが、その真相を持ち運んで逃げる時間はなかった。一人の人間が生んだ死を求める意思が渦巻き、底なし沼のように司たちを絡め取っている。

「……良いですね。やはり殿方の存在しない空間というものは、落ち着くものです」

加良部は何の感慨も湧かないという顔でつぶやき、ますます深くシートにもたれた。そのようなセリフを言われてどう対処したものがわからず、司は曖昧にはあ、と一息の返答を吐いた。加良部はそれにも動じず、応じる。

「心配なさらずともよいのですよ。おわりだけは誰にも優しく、等しいですから。無論、このことを理解することのできない方々が多くいるのも事実ですがね、本当は誰しもがどこかでおわりを求めているはずなのです」

司は答えずに、隣で肩を寄せる小野を見た。ようやく身体の自由が利くようになったのか、彼女はふるふると青ざめた唇を震わせ何事が伝えようとしている。司は首と耳を、小野の言葉に傾けた。けれど音は耳で拾えず、目で見て口の動きで判断するしかなかった。

「終極でなく絶頂、逃避ではなく反抗だということ誰も理解しようとしません。理解が及んでも認めません、聞かず認めず知らんふりです。そうしてわたくしたちの何もかもが許され得ないというのに、最後の遺志にさえも皆が耳をお塞ぎになるのです。ではどうしろというのでしょうか？」

鼻を突く臭いがあった。またも第六感に何か感ずるものがあったのかと思えば周囲を見渡すと、何のことも無い。加良部の居る助手席から、ふすふすと湿気た煙が流れてきているのだった。一吸いしてしまっただけで頭の中で脳がぐりんと反転したような気分を味わった司は、耳を小野に寄せたまま袖で口元を覆い隠して、小野にも同じようにして煙を吸わせないようにする。

そんな二人の様子も車内の女性も気にした風ではなく。加良部は沈んだ張りの無い声のまま、台本でも読み上げるように淀みなくす

らすらと喋った。

「続きが続いてどこまでもいって、それでおわりが無いなどということがありえまじょうか？　ありえないでしょう。過去から続いてきた歴史に重みはあるでしょうが未来がきておわりがくれば無いも同然、だったらいつそ未来に抗って道を選ぶべきではないのですか？　困難に抗わないことは不幸で自慰に耽^{ふけ}るに等しいと言っではないですか」

わかりづらい主張を述べつつ、車の揺れとは明らかに違う周期で、加良部の首が揺れる。

が、そこに紡がれる言葉には、納得しかけてしまう部分も多く含まれてはいた。とくに司にとっては、怨嗟のように言の葉を振り絞る加良部の姿が、これまで接してきた霊に重なっで見えたのだ。

世界を恨み、息絶えてからも恨むことで世界に執着した者どもの顔が、ふっと脳裏に浮かんで消えた。辺りを見回せば、司には視えてしまう気がしてこわくなった。

(……きつとこれは死者の怨念と、変わらない。それしかできないから、精いっぱいそれを以てこの世に反抗しようとするという点で)

「わたくしは安い同情を煽るべく不幸を強調するものではありませんよ。決してそのような意図ではございません。わたくしはあくまでおわりを望むのみ。けれど一人ではいけない、それはいけない。同じ痛みを抱える者がいる限り、わたくしも辛い。だからこそ共に思い同じくする者を集うたのです」

(なら、それを止めるべきじゃない気がする。ここでおわるのかおわる先で長く待っておわるのかわからないけど)

「このことのみが、わたくしの最後の遺志なのです」

（それが、意思なら。遺志なら。邪魔するべきじゃ、）

「、。」「

聞きとりづらい音が、思考の間を縫って現れた。

加良部が語るその間も、小野のささやきは続いていたのだ。司は煙が染みて考える力の低下していく頭の中、おもむるにもう一度小野の言葉に耳を澄ます。しかし伝えたいものがあつたというよりは、うわごとのように近くの誰かに話しかけているだけのようだった。

「もしくは、この世の他の人々がおわりも道の上であると認めないのなら。それは自らの足下を泥沼であると認めるに等しいのではございませんか。ああ。もういつそ、全部が？ぜんぶ？でわたくしと共に思いを同じくすればよろしいのに」

ひふ、ひふつ、と痙攣した呼吸音を言葉の端に混ぜて、やがて加良部は窓の外へ燃え尽きた葉を捨てた。外からの風で少しは換気がなされ、司はせき込みながら新鮮な空気を取り入れた。だが一度頭まで回った煙は平衡感覚を蝕んでおり、車が少し揺れるだけで頭が左右に振られた。他の乗客の女性たちも、似たような状態にある。世界が、傾いていた。

……その中であつて小野がささやく言葉だけが、司にしつかりと足下を認識させていた。聞こえづらく、内容がつかめないにもかかわらず。ひたすらに、現実的な重さを伴って。

「少しつづけば皆、中身は同じではありませんか。ああ、これは賤すつもりではなく本心から、同一であるとの意味合いですよ。わたすだけでは特別どこか風変わりというわけではございません、皆様

同様におわりを望む心持ちを有していらっしゃる」

ともすれば口から臓器が漏れ出て、身のすべて裏返しになってしまいそうな吐き気の中で、確かに小野だけが現実の重さと一緒にそこにあると司には感じられていた。煙のために思考を惑わされ、刻一刻と移り変わる意識の奥底まで、小野のささやきのみが届いていた。

「皆様、生きながらに死んでしまっている不幸なる部分もあるのですよ。わたくしが正にそうですがね。そうであるならば　人を呪うことでもあるでしょう」

加良部の声が、遠く、響き、こだまして。

「……………」

小野の言葉が、近く、弾け、目覚めさせた。

司はポケットから小刀を取り出し、小野と重ねた左手を離すと自らの膝の上に下ろす。息を整え、その呼吸でまだ薄く取り巻く煙に意識を吞まれかけ。

急ぎ鞘を払うと、親指の付け根の肉が厚い部分めがけて、短く構えた刃先だけを突き刺した。ところが浅めに刺すつもりだったが平衡感覚のみならず遠近感も狂っていたらしく、刃が骨にふれた接触が激痛として脳と神経をひっかいた。掌で血が噴き出し、視界に星が飛ぶ。貧血の予兆に似た感覚がぐつと司を通り抜けて。

その衝撃で脳の位置が正常に戻った、とも感じられた。世界の傾きが、尾を引きながらも正常な位置を定めていく。とはいえ運転手も薬に酔わされたのか、ハンドルさばきが覚束ないので横揺れだけは残っていた。血と共に薬の作用が抜けていく感覚に、しばし司は

身を任せた。

「……………あー、痛……………」

「いかがされました、マルドメさん」

掌を押えて止血する司に、虚ろな加良部の声がかげられる。

本心から心配しているわけでもない、なんの感慨も無い声。希望も、展望もない。反抗する気力すら残っているか怪しい声である。惑わされるほどのこともない、催眠にかけられるはずもない。気付かないように少しずつ音量が上げられ、聴覚に訴え続けていた催眠用の曲目も、わかってしまえば跳ねのけることは十分できる。くだらないと断ずることも可能だ。

ずっとそのことを教えてくれようとしていた小野に、司は感謝の視線を向けてから。

向き直って、ルームミラー越しに加良部を睨みつけた。吹き出す不満に似た言葉を自分の中に押え蓄えて、まとめてから叩きつける。加良部に向けて。

「……………ま、そうだね。誰にだって不幸な部分はあるよね」

「そのとおりです」

「ならそれは他人には理解できない、自分だけのものであるとは思わない？ 特別な、己をおわりに導く道しるべとしての、さ……………もちろん、決しているものじゃないけど。でも自分だけのものって意味じゃ、悪いものの中では良い方じゃない？」

小野が薄く目を開いて、隣で険しい目をしている司を見る。

その目にはどこか、見覚えのある鈍い輝きが宿っていた。

そして司の問いかけにも、加良部はやはり、何も感じない、考えていない顔でつぶやいた。

「ええそのとおりだと思います」

「じゃあ 人を巻き込むな、バカ野郎」

吠えるように言い放った司に、何の感情も現さない顔で加良部は振り向く。ところがその後、凶悪なまでに歯をむき出した、嫌悪感に満ちた顔で司を見据えた。否、司の、後方を見ている。

視線の先に気付いた司が振り向くと同時に、大きな震動が車体を揺るがし貫いた。

十三題目 「危険な手なのだぜ」と廉太郎がぼやく（後書き）

戦いの収束へ向けチエイスはさらに激化し、加速する。

次回GW編完結。結局最初の二日しか動いてないのは気のせい。

十四題目 「」……………」と小野が絶句する(前書き)

GW 編終幕。

十四題目 「……………」と小野が絶句する

#

赤馬たちが車間距離を詰めて追い越しをかけようとした瞬間に、司たちの乗るハイエースは軽くブレーキをかけてキャラバンに接触をしかけてきた。赤馬はかわそうと右へハンドルを切ったが間に合わず、凄まじい衝撃に乗員全員が固まった直後、さらなる衝撃が六人を襲った。

「……………」

エアバッグから顔を上げた踊場は自分の正面に何があるか確認する。ひび割れたフロントガラスの向こうでは、中央分離帯の柵が、たわんで車体を押し留めていた。ひゅんひゅんと眼前を行く車の群れを見、反対車線に突き出していなくてよかった、と心拍のあがった胸を押える。

だがルームミラー越しに背後がちらりと見えた瞬間、心拍は一気に鳴りを潜めた。

「……………」
「口論義！ 口論義っ！」

がちゃがちゃと震える手でシートベルトを外し、後ろに向き直る。真後ろに陣取っていた口論義は、シートベルトのおかげで前に吹き飛ばようなことにはなっていないかった。しかし、積み荷がある。元々は赤馬が空き缶（とどこから持ってきたかわからない銅線）を換金しにいく途中で無理に乘せてもらったので、最後尾の座席には大量の空き缶の袋がある。

急停止して慣性のままに飛んで来れば、下手すれば大げがかもし

れなかった。

「……うるさいぞ踊場。その様子だとくたばってないようだな」

だがそこへ答えたのは、廉太郎だった。口論義の隣、真ん中の席に陣取っていた廉太郎は、左腕を後ろに突き出して口論義の頭に空き缶の山が直撃するのを防いでいた。ああ、と嘆息して、今度こそ心拍が限界まで跳ね上がる。油断すると涙腺まで緩んでしまいそうで、踊場は自制するのに苦労を強いられた。

「ぜ、全員無事なのかい？」

「なんとか、ね」

口論義がふせっていたところから顔を上げて言う。奥で空き缶の山を回避しながらレンズの発動を器用に保持していたサワハも、片手をあげた。

手が上がらないのは二名。運転席で鼻血を流している赤馬と、なんとなく連れてきてしまったフォッグマンの少年だ。二人とも気絶してしまっていた。

「しっかしふざけたものだぜ。あの連中まさか体当たりしかけてくるとはな。鞭打ちにでもなったらどうすんだ」

「でもマルドメくんいたは確かよ、振り返るでこっち見てたネ」

「小野ちゃんらしき頭も見えてたわね。くそ、もう少しだったのに」

踊場が右手側、進行方向を見やると、彼方に豆粒のようなサイズになったハイエースが見えた。追い付きかけたのに、逃してしまう。禍々しい気配をまといながら、ハイエースは遠ざかっていく。

「……早く追い付かねばならないのに。取り返しのつかない事態に

なってしまう前に」

「踊場サン、それどゆこと？」

「いつ事故を起こすかわからないのだよ、あの車両は」

言い残すとドアを開けて踊場は雨の下に飛び出し、ぐるりと回って運転席に近づく。少しへこんではいたもののドアはすんなり開いたので、シートベルトを外して赤馬を運転席から引つ張りだした。続けて後部座席に押し込んだので、反対から押し出された口論義が助手席に乗せられる形になる。次いで踊場が、運転席にてシートベルトをしめた。

「追いかけるよ口論義」

「……あんたまだ免許取れてないわよね？」

「高速教習もまださ。が、オートマならなんとか運転はできる」

チェンジレバーをリバースに入れ、踊場はハンドルを握った。前面部はひどくひしゃげていたが、内部にまでは損傷がないのかゆっくりと車体が動きだす。ワイパーを作動させて雨露を払い、準備はできた。

「おっかなびつくりだなオイ、大丈夫か」

「大丈夫なわけないだろう」

車線に対し垂直になると、踊場はブレーキから完全に足を離れた。がこんとレバーを入れ、アクセルを踏み込む。動きだした車体はすぐに加速して、速度だけならば周りの車にも溶け込んだ。だが少しハンドルさばきがぎこちないことと、前面部の大きなへこみが威嚇のような効果を表し。周りを走る車は事故に巻き込まれたくないという心理が働いたのか、踊場に道をあける形になっていった。

「……で、なにがなにであの車危ないノ？」

「ああ、それかい。単純な話ではあるのだけどね、」

「ちよ、ちよつと踊場、あんた話してて運転だいじょうぶなの？」

「どうせ大丈夫ではないし、話しながらの方がいくらか気がまぎれるというものなのでね……廉太郎、無学なきみでも？ハイウェイの幽霊？くらいは知ってるだろう」

「あー知ってる知ってる。うちにもよく出る」

テキトーな受け答えをした廉太郎を踊場は無視して進めた。

「日本式に言えば？消えるタクシーの乗客？だよ。夜道で女を乗せたつもりだったのに、目的地について振り向くと乗せたはずの女がいないという話さ。怪談話の落ちとしてはこのあとに目的地の家で話を伺って、その家の娘が亡くなっていること、今日がその命日であること、などが運転手に語られて終わるのだが……これらの現象について感覚遮断性幻覚という現象で説明をなされていることがある」

要は五円玉揺らす代わりに車を走らせるのさ、と踊場は説明を加えた。納得のうなずきを示したのは口論義だけである。細かい説明をする必要性を感じ、頭の中で説明文を浮かべた踊場は暗くなりつつある周りに合わせてライトを点灯した。

「高速道路や、外国でならハイウェイで起こることが多いため、ハイウェイヒュプノシスとも呼ばれる現象だ。同じ景色で平坦な道を同じ速度で走り続けると、視覚刺激の単調さから慣性化を引き起こして眠気を催す。五円玉を揺らすのと同じようにね。」

だが運転している以上は緊張感も保たねばならず、精神状態は非常に危うい域に突入するわけだ。するとこの時の精神状態は、催眠にかけられる時の状態に似てくる。結果、夢うつつのまぶたの裏に

は本来あり得ないものが映り始め、自己催眠による幻覚の一丁上がりさ」

「ちなみに速度は時速七〇キロくらいが一番その状態に近づきやすいと言われているわ。といっても、最近は高速も居眠り防止用の細かい段差がいくつも設置されてるから、そういうことは起こりにくいらしいけどね」

口論義が言った途端に、ががががと車体が細かく振動した。廉太郎も踊場も口論義も薄闇に包まれ始めた向こう側へ目を凝らすのが、少々ひび割れてしまったフロントガラスということもあり見通しは悪い。ハイエースの影はまだ見えてこない。

「でもそれがどう関係してくるんだ？ たしかにあの連中、集団自殺を目論んでるとかいう話だったが」

「説明のためにはもうひとつ聞かなくてはならないよ。……こっくらさんくらいはさすがに知っているだろうね」

「俺んところはキューピッドさんだったが、まあ同じやつだろ」

今度はふざけず廉太郎も真面目に答え、踊場もうなずいた。

「それだよ。ところがあれは安易で容易な交霊術として浸透してしまっているが、一種の集団幻覚、集団ヒステリーを引き起こす要因にもなりうる危険な術なのだよ。というのも女性というのが元来、神域や霊域に近づきやすい存在とされていたからでね。ほら、巫女や沖縄のユタなどは女性がやるものだろう」

後者については知らなかったので適当に相槌を打った廉太郎とサワハは、先を促す。

「古来、女性にはそうした力があると見なされていたのさ。風土が

生んだ民族性によるものでもあるが、詳しい話は割愛しておこう。ともかくにも、女性には霊性が宿り易い。憑依などはその最たる例だ。ではそうさせるものがなんなのかはわかるかい？」

「群集心理。さっき言った集団幻覚やヒステリーにもつながる、集団が作る心理、でしょ」

口論義の相の手が、踊場の言葉の足りない部分を補完した。

「そう。一つの群衆、集団が同一の考えの下に集まることは、強い力を持つ。こつくりさんなどは簡易化されて行われることばかりなのでね、実際のとこ術としては未熟であることが多い。とはいえ多人数、しかも感受性の強い若年層の女子のみでその存在を信じて『こつくりさん来てください』と口にすることは、強い憑依状態にまで導かれるほどの言霊と暗示性を生み出すこともある。七十年代から八十年代にかけてブームになった際も憑依例は数あったという」

「たしかにまだあの車、高速降りるはしてないけど……なかで同じことなってる言うノ？」

「とびきりたちの悪いものとしてね。なにしろ集団として持っている方向性が自殺なんだ、どんな幻を視て死に誘われるかわかったものじゃないだろう？」

踊場は賛同を求める言葉を放ち、直線の道が見えてくるとさらに加速した。まだハイエースは見えてこないが、サワハの視界では高速を降りていないということなので、針路を変えることなく進み続ける。

「でも踊場、具体的にはどう止めるの？」

「ぶつけられた以上、ぶつけ返す他ないと思うよ。横に並んでガードレールの方へ押し込む」

「ずいぶん強引な手だな。けど、こんだけ破損しちまってんだか

ら、大して変わらんか」

「……きみら、誰の車だと思ってるんだね」

鼻をすすりながら赤馬が目覚める。

踊場たち四人は何も言わなくなつた。

#

踊場たちの会話が聞こえていたはずはないのだが、同時刻にハイエースの針路は高速道路を降りて山を目指し始めた。ほぼ全員が夢うつつの幻の中にいる車内で、司は自分の精神を保つのに必死だった。

「あの車……友達が、仲間が乗つてたのに！」

「そのことにつきましては面目次第もございません。わたくしにとつてもっとも唾棄すべき人間の姿が見えましたゆえ、あのような行動に出してしまったのです」

「なんで、どうしてそんなことになつたのさ」

「申し上げる必要性を感じません」

無機質な加良部の音声は、司の心を波立たせた。彼方に置いてけぼりにしてしまった踊場たちが無事かどうか心配であったが、携帯電話はこの車に乗り込む前に奪い去られてしまい今は雨降る路地裏に放置されているはずだ。連絡を取る術は無い。

どうにもならない状況にも苛立ちを覚え、司は加良部の方へ身を乗り出した。すると加良部の方から、先の司の言葉に対する返答のようなものが発せられた。

「自分だけのものなら、巻き込むな、とおっしゃいましたね」

「言つたよ。周囲を巻き込むなつて」

「しかしわたくしは道を示したのみです。おわりを。道を。そこに乗ってついてくる者の責任までをもわたくしが被らなくてはならないのですか？ かような道理は通るものではないです。」

「なんだ。ついてきた奴が悪いから、そそのかしたあんたは悪くないって言うつもりなの？」

「息苦しい生き苦しいともがく人を放置することが善行であるならば、わたくしは悪とののしられようと一向に構いません。巻き込んだという言い方はいささか心外ではございますが、そこから既にわたくしとあなた様の間には見解の相違があるのでしょ」

かたくなに意思を交わすことを拒み、加良部は運転手に針路を山へ向けるように頼む。今走っている最中の人里を通り抜ければ、もはや加良部を止めることのできる場はなくなってしまつように司には感じられた。

「逃げないでよ」

「逃げるとはどういう物言いです？ あなたの前進と呼ぶ方向とわたくしの前進と呼ぶ方向が逆であるというだけで、あなたの主観でわたくしの道までをも変えないでいただきたい」

「あんたそうやって、わかり合おうっていうことをしてこなかっただけだよ」

司にかけられた言葉に、初めて加良部は反応を見せた。だがはかなく短い反応は加良部自身すら気づくことはなく、

「お心遣いは、少しだけ嬉しく思います」

そのように言いつつも、相変わらず、ルームミラーに映る加良部の表情に変化はなかった。先ほど齒をむき出しにして踊場たちの乗る車をにらんだ時の表情は仮面をかぶっていたのではないだろうか、

と司に疑わせるほどに。

「橋本さんともども、お降りなさい。もうわたくしは、そして？ ぜんぶ？ は、すべてを諦めてしまったのです。嬉しみも楽しみもなくただ嫌悪と悲哀だけが傍らに在り続けるのです」

「この人たちも同じとは限らない」

「幸福が用意されているはずだ、と？」

薄く、酷く冷たい気配を一言にまとわせて、加良部は司の反応を見た。司は動けなかった。

「幸福とは広がりのある概念ですが、広範にわたって存在するだけで範囲全てを満たしているわけではございません。ある一点を見れば確かに在るのでしようが、それ以外を満たすのは不幸と絶望です。幸福という概念はえてして、狭量な器を介して傲慢な前提を信じるからこそ感じ取れるのです。少なくともわたくしにはもうできません。そして信じ、感じ取れる者は わたくしの暗示にはかかりません」

あなた様と、橋本さんのように。

と言われて、呼ばれたと思ったのか小野がやっと目の焦点が合つて、司を見る。スタンガンによる電撃と薬の煙で薄れ沈みかけていた意識が、ようやくきちんと形を成し浮上したらしい。怪我を気取られぬように、司はさっと手をポケットに隠した。

「つ、かさ、さん」

「小野、もう平気？」

「はい。あの、わたし、油断して、ごめんなさ」

「大丈夫。きつと、大丈夫だから」

なにがどう大丈夫と言えるのかわからなかったが、落ち着かせるために小野に言い聞かせる。言葉は耳から、司の内にも染みいった。踊場たちを案じるあまり暴走しそうな自分を落ち着かせるための言葉ともなったのだろう。

加良部はそうした二人の様子を見て浅く息を吐き、進行方向にあった山道の入口にある、退避場所を指し示した。

「あの場所でお二人には降りていただきます。無理におわりを共に迎えていただく必要はありませんゆえ」

「……身勝手だ」

「わたくしは、自分自身に対しても自分勝手なのでしょうね。誰にも理解されることはなく、けれど他者の承認を欲しがりました。わかっております、己が恥ずべき死願者だということは」

自嘲する言葉を撒き散らして、加良部はがくりとうなだれ司たちの方を向いた。

山道が近付き、小野が身震いする。

「与えねば求めてはならない。だからわたくしと？ ぜんぶ？ にできることは、おわりを求めて自らにおわりを与えることしかないのですよ」

何も感じなくなった加良部の瞳はここに来ても輝きを取り戻すこととはなく、静かに目の前を見つめ続けていた。一秒先すら見えていない、消化するだけの試合と言える人生だ。

そのように思っただけはしくはないだろうと気付いたが、それでも司は彼女を「哀れだ」と思うことを止められなかった。

「さあ、幕引きです。お帰りはこちらに。本当に短い間でありましたが、わたくしのことを」

言葉を切り、加良部は前方を見据える。退避場所が近付いてきていたが、スピードは緩む気配が無い。あっという間に通り過ぎて、山道を凄まじい勢いで登っていく。舗装の崩れた部分が多いのか、がたがたと、揺れが激しくなった。

「……………？ なぜ、止まらないのですか」

加良部がはじめて困惑の色を見せた。そして激しい揺れのために最初司は気付けなかったが、小野の身震いも止まっていない。進むにつれ、歯の根を鳴らすようにおびえた。

「小野、小野？」

「つかさ、さん。なんだか、この先、進んではいけない気がして」「どういう意味？」

「先日の、犬神使いの家の時に似ています。重苦しい空気が、漂ってきていて……………でも、あの時よりもっと濃厚な」

「重苦しい、気なんだね？」

詳しい説明を小野に求めようとして、瞬間　ぞぐん。

全身がヘドロの海に沈められたように不快な、触覚と嗅覚を押し潰す幻覚。これまでにないほどの密度で身体を覆い襲う第六感の警報の強烈さは、そのままこの先にある何かの危険さを表していた。

（小野も第六感、あるんだね。しかもこっちより早く気付いたってことは、感度がいいみたい）

感想を漏らす余裕はなく、心中だけで司は思った。その間、上り坂にもかかわらず速度が少しずつ上昇しており、どこのカーブで谷底に落ちてもおかしくなさそうな遠心力が車内の人々を振りまわす。

揺られるたび、手の傷が痛んで表情が歪む。加良部は想定外の事態にやっと焦りを見せ始めたが、司にはなんとなく原因が読めていた。

「……この車内の負の気が、峠のモノに引つ張られてる」

事故死した人々の霊が元から山にある靈性のモノの仕業かは判別つかないが、悪意と害意が車体に乗っ取っていた。その力は、常に断崖絶壁の方へと車体を引き寄せている。外側へ張りだした右折カーブの度に、遠心力以外の何かがあるはずと崖へ司たちを引きずり込もうとしていた。

何も視えないが何かがある。と、確信する司に？何か？の正体を見せつけるものがあつた。

「手が、手が」

細い加良部の言葉が指すものが何か、司には見えない。けれど確かになにかがあるように彼女は振る舞い、身を強張らせて自身の前にある空間を掻きむしるようになっていた。小野も同じ方を見ていたので何かあるかと訊ねてみるが、司と同じく何も見えないと言う。

見えないのに何かがある。その状態は周囲にも伝わり、ほどなくして車内は運転手まで含めて静かな狂乱の中に堕ちた。わらわらと手と手が床を這い天井を這い、司と小野にはみえないものを掻きむしる。一致した意識が想像を具現化する。

見えない何かは、視えない何かである。

視力にも霊視にもみること叶わない存在。すなわち、第六感により彼女らは感じ取っている。

「ありや幻覚だね。さっきのおくすりがマズかった、っていうのもあるんだろうけど」

「同じ、自殺という思念の方向性を抱えた人間が、六人もいたから

ですか」

「生き死にかかわる思念だからなあ……強いよ。これだけの幻覚をみせるくらいには。おまけにこの前の犬神使いの家は土地柄で溜まってただけの正負どっちでもない気だったけど、ここのは混じりつ気なしの負の気だからね」

「対処、法は」

「原因の霊体のはつきり視えてるなら刀刺してどうにかなるかもだけど、今のこれは生き霊っていうか霊にすらなりきれてない、純粹な思いの力だから」

「では車を止めることは」

「そつちに関してはおつと漠然とした？何か？の意思によるものだから無理だよ。……止まんないなら、飛び降りるしかない」

無事な手を後ろに伸ばして、後部のドアを開く。やまない雨に濡れた路面はさぞ滑りやすそうに黒光りしており、カーブにさしかかる度に跳ねる水が車内に飛び込んだ。まだふらついている小野も自分も受け身なんて取れないだろうなと思いつながら、深呼吸でタイミングを計った。なんだかんだでカーブにさしかかる際には、速度が落ちているのである。そこを見計らう。

こわごとと小野が司を見上げ、下唇を噛んだ。

「本当に、飛び降りるというのですか」

「最悪下敷きにしてくれればいいから」

「……起きぬけでこんなスタントなんて」

「ごめん。もつと早く助けられたら、こんなことにならなかつただけ」

そこだけは本当に、司は自分の不手際がうらめしくて黙った。助けに来てくれたのに険しい言葉を投げかけてしまったことに気付くと、小野はもごもごと口ごもった。

「いえ。どうあれ、助けに来てくれたのですから。……勝手に言うて申し訳ありません」

「ミイラ取りがミイラ、だけどね。本当にごめん。でも、もうこれしかない」

司はシートを倒して、外に出やすくした。小野は恐怖心と戦いながらいつそう強く司の袖を握りしめる。そういえばずっと握っていたのか、ということに気付いた司はふつと微笑んだ。

本当は司も内心ではとても飛び降りられるはずもない、と弱気が絶叫していたが、気力だけで押えこむ。風ではたばたとはためくパワーを払いのけ、慎重に位置を見定めた。

「」

話しかけられた気がして、最後に一度だけ加良部を振りかえった。加良部は困惑も焦りもまた乗り越えてしまったのか、静かに空を掻く女性たちの中でひとり虚ろな顔をして茫然とフロントガラスを見据えていた。もう、何を語る様子も無い。

「……さよなら」

かけられる言葉はこのひとつしか思いつかず、司は目を逸らした。逸らした先には小野の澄んだ瞳があり、心配そうに見つめられるといやでも元気を出さなくてはという気にさせられた。

「それで司さん、位置はどこにするのですか」

「ん、次のカーブだよ」

短く答えて、先ほど見た光景を思い浮かべる。この先三〇〇メー

トルほどで、右手を山肌に沿いつつほぼ直角に左に曲がる位置があり、その次は断崖に張りだした右折カーブとなっていたことを。タイミングを逃し降りられなければ次の右折の際に転落する、との確信もあつた。

指が血の気を失いそうなほど強く、小野が司の袖を握つた。

「じゃ、いくよ」

司は呼びかけて、小野のうなずきを得ると黒い路面を見続けた。左折カーブまで直進が続く。

残り二五〇メートル。覚悟を決めて、深呼吸の後に息を止める。

残り二二五メートル。ぎちぎちと、心臓がねじきれそうな音を立てるのを聞いた。

残り二〇〇メートル。小野がいることを確認して、ゆっくりと車体のへりに足をかける。

残り一七五メートル。足を滑らせたらと嫌な想像が脳裏をよぎる。

残り一五〇メートルを切つた、というところで、司はまぶしさに目を押えた。

「……あ！」

小野が声を上げる。まばゆいライトの光は一瞬司たちを照らしたあとすぐに路面へと下げられ、車影が雨の中にぼんやりと浮かび上がってきた。

前面部が大きくひしゃげたキャラバンが、一〇〇キロにも届きそうな速度で直線の道を駆けあがってくる。司たちの通った軌跡をたどり、司たちよりも遙かに早く。

「みんな、無事だったんだ……」

「し、しかしあの速度で突っ込んでこられても」

小野が慌てふためく。転落も嫌だが追突事故もごめんである。するとあれほどの速度の中でよくそんなことをする気になったと思うほど窓から身を乗り出した廉太郎が、右腕を大きく上げ下げしている。叫んでもいるようだが、荒れ狂う風に掻き消されて最後まで声は聞こえない。

「あ。あれってこの後部ドアを閉めろ、ということでは？」
「なるほど」

そこから先の目的は不明だが、小野の助言で行動の意図だけはつかめた。司は手を伸ばしてドアを閉めようとする、が、さらにジェスチュアは続いていた。廉太郎が自分の右肩から左腰へ、腕を上げ下げ。今度は「シートベルトだ」とぴんときた。

「シートベルトしてドア閉めろってことだね」
「……あの、その指示って」

おとなしく指示に従ってはみたものの、小野は不安そうでまだ司の袖を離していない。

けれどもここまでできては司も、もはや笑うしかなく。

「皆まで言わずとも、嫌な予感してるのはこっちも一緒だよ」

もはやすぐそこまでキャラバンで迫った踊場たちを、信じるしかなかった。

残り四〇メートル。廉太郎が引っ込み、さらに加速した。

残り三〇メートル。奥歯を噛みしめて運転する踊場が見えた。

残り二〇メートル。踊場が車線を右へずらした。

残り一〇メートル。キャラバンが二車線の幅をいっぱいに使って

ハイエースが普通に曲がろうと横つばらを見せたところへ、雨で濡れた路面にしぶきをあげてスライドしてくる。その様は、熟練の腕前を思わせる綺麗な弧の描き方をしていた。弧の終着は 鈍い激突音で、締めくくられる。

「つぐつー！」

「わっ！」

ドリフトして横付けされるといっことはまっすぐに突進されるよりは遙かに軽減された衝撃なのだろうが、それでも身体をショックが突き抜ける。そのままごりごりと押し付けられるようにして二台は並走し、ハイエースはバックミラーがもぎ取れ車体と山肌の間では火花が散った。小野と司はひたすらにこの時間が終わることを望み、べきべきがりとボディが砕け崩れる甲高い音が耳を貫いていく。小刻みな震動で上下左右に揺さぶられる非常に気持ちの悪い時間はしばらく続いて、続くほどに摩擦で速度は落ちていく。やがて左折カーブが終わるころに、ボロボロになった二台は静かに停車した。振り返れば、剥がれおちた塗装と部品が、道を汚している。

「……………、はあ」

どちらともなく、無言で溜め息をついた。

そして後部ドアを叩く口論義の声に同時に振り向き、外に降り立つ。

雨の降りしきる中、ただ生きてるなあという具体性の無い実感だけが、司の身体を満たしていた。

#

夜の峠は肌寒く、降り続いた雨のせいか霧に包まれ始めていた。

二台の車を縦に並べてハザードランプを点灯し停止表示板を置いた
踊場は、一仕事成したという安心感からアスファルトに倒れた。キ
ャラバンの後部バンパーを背もたれに座り込み、ひらひらと手に手
を振る。

無免許だというのに雨の峠で速度を出したことは、相当なプレッ
シャーだったらしい。傍らでなにやら複雑そうな顔をしている口論
義と、雨音で消える程度の声音で話しあっていた。

「ホントに、今回は助かったよ」

「お礼ならサワハ君に言うべきではないかな。……いや、やはり何
も言わずとも良いかもしれないか」

「へ？ なに、なんでそんな急に一八〇度意見変わったの」

「今回も廉太郎君以外の微能力はみんな大活躍だったー、ってこと
よ」

口論義に言われて、後部ドアの窓越しに缶の山に埋もれかけてい
るサワハと目を合わせる。にまゝと笑いながらレンズの発動動作を
行ったのを見て、背筋にぞっとする感覚を覚えた。

「いつ、いつ仕掛け、ってあああ、あの入院した時の」

「まずは落ち着きなよ司君。レンズは一度発動したらその場所から
移動できないからきみのプライベートは覗き見されないさ。……ひ
とっしかつけていなければ、だが」

「うわ」

片手で頭を抱えて悩む司を見て、先ほど喫茶店でからかわれた時
の仕返しとばかりに、踊場は腹を抱えて笑った。

そうしていると三人の視界を、すつと隣の手線まで横切る影があ
る。誰かと思いきや、加良部が崖沿いのガードレールに
腰かけていた。少し上半身を後ろへ傾ければまっさかさまに落ちる

位置に、平然と居座る。加良部に気付いた口論義の顔に浮かぶ感情が、より複雑さを増した。

「……おしまいですね」

変わらず、何も感じず考えずの顔で司に言った。

言外に、今回がうまくいかなかったただけだという意が差し込まれているように司は思った。

「また同じようなこと繰り返す気？」

「ええ」

「嫌がる人も無理に連れてきてまで？」

「本当に嫌がる人はおわりまでご同行いただきませんが、中途までは連れてくるでしょう。今回がそうだったように」

あなた様も理解しかけたのでは。そう言って加良部はボロボロになって停車したハイエースの中をのぞいた。半狂乱になっていた被害者たちは廉太郎が一喝したおかげか今は平静を取り戻しており、また高速道路を走っていた時のようにぼんやりと中空を見据えていた。

覇気もない力無い様子に、このまま精神状態が元に戻らないことなどないだろうかと司は心配になり、同時に加良部の求めるものへの道程がこの状態を示すことを確認して首を横へ振った。

「あいにくと今はまだ理解できない。やりたいこともあるし、おわりなんて知りたくもない」

「左様でございますか。ではまた、いつかということ」

本心から述べているのであろう加良部を司は今さらながらに恐ろしく思った。同時にそこから引き戻してくれた小野に、感謝するし

かない。

「……結局、あんたさ。自殺したかったの？」

簡潔な司の問いかけへ答えることに、加良部は長い時間を要した。果てに彼女は「いえ」と短く告げ、身体を後ろへ反らした。ひゆるり、霧の間を吹きすさぶ風に身を任せたいと願ったように見えた。

「ひとりで死ぬことも、自分で死ぬことも、恐ろしいことです」

「じゃあひとりが怖いんだよ。で、こうして人を集めたんだろ。そうやって関係性を持ちたいなら、死にたいとは限らないんじゃない」

「死にたい？ 違います。あなた様は根本から問いがずれているのです。わたくしはおわりたかった。死を願いはしましたが、願いとは手段です。手段の先に求めたのは死ではなくおわりなのでございます」

「わけわかんないや。もっとわかりやすく言ってよ」

にらみつける口論義、静かに見つめる踊場、視界に捉えておこうとする司、の三者に囲まれて、加良部は主張の根幹、根元にある思いに至る。それを言葉にしようともがく中で思いはより強まり、今すぐにも遂げたいという情念をひしひしと司たちに投げかけた。

「わたくしは、エンドではなくゴールを求めたのです。追い詰められるのではなく自ら進みたいと願いました。死は願いにして手段で、おわりを得るための道具にすぎません。これだけ集めた？ ぜんぶ？ もおわりに刻む墓標の文であり、同時にわたくしも彼女ら？ ぜんぶ？ の墓標にあるための文にすぎないのです。そして文を読むのはあなたがた、生きている者」

その在り様こそがわたくしの求めるおわり　つばやきを霧にま

とわせ、加良部は真つ暗な目で司をとらえる。

「理解できませんでしょう？　ならばあなた様はわたくしのおわりを知り、覚えていてくださる、そちら側の人だったにすぎません」

最後まで理解を阻む物言いのまま、加良部は言うだけ言って口を閉ざした。全てを把握することなどできはしなかったが、なおも司の頭の中には残響のうなりが留まっていた。おわり。死。彼岸に片足を踏み込んだ者すら視える司にも、このふたつの違いを感じ取ることができない。ひよっとしたら説明はできるかもしれないが、そんなことに意味は無いのだ。

「でも……ゴール、だとしても……」

仮定して話を進めようとして、止まってしまった己について司は思う。仮定することすらできないほどに、自分は加良部の論理を認められないのだろうと。わかり合おうとしなかった、などと加良部を批判した己が、同じように理解を放棄したことで、逆説的に司は加良部の心情を理解した。だが自身を恥じた。

無理だと決めつけてわがろうとしなかったのではなく、努力しても辿りつけないのだと気付いたために恥じた。個々人の間に根付く溝は、認識してしまうとあまりにも深いのである。

……たたずむ加良部は放っておいても何もしない、できない。自分をこまかすべくそう信じ込んで目を離し、逃げるように司は小野のところへ行く。キャラバンの後部座席で膝を抱えていた彼女の隣には赤馬が腰かけており、例のごとくゴールデンバットを吸っていた。

「疲れた様子だね司くん」

「……うん」

「きみも吸うかね？」

「遠慮しとく」

「そうか。なんにせよ今回は大変だったねえ、カーチェイスまでやらされるとは思ってもみなかった」

喉がひりつく香りの元をくゆらし、赤馬は片手でハンドルを回す所作を演じた。司が沈んでいるのを見越してわざと大仰な振る舞いを成す赤馬に、司は感謝しつつ話を聞く。

「赤馬さんも運転したの？」

「もともとおれが運転してたのを口論義くんたちにカージャックにあったのサ。おれはほれ、後ろに積んである空き缶の山を換金に行くところだったんだがね」

ひしゃげた前面部と擦れて塗装の剥がれた側面を向いて、赤馬は大きく溜め息をついた。古い型の品とはいえ愛車をここまで傷つけさせてしまったことに、司は謝らなくてはならない心地にさせられる。しかしそこでサワハが空き缶の山の下を探った。

「ところで赤馬サン、この銅線はなにになノ？」

「な、なにを言ってるんだねサワハくん、おれは空き缶しか運んでないぞ」

「おう、太さちょうど電線くらいネ、これ」

怪しげな運び屋らしかった。一気に赤馬に対して白けた気持ちになり、司は小野に話しかけようとした。すると赤馬は片手を下ろして、司の言葉を遮った。

「おっと司くん、まだ話しかけない方がいいね」

「なんで」

「きみも視える人間なら察したはず。この峠にや良くないものはびこってるよ」

赤馬は己の三白眼を指差し、煙を吐きながら言った。司は自身の加入以前の霊的トラブルは先代会長、すなわち赤馬によって解決されていたという話を思い出す。

「きみと違いおれは視える聞こえる触れるってなもんでね。そこら中にいるの、見えないかね？」

言われて、言霊で押しつけた第六感ではなく霊視の眼で周囲を見渡した。すると霧にまぎれて靄のような力の塊が、ふよぶよと地を這いアスファルトに混じりゆくのが視えて驚く。

「この気、悪」「それ以上は喋らない方がいいね」

司が続けようとした言葉を察したのか、赤馬は素早く制止をかけた。燃え尽きかけた吸いがらにもう一本を押し付けて火を繋げて、二本目を吸い始めた。

「？良くない？だけだからね。負の気であつてもまだ意思は無い。放っておけば山の中に溶けて混じるのに、きみの言葉で気に形を与えてどうする……ま、そのあとでここに補充された気が将来どうなるかは、おれにもわかんないけどね」

「……あの、じゃあ小野に話しかけない方がいい、っていうのは？」
「知ってるだろう、この子は惹かれやすいってね。特に峠は世俗との境目、人間の文明と自然の狭間。古来で言えば情報の行きかう場でもあり、そこで発した噂の力が？何か？を呼びい形を与えてしまふ場でもあつたからね。へ々な刺激は力を形にしちまうよ」

靄よりも濃くけぶる煙に空気が攪拌され、車内の景色を揺らした。司はこの光景にどこか既視感を覚えたが、どうしてその感覚が生まれたのか説明がつけられないうちに実感を失う。

だが揺れているというのは事実で、辺りを見回すとところどころ、歪んだ空間の向こうの景色がねじれたり反転したりするのがみえた。靄もいつの間にか出てきたのだし、今度は蜃気楼だろうか、とあり得ないことを司は考える。

「にしても赤馬さん、詳しいね。踊場さんみたい」

「みたい、も何もないもんサ。踊場くんの知識の三割くらいはおれが話して聞かせたものだからね」

踊場も同じだが人に自分の知識を語って聞かせるのは楽しいらしく、赤馬は上機嫌で煙草を吸った。景色の歪みに、煙が割って入る。

「霧が晴れたら、手早く下山すべきだね。ひとまずこれにて落着、といきたいよ」

「霧もそうだけど、このヘンテコな歪みの方が気になんない？」

「歪み？」

「ほら、そこらへんになんか、蜃気楼みたいになってるところあるでしょ」

指し示した空間を視ても、赤馬は何も言わない。ただ、じ、と三白眼を細めて霊視を最大の感度にまで高めるが、歪みなど存在していなかった。

「きみ……まだ車内の残り香で頭やられてるんじゃないかね」

「え、そんな」

「ゆがみ」

黙っていた小野が自ら声を発した。座席の上で膝を抱える姿は痛々しくもあり、よく見てみれば腕や足がかたかたと震えていた。寒いのだろうか、と司はパーカのジッパーを下ろしかけるが、どうもそうではないらしい。

峠を登ってきた時と同じような怯え方であり、なんらかの恐怖の対象への反応が身体の震えとして表れているのだった。

「まさかこの歪み、小野も視えるの？」

「いえ、ただ嫌な感じがするとか……暗闇の中で、周囲に生首が浮いてると言われたような気分といえますか」

不気味な喩えだが感覚としてはつかみやすい。こうなってしまうと言葉をかわすことの危険性よりも、現状の異質さの方が問題であると感じられた。司と小野は赤馬を挟んで向かい合い、赤馬は二人の視線のやりとりに気づいてはいたが、両者ともに薬の副作用が残っていると判じた様子だった。

「幻覚を引き起こす成分を含むあの種の葉っぱを燃やした臭いだっただけだね、まさかきみら吸わされ過ぎたんじゃないのかね」

「五感は一瞬で簡単に狂うけど、第六感とか霊感はそのはいかないよ」「そりゃそうだがね。んじゃきみらがみて、感じているものはなんだと」

自分の発した言葉に、赤馬は解答に至るためのパーツが含まれていたのを感じ取った。

周囲を見回し、この山の表面を漂っていた負の気がほとんど消えてしまっているのを確認して。次いで、キャラバンの前に止まるハイエースの中に、未だ淀み溜まっている負の気があることを思い出した。

「……や、それこそまさかだね。まさか」

「どしたの？」

「なんでもない、とは、言えないが。……まずい場所になってるかもしれないね、ここは。といって、霧の中を歩いて降りるのもそれはそれでまずいかね」

「なに？」

「その、だね」

忠言を口にせんとした時には全てが遅かった。

みしりとキャラバンの車体が揺れる。小野がとつさに近くのものをつかんだ。車外にいた司も異変を感じ、目の前にあった助手席のヘッドレストをひつつかむ。肌がひきつって、傷が痛んだ。ところが赤馬とサワハは不思議そうな顔をしていて、車体の揺れを感じていないようだった。

三秒もしないうちに揺れは収まり、すぐに背後でガードレールに腰かけていた加良部のが頭をよぎる。ヘッドレストから離れた手を再度ポケットにしまつて振り返ると、加良部はいなくなっていた。

「お……ち、た？」

「落ちた？ なにが、あ」

赤馬もガードレールの上に居た人物の不在を目にし、辺りを見回す。人影はどこにもない。

ガードレールに駆け寄り、司は加良部の姿を探した。けれど乳白色の霧に覆われた崖下は少しも見通しがきかず、加良部どころか三メートル下もぼやけて見えていた。横には口論義と踊場も並んで加良部を探しており、特に口論義は真剣な面持ちである。

「……くっそ。人を騙してこんなことしといて、とつとと退場するとか何様よっ……！」

怒気をはらんだ小声で、恨めしそうに文句を叩きつける。隣で踊場が悲しそうな目をしていたが、崖下をにらみ続ける口論義にはそんな近くの彼さえも視界に入っていないようだった。

二人がなにを思いそんな行動に出ているのかは読めなかったが、落ちたにせよ逃げたにせよ司にできることはもうない。おとなしくキャラバンのドアの前に戻ると、赤馬が路上に降りて煙草の火を踏み消していた。

「落ちたのかね」

「……たぶん。今の揺れのせいだ」

どこへ向かうのかもわからないような、悔しい気持ちを隠しきれないで司は言う。

と、赤馬は眉根を寄せて表情に疑問符を浮かべた。

「揺れ？ 司くん、今べつに揺れなどはなかったはずだがね」

「は？ ついさつき三秒くらい、がたがたって」

「そんななかたヨ」

「いえ、わたしも揺れていたと思いました」

またも感じ取ったのは司と小野だけ。いよいよ赤馬は怪訝な顔を司に近づけた。

「ち、ちがう。薬のせいじゃ、」

「そっちの可能性も捨てきれないけどね、今おれが視てるのはそういう意味ではないから」

司の瞳を覗きこむ目には、確かに不信の色はあまり見えない。むしろなにか考えあつての疑いをかけているように思われる、澄んだ眼の色だった。時折視線を外しては周囲、司が「歪みがある」と指した場所などを見て、やがてひとつの問いを生んだ。

「……うーん。もしかして揺れではなく、ぶれているように見えたりしないかね」

放たれた問いかけが今さっきの司の感覚を呼び起こし、確認をとらせる。身体感覚の記憶をさかのぼると、左手がつかんだヘッドレストの表面には　揺れなどは、感じなかった。

「あ」

「やっぱりだね」

嘆息して、赤馬は目を伏せた。なにに納得されたのかさっぱりわからず、司は解答を乞う。赤馬は答えるべきか否か逡巡したが、小野にも頼まれ両側から挟まれるとさすがに折れた。だがまだこの場で語るべきじゃない、と言って、下山の時まで待つように言う。二人は粘ったが、この気などが関係するもので、ヘタに説明すれば周りを巻き込みかねないと言われては食い下がるわけにもいかなかった。

ただわからないづくしでは可哀想だと思ったのか、赤馬は一言だけ二人にヒントをくれた。

「……二人とも、よく周りを見てみるといいね」

ガードレールの方へ歩いていって、崖下を覗きこむ。赤馬はそれで何やら確信を得たようで、もう少しだけ言葉をつづけた。

「ハイエースからも、この峠からも……気が、消えてないかね？」

#

「つかれたなあ」

布団に寝転がって小野にメールを打ちながら、司はあくびをかました。

ゴールデンウィークに入る以前に前納が話していた映画に行くという計画に、結局参加してみたのだった。ところがいざ到着してみると前納しかおらず蓮向は欠席だとかで、二人で列に並ぶこととなった。まあ、これはこれでいいかと思えばし歓談。そうしているとポップコーンを買いに行くと言って司にチケットを預け、前納が列から離れる。

途端に蓮向が息を切らして司のところまで走ってきて、前納はどうしたとすごい剣幕で詰め寄ってきた。ポップコーンを買いに行つて今チケットを預かっていると正直に言くと、蓮向は少し考え込んで、じつはポップコーンが売り切れで作るのに時間がかかるとかで前納は遅れる、先に入ってくれとのことだと司に説明した。納得した司。その手からチケットをもぎとると蓮向は一瞬列から消え、戻ってきた時に「渡してきた」と言った。司はそれを信じた。

しかし入場がはじまり席が客で埋まっていても、前納はやつてこなかった。やがて満席になったと思われ、上映がスタートしても現れなかった。最後尾から三列目の真ん中に位置した司と蓮向は探しに出ることもできず、しかたない大人しく映画観よう、と頭を切り替えた。するとその時乱暴にドアを開けて前納が入ってきた。

ところが席が無い。どこにも空いていない。満席だった。これは

どういう手違いだろうと司が思っていたら蓮向を見つけた前納が静かに近づいてきて、購入したらしいベジマイト味のポップコーンを投げつけてきた。どうやらチケットは最初から二枚しかなかったらしい。司はまた、これはどういう手違いだろうと思った。

ただ放っておくとポップコーンの投げ合いから蓮向による人間投げ飛ばしに発展しそうだと思ったので、二人に手を振り自分が席を辞した。ぼかんとした表情でつかみあったまま止まった二人を尻目に、司は映画館のあるショッピングモールの中をぶらついて二時間を潰した。なかなか良いパーカを発見して購入に至ったので、わりと充実していた。

そうして戻ってきたあとで二人に映画の感想を尋ねると、互いにそっぽを向いていて何も語らないわけである。これまたどうしたことだろうと思いつつも、残り半日黙したままの二人と過ごすのは嫌だったので、司は二人の仲の復旧に努めた。

苦勞の甲斐あって一時間ほどでいつも通りの二人に戻ってくれたのだが、そうすると二人して観た映画の話題がちよくちよく挟みこまれるので、今度は司が面白くなかった。

「……そんな、わけで、残りの、休み中、映画、観に行かない？と。送信」

見逃したタイトルがアクションものだったので、ちょうどいいと思った司は小野を誘ってみたのだった。

返信は五分ほどで届き、日時と場所を尋ねられた。顔をほころばせて、司はふたたびカチカチと文面を打った。

「ゴールデンウィークもおわりですね」
「だね」

都市部のシネマコンプレックスで待ち合わせた司と小野は映画がはじまるまで、映画館の下の階にある喫茶店で時間を過ごしていた。今日の小野は長めの丈の丈のスカートに長袖のチュニック、ストールを合わせた格好で、先日の様子からまたいつも通りの印象に戻っている。

「どうかなされましたか」

「ん、普段通りだなと思って」

「失礼な。多少なりともめかしこんできてますのに」

「そういう意味じゃなく。この前着てた服装はほら、被害者に似せた奴だったからさ。小野らしさが出てないというかなんというか？

いつも通りがベストというか」

「……本当、その際も言いましたが。言葉を重ねるほど薄っぺらく聞こえますよ」

ざくりと突き刺さる言葉により司の心が傷を負った。水を呑んで間を繋ぐと焦るが、既に飲み干したあとだった。正面の小野は頬杖について呆れた表情である。苦笑いした司が硬直していると、見計らったように抹茶小豆のケーキとコーヒー、苺のミルクフィードと紅茶が運ばれてきた。慌てて受け取り、間を潰す。小野はつんと澄まし顔で司の様子を見ていたが、すぐに吹き出してケーキに手を合わせた。司もそれにならう。

その所作で手の怪我に気づかれたが、司は工作をしていて突き刺したのだと、嘘をついて流した。小野は疑いもしなかった。

「しかし、前回も相当な大事件だと思ったけど、今回はカーチェイスまでするなんて思ってもみなかったね」

「わたしは未だに車に乗ることに若干抵抗がありますよ」

「んー、小野は無理やり連れ込まれてさらわれたわけだし、拒否反応出ても仕方ないよたぶん」

「ですかね。……そういえば、機を逸してしまっただけでいいんですけど」

「うん？」

「……………その」

珍しくはつきりしない、しどろもどろな態度で小野は司を見ていた。視線に気づいてキーキをほおばりながら目を合わせた司は、小野に向かって首をかしげてみせる。

「あのですね。今更になってしまって、申し訳なく思うのですが」

「……………なんか物壊したとか？」

「ちがいます」

「じゃ、なに」

「ええと……………あの時、連れ去られそうになっていた時から、一心意識はあつたんです」

予期せぬところへ話題が飛んだため、あの時というのがいつを指すのか司の理解が一瞬遅れる。だが続けて言った連れ去りという言葉で先日的事件のことを言っていると気付き、ああ、と鷹揚にうなずいて返した。ところが理解を示して思考が通じたというのに、小野はますます言いづらそうに顔を背けた。

「……………だから、司さんが危険を冒してまで車に乗り込んできてくれたことも、ぼんやりとですが覚えているのです」

「そうなんだ。なんか、こっぱずかしいや」

「恥ずかしながらずとも良いと思います。ただ、その……………だから司さんに助けていただいでしまったので、その……………謝りたくて」

「あやまりたくて？」

オウム返しに聞き返した司に、小野は大きくうなずいてみせる。司は小野の意図するところがまたもつかめなくなり、素直に「どうして」と訊ねた。小野は、顔を背けたままに語る。

「……わたし、それなりに腕は立つ方だと自負、いや勘違いしていました。しかしそのことが原因で今回……いいえ、よく考えれば犬神使いの時も、助けられましたね。つまり計二度も司さんに迷惑をかけることになってしまったので、お詫び申し上げたく」

「いや、いやいや。なんでそうなの？」

「自分を過信して、隙に付け込まれて司さんをいらない危険に巻き込みました。どうしようもありませんが、お詫びしかしようがないのです」

小野は逸らしていた目を再び司に向けると、深々と頭を下げ、真摯に謝った。今度は、司の方がしどろもどろになる番だった。

「……うーん」

謝られても、司はお詫びを口にされるほどのことをした覚えはないのである。

むしろ、本日の誘いに乗ってくれた理由の九割方がこの謝罪のためだったのだろうか、などと考えるとさめざめと泣きたくなる。もう五月だというのに、心に吹く隙間風は凍てつくように冷たく、身を切るように鋭かった。

「気にしなくても、いいのに」

「そついうわけにはまいりません」

「でもさ、いつか今度はこっちが助けてもらおう側になるかもしれないな

いでしょ？ したら、そのとき小野はこっちが謝ろうとしなかったら腹立つ？ いや、まあ大げがとか、そういうことあったら腹立つだろうけど。今回に限ってはこっちも小野も無傷だったわけだし」「けれど、命を落として、彼岸と現世の間に投げだされるかもしれない。なかったのですよ？」

急に概念的な話題に移った。が、司は小野の言わんとしていることを理解した上で、話しにくいと感じて頬をひきつらせた。

彼岸と現世の狭間。命を落としかねない、危険な空間のことである。その話題は、あの日七人が被害者女性たちを置いて下山の運びになりかけた際に、赤馬から聞かされた話だった。

「？ 異界？ …… ね」

あれから霧が晴れた二時間後、下山すべくキャラバンを駆る赤馬は、山から離れてあやしげな洋館に寄ると車ごと空き缶、銅線を買って取ってもらい、白衣のポケットに乱雑に札束（というほどでもない厚さ）を突っ込むと駅まで歩く道すがら、司たちに語ってくれた。

『気が三種類あることは知ってるね？』

『正、負、あとは……』

『どっちでもない、無色の気、でしょ』

小野の答えに付け足す形で答えた司に、赤馬はうなずいてみせた。

『そう。そして無色の気は正負に傾くこと、または気の溜まる土地が破壊されることがない限り消費されることはなく、ひたすら溜まっていくというのは知ってるかね』

犬神使いの時の家がそれだ、と気付いた二人はうなずいて返す。

『では山の気はどちらだと思っね』

『良くないもの、ってさつき言っただよね』

『ああ。けれど良くないものが総じて悪いたあ、限らないのサ。かといつて正と言いつけるほどの効能を持つわけでもない。だから両者混在した、無色の気に近い存在が山の気なんだね。んで、無色の気は強い情念、呪いに通ずる執着などに染められると、負の気へと傾いて大きな流れになり術の力を増す。これも知ってるね。じゃあ、流れた力はどこへ向かうと思っね』

『そりゃ、術者が呪った相手でしょ』

『半分正解だ。でも人ひとり殺す程度のために使われる力なんて、そんなじゃごくごく一部。よほどのことがなきゃ余るわけだね。余剰分の力がどこへ向かうかというのが問題なんだね』

悩む司と小野を見かねたのか、踊場がうしろから解答を教えようとした。しかし赤馬は「答を知ってる奴が言っちゃ面白くない」と言っただけを遮った。

考え込んだまま足を止めた小野は地面を、歩き続けていた司は上を見て、それぞれに視線の先を指さす。赤馬は大きな声でブーっ、と不正解の意を示した。

『行く先など、どこでもないんだね』

『なにそれ汚い』

『いやはや、勘違いされちゃ困るよ。？この世には？存在しないってことサ。ま、そういう意味では二人とも、半分くらいは正解だね』

軽く手を打ちならして赤馬は笑う。地面を見つめていた小野は顔を上げて、歩き出すとまた視線だけ下に向けた。地の底、獄へと思いをさせて。

『この世には無い……ですか？』

『ああ。多すぎる負の気は留まる場所を持たず、水が低きへ流れるように同じ負の気の多い場へ繋がる。つまり、彼岸にほど近い場所？異界？だね。でも、おれにはみることができない』

『どうして？』

『浄眼と呼ばれる、普通みえないものをみる眼があればなんとかならしいがね。異界ってな奴あ通常の霊視、おれの眼じゃみえないのサ……だがきみら二人にはみえる。自分の言葉くらいは覚えてるかね？ きみらがみた、感じたというあの？歪み？だよ』

塵気楼のようなイメージが、おぼろげに頭によみがえる。空間にねじれとひずみを生んでいた、なんだか掴みどころの無い力の出入り口。歩きつつ振り返った赤馬は二人の記憶が脳内に像を結んだのを表情から読み取ったのか、鼻を鳴らしてうなづく。

『ふん。おそらくはそれが異界の入口だったのだね。指向性を持ってしまった、膨大すぎる量の気が流れこむ穴つてもんだ。あの場の負の気を作り出した張本人は、流れる負の気に乗ってそこに吞まれたのかもしれないね。俗に言う、神隠しサ』

赤馬とはそこで別れて、以来会っていない。だが彼から聞いた話は頭の中に刷り込まれたように残っていて、どうにも時間が空いたりとすると司はついついそのことを考えてしまうのだった。

「犬神使いも、自分が生んだ負の力に染められたあの家の気に乗って、異界に消えちゃったのかな」

「わかりません。が、加良部にせよ犬神使いにせよ、帰ってこれない場所へ届いてしまったのは確かです。司さんも、そうなるかもし

れなかつたんですよ」

「でも、次に？そうなるかもしれない状況？になった時、小野が助けにきてくれる可能性だってあるじゃん」

「それは……しかし、」

「続けても水掛け論になりそうだから言わせてもらおうけどさ。仲間内でしょっちゅう謝り合うのって、あんまり良くないと思うんだよね。言われた方も言った方も気を使うけど、一歩引いたような、よくない気の使い方になるだろうから」

押し留めるように手を突き出して言う司に、はっとした表情を見せて小野は黙り込む。

言い過ぎたかな、と後悔の念が司の心中にとぼとぼと注ぎこまれ、居たたまれない空気になってしまったため真剣に席を立とうかとさえ考えてしまう。息が詰まって、苦しかった。

「ええと、小野、自分のせいだとばかり思わない方がいいよ。一人でやってるんじゃないし、だれかのミスだつてあるだろうから。でも一人じゃできないし、自分のミスも出るだろうけど……ああ、なに言つてんだろ。ごめんちょっとテンパってる」

思いつくまま言葉を放りだすと、支離滅裂なことを言っている自分に嫌気がさした。けれどそれよりも、小野が悪いわけでもないのに沈んでいることが、司にとっては嫌なことを感じたのだった。

と、司の放りだした言葉に何か感じ入ることがあったのか、小野は気の晴れた顔を上げる。

「いえ、なんとなく……わかるような気がします。というより、わかりたいと思います」

挙動不審に頭を抱えていた司に、小野はそんな言葉をかけた。

「……そうですね。自分のせいだとばかり考えて、その気持ちを相手に押し付けては、いけませんよね」

「そうだそうか、と納得を噛みしめて、苦い微笑みを散らした。司はあっけにとられていたが、元気を取り戻した小野の笑い顔を見ていたら、問題が全て片付いたような、不思議な気分に見えた。不意に、小野が笑みを納めて驚いた、新鮮な気付きを覚えた顔になる。

「……あ、そうか」

「どうしたの？」

「言いたいこと、謝る以外の言葉で見つかりました」

司がへえ、と続きをせがむ声音を弾ませたのち、少しはにかんで、小野は言う。

謝る感じではなく、それはむしろ逆の言葉だった。

#

#

駅のホームに降り立ったのは、灰色のスリーピースで身を固めた背格好のがつしりした男だった。

短く白いあごひげを撫でつけつつ改札を抜け、地上に続く階段の手前で足を止める。降り続く雨のことをすっかり失念していて、傘を忘れてきたのだった。どうしたものかと思い、売店で購入しようかとも迷ったが、ちょうどその時構内の端に何本か骨の折れたビニール傘が置かれていることに気付いた。短時間雨をしのぐのみならこれで構わないと判じて、男は雨中に死にかけの海月に似た傘をさ

しこむ。

しばし歩き、歓楽街へと進む。途中で大型の白いハイエースとすれ違い、乗っている人間が虚ろな目をした女性たちばかりであることを確認すると、周りに人がいないのをいいことに腹の奥から笑う声を響かせる。

さらに先で、男はコンビニに入った。なぜか混んでいたコンビニの傘立ては既にスペースがなく、仕方ないので男は傘をゴミ箱に突き刺す。盗まれることなどないのは保証済みであるし、盗まれたら傘立てから拝借しようと思いつつ。店内のATMで金をおろそうと財布の中でカードを探した。

そして店から出ると、見事に傘はなくなっていた。それを確認しやすく、誰も疑いの目をかけないほどスムーズに、さも自分のものであるかのように男は傘立てから真新しい紺色の傘を盗んだ。通りの向こうでなにやら乱闘めいたことが行われていたが興味は無く、細い路地に入って霞のように姿を消す。

歩いて、抜けて、歩いて。路地を通って目的の場所へ向かい、男はその途中、つまらなそうに曇天を見上げる少女を見た。

雨に濡れしつとりと頭を覆う黒髪、半月を描く黒曜石のような瞳、透けるように白い肌、小さく澄ました輪郭を縁取る頭。

男は己の目を疑った。

「……馬鹿な……山女魚？ なぜ、お前が……」

男の問いに答えられる者は誰もいない。

その事実を理解していたから、男
れる前に、足早にそこを去った。

七無^{ななし}は少女に己を見つげら

GW俗信編：終

十四題目 「……………」と小野が絶句する（後書き）

というわけで最終章前後篇で計四万文字という冗長さを見せたGW編おわり。

今さらですがこの話に勝利とかカタルシスとか求めてはいけませんよ。客観的に見ると主人公サイドが論戦すら放棄してただひたすら目的のため怪異に食らいついてるだけという夢もキボもありません。ない話デスヨ

次の三章はもう少しこう、ライトなノリだと、思いたい。学習合宿編はいろいろ進展あるはずです。いろいろ。

Name: 目取真司

Hobby: パーカ・一人カラオケ

Weakness: ぬれせん

Specialty: 水切り石がすごいよく跳ねる

Skill: ? ^{ゴーストカー} 追惜者? 霊体の認識。但し声は聞こえず触れもしない。ひたすら視えるだけ。しかし霊媒体質であるため憑依されることで（不本意ながら）口寄せもできる。また第六感が鋭く、触角と嗅覚への幻覚により危険域を察することが可能。 異界をも認識するという、赤馬に指摘された浄眼とは……?

Notes: 発言の際に結構苦労している。メンバーのうち二人は司の発言にある「わざわざ苦労しているその点」をおかしいなと気づいている。

十五題目 「合宿スタート」と司が声を弾ませる（前書き）

合宿因習編スタート。

十五題目 「合宿スタート」と司が声を弾ませる

「中間と期末の間ってやけに短いと思うんだよね」

つい先日、期末で赤点をとった数学の追試をやつと終わらせたばかりの司は、顔をしかめた。両手をポケットに入れたままスケボーに片足立ちしている廉太郎は、贅沢言つてんじゃねえと司の肩を叩いて高校へ続く道に行く。体重をかけられて、司はがくりと膝を折りかけた。

「お前はまだ、きちんと追試終わったからいいだろ。俺なんてまだ物理と日本史の追試残ってるのだけ？ 期末が控えてるってのに中間の勉強に戻らなきゃならないとは、やってられん」

廉太郎は顔を歪めて眼鏡を拭いた。司は自分よりも苦しんでいる人間がいることに少しほっとした様子で、けれど悟られないように陰気な表情作りを保った。

「ところでマルドメ、お前が背負ってるそのデカくて重たそうなおっぱサックはなんだ」

「これ？ これ全部野菜だよ、野菜」

「ほお、お前が菜食主義だったとは知らなかったぜ」

「ちがうちがう、むしろ肉食だよ。この前ネットうるついでたら『変な村見つけました』って書き込み見つけて、いても立ってもいられなくなつてさ。土日で探しに行ったの」

速度を落として後ろにつくとおっぱサックのジッパーを開き、中をあらためた廉太郎は「極彩色というか極菜食というか」などつぶやいて横に並び直した。姿勢を崩していた司はそこで前傾姿勢に

持ち直す。

「して、成果は」

「だから、これ」

「……野菜だ」

「うん野菜。書き込みはウソだったらしくて、普通の村だったよ。優しげなおばあさんとお茶のんで帰ってきた。そんな時にいただいたのが、この野菜ってわけ」

司は一応固辞したらしいが、半ば無理やり持たされたらしい。嬉しいような重たいような、わりとかさばるお土産であった。時折地面を蹴って司の横の位置を維持する廉太郎は、わずかに後ろへ重心が傾きかけた司がそのうち倒れるのではないだろうかと考えた。

「家で消費しきれなかったのかよ」

「ん……まあ、ね」

「はん。なんにせよ、こんな時代でもそんな心温まる人情話があるもんなんだな。俺の知るジジババは大体、若人じゃ厳しいと相場が決まってるんだが」

「それ、廉太郎さんの対応が悪いからじゃないの」

「お前の趣味が枯れてるって可能性もあるだろ」

「枯れてるう？ 別に切手収集の話しかしてなかったわけじゃないし」

「おいおい、こんな時代でもそんなアナクロな趣味してる高校生いるもんなんだなオイ」

からかいながら愛車で地を滑り、司の振りまわしたポストンバツグの射程外へ出る。けらけら笑って廉太郎はスケボーを舞わせ、共に空中でくるくると舞った。周囲の学生が驚きと物珍しさに目を見開き、廉太郎はその奇異の視線をも好んで受け止めているようだっ

た。

「アナク口って言ったら廉太郎さんこそ。いまどきスケボー乗ってる若人なんて見かけないよ」

「俺の場合は乗るのが好きって以上に理由があるんだ、よっ！」

跳躍して、足下でスケボーだけがぐるりと三六〇度回転する。一体なんの理由が、と司が思っていると、着地の瞬間に端を蹴られたスケボーが歩道の先へ転がっていく。廉太郎は追いかけるでもなく愛車の行く末を眺め、掌を前方に差し出した。

「俺なりの、微能力開発と研究だ」

廉太郎の視界で掌の向こうにスケボーが隠れた瞬間、手首を右へねじりながら指を閉じ、なにかをつかむような動作をしてみせる。するとスケボーがぴたりと転がるのをやめ、ぐるり。車輪が逆回転し、次の瞬間には廉太郎の足下まですっ飛んで戻ってきた。

周りの人々は朝っぱらから目の前で繰り広げられた怪異現象に目をぱちくりさせていたが、風の仕業と思いきむことにしたのか、廉太郎と司を避けるようにして通り過ぎて行くのみ。突拍子もない出来ごとで司のあたまが理解に追い付いていないのを楽しげに見ていた廉太郎は、またスケボーの上に飛び乗ると足下を見つめた。

スケボーは、平地にもかかわらず勝手に動き出した。

「え、なにその、えええ？」

「なに驚いてんだ、前にも魅せたる」

「いや覚えがない」

「犬神使いの時、俺が弥七のごとく風車投げたじゃないか。見てなかったのかよ」

「アレ回してたの念力だったの?!」

「念力とはちがうぜ？回天竺オトジャイロ？だ。字面は回天と天竺をかけて、回天竺。間違えてくれるな」
「いや技名なんて知らないし」

かぶりを振った司の反応に驚いたのか、廉太郎はスケボーから落ちるようにならずにつこけた。しばしその場に立ち止まって斜め上を見、自分の記憶の中をさかのぼっている。

「……あれ、一度も紹介してなかったか？ そっぴやどたばたしてたしな、忙しくて忘れてたよなのだぜ。まあともかく、回天竺オトジャイロだ。創部以来初のPKだと言われたほどレアな微能力だという、回天竺オトジャイロだ」

「そんなに大事なことじゃないから一回も言わなくていいよ……」

「技名無いとつまらんだろ。お前の霊視力にも名前考えてあるんだぞ。幽霊を追い、しかしてその境遇に弔いの念を示し、彼らの死を惜しむ者すなわち？追惜者ゴーストカー?! ちなみにこれはゴーストを追うという意味でのストーリーカーと彼らの念に应じる相手という意味でのトーカーが入っておりさらに漢字表記では『追悼し惜しむ者』で追惜者ついでせきとなりストーリーカーから転じての追跡者とかかっている」

「……なんでそういうのだけ無駄に凝ってるの」

「カッコいいからだ。あと、周囲に隠して能力を使用しなくてはならない状況になった時『幽霊を視る力を使え!』とは言えないだろ？」

「たった今さつき派手に衆目にさらしてたじゃん回天竺オトジャイロ」

「ほら、こっぴやってすぐ日常会話にも組み込めるし、周囲は俺たちが何言ってるか理解不能だ。仲間内で通じる暗号みたいだな」

「……、」

理解不能というか意味不明。話が通じないと見て司は閉口した。廉太郎は自分の主張に間違った点があるとは思えないのか首をかしげており、しかし悩むのにすぐ飽きたのか、立ち止まっていた足を再び地を蹴ることに使い始めた。司は彼が本当に上級生なのか内心で疑いつつ、重たい荷を背負ったままのそのそと後ろを歩いた。

「でも、PKが珍しいのはよくわかる。実際、本物を見るの初めてだったよ」

「だろ。きてれつ研の中じゃ、会長の虚言看破も小野の超常決戦もぱつと一般人に示せる能力じゃないからな。その点で俺のはわかりやすい。猿でも凄さがわかる」

次々に自分の名づけた技名を連呼する。語の前に人名が付いていたためかろうじて司にも理解が及んだが、そうでなければ異邦の言語のごとく右から左へ受け流されていたと断ずることができた。

朝っぱらから無駄なことに思考時間を割いている、と思えてきた司は心身に疲労を感じ、両肩にかかるナップサックの重みが倍くらいに感じられるようになってきた。だがまだ学校までは五〇〇メートルほどある。前に行く廉太郎のわりと広い背中を見て、司は荷を下ろした。

「じゃ、その猿でもわかる凄さでこの荷物運んでよ、つと！」
「ぐお」

いかげん重たさにやりきれなくなってきた司はナップサックを廉太郎に投げつける。しかしさすがに日ごろ鍛えているだけのことにはあり、廉太郎は体幹がぶれることもなくずっしりとした重みを受け止めた。あぶねえと口では言っているが、背後からの不意打ちでこの有様ではこいつに危機的状況など一生訪れまいというのが司の見解だった。

「ほら、早く念力で飛ばして運ばいいじゃん」

「オートシャイロ回天竺だつて言つてんだろが。そもそもそういう使い方はできん」
「念力なのにな？」

「おいおいここにや微能力者しか集まつてないと会長も言つてたろ？俺の能力も効果対象が『元から回す用途で作られた物体を一度に一つだけ』、動かす方法も『左右どちらかの？回転？のみ』。距離制限は『俺の視界内限定』、重量制限と回転速度は『俺の腕力で動かせる範囲』とまあ、とかく制約が多い能力なんだ」

きてれつ研に入会して以降、一年かけてあらゆる実験を試した結果これだけの条件が存在することを知つたらしい。苦勞のわりに報われない微妙な能力だつたことを、司でさえいささか不憫に思った。

「不毛な一年だつたね」

「失礼だなお前、？風車を回せるだけのPK？だつた一年前と比べたらだいぶマシだが」

「たしかにそれはシヨボい。……まあでも、せいぜい、毛が生えた程度というか」

「うまいこと言つたつもりか」

廉太郎の吐息が曇つた色合いを帯びた。

「ごろごろとPKにより回転するスケボの車輪が、上に乗る廉太郎と彼の背負わされた野菜入りナップサックを少しずつ学校へと近づけていく。樂をすることができた幸運に感謝しながら司は背筋を伸ばした。下あごを突き出してげんなりした顔を向ける廉太郎はのびのびとウォーキングをしている司を恨めしげに見つめて、ナップサックを背負い直す。」

「で、こんな大量の野菜をどうするんだ。お盆にはまだ早いぞ」

「馬とか牛つくるのに茄子と胡瓜以外の野菜ばっか集めてどうすんのさ。お盆のためじゃないんだよ。ていうか、さつきからボストンバッグ持ってたのに、まだわかんないの？」

「ぶち家出か」

「まさか、会長じゃあるまいし」

言った途端くしん、と背後から吹き出したような音が聞こえたので、二人そろって振り返る。

鼻の下を手の甲でぬぐいつつ、こちらに気付いた口論義が手を振った。

「やつほお。司くん大荷物ねえ。そついや、今日から学習合宿だった？」

#

私立・ノ木斗目^{のちめ}高等学校では一年生の六月に隣接する県の山間部にあるキャンプ場で学習合宿を行うことが習わしとなっていた。

無論、ここで言う「学習」などというのは名目上のものであり、キャンプ場近くにある小さな町で文化資料や民俗資料の見学などをする時間の他に学生を縛るものはあまりない。金曜日から週末を挟んで三泊四日の行程は、学生にとっては羽目を外して学友と遊ぶまたとない機会として認識されている。

学校からゆらり揺られること二時間半。広い駐車場に停められたバスより降り立った司が見たのは、ケーキの上に乗せられた砂糖菓子の家のごとく小高い丘の上に立つちんまりとしたバンガローの数々だった。

「着いた、ついた」

キャンプ場は中央に百人単位で入れそうな炊事場を構え、周囲を取り囲むように木で組まれたバンガローが立ち並ぶ。三方に山の景色が連なる、のどかでゆったりとした時間の流れる空間だった。

そして振り返れば、丘の下には水路が張り巡らされる箱庭のジオラマじみた町が姿を現す。これだけでもこの四日間に対する期待が否応なしに高まり、周囲の同級生とうきうきした心持ちが共有されてゆくのを感じた。

「……皆、はしゃいでいるな」

同年とは思えないほどどこか老成した雰囲気を持つ蓮向に言われると、なにやら悪事をとがめられたようで司はぎくりとした。が、逸る気持ちを押し切れない自分をまだ子供なのだろうと思う一方、この気持ちを味わえないなら大人になるのもなんだかなあ、と思った。

「蓮向は気分盛り上がらない？」

「……いや？ 先ほどから一切笑みを隠せていない」

巖のように硬い表情からはあまり笑みを見て取ることはできなかったが、そこも合宿の雰囲気のをせる業か。司はさほど気にせずそっかそっかと笑いを返した。

「んん。定番だけどやっぱり、空気がおいしいって言いたくなるよね」

「……そうだな……しかし、ああ。賛同したいのは山々なのだが。こいつを見ると、どうにも私はおいしい、などという言葉の使用を控えたい」

バスから降りたって司の横に並んでいた蓮向は、心からの嫌悪と

共に吐き捨てた。

もちろん言葉の矛先は司に向いているのではなく、肩を貸して支えていた前納がでると身体を屈曲させてぐったりしているのを見て言っているのだった。普段よりもなおしんなりと丸まった天然パーマの髪が、時折ひくひくと蠢いている。

「う……う……は、蓮向……おれの、おれの鬼太郎袋は……」

「……ジャージの上着のポケットに入れていただろう。おいやめろ、袋を口にあてがって息をするな、なにやら違う用途に見える」

ちなみに鬼太郎袋とはバスなどで座席の前ポケットに入っているビニール袋の俗称であると司は蓮向から聞いていた。用途はゴミ入れなどにも対応しているが、主だった利用法については説明を割愛された。とはいえ予想はついていたので司もあえて尋ねるような愚は犯さなかった。

「ぜえー、ひゅー、ぜえー、うぷ」

「……おい司の前で吐く間抜け。向ここのバスの陰へ行け」

「ぬるいバナナなんか食べるからそうなるんだよ」

「うつつ……ひっでえ……こいつら、ホントにおれのとこだ、うお
うつつ」

完全に車酔いでダウンした前納は前傾姿勢のまま人の間を縫ってバスの陰へ走り、末路を想像するのもしやだった蓮向と司はバスに背を向け雄大な緑の山々を見ゆる眺望を楽しんだ。

「いい景色だね」

「……ああ」

ぴんよろー、となにか鳥の鳴き声が響きわたり、清涼な心地にな

った。二人して深呼吸などしてみれば、蒼に霞む連峰から漂ってくる涼しく快い空気が肺を満たし、前納のことは一瞬で慮外に消えた。

「いこっか」

「……ああ」

班分けでも三人で同じ班なのだが待つのも面倒に感じ、二人は前納を放っておいて炊事場へと向かった。

班決めは他の組と合同で行われ、司の六組は三組と混ぜた上で分けられた。結果、司のくじ運によるものか小野の悪運によるものか、二人は同じ班で四日間行動を共にすることとなっていた。そわそわと待っていると、退屈な注意事項の読み上げが終わってすぐ、小野がクラスメイトだという他の女子を引き連れてやってくる。

薄赤の女子用ジャージの前を開いて白いシャツをはためかせ、シヨートパンツからすらりとのぞく白い脚を見せつける小野は相変わらず短めの黒髪をいじくりながら隣の女子を紹介した。

さほど背が高くは無い小野よりさらに背が低く、一五〇センチあるかないかに見える少女は倉内千影くらうちちかげと名乗り、頭を下げた。頭の下にあわせて左側だけまとめあげて結った髪が跳ね、大きなどんぐりまなこがぱちくり。彼女は小野とは違い、黒いタートルネックのシャツをジャージの中に着ていた。

「どうもです！」

「あ、どうも」

勢いの良さに押され、思わず司も頭を下げた。無闇に元気が有り余っていきそうな印象を受ける少女だったが、特に興味を惹かれるわ

けでもなかったので挨拶もそこそこに作業へ移る。

「基本的には普段交流の無い他のクラスと交流と深めるのが目的だ
そうですが。わたしたちに限ってはいつも通りですね」

「いいんじゃない？ 正直、班分けされてるって言っても、炊事の
時と資料館見学くらいしか一緒に動かないし」

「ですかね。自由時間はどうしましょう」

「んんー、どうしょ。班で回ってもいいけど」

本心あらずの言葉をばいと投げ捨て、小野の反応を横目でうかが
う。

「はあ、班ですか。しかし班とは言いますが……一人足りないよう
な」

「足りない一人はバス内の余興で落語やっておひねり代わりにもら
ったぬるいバナナ食べて酔ってぶっ倒れた」

反応に困った様子で小野は小首をかしげ、得心いったのか首を縦
に戻す。四月に司を勧誘に来た際に前納と一度会ったことを思い出
したのかもしれない。

「なにせよ一人足りないですね」

「すでに班行動って形じゃないかもね」

班で動かないように少しずつ話題を誘導しつつ、司はあくまで平
静を装って小野に提案を持ちかけようとしていた。何も気づかない
小野はじゃあ、と口を開きかけたが、そこに蓮向と倉内が発言をか
ぶせる。

「……このテーブルだ」「通り過ぎますですよ」

なんてタイミングが悪い、と思った司だが、まだあとで機会はあ
るだろうと思いつめ息と共にテーブルを囲む。先に持ってきていた
野菜の入ったナップサックを開けると、小野も「司さん、菜食主義
でしたか」と聞いてきた。

早速、肩を並べて野菜の皮むきからはじめる。言わずもがな、メ
ニューは定番のカレーである。米炊きは得意中の得意と豪語する蓮
向に任せ、付け合わせのサラダは妙に刃物の扱いがうまい倉内に任
せた。

「さて、四日目は午前の中に撤収して帰るらしいから実質三日間。
小野は結局どのコースに？」

「司さんが勧めてくれましたし、同じ下町散策コースにしましたよ。
それに登山や溪流釣りは、夏休み前に倉内さんと行きますので」

「あの子、アウトドア友達なの？」

「いえ、友達と言いますかなんと言いますか」

友人ではないと言い淀むような人物と同じ班で、しかもアウトド
アに行くのだろうか。変な疑念が湧いたが、他クラスにおける小野
の動向にいちいち干渉するのも好ましくない。司は適当に流し、今
日以降の散策について話す。

「それで、どこ行こうね。ちょっとバスに乗っていくとロープウエ
イがあつて、展望台公園とかあるらしいよ。どう？」

「山の上ですか。景色が良いのは大変結構ですが……また？歪み？
が視えたりとか、しませんよね」

「え、ああ。大丈夫、だと思っただけ」

車に乗って山の上に来ることで、先月の事件を思い出し出している小
野は翳りのある表情を見せた。半ば誘拐じみた目に遭ったことで外

界に対して恐怖心を覚えるようになったのだろうか、と司も少し落ち込んでうつむく。すると視線の先に、小野の白い脚がまぶしげに映る。眼福、とは口に出さず司は思うに留める。

「まあ鍛え直しましたし、今度は油断、しませんけどね」

が、その発言ひとつで視線の先にある脚線美が鉞まさかりの異名を誇る凶器だったことを思い出し、すっと冷やかな気配を感じて視線だけを上げるとなにやら小野が司のつむじの辺りを凝視していた。頭の高さと間合いから見て踵落としを加えられる距離だと判じた司は、半歩間をおいて笑みを取り繕った。

「で、展望台公園なども良いとは思っていますが……わがままを言わせてもらえるのなら、わたしはまず下町周辺の寺社などを見て回りたいのです」

「寺社？」

「ええ、下の町だけでなく、バスに乗って少し先の集落にある寺社にも行くかと。小さい規模ですがお祭りなどを催しているそうで」「そんな情報しおりとか町のパンフレットにも無かったけど、一体どこから」

「ネットです」

一応はきてれつ研の学外活動の一環として報告するために是非、と続けた小野は、手元の人参をくるくる回して包丁で皮を剥いた。ピーラーで削ぐように皮を剥いていた司は小野の言葉に応じ、合宿のしおりに同梱されていた周辺地図をぼんやりと思い浮かべ、手元から意識が逸れたために左手人差し指の表面をさつくりと削いだ。

「あいだっ」

「……下手な」

相の手のごとく、火熾しをしていた蓮向に突っ込まれてしどろもどろになる司。小野はなにをやってるんですか、と潤んだ唇から嘆息をこぼして包丁を置き、手を伸ばしてきたので司の心臓がどきりと跳ねた。

そして小野の手は　　司の手を通り過ぎて、手の下にあつた野菜に血が落ちないようにどけた。瞬時に司の心臓が平常運転に戻った。

「早く水で傷口洗ってください。絆創膏持ってますか？　ない？　じゃあ水回りでの仕事じゃなく火熾しの方に移ってください」

「うん……」

「……司お前、一瞬期待した目をしたのは一体なんだったんだ」

「ごめん触れないでその辺」

「……まさかお前、治療してもらえると考えたのでは」

「ごめん触れないでその辺！」

痛そうに人差し指を伸ばしたまま刃物のそばを離れ、蓮向と位置を代わり背を丸めて火に向かう。飯ごうで米を炊くことは得意だと言っていただけはあり、蓮向が居た短時間でかまどには煌々と焔が揺らめいていて、黒い飯ごうが火に巻かれている。

しばし憐憫の情がこもった目線で司を見据えていた蓮向はやがてはあと誰に向けたかわからない溜め息をつくと、司に火の番について講釈を垂れた。

「……あとは薪を絶やさず入れすぎず。ほら、並べて円錐の形にしてあるだろう。その円錐の高さで火力を調節する。初めちよろちよろ中パツパ赤子泣いてもフタとるな」

「なにそれ呪文？」

「……なんと。今の時代では通じないのか」

「蓮向、なん歳？」

言いながらたまに火を団扇であおぎ、火が弱まることのないようにする。蓮向は司と交代で水回りに立ち、たっぷりの水を湛えた鍋を飯ごうの横に置いた。

「あれ、もう煮るの？」

「……最初からお湯を用意しておいて、玉ねぎなど野菜をある程度炒めたらすぐに鍋に入れる」

「お湯つて沸かすのに時間かかりますからね。炒める段階より早く煮る準備をしなくては」

「小野、サラダできましたがー」

「……ん。こんな野菜は、あつたか」

「倉内さんが近くでとってきた山菜ですよ。軽く炒めて塩をふればサラダの一部にちょうどいいです」

アウトドアに特化したメンツが集まっていたようで、三人で良いチームワークを見せ始めている。火の番を任された司は一人、寂寥感にさいなまれた。内心で寂しさに呻いて空を見上げ、トンビが弧を描いて気ままに飛ぶのを見ると自分が余計みじめになり、任された仕事だけでもしっかりしようと思ひ直すと、火に向きあつた。

ぐらぐら煮えるお湯を取り巻く焔は刻一刻と姿を変えて、まるで獣の姿を象るよう。

(こうして火の前に座るなんていつ以来かなあ)

記憶をたどり、そもそも家族と出かけたこともほとんどないことを思い出した司は、自分の記憶の中にある焔の揺らめきの出所がなんだったかを思い出す。

幼い日、自分が住んでいた村。寒村であり発展という語句の例外がごとく昔のままの趣を残す場は、たかだか十年前でも未だ囲炉裏の火を囲んでいたのだ。

そこまで思い至って、あらためて周囲を見渡す。

(そういえば友達と遠出は……はじめてだ)

こそばゆい心地がして頭の後ろを掻き、司は誰にともなく笑った。

十五題目 「合宿スタート」と司が声を弾ませる（後書き）

たぶん前納の出番もう終わった。いやもう少しは出るかな？

前納・蓮向の脇キャラコンビに続き、小野の知人・倉内登場。きてれつ研以外でもだちいないのは可哀そうなので出てきました。無論本筋には一切からみません（って言ったらみんな油断するかな）いやうそですよ（どっちがだ）

Name：前納夕雄まえのせきお

Hobby：笑点の視聴、街頭寄席（無許可実行。たまに捕まる）

Weakness：奇食

Specialty：殻に入ったままのゆでたまごと生たまごの違いを当てられる

Skill：小野曰く、「無い」

Notes：前の席の男。

Name：蓮向凜仁はすみかいらんと

Hobby：日曜朝枠の番組視聴（彼の今季一押しは「企業戦士マシダムNEO」）

Weakness：マトボッククリ

Specialty：池で手を叩くと超高確率で魚類が跳ねる

Skill：小野曰く、「何かある」おそらくは上記の特技。

Notes：斜向いの隣人。

ではまた。

十六題目 「神社は落ち着きますね」と小野が深呼吸した

#

昼食を終えて私服に着替えた司と小野は、丘の下まで降りると町に繋がる橋の傍にあった停留所へ向かい、隣の町まで移動をはじめていた。カレーを食べ終える頃には前納も前線復帰を果たしたのだが、司が小野と出かける旨を伝えると寂しそうに手を振り、その場に留まっていた。彼と蓮向は溪流釣りのコースにしたとのことである。

「そつえば、さっきの話で思い出したよ」

「はい？」

バスに乗り込み、司の隣に腰かけて白い長袖のワンピースの裾を正しながら腰掛けた小野は、頭の上にのせた日よけの麦わら帽子を膝の上に置いて小首をかしげる。黒い半袖パーカの襟元をぱたぱたとさせて胸元に風を送り込む司は、バスの天井から吹いてくるクーラーの風の方へ頭を傾けつつ小野の問い返しに応じた。

「山の歪みのこと。実はあのあと荒れた山の気を調整するために、御手洗みたらいさんが雇われたんだって。そしたら妙なことがわかったからつて教えてくれた」

「妙と言いますと」

「うん、なんていうか……あの場における気の流れに、細工を加えられてたらしい。川の流れに石を積んで向きを変えたり、一方向に集中させて強い流れにするみたいに」

「最初から、あの方々は山の気を負に染めて指向性を持たせ、異界

を開いて彼岸近くへと渡るつもりだったというのですか？」

「いや、だったら車を止められようと計画が中断されることはなかったはず。でも加良部は完全に今回を失敗と見なして、次回があることを匂わせる発言もしてたんだから、そういう作業をしたのは別の人の。 展覧列挙集のフォッグマン事件項目に加良部が書きこんでたスレッドのログとっついてよかったよ」

携帯電話を取り出し、揺れる車内の中ネットに繋いで展覧列挙集を開く。そして七無と加良部のやりとりの一部を見せると、小野は歯痛に耐えるようなしかめつらで画面を食い入るように見つめた。

「これは」

「うん。こういう、自殺志願者とかが集まるスレだから煽ってる、っていう可能性もあるんだろうけどさ。明らかにこの七無って奴の誘導で、加良部の行動が決定づけられてると見える」

「確かに、わたしや司さんの乱入などのアクシデントでいくぶん予定はずれたのですが、それ以外の部分、場所を峠にすることなどは全てこの人の示唆によるものですね……」

わかっていてこれらをやったのだとすれば、七無が峠になんらかの細工をしかけた可能性は十分ある。二人は顔を見合わせた。

「気の流れを操れる、ということとは呪術師やそれに類する異能の者、ということなのでしょうか」

「そういう人間のつてがあって依頼してるのか、本人が術師なのか、そもそも目的はなんなのか、一切わからないけどね。こういうことと繋がりのある人物であることは確かだと思うから、今後ネットなりなんなりでこの名前見かけることがあったら、一応注意しとこう」

「承知しました。……まあこれから三日間はこんな場所ですし、ネットを見る機会もそう多くはないですけど」

「それもそうだね。で、小野、寺社を回りたいんだっけ？」

「ええ。すみません司さん、わたしに付き合わせてしまつて」

「いいよいいよ。先月はこっちが映画に付き合ってもらつたし」

話をしながら車窓から眺める風景は小さな町をあっという間に通り過ぎると、あぜ道と杉林とその向こうに広がる青空との色合いのコントラストばかりが目につき視界に広がっていく。

町から離れて自然の広がる中へ踏み込んでいくのを感じると、急に遠くへやってきたような不思議な高揚感がある。正直なところ司は寺社を見て回ることはさほど興味もなかったのだが、小野がめずらしく弾んだ様子ということもあり、これはこれで楽しめると思い始めていた。

狭い二車線の林の中を過ぎると、バスは田園風景の中を抜けていく。穂波田村ほなみだむらという地名を示す看板が目に入り、十分ほどすると二人は通り沿いの駄菓子屋前にあつたバス停にて降車する。去つていくバスの方向を見据える司を尻目に小野は帰りの出発時刻を確かめ、五時三十二分発の車両に乗ることに決める。

「三時間ほどしかありませんし、手早く回りましょう」

「おー」

この村においては幹線道路なのだろうと思われる道から少し歩き、二本ほど道を逸れただけで店舗や住居の数が格段に減り、代わりに小さな林や田畑が増える様子は司たちにとっては新鮮な光景である。狭い裏道や行き止まりの路地などが存在する田舎道は、冒険心を刺激される。

一応、周辺地図を持ってはいるものの目的地を知らない司は小野に追従する形になり、手持無沙汰に視界と頭を持て余している分いろいろなものを目に付いた。

「なんだこれ、やきいもジュース微炭酸……だれが買うんだろこれ。あ、前納なら飲むか」

試しに自動販売機に百円投入し、司はやきいもジュースを手に入れた。もちろん自分で飲む気は起きなかつたため、肩から提げていたフラップバッグに納めた。ついでに横にあつた菓子類の自動販売機で細いプレツツエルにチョコレートとコーティングした菓子を買うと、小野に追い付くべく小走りしながらぼつきぼつきと噛み砕いて食べた。

「……なんでひとりで遠足気分演出してるんですか」

「食後つて甘いもの欲しくなんない？」

「さほど。わたしはそこまで甘食に固執してませんので。でも一本いただきます」

チョコレートを舐める派であるらしい小野は口の中に入れたプレツツエルを舌先でころころと転がし、司とは違い時間をかけて食べている。司も二本目を食す際はなんとなしにその行動にならない、のんびりと歩いた。時折路肩に祠などが見られ、中をそつとのぞくと狐を模した像が鎮座していた。

バス停のあつた道路からだいぶ離れた位置まで歩いてきて、いつしか二人は川沿いを遡上していた。対岸まで三〇メートルはあるうかという川に沿う道は、林の陰に入れば日差しの強さも忘れられるだけの涼やかな気配が漂う。コンクリートと鉄骨で満たされた街から来た小野にとっては、村と街のこうした細かな差異も珍しい体験となる。司にとっては、懐かしい体験だ。

やがて進行方向右手に神社が見えてきて、二人は汗を拭いつつ到着する。周囲を林に囲まれた神社は丘の上にあるらしく、石段が長く続いていた。

早速二段飛ばしで進む小野の後ろについた司はなるだけ歩調を落

としてみたが、小野のワンピースは真面目と言って差し支えない裾丈だったために生足サンダルの他は特に何も見えず、不満げな司は前方に届かない程度に舌打ちする。続けて以前、きてれつ研に入会する前も今と同じことをしたのを思い出して、嘆息した。

「……うーん、色々な意味で、あの時と何も変わってないのかな」
「どうしましたー、足を止めて。膝か腰でも痛いのですかー」
「いやまだまだ若いから。失礼なこと言わないでほしいな！」

既に石段を登り終えて鳥居を抜けようとしている小野に呼びかけられ、腕を振りながら司も駆け上る。駆ける、上る。走る、上る。小走り、上る。早足、上る。歩く……上る……ところが予想以上に段は多く、途中まで数をかぞえていた司も思考に回せる酸素を失い、次第にゆっくりと足を前後させるだけになっていった。

背を丸めて荒く息を吐き、疲弊を全身で現しながら上りきった司は、既に手水所で手と口をゆすいで待っていた小野の横へゆっくりと近づいて行き、へたりこんだ。

「お疲れですね」

「……うん」

「足腰鍛え直したので、わたしのペースが早くなっていましたかね」
「……参考までに聞くけど、この一カ月、どんな特訓を」

「いえ、大したことはしていません。週末、二百メートルほどを走って登ったり下ったりしていただけです」

「市内に、そんな長くてきつい坂あったっけ」

「坂ではないです。隣の市との境目に、山頂に神社のある山がありまして」

「二百メートルって標高かよ」

石段などなんでもないわけである。司は茫然としていたが、しば

らしく立ち上がって息を整えると柄杓で水を汲み手と口をすすぎ、なんとか氣勢を取り戻す。小野と共に、背後に構える社に向き直った。が、すぐ問題が発生した。

「まずは拝殿で参拝しましょう」

「あ、小銭さっきの自販機で使いきっちゃった」

「……計画的にお金を使ってください」

狛犬ではなく並び立つ狐の間を抜け、道の真ん中を通らぬように気をつけながら二人で賽銭箱の前に立つ。小野だけお賽銭を投げいれ、鈴をがらがらと鳴らしてのち、二礼二拍一礼。タイミングがずれかけたものの、司は横目で小野を見ながらなんとかやり遂げる。

その後は回廊沿いに右側からぐるりと拝殿の裏へ回り込み、本殿をしげしげと眺める小野について回った。

「ん」

「どしたの、小野」

「いえ、奥にある枝社えだやしらの方が綺麗な気がしまして」

「枝社つて、本殿とちがう神様を祀つてるところだよな」

「それだけではないこともあるそうですが、概ねその認識で間違っ
てはいないかと。しかし、ふうむ」

境内をしばらく歩きまわり、この神社の古事や由来の書かれた看板を見て、司と小野は一休みしてからまた石段を下った。帰りの方が膝に負担がかかることに気付いた司は、存外己の身体が脆いのかもしれないと悲しい気持ちになる。

元の道に戻ってきて、再び川沿いを歩く。次の目的地は橋を渡り、向こう側に見える小さい山のふもとにあると小野は言う。

「この村は稻荷信仰の厚い場所のようですね」

「さつきからたまに見かける祠にも、狐の像があったわけだ。でも、狐にはあんまいい思い出ないんだけどなあ」

「どうしてです？ 可愛いじゃないですか、きつね」

「化かされたことあるんだよ」

「本当ですか」

「ホント、だと思う。昔　そう、今探してるあの村にまだ住んでいた時。山の中歩き回ってたら知らない大人に出くわしたんだよ。小野には話した通り、呪術師ばかりの閉鎖的な村だからよそ者なんてそうそう入れないはずなだけだね」

久方ぶりに思い出を掘り起こした司は、腕組みして考え込む。次第にもやのかかったような記憶に辿りつき、頭の中の映像を言葉にしてはつきりさせようと試みた。

「その大人が『ここはどこ』って言うから……なんて答えたんだっただかな。とにかく村について話した。そしたら、『稲荷』とか叫び声あげてどっかに行っちゃって……そのあと歩いてたら知らない村が見えて、祖父母から自分の村を離れないと言われてたから慌てて引き返した」

「……なんとなく先は読めましたが、続きをどうぞ」

「うんまあよくあるパターンだったよ。知らない村のことは誰にも言わず黙ってて、村によそ者が来なかったか訊いてもそんなの見てないって言われて、あとから山の同じ方向に歩いて行っても二度とそこには辿りつかなかったとき、おしまい」

化かされて同じところをぐるぐるとさまよう話、盛大な宴の中へ迷い込んだと思いきや、ふと目覚めると酒も食事も雑草や生ごみだったという話など、狐や狸に化かされてひどい目にあうこととなる話は全国に散見される。

それだけ狐は知能の高い生き物と認知されており、人間を騙せる

ほどに高等な頭脳を持つと扱われる動物なのである。

「というわけで、この眼じゃ幽霊は視えても、化かすのは見破れないみたいなんだよね」

「……わたしみたいなのと一緒に行動していると、また化かされるかもしれませんよ」

「ああ、そっか。そういう異常事態にも巻き込まれやすかったりするか」

小野の異能察知の微能力は、異能の持ち主を察知するのみならず異能により問題の起きた場にも引き寄せられやすくなる効力をも持つ。普段のように自ら進んで事件を追う際には有用この上ないスキルだが、今のような平常時にもトラブルを招いてしまいかもしれないというのはいただけでない。

「山に近付きすぎなければ、大丈夫だとは思いますがけれど。妙な事態になってしまった場合は、対処に協力をお願いしておきます」

「まあ、歪みがみえるとか明らかにまずそうなことが起きたら、すぐ伝えるよ」

安請け合いしつつも実行可能なことしか提示せず、できることできないことの境目をはっきりさせた上で司はうなずく。小野も応じてうなずき、二人で橋を渡る。さわさわと流れる透明な水は彼方まで続いており、川を形作る流れの一部を辿ると進行方向の右側で斜面に向かってまっすぐ伸びているのが見えた。

滝でもあるのだろうかと思い、司が急ぎ足で小野を追い越し斜面をのぼってみると、然り。豪快な水量というほどではないが、十五メートルほどの高さから降り注ぐしぶきが辺りにひんやりと心地良い水気を振りまき、空気を冷やすようにかき乱していた。

「向こうにポンプで水汲み場もある。ちょうどよかった、喉乾いた」

「？ 司さん、さっき自販機でなにか飲み物を買っていませんか？ たか」

「あれは飲み物っていうか奇食に近いから……」

ペットボトルでもあれば汲んで帰れたらうにと思ったが、重たくなるのでどうせ面倒になるだろうとも思った。崖によって日陰が作られた空間は、滝の流れ落ちる位置を中心に五メートルほどが池のようになっていて、浅瀬には踏み込むこともできそうだった。

日差しの中、歩いたり駆け上ったりで火照った身体を冷やしたいと思った司は、スニーカーとくるぶしまでのソックスを脱いで、ベージュのストラップスの裾をまくると水面に続く濡れてなめらかな岩の上に立った。片足ずつそろそろと水につける。とぷんと沈み込んだ爪先、土ふまず、かかとの順に、ぞぞと冷たさが這いあがる。

「うあ、つめたい。気持ちいいけど」

さぶさぶ、静かに音をたてながら浅瀬を歩く。前屈みになって両手を水に浸せば、腕をまとうように流れていた汗もすうっと引いていった心地さえした。

「深呼吸してるだけで身体の不調が消えてく気さえするよ」

「いかにもうさんくさい効能の説明みたいですね」

冷えた手先で首元も冷やししながら顔を上げた司は、そんなことを言う小野に手招きした。

「小野も入ってきたらわかると思うよ？ サンドルだしいいじゃん、入れば」

「ですか。では、少しだけ失礼して」

無造作に、小野はサンダルのまま濡れた岩の上へ踏み出した。

（え、いやサンダルはスニーカーと違って脱ぎ履きしやすいだろうから『いいじゃん』って言ったのであってそのまま踏み出すのは危ないと思うんだけど）

という司の心の叫びが身体動作となつて右腕を上げかける間に小野は「ひゃん」と抑揚の無い声でつぶやき、二歩目の左足を滑らせると麦わら帽子を浮かせ、驚愕に目を見開き、司の右腕をかすめて着水した。

「……わ、わ！ 小野、え、あの」

腕を突っ張つて完全に身体が沈むことを防いだとはいえ、じゅぶんと跳ねた水は小野の服をほとんど満遍なく濡らしていた。次いで水面に落ちそうになつた麦わら帽子を、司は伸ばした右腕でキャッチした。

気まずい沈黙の中で滝の水音だけが二人の間を満たす。なんと声をかけたらいいかわからない司は気休め以下であることは承知していたが、ハンカチを片手に取り出して屈みこむ。小野は身じろぎひとつせず、左手両膝を水の中に落とし、右腕で胸をかばつたようなポーズのまま固まっていた。

「えっと、その、小野、だいじょうぶ」

「……いいえ、あまり大丈夫じゃないです」

なおも小野は動かない。傍から見たらだいぶ滑稽だろうな、などと司は要らない考えばかりが頭を巡り、肝心なはずのこの状況に対

処する思考がさっぱり出て来なかった。

「……あの」

「は、はい」

「司さん、何かタオル的なものはお持ちですか」

「ごめんハンカチしかない……」

「左様で。では向こうをむいていただけますか」

小野の言葉の意図するところが一瞬わからず、司は戸惑う。しかしつつむいたままの小野のうなじと耳元が、日焼けなどではない理由で赤くなっていることに気付いて慌てて後ろを向いた。

「ハンカチ、お借りします」

「うん」

後ろ手に差し出したハンカチに、小野の冷たい手が触れた。ハンカチを受け取り、小野は白いワンピースに染み込んだ水をしばらくから身体を拭いている、という様子が司の脳裏に容易に想像された。目を閉じて雑念を振り払う。滝のそばとしてはありがちな行動だ、とまたどうでもいいことがまぶたの裏をよぎった。

「ややあって、溜め息が司の耳元に届く。」

「……やはりだめですね。とてもじゃないですが、これで往来は歩けません」

「え!?!」

「なんですか、そのひっくり返った声」

ハプニングに驚き少しだけ喜ぶ心情と、このままだと貴重な残り二時間を無為にしかねないという思いの二つがぶつかりあい、司に変な声を出させていた。

「どうしましょう……」

「あ、とりあえず、これ羽織って」

いつになく弱気な小野の声音を背後に聞きながら、司は自分の着ていた黒の半袖パーカを脱いで手渡す。下着だけでなくシャツも着ておいてよかった、と内心でさつき着替えた時の自分を褒めつつ、パーカが受け取られるのを待つ。おそろおそろといった様子で小野がパーカを借りて、十秒ほどして「いちおう大丈夫です」と声をかけられた。急いで司が振り返る、

見れば、袖は通さずに司の言葉通りパーカを羽織った小野は、留められるボタンの位置が低いために隠しきれない胸元を左手でかばい、パーカの裾から出した右手でスカート部分を引っ張って、服が透けることを極力回避させていた。

かなりめずらしいことに顔を赤くしてあさつての方を見る小野は、恥ずかしげに司に問う。

「あの、隠せてますか」

「ばツチリダよ」

「また声裏返りましたけど」

見たい下心と他人に見られたら嫌だという感情の板挟みにあつたがための声である。なんでもナイ、とこれまた裏返った声で答えた司は、辺りに人気がないことを確認し始めた。

「隠せているなら、ひとまずこれで移動しましょう……できれば神社の人にバスタオルかなにかを借りたいです」

「そうだね……けどごめんね小野、入ったらって誘ったばかりにこんなことになって」

「気にしないでください、冷たくて気持ちいいのは事実でしたよ」

濡れそぼった前髪をかきあげて、小野が司に笑いかける。それだけで救われたように、司も笑みを浮かべた。

放っておくと肌に吸いついて透けてしまうワンピースの裾を引っ張りながら、ゆっくりと歩いて神社に近づく。ここでも狛犬の代わりに狐の像に迎えられ、敷石の続く先にある社務所に司が走る。神主が男性であればバスタオルを借りてから小野を近づけようと思っていたが、幸いにも御守りなどを売る場の奥に居たのは巫女だった。細い筆でひと撫でしたような鋭く払われた眉尻と、茶の色合いを帯びた虹彩鮮やかな瞳が司に向けられ、ばたばた走ったことをとがめられたと司は思った。歩調を正し近づく。巫女は千早をまとい長い黒髪に檀紙を巻き結えた格好で、場が場であることもあってか清浄で荘厳な雰囲気をごちらに与える。司が話しかけると、軽くお辞儀をした。

「あの、すみません」

「はい」

「あつちにいる連れが向こうの滝で身体を濡らしてしまつて。タオルかなにか貸してもらえますか」

「タオル？」

司が何かを買つたため近付いてきたと思つていたのか、目的が違うと知るや否や巫女は急にくださった語調になつて司に聞き返した。そして司の向こうで立ち尽くしている小野を捉えると、「待つて」と言い残して売り場から消える。

裏手の出入り口からタオル片手に現れた彼女は司と同じくらいの背丈で、ハンドタオルを二枚抱えて小野のところへ歩いて行つた。

「さ、どうぞ。あらあ、びつたびたになつちやて」

「あ、ありがとうございます」

「気にせんでもいいわよ。こんな格好じゃ道を歩くこともできん
しょ」

年の頃は二十半ばほどだろうか。面倒見の良いお姉さんという体
で会話をはじめた彼女には、もう先ほどまでの荘厳な雰囲気はかけ
らも感じ取れなかった。追いつくように近付いた司は身体を拭くべ
く小野が脱いだ少し湿り気の残るパーカを片手に、また後ろを向く。

「あらら。こらあかんね。他の色ならともかく、白だから透ける」
「やはり拭いてもダメですね……」

「下着の色わかつちやうわ。レースの薄いみ、」「やめてください」
（水？ 緑？ ……海松^{みる}？）

聞き耳をたてられる距離だった司には少々刺激の強い話題だった。
背後から後頭部の辺りをぶちぬく殺気の視線が当てられていること
に気付くと、さすがに思考を巡らすことも中断せざるを得なかった
が。

「ちょっと乾かさないと着れんわよ、これ。そだ、天日干しだと時
間かかるし、裏にある乾燥機使う？」

「いいんですか？」

「構わんよ。同じこと二、三回あったから慣れとるの」

唇を閉じたまま笑う巫女に、小野は申し訳なさそうに眉尻を垂
らした笑みを浮かべた。

後ろを向いたまま、司は話が進んだことを察して声をかける。

「小野ー、こっちはどうすればいい？」

「しばらくそうしていてください。司さん、聞き耳なんて立てて」

「不可抗力だって」

それに肝心なところは聞きそびれた、と肩を落とす。巫女はそんな二人の様子を見てさもおかしそうに笑みを深めた。

「お茶くらいは出したるからこつち来なさい」

先導して歩き出した巫女に続くと、社務所の裏手にある階段を下りて平屋造りの家が見えた。生活スペースとしての場所であるらしいそこは、すぐそばにある神社の放つどことなく気が引きしめられる空気と違い、生活感が滲み出るごく普通の家庭に似たにおいがした。

鍵を開けて玄関からあがりこんだ司と小野は「お邪魔します」と同時につぶやき、ひたひたと廊下を歩いた。巫女は奥まで進むと右手に折れて、脱衣所と思しき場所へ小野を案内する。

「着替えも貸しとくわね」

「すみません、なにから何まで」

「困った時はお互い様、つてえ奴よ。あとそつちの君は、その居間でくつろいどつて頂戴」

「はい」

脱衣所の手前で左に折れると、ちゃぶ台の周りに二枚の座布団が置かれたごんまりとした居間に入っていた。窓を見ると西側に面しており日が差し込んでまぶしく、先ほど司が渡った川の下流が遠方に流れゆくのが見えている。

「粗茶しか出せんけど堪忍してね」

「いや、お構いなく」

「あ、座布団一枚足らんわ。ちょっと取ってくる」

盆に乗せて運んできたグラスとやかんをちゃぶ台に置くと、ぱたぱたと歩いて他の部屋へ移動していく。よく動く人だな、と司は思いながら、やかんから三人分のお茶をそそいだ。

「うーん、ちよつと座布団見当たらんからクッションでいいかしらね」

戻ってきた巫女はピンク色のクッションに腰かけると、司がお茶を注いでいるのを見てありがとう、と笑った。

「来客自体が珍しいもんでね。二人はなに、キャンプかなにか？」
「学習合宿、つて奴で。下流の方にある川浪かわなみっていう、バンガローのあるところに学校で来てんです」

「あー川浪！ あの辺りだとたしかホタルも見れるんじゃないかな？」

「らしいですね」

「私も昔は観に行ったもんよ。今じゃ忙しくてここから離れられんのだけだね」

「巫女さん、ですか」

「ん。だいぶ歳だから神楽以外はそろそろ引退しなきゃならん巫女さんよ。遅れたけど、私は神代珠百かしろたまお」

「どうも。……え、と、丸留司まるどめつかさです」

冷たい麦茶で唇を湿らせながら、他人の家の麦茶はどうにも味が違う、ということを再認識する司。適当な世間話を振る中で名前を聞かれ、とっさに以前使った偽名で応じる。少なくとも「つかさ」という名に関しては普段から小野もそう呼んでいるし、目取真という苗字さえ名乗らなければ支障は無い、と司は思っていた。

そんなこんなで愛想笑いと共に司が間をもたせることに苦労していると、廊下を強く踏みしめる音が断続的に迫ってきた。

「あ、の！ すいません、これ、この服！」

「なんか問題起こつとる？」

「問題といますか、これ」

入口から顔だけ出して神代を手招きする小野は、しきりにつつむいて自分の格好を見ている。一体どうしたのだろつと司が腰を上げてみると、はつとした小野はすごい勢いで脱衣所に逃げ出した。

「小野？」

「あ」

慣れない服を着た小野はもたもた廊下を歩いているうちに司に追いつかれた。

すると、白と赤の対比が司の目に美しさを直接に叩きつけてくる。白衣と緋色の行燈袴。屈んでいるためか袴の切れ目はわずかながら開いており、小野は壁に手をつけて身をよじりながら司を振りかえる。襟足も折り返して毛先を上に向け、髪留を付けているためうなじが綺麗に映える様は、普段と違う艶つばさを感じさせた。

「私の服だとサイズ合わんかと思って。備え付けの巫女装束からSサイズの選んどいたけど、あかんかったの？」

「サイズ無視して普通の服でいいです」

「私は仕事上それが普通になつとるのよ」

司の後ろから顔をのぞかせた神代は首をかしげてそんなことを言い、小野は反論していたが、司はと言うと今日はめずらしい小野を色々見れたなあとしみじみ感じ入っていた。

「もう、司さんもなんとか言っってくださいー！」

「え、ああ。いいんじゃない、かわいいし似合ってるよ」
「またあなたは、すぐそういうことを……」

戸惑っているもののきつちり着ている辺り、小野も気に入っているのではないかと思っただがあまりからかいすぎるのも危険だと判じて、司は黙って小野を上から下まで眺めまわしていた。……それはそれでやめてほしいと頼まれるまでさほど時間は要らなかった。

十六題目 「神社は落ち着きますね」と小野が深呼吸した（後書き）

……あれ、なぜかきやつきやうふふな展開になった。

まあどうせそんな展開長くは続かないと思いますけどね。

そろそろいろいろ伏線ハツタリ回収したりがはじまります

十七題目 「見よや理想郷」とサワハが叫んだ

散々いやいやとかぶりを振った小野だが、神代が持つ他の服を借りようにもサイズが合わず、背丈はもちろんのこと胸囲などもぶかぶかになってしまったためしぶしぶ巫女服を認めた。

「巫女装束はバイトの子が来た時のためにサイズはいくつか揃えるからね」

なぜか自慢げに語った神代は、ずずずとお茶をすすって卓を囲む司と小野の二人を見据えた。

改めて見渡すと質素な室内は生活感こそあるものの、立派に作られた神棚ばかりが目立つ。すると見回す司の視線に気づいた神代は、口より物を言っていた司の目線に応える。

「ああ、ここは私しか住んどらんから。たまーに神社関係の人が来て泊つくことはあっても、長く滞在はせんもんでね。娯楽用品とかもさっぱり持つとらんのよ。日課に朝夕の神棚掃除を加えてもぜんぜん時間余るくらい」

「まあ神職だったら掃除くらい当然のような気も……」

「かしらんね。ところで、さっき丸留ちゃんから二人は合宿で来たって聞いたけど。なんで隣の川浪の町からこっちまで来とったの？」

丸留という聞き慣れない名前にびっくりと反応した小野は横の司に「偽名ですか」と視線で問うたが、さすがにその意味合いまでは見抜けなかつたらしく神代は首をかしげている。司は小野の視線の訴えは無視する形で、「こっちの連れが寺社を見て回ったかったそうで」と説明した。それを聞いて、神代は感嘆の溜め息をつく。次いで、また笑った。

「若いのにずいぶん枯れた趣味もつとるのねえ、えーと」

「あ、申しおくれました。小野香魚香といます」

「ふうん。小野ちゃんか。私は神代珠百。……つふーむ、じゃあ寺社に興味あるなら、ここ田淵たのふち神社の案内でもしたげよっか？　しばらく喋つとれば服も乾くだろうし」

「いいんですか？」

「もちろん！　……ガイド料取つたるからね」

「え」

「冗談よ冗談。あ、でも本殿内部は拝観料一〇〇円だから」

快活な声で言う神代は、早速席から立ち上がると司と小野をうながす。手持無沙汰にこの居間に居続けるのもなんだだったので、呼びかけに応じて二人は神代のあとを追った。

「ふうんふうん、うなりをあげている乾燥機の響きが届く玄関先で靴を履き、先ほど下りてきた階段を上ると拝殿の前を通った。」

「うちの社は、というかこの村の社のほとんどは稲荷大明神を祀つとるの。要はお稲荷様よ。京都の伏見稲荷、行ったことある？」

「あの千本鳥居のあるところですよ」

「うん。稲荷神社はあそこが総本山とされとるから、あそこと同じような稲荷信仰がここにも根付いとるわけなんだけど……ま、ここではそれ以外にも土着の神様もおつたりしたもんでね、そういうこともあつて枝社でそつちの神様も祀つとるのよ」

「ああ、そういえばさつき見かけました」

「ここ来るまでに他の神社見た？　そうそう、そうやってどこも枝社建てとるわけ」

小野と話す神代の指し示した方向には本殿よりやや小さめだが立派な枝社があり、先ほど立ち寄つた石段の先にあつた神社でも似た

ような建物があったことを司は思いだす。

「特にここでは少し変わった信仰で、お供え物で食べ物を置く時には枝社の方を、少し多めにするってのがあってね。ちよつと変な話でしょ」

「めずらしいですね」

「特に元来稲荷、狐つてのは穀物とか食の神様の使いとされとるから余計めずらしいのね。というのも、字面通り『稲荷』稲が荷。狐は季節に合わせた生活サイクルしとるから、春に現れて稲穂が実る季節になると山へ消える。だから米の季節を想起させるイメージと食の神様の使いとしてのイメージが結び付いて、稲荷と呼ばれとつたらしいのよ」

拝殿を左回りに回り込み、本殿の方へ向かいながら神代が言う。

真剣にそれを聞く小野は自分よりも歩幅の広い神代についていくべく小走りになるが、慣れない服装のためにいつ転ぶかわからない危うさがあり殿しんがりを務める司はひやひやしていた。

やがて看板が見えてきて、青く錆びに浸食されたプレートを手で示した先導者が「左手をご覧ください」とまるでガイドであるかのように説明した。いやガイドではあるのだが。そういうガイドではない。

「昔の慣習とかについて説明してあんのね、これ」

「……読みづらいですね」

「神主の趣味で書家の人に頼んで、草書体で書いてもらったらしいからね。読めたらむしろ驚くわ。私も内容を教えてもらつとるだけで、これ読めるわけじゃないの」

照れたような笑みを浮かべながら神代は図を指し示す。草書体の説明文の下に描かれている人物たちは、どうやら巫女か、少なくとも

も神職の人間と推測される格好で舞台に正座しており、背後にもやのようなものが描かれている。

「無礼講、からこの説明が始まっとるんだけど」

「宴会の席で言うあれですか」

「そうそれ。の、語源。もとは最後一文字の？講？っていうのが、民間信仰における宗教行事の時の集まりを指すんだけどね。そこでの上下関係を取っ払うことを指しとるわけよ。で、ここでも無礼講と一口に言ってもいろいろやっとな。あ、庚申講こっしんこうって知らんかな？」

「……三戸さんしの虫？」

「そっそ、丸留ちゃんよく知っとるわね。じゃあヒルムカシってのも知ってる？」

「まあ、知識としては一応」

話がわかる人間がいたことに心底嬉しそうなところを見てみると、くだけたフランクな態度のわりに神代はきちんとした案内用の教養はあるのかもしれない、と司は思った。小野はというと聞き慣れない言葉に目を白黒させている。

「昼ぶかし？ こうしんこう？ 三枝の無視？」

「ヒルムカシは、その昔は昼に昔話をすることが禁忌だったから、それを指す語。それで庚申講は道教、中国伝来の宗教の伝説の中で庚申の日に夜中、寝てる人間の身体から三戸さんしの虫むしつてのが出て行って閻魔大王に悪事とかを告げ口するから、徹夜して虫が出て行かないようにしようっていう集いのことだよ」

「詳しいねえ、丸留ちゃん」

「……知り合いに博識な人がいましてね。その人、猿を肩に乗せてることが多いんですけど、一度どうして猿を連れてるのが聞いたら庚申とか猿楽についていろいろ講釈を受けたんで」

御手洗のことを思い浮かべながら司が言うと、神代は納得した様子で何度もうなずいた。

「話を聞いとると神道に明るそうな人ね」

「その人、基本的な性分が研究者なんで。昼はあんまおしゃべりじやないんですけど、それこそ夜になると多弁な人でした」

「正にヒルムカシよね。……昔は明かりも無く夜の仕事は捗らんから、昼は話しとる暇がない。だから昼の昔話は禁忌になっとったんだろね。で、そういう時子供に話をせがまれると大人は『話は庚申の晩に』と言って追い払う。そして庚申の晩はどうせ徹夜だから話をする暇ができる。こうして古来からの口承文芸は、語りの場まで日常の中から選別されて作られとったって話よ」

「……こうしん、というのは、ひよつとして健康の康に似た字に、猿の申ですか」

「あたりだよ、小野」

司が言うと、なぜか小野は顔を曇らせた。神代は首をかしげたが、司が続きをうながす。

ちなみに十干という五行それぞれに陰陽を振り十種に分けた要素あるいは属性。そこに十二支を加えたものが庚申を含む、いわゆる干支である。

曆に用いられるこれら数詞は天地の気の流れを示し、古来より物事を成すに良い日と悪い日などの選定に使われてきた。庚申講もこれに基づく行事のひとつと言える。

「で、まあ説明に戻ると。この村での無礼講ってのはさらにちよつと特殊で、この図の通りにいるんな人が集まっとるわけなんだけど。神楽の舞台なのに普通の村の人もあるが、つとるの」

「それ、神職の人たちだけじゃないんですか？」

黙ってしまった小野の代わりに、司が問いを重ねると神代は快く答えた。

「一般の村人も混ざつとるよー。なんなのかってえと、この村ではそれが？無礼講？なのね。神様と繋がるための舞台にみんなであり、供物も召し上がる。下に合わせるでなく、上に引き上げたる形で上下の垣根をなくすのよ」

図をよく見ると、たしかに人々は皆なにかを口にしている。食の神様を祀るからこそその神事なのかもしれない、と司は理解した。

「どこもそうだろうけど、この村も大昔は飢饉なんかに見舞われつつたそうだからねえ。食を神様とも分かち合う儀式は、せめて心だけでも豊かにしたろ、ってな気持ちの表れだったらしいわ」

「へえ……」

「で、次の図では狐に見立てた仮装をして、踊り回ることで豊作を祈願しとるのよ。雨乞いでは古来、上に向かって祈祷師が水を吹きかける真似しとったって言うけど、それと同じように『求める結果の模倣をする』ことで現実を理想に引き寄せようとする儀式になつとるわけね」

「ホントに詳しいんですね」

「私、民俗学とか文化人類学に興味あったから。この村の神事とか言い伝えについてはもちろんのこと、あとは独学でちっとかじつとるの」

神代は笑って、えへへと頭を掻く。踊場あたりが居たら話はずむだろうと司は思った。少し興味が出てきたので、看板の奥、枝社の向こうにある苔むした石碑の方を指差して司は問う。

「そつちの、奥の石碑はなんて書いてあんです？」

「あれ？ あれは……直接にこの神社と関わりあることじゃないんだけどね。ここの裏手の山では、その昔神隠しが起こったそうなのよ。そのことについて書いてある」

「神隠し、ですか」

「まあ神隠しも論理的に考えたら寒村での口減らしのために行われた暗黙の了解、ってな側面が見えてくるけど。ここの言い伝えじや若い子供だけでなく大人も消えて、帰ってきとる事例もあるそうだから一概にそうとは言えんね」

口減らし、と口の形だけ動かして、司はどこか痛んだような顔色を見せる。神代はここで一息いれて、石碑に近付いた神代はざらつく青黒い石の表面を撫でる。後ろをついてきて崖下にある石碑の前で雑草を掻き分け踏み入る司と小野は、内容について語る神代の声に耳を澄ました。

「『山に入りたる者、異なる氣に触れ梁渾^{つみい}ゑ至る』と書いとるね」「りようこん？」

「ここに書いとる神隠しにあつたのは女の人だったみたいだけど、なぜか……顔にひどい火傷を負つとって、帰ってきてからそれしか言えんかつたらしいわ。どういう意味かは不明、この字は当て字みたい」

不気味だと思ったのは司と同じなのか、小野の表情が歪んだ。二人の反応に神代は笑い、手を振って茶化した。

「つても、火傷の件はともかくとして、ここ十年くらいの間にも二三件の行方不明者は出とるし。なんにせよ山は迷うと危ないってことを教訓として石碑に残しとるんでしょうよ」

司に自分の結論を語ると、雑草を掻き分けて神代は石碑の前から石畳の道まで戻った。司と小野も戻り、枝社の方を向いてはじまった説明に司はまた耳を傾ける。

さほど広くない敷地の中を歩いただけだったが、神代のガイドはそれから三十分ほど続いた。

乾いた服を身にまとい、折り畳んだ巫女装束を差し出した小野は深々と神代に頭を下げた。

「良くしていただいて、どうもありがとうございます」

「いえいえ気になさらず。キャンプ楽しめるといいわね」

「じゃ、ガイドもどうもありがとうございます」

社務所に引つ込んだ神代は二人の姿が見えなくなるまで手を振っていた。てくてくと、また滝の方まで歩きながら二人は幾度か後ろを振り返る。

「いい人が居てよかったね」

「ですね。……でも？丸留？さん」

「ん？」

「この偽名はなんですか？」

訝しむ目で見られた司は、そういえばゴールデンウィークに遭遇した加良部の一件の際、小野は意識が朦朧としていたために自分がこの偽名を使ったのを覚えていなかったのだったか、と思いだした。

「いや、別に。苗字呼ばれるの、好きじゃないから」

「それ、赤馬さんと会った際にもおっしゃってましたよ」

そこで名乗らなかつたことは覚えていたらしい。どうしようかと
わずかばかり迷うが、別段小野がこれからする話をだれかに吹聴す
ると思えなかつた。自分が不利益をこうむる可能性は考慮するに
値しない程度だろうと推測した司は、肩をすくめてポケットに手を
入れた。

ふと先ほどの『口減らし』という言葉も頭をよぎつたが、気にせ
ずに咳払いをした。

「……まいつか、正直に話すよ」

ただ、正直に語り、ウソはつかないが、語らない部分もある。と、
司は心中で舌を出す。

「うちは、家族とあんま折り合い良くなってさ。っていうのも、仲
が悪いわけじゃなくてね。……小さい頃、ほとんど両親と兄妹と、
過ごしてなかつたからなんだ」

ちらりと横を見ると、小野はこういう話を聞いた時の人間の反応
として大方予想のつく、気まずそうな表情を滲ませていた。フォロ
ーとして「別に育児放棄とかじゃないから」と説明を差し挟んだが、
その口にしつつも司自身『育児放棄』という語に対して思うところ
はあつた。

両親は、進んでそうしただかつたのではないが 強いられてそう
せざるを得なかつたから。

仕方がなかつたとはいえ、自発的でなかつたとはいえ、棄てなか
つたとはいえ。

手『放』したことには、変わりない。口減らしでは、ないのだろ
うが。

「思い返せる一番古い記憶は、天井を走る太い梁を眺めている自分と、その周りでせつせとなんかの作業に励む祖父母の姿かな。今現在探し求めているあの村、あの家に、祖父母と一緒に七歳まで暮らしてたらしい。……時間経過を実感できる記憶はないけど」

司は村では普通の、しかし傍から見れば奇妙な風習などにも参加させられ、現代の子供としては異質な育ち方をした。そこから急に現代社会の都会に投げ込まれ、家族として接しなくてはならなくなつた？ 初対面の父と母？ 真一郎しんいちろうと房江ふみえ。？ 初対面の姉と兄？ 一恵かずえと啓二けいじ。

もつとも一恵と啓二に関してはかなり歳が離れており既に自立していたため、目取真家にて生活しはじめた司とはほとんど顔を合わせることもなく「知人のお兄さんお姉さん」という程度の括りで接することができた。

問題は、両親だった。毎日寝食を共にする、まったく知らなかつた他人。

溝は今でも残っており、司は極力両親と顔を合わせないように生活していた。

「わけあってそうせざるを得なかつたらしいけど。あの呪術師だらけの村で祖父母と過ごした七年の間、苗字は母親の旧姓である霧島きりしまにさせられてた。だから八年前、突然いまの苗字にさせられた時も、どうもしっくりこなくてさ。自分から進んで名乗りたくないし、呼ばれたくもないんだよね」

「そういう、理由だったのですか……」

しみりしてしまった二人の耳に、滝の音が近づいてくる。静まつてしまった空気に暗い気配を感じた司は、まだ隠していることがある罪悪感も相まってか居たたまれなくなつたが、これ以上は語るわけにいかないのでとりあえず他の会話の糸口を探した。

「ごめんね、なんか沈んでたみたいなのに余計暗くなるような話して」

「し、沈んでましたか？ わたし」

「違った？ なんか神代さんの説明の途中から、黙りこくって考えごとしてたみただけど」

じつと観察されていたことに焦った様子で、小野は麦わら帽子を深くかぶり直す。ええとその、となにか隠したいことでもあるのか、言葉を濁して語ろうとしない。氣遣った司は「まあいつか、それより急がないとバスが行っちゃう」と小野を急かして、自分の問いをうやむやにしようと明るく振る舞う。

その司の袖口を引っ張って、小野は先ほど滑った位置の近くで立ち止まった。

「……どしたの、小野」

「いえ、司さんにばかり話していただくのも、申し訳ない気がしまして」

「こつちの場合は話しておきたくてそうしただけだから、気にしないでいいよ。ほら、唐突に過去を語りたくなつたというかなんというか。こういう日本の田舎らしい景色を見ると、昔を思い出したというかなんというか」

「じゃあわたしも話しておきたくまりました」

じゃあってなんだ、と司は思ったが、茶化す雰囲気でもなさそうだった。居ずまいを正す司は、小野がつかむ袖をやんわりと離して向き直る。憂いを帯び濡れた目の色で司を見上げる小野は、けれどやはり言いにくそうに、切り出した。

「……わたしが思い考えていましたのは、庚申のことを聞いたから

です」

「庚申？」

「ええ……司さん、以前お話ししましたよね。わたしの仇。カノエミフネについて」

「ああ、カノエ……かのえ？」

「庚申の庚は、かのえとも読むでしょう。ですから、考え込んでいたのです。それに、そのあとに神代さんが語っておられた神隠しも」
「なにか、カノエに関係あるの？」

司の問いに、小野はすぐ答えることはできなかつた。自分の右腕をぎゅっと左手で握りしめ、寒さに耐えるか弱い存在のように歯を打ちならして気を落ちつけようとしている。そこまでして聞きだすことに心苦しさを覚えた司は手を小野の肩において言葉をかけようとしたが、「いいんです」と遮られて唇が止まる。「話したいんですから、いいんです」。

いつの間にか閉じていた目を、ゆっくりと開く。小野は司の目を捉えると、うつすら諦めを享受した顔色で……右袖をめくる。

「わたしの仇、カノエは、母を殺した相手です」

露わになった右前腕部の内側を、暮れはじめた西日の下、司に晒した。

「母……小野、山女魚めまぎは、被いを専門とする祈祷師でした。けれども四年前、出先の村で神隠しに遭ったように姿を消して……帰ってきた時には、全身にひどい火傷を負っていました」

波打つようにひび割れ、歪み、爛れる。

「だというのに母を運んできた村の男の人たちは、こんなになるま

で戦って、敗れた母に『契約の不履行だ』 『カノエミフネはまた山をさまよう』 『役に立たなかった』 と罵声を浴びせるだけ浴びせて、帰っていきました」

掌を朱肉につけて掴んだように、強く、醜く、残る。

「残されたわたしと父は、どうしようもなく。火傷のために弱っていく母を見ているしかなく、一晚を母の枕元で過ごししました」

焦げるように、黒く、血染めのように、赤く。

「そうして今際の際にわたしの腕をつかんだ母から移った呪いの熱が この火傷の痕を肌に残しました」

小野の右腕にまわりつく痕は、熟し切って割れんばかりの柘榴ざくろのごとく、鮮烈な色合いで以て司の脳裏に焼きついた。するり、袖を戻した小野を見て、司は彼女が一度も半袖の衣服を身に付けたことがなく、先ほど濡れた時にも真っ先に右腕をかばっていたことを思い出した。

かぶりを振って、小野は続けた。

「あいにくとわたしは母の職業にさほど興味がなく、母の持つ他の呪術師などの繋がりについても一切知らないままでした。それは父も同じで、おそらくは母が意図的に隠していたのだと思います。だからわたしは仇を追うべく、様々な場を頼りました。末に行き着いたのが、きてれつ研だったというわけです」

きてれつ研の名を口に出す時だけは緩んだ表情を見せて。

小野は右腕をつかんだまま両腕を下ろしてうつむいた。

「……この話って」

「いいえ、みなさんにもわたしが仇を追っていること、奴の名が力ノエであることについてはお伝えしていますが、ここまで詳しくお話したのは司さんが初めてです」

「いいの？」

「知っておいていただきたかったです。司さんには、特に。今話すべきだと感じただけで、いつかはお話しておくつもりでした」

腕を押え、西日に照らされた逆光の中で悲しげに笑う小野は、なぜ話したのだから自分でもよくわかっていない様子であった。

「……じゃあ、前に話してた『呪い返す』ってというのは」

「復讐のためならば、わたしは自分を害する術に頼ることも厭わなということですよ。……司さんは以前、『呪うのはもうそれしかできず、現実に関わる術を持たない幽霊にのみ許された行いだ』とおっしゃっていました。法に頼るわけにもいかず、力なく、財もなく、人脈もないわたしのような小娘には、霊と同じく手立てがありません。霊と同じく、先のことはもうあの時から一切考えることができません」

悲しげな笑みのまま、小野の時が凍りついていた。

彼女は比べ続けるのだろう。母がいた過去の時間と、いない今の時間とを。

その行動は少しだけ司が過去を追い求め村を探し続けていることと似通っていて、思わず司は自分の抱えるこの名にまつわる真実を語りそうになり、慌てて口をつぐんだ。

「……だから呪い返すんです」

それは悲しい独白だった。

川浪のキャンプ地に戻ってきたばかりの二人はぎこちない表情だったが、キャンプの雰囲気になじみずつ和まされ、いまは徐々に普段通りの空気を取り戻しつつあった。夕食の流しそうめん大会をくぐりぬけ、自由時間の今には前納たちと笑いあえるだけの余裕を持っていた。

当然のこととも言える。人は、ひとつの感情だけで生きているわけではないのだから。

「ダウト」

「げっ、司やめろよ。まーたおれかよー。……この手札数を見てくれ、こいつをどう思う?」

「……お前は素直すぎる、ダウト」

「蓮向てめえええ」

「なんかつままないの一周通り過ぎてこの出来レースが面白くなってきましたですね」

「倉内さん首位独走ですしね、ダウト」

「小野ちゃんてめえええええ」

「前納うるさいよ」

夕方に暗い面持ちで会話していたのがウソのような、明るい時間を司と小野で共有していた。

やがて入浴の時間になり、バンガローから小野と倉内が出て行く。

「では自由時間もお開きですし、これにて」「朝までさよならです」

手を振る二人に追い付くように、司も先に歯を磨きに行くと言い、

バンガローをあとにした。残るは男子二人。寝巻のジャージに着替えた二人のうち、天然でパーマがかかった方の男、前納がうきうきした様子でポストンバッグを漁った。もう完全に眠りにつくつもりであくびを噛み殺していた蓮向は、首をかしげて前納を見る。

前納は蓮向の表情に答えるように、満面の笑みを浮かべてダブルでピースサインを出した。

「……前納、お前なげうきうきしている」

問うと、前納はいやらしい感じにダブルピースをくねらせくくと笑いをこらえきれない。

「きーまってるんだろー？ おれ溪流釣りの間に、観測点探しといたんだぜっ」

「……星座でも観に行くのか？」
「ばか言ってるな、女湯うきうきウォッチングに決まってる！ ほらっ、こっから朝までは男女別れ別れになっただろ？ だからせめておれはね、彼女らの一系まとわぬ艶姿をこの目に焼き付けてから眠りにつきたくゆうっ」
「……寝てる」

送り襟締めで前納を落とした蓮向は、ダブルピースのまま白目を剥き泡を吹いている前納を不快そうな面持ちで一瞥して、布団に寝転がると電気を消した。

……しかしもぞもぞとしばらく布団の上で転がった後に、ごそごそと外に出て行った。

そしてバンガローの窓の外からは、背の低い人影が暗い部屋の中をのぞきこんでいた。

倉内に先に浴場へ向かってもらい、さて右腕を隠したまま風呂に入るにはどうすべきか、と悩む小野。素直に事情を（火傷を見られたくないという部分だけ）説明して、教員の泊まるバンガローに備え付けのシャワーでも使わせてもらおうかと思っただが、この火傷のことを話すこと自体が嫌だった。

司と倉内など、親しい人間が近くにいたため先ほどは前納と蓮向を相手にしても談笑することができていたが。未だに小野は初対面の人間や、あまり親密でない人間の近くにいることが苦手なのだ。

原因はやはり、夕方に司へ語った彼女の過去にある。母を頼りとしたにもかかわらず、罵倒し、なじるだけで帰っていった見知らぬ男たち。初対面の相手に対して彼らへのイメージが想起されて火傷がうずくたび、小野は傷跡を握りしめ見知らぬ人への不信任と戦っていた。

（……いずれは向きあって、直さなければ生活にも支障が出るかも
しませんが）

今はまだ、周囲には隠していたかった。

やはり人がいなくなるまで待つてから入り、ささっと洗って出よう。そのように考えて浴場前のロビーで椅子に腰かけた小野は、ふと溜め息をついて右腕を見る。

自分はなぜこのことを司に話す気になれたのか、そのことが不思議だった。付き合いの長さで言えばきてれつ研の他のメンバーの方が長く、廉太郎に至っては同門の兄弟子としても付き合いがあった一番親しい人間のはずだったのだが。

（よく、わかんないです）

ぼんやりと中空を見据えて、目を閉じ、思いを巡らした。

「おい、風呂場ってこっちでいいのか」

しかしすぐに横合いから横柄な声音で話しかけられ、目を開ける。

「……ええまあ。お風呂はこっち、に……」

眼前の相手を見て目をひくつかせた小野は、先ほどまでの自分の回想などが幻視として実を結んだのかと己を疑うこととなった。

歯磨きを終わってからタオルを取りに行こうと浴場の近くを通りかかった司がそれを発見したのは、まったくの偶然だったと言っている。

「……鎖骨から曲線を描く瑞々しい肌の内には、右に夢を左に希望を詰められて。腰から流麗に流れて落ちる脚部へ描かれる弧は神様の造形がごとく……引きしまった太腿からふくらはぎ、足首に至るまでが黄金比の均整を取り……そしてそう、こちらを向いてくれれば！ 無毛の更地に刻まれたクレバスが陰影によって今まさに艶やかさを増し、おおっ……」

木の上、ちょうど屋外から浴場の窓を照らすライトの陰になる場所へ、坐して堂々とのぞきを敢行している者がいた。

「……『覗』って漢字、大っきらいなんだよなあ……」

自らの名前と照らし合わせてそう嘆息した司は、木の上に居る人間に向けて、警告の意味で幹を蹴り飛ばす。

「っトお、あっわわわ?!」

間抜けな叫び声と共に落ちてきた人影は、いかにも痛々しい鈍い音を立てて尻餅をついた。腰をさすりさすり立ち上がって逃げようとする人影の前に回り込むと、司は詰め寄って屈みこんだ。観念したのか、覗き魔は頭を掻いて笑う。

「……なにやってんの、サワ八さん」

「男湯のぞいてたネ! 大胸筋、脚線美、割れた腹筋見てうはうはヨ!」

興奮冷めやらぬ様子で両拳を握り熱弁するサワ八は、黒いシャツにジーンズという覗くために設しつえたような格好で目を輝かせていた。

「まぎらわしい描写しないでよ。カタコト抜けてたし。ていうかレズ使えばいいじゃん」

「ロマンなくなるは良くないのコトよ。スリルない覗くはワサビなにお寿司に似たりよつたり」

「知るか。……で、なに。他のみんなも来てるんでしょどうせ」

「いやあ、期末まで間があつたしねえ。旅行にでも来ようかと思つたのよ、踊場が免許取つたし」

「いやいきなり長距離走らせるとかどうなの」

背後からやってきた口論義に片手をあげて応じ、司は苦笑いを浮かべた。

首に双眼鏡を提げた口論義はにやつと笑って懐中電灯で自分の顔を下方から照らし出す。

たつたの、十二時間ぶりの再会であつた。

十七題目 「見よや理想郷」とサワハが叫んだ（後書き）

前納の失神描写を描くにあたってR15にするか迷いましたがこのままで行くことにしました
そして女湯描写はありません 蓮向は窓辺の踊場の気配を察したただけです 残念でしたまた次回

Name: 倉内千影^{くわいしちかげ}

Hobby: アウトドア、体を動かすこと全般

Weakness: あずき味とかキューカンバー味の例のアレ

Specialty: 倉内流師範代の実力

Skill: 小野曰く、「なにかある」。べらぼうに高い身体能力か。

Notes: 廉太郎と小野の師、のようなもの。もちろん廉太郎の出番を削るので本編には一切かわってこない

十八題目 「田舎の旅情」と口論義が囁いた

「なにしてんの、みんな揃って」

「テスト前の最後の息抜きにと思って小旅行に出かけようと思ったのさ。ちょうど僕も免許をとったところだったのでね、温泉地にでも出かけて鋭気を養おうということだよ」

司に問われた踊場は、指先でくるくると車のキーを回していた。

風呂場近くの休憩所で膝の高さのテーブルを挟んで向き合う二人の周りに、残りのきてれつ研メンバーも勢ぞろいしていた。

周囲を駆け回るように、湯上りでほくほくしている廉太郎がサワハとコーヒー牛乳の奪い合いをしており、ソファの背もたれに腰かけるようにして口論義が踊場と背中合わせに座っている。司の隣では小野がじろじろと廉太郎たちが跳ねまわる様子を見ており、入浴時間が終わってしまうかもしれないがいいのだろうか、と司は思った。

「というか、旅行にしたって、ここじゃなくてもいいじゃん……」

ちらりと横を見てから口をとがらせて司が言うと、踊場はうつんと顔をあげて司と小野の顔をためつすがめつ見やる。踊場の背後で、口論義がぼそつと尋ねてきた。

「なに、司ちゃん、あたしたちが来たことで何か不服な点でもあるの？」

「……ないよ別に。ないともさ」

明日以降の行動には小野と自分の後ろにこの四人が標準装備されるだろうことを考えるとどうにも目つきが悪くなり険しい表情にな

つてしまう司であったが、口論義はあまり気にした風でもなく携帯電話をいじっていた。

「まあ僕らがここに来た理由というのもね、もちろんこの辺りの温泉が目的ではあったのだけどそれだけではないんだよ。ところで今日は展覧列挙集、一度も開いていないのかな？」

「開いたけど、自分でフォッグマンの件について書きこんだところしか見てないよ」

「そうかい。新しく書き込みしておいたから、なにかしらきみら二人から反応がくるかと思っていただけだね……実はこの川浪という町の隣に位置する穂波田村というところだね、明後日からお祭りが催されるらしいのだよ」

「お祭り？」

ああ、と首肯する踊場にうながされて、司と小野も自らの携帯電話を取り出し展覧列挙集を見る。新しい項目として『祭 穂波田村巫女考』というものができており、二人は内容に目を通した。

「著休めというか、学校への研究提出のための一件として見ていうことさ。ここのところ危険な事件にばかり首を突っ込んでいたからね、たまにはこういうのもいいだろう。まあ僕の趣味に走ったものとなってしまったのだが、」

「踊場さん巫女服好きなの」

「そういうフェティシズムではなくてだね。民俗研究の一環としてこうした祭りについての生の情報をフィールドワークで採取したいということだ」

「そうだけマルドメ。こいつはフェチ的には巫女よりメイドの方が好みだそうだからな」

「おおう、古き良き日本文化、西洋の波に押し流されたカナ？」

「その二人、テキストなことを言わないでもらおうか」

振り返って犬歯を剥くように廉太郎とサワハにぴしゃりと言いつた踊場から逃げるように、二人は司と小野のソファの後ろへ移動した。

「で、きみらは明日以降どうするんだね？」

「あー。その穂波田村、今日小野と一緒に行ってきたばっかなんだけど、」

「今日はいろいろあってあまり見て回れなかったので、明日も行くかと考えています」

「じゃあみんなで行くのでしょうか。大して距離も無いようだし、人数的にも僕のカローラで移動できるだろう。ん、どうしたんだい司くん」

「……いや、なんでも」

なんとかかして踊場たちと別行動にできないかと行き先を逸らそうとした司の目論見は儚くも無残にご破算となった。

「ま、そうは行ってもきみらは合宿中だし。調査と報告はあたしらに任せてくれればいいのよ」

「はあ」

「疲れたような声出すなよマルドメ。俺だって帰ったらまた追試だからホントはこんな調査してる暇ないのだけ？」

「いや、きみは対人折衝の術をあまり知らないから調査には回らずともよいよ。サワハくんともども走り回って遊んでいればいい」

「ま、マジで？ やったな、降ってわいた休暇だ！」

「やつほう、田舎で神社で遊ぶは初めてのコト。ぷーたー」

乾杯とでも言いたげに、牛乳瓶を二人して上に掲げた。踊場の言葉には遠回しにとげが含まれていたような気がしたが、おそらくは

「対人折衝」の意味がよくわからなかったのだらうと司は小野に話し、彼女は苦笑いを浮かべた。

「相変わらずこの研究会は踊場さんのワンマン研究で成り立っていますね……」

「仕方ないさ。僕には異能が、無いのだから。これくらいしか貢献できない」

卑下するように踊場は言ったが、「しかし僕らの卒業後はきみらのどちらかが僕の役割を担うのだよ」と釘も刺してきた。考えてみれば口論義も踊場も三年生、長くとも秋までで部活動などは引退というのがノ木斗目高校の慣例だ。二年生の二人もいるにはいるが、記録や調査に向けた二人とは言い難いため必然的に司か小野に仕事が回ってきそうだった。

「踊場さん、卒業後はどうすんの？」

「県内の大学へ行く。日本文化学科で今と同様に研究をするつもりだよ」

「そっか、もう夏も目前ですしね。進学のことなども決め始めてますか。会長は如何様にいたすおつもりですか？」

「……あたし？ あたしも、まあ、大学かな。心理か人文かってとこかしらね」

覇気の無い様子で笑うが、司の記憶が正しければ踊場も口論義も成績は良好、優等生のはずである。選り好みできるだけの実力はあるといふのに、妙な反応だなと思った。

「反面教師になる人物と長く過ごしていたのでね。しっかりしなくてはと思うよ、実際」

「反面って、あー赤馬さんか……」

「あの人は去年の今頃『勉強しないで遊ぶん学部、法律さつぱりアホう学部、教授無視して不敬罪学部、さあてどれにしようかね』などと歌っていたからね。……結果はご覧の有様なわけだが」

「……フォッグマン事件のあの時、出所のわからない銅線とかスクラップになった車とか売って生計立ててたみたいだけど。何者なの一体」

「知りたいかい？」

「いややっぱやめとく」

踊場の情報網と同じで、知っても幸せになれなさそうな臭いを感じて司は退いた。ちょうどそこで腕時計で時間を確認した踊場は頃合いだと思ったのか席を立ち、追従して残り三人も休憩所から出て行く。

「ではお暇させていただきよ、二人とも良い夜を。明日の正午、資料館見学が終わったらこのキャンプ地の入口にある看板まで来ておくれ。車をまわしてくる」

「あれ、みなさんはバンガローにお泊まりにならないのですか？」

「ワタシたち、ここ来る途中中山で見つけたの宿に泊まるのトヨ。えっへへ、なんか地図に載ってなかつたし、秘境の宿屋さんかもしれないネー。かわいいそーなマルドメくと小野ちゃん、バンガローのかったい床に寝袋敷いて寝てるの間、サワハたちのんびりぐっすりすやすやよ」

胸を張って大きくVサインを見せるサワハ。秘境という言葉であるの村のことが頭をかすめたが、宿は関係ないな、とかぶりを振って司は笑みを返した。

「ていうかよくそんなお金あったよね、みんな」

「そこが偶然にも俺の師匠の娘が出入りしてた宿らしくてな、わり

と安くしてもらえた。人間、どこでどう縁があるかわからんもんだな」

じゃ、と片手をあげて四人はそろそろと去っていく。司も時計を確かめて、入浴時間がだいぶぎりぎりになってきていることを悟った。

「さてじゃあお風呂に……あ、あー……」

時間がないなと思いつつ振り返った視線の先に居た小野を見つけ、司は気付く……彼女が押さえた右腕。小野も入浴時間のことを気にしていなかったわけではなく、意図的にここまで混む時間帯をずらして入ろうとしていたのだろう、と。

司の表情から何を言おうとしているのか読み取ったらしい小野は、少し困ったような顔で時計を見上げて、もう入浴時間が十五分ほどしか残っていないことを確認した。

「入れそう？」

「んー、でもまだ、さっき入っていった方々が出てきていないのですよね」

「入れ違いにはなれないか。どうすんの」

「……事情を話して、教員のバンガローにあるシャワーを使わせてもらいます。中学の間も、体育の授業でプールが始まった時には毎回『火傷痕が敏感で塩素でただれる』と説明して切り抜けていましたので、今回は泉質が問題だとも言えば大丈夫かと」

「そっか」

「仕方ないですよ。呪いの怪我は、あまり衆目に晒すべきものではありませんから」

では、と言って去ってゆく小野の背中、少し寂しげだった。と

はいえどうしてやれるわけでもなく、司はせつかく打ち明けてもらえたというのに何もできない自分を齒がゆく思った。進展しているようでもなにも変わらないな、と昼間にも思ったことを再び考え、嘆息でもやもやした気持ちも吹き消した。

休憩所を出ると、肌寒いくらいの風が山を駆け下りてくる。バンガローに戻ってタオルを取りに行く途中だったことを思いだした司は駆けだそうとしたが、そこで横合いから声をかけられた。

「司くん」

キャンプ地の入口方向へ点々と続く街灯の下からすつと現れた人影は、司より少し低い視線をきらめかせて輪郭を露わにする。表情の硬い踊場が、片手をあげていた。

「へ？ あ、踊場さん？ 車の方戻ったんじゃないの？」

「いやなに、少し皆には待っていてもらった。話しておきたいことがあったのでね」

柔らかかそうな自分の髪をくしゃりと撫でた踊場は、少し言いづらそうに司に一步近づいた。

「じつは、口論義のことなんだが」

「会長？」

「ああ。今日もそうだったが、どうも先月の一件以来あまり元気がなくてね。今回も気分転換にならないかと思ってこの旅行に連れ出したわけなのさ。そういう事情もあるから、少しだけあいつのこと、気にかけてやってくれないか」

心底お願いするように、踊場は司の目をまっすぐに見据えていた。いつかもこんな話をして、その時も踊場は同じような顔をしていた

ことを思い出し、司は駆けだそうとする姿勢から、身体の向きごと正面を踊場に据えた。

「別にいいけど。会長、そんなに元気ないの？」

「まあ、前回の事件におけるフォッグマン・加良部雪のやり口への嫌悪と、阻止できなかった自分への苛立ちが混ざって気落ちしているところかな」

フォッグマン事件の折に喫茶店で踊場と話した際に、口論義があの事件に対して特別な思いを抱いているということについては司も聞いていた。なので踊場の意図するところがそこにあるのだろうことはすぐに理解が追いついたが、しかし細かい事情については聞かなかったためどうにも対応しづらいな、とも感じた。

「フォッグマンの、やり口かあ」

「ああ」

踊場にその先を語るつもりはないようで、ただじつと司の方を見る。むずがゆくて居たたまれない心地がしたが、真摯に頼んできていることもまた、強く伝わってきた。

「ん。わかったよ。ちょっと会長のことは気にかけるようにする」

「ありがとう。恩に着るよ」

だが踊場は以前にも事情を話すかどうかは口論義が判じるべきとの考えを示していたので、深く立ち入って聞くことは司もしない。踊場の方も含んでおいてほしいという程度の意味合いで口にした言葉だったらしく、了解してくれた司にほっとした顔を見せる余裕ができたようだ。

「すまなかつたね、呼びとめて」

「大丈夫。あとはお風呂入るだけだったから。ところでさ、踊場さん」

「ん？」

「単に興味本位で聞くから、言いたくなければそれでいいんだけど……大学、はたまたその先に行っても、今みたいに口論義さんをフオーし続けるの？」

「たぶんね」

ポケットに手を入れてきびすを返そうとしたまま動きを殺した踊場は、いつかだれかにそう問われることを予想していたかのように、即座に返答した。

「僕の生活で口論義がまつたく関わっていない事物は、少ないんだよ。だからフオーというわけでは、ないのかな。関わっているのが普通なんだ。少なくとも僕からはそう思って接している。たとえば僕がこうして民俗研究にはまりこんだのも、口論義と過ごしてきたからこそ、だからね。無論、幼馴染で長い付き合いで、しかも僕があいつに……その……惚れているから、というのもあるかもしれないが」

照れくさそうに身じろぎして、一刻も早くこの場を離れたいのか爪先で地面を蹴り始める。そんな反応を面白いなあとからかうような目で見るのが司の常なのだが、今日はなぜだか、どうにも冷めていて、やけに平静な心情が腹の内に染み込んでいた。

「廉太郎さんに会長をとられるんじゃない、とか考えない？」

しかし言葉だけは普段のごとく、明るく言葉尻を跳ねさせて問う。司はこうして冗談交じりに問えば踊場もいつものように廉太郎に対

して罵倒と酷評を浴びせて「そんなことありえない」とでも笑うの
だろうと思っただが。

なぜか、今日はちがった。

「いつも考えているさ。とられかねない、とね。まあ僕の者でもな
んでもないわけだが」

「うそ」

否定の意を込めて首を横に振れば、踊場は司の否定に否と断じた。

「あいつは確かにいい加減で、粗野で、不誠実で、面倒くさがりで、
ほとほと呆れ果てるような人間だけれどね。口論義に対しては

真面目で、紳士で、誠実で、几帳面で、いい奴だ。もしかしたら、
なんていつも考えていることさ。だから僕はいつもあいつの駄目な
部分を露呈させようとしているんだ。僕はあいつみたいには、きつ
となれないから」

「あいつみたいって、なにさ」

「最初にきみが廉太郎と会った時、あいつは言っていただろう。『
危ないものには近寄らない、近付いてしまったら相手を食ってでも
生き延びる、そして手が空いたら真つ先に会長を助ける』とね。

……僕は散々あいつを馬鹿にしてきたが、本当はあいつこそ賢いの
かもしれない」

賢者は黙して語らない。そう自嘲気味に笑う踊場は、街灯に背を
もたせかけて司から視線を外した。司は灯下に移動した為に暗くな
って見づらい踊場の顔をよく見ようとしたが、視線を遮るように踊
場はあさつての方を向いた。

「あいつは愚直率直素直で正直、できない約束事は口にしない。だ
から口論義が危険を追うことに難色を示すし、けれど口論義が止め

ても止まらないことを知っているから守ることに徹する。……僕はちがう。止めようとしてもしない。口論義の望むまま彼女に従い危険を追って、結果彼女を幾度も危険にさらした。だから廉太郎は僕のこと嫌いなんだ。僕とちがって、正当性のある嫌悪、だが」

これ以上を語ることは口論義や廉太郎の事情に触れると思ったのか、それとも自分の内面を晒したくなかったからなのか。早足で駆け抜けるように切らさず言い放った踊場は、一步街灯からも司からも離れて、キャンプ地の入口へと足を向けた。

「……すまない、愚痴に付き合わせてしまった」

「いいや、呼びとめて聞いたのは、こっちの方だから」

「今のやりとりは、なるべく忘れてくれ。じゃ……また、明日」

「うん」

また時計で時間を確かめて、そろそろ時間がないと思った司は挨拶もそこそこに走り出す。

みんな、何かを抱えてきてれつ研に集まっている。普通とは異なる世界の一端に触れてしまったために重荷を背負ったり、異能を手にしたたり、どこか一般の世界からずれた位置に属してしまっている。

小野と自分はそのことでひとつの目的へ向かわざるを得なくなり、口論義もなんらかの事情のため事件を追うこととなった。同様にそれを手伝う踊場や、廉太郎や、サワハにも、なにかあるのかもしれない。

傷が、埋め合わせられる日はくるのだろうか。くると信じていいのだろうか。

自分で行き場を定めたわけではない司には、信じることで本当に結果が引き寄せられるとも思えなかった。ただできれば、傷が薄められるくらいのことではあってほしい。そう願った。

退屈そうに、資料館から人の流れが溢れだしていく。水路を張り巡らした涼しげな町、川浪の中心に位置する蔵屋敷を模した資料館にはその町の郷土資料などが多数展示されていたが、当然興味の無い人間にとってはただのがらくた屋敷である。

そこより出てきた小野は水色のブラウスに白いフレアスカート姿で司の前を歩く。とはいえ、普段から踊場よりいろいと雑学じみた無駄話を賜っていた司と小野だからこそ多少は興味を持って見ることができたが、普通の高校生にはこの見学は苦行と言って差し支えない。やっと解放されたという様子で町に溢れた学生の群れは、昼からの散策などになり出すようだった。流れに乗って歩く二人も、踊場たちとの集合場所であるキャンプ地の看板前に着く。

「よお、寝袋の寝心地はどうだった？ カマドウマ出なかったか？ 夜中出歩いて正座させられなかったか？ 朝食に出るスイカの漬物は相変わらずだったか？ 資料館見て回るとこ少ないのに一時間もすし詰めで嫌にならなかったか？」

すると開口一番、甚平姿にハンチングをかぶった妙な格好でにやにや笑う廉太郎はかつての己の経験を元にしたと思われる合宿の嫌な点をつらつらと列挙した。カマドウマこそ出なかったが、それ以外はすべて該当したため司も小野も閉口する。

「先輩ってこういう時いやですね、こちらの内情を知りつくしていただきますから」

「まったくだね」

「サワハたち湯上り卓球して寝るはふかふか布団で朝ご飯も旬の物尽くしだたネ」

「妙に若い上に美人な仲居さんも多かったわね」

あくびをかます口論義はそんなことを言っつて、停まっていたカローラにもたれる。白のカーディガンニットと淡い橙の花柄が入り乱れるチュニックブラウスがどこか淑やかな印象を与えるが、緩くウエーブのかかった茶の髪に隠れる容貌が少し気だるげで、いつもの明るさがないことこそがおとなしいイメージを確定しているように思われた。元気が無い、というのを目の当たりにして、司は昨夜の踊場の話を実感する。

「仲居さんとも卓球したぜ」

「そそ、仲居サン若いからかノリよかたヨー。卓球勝負、接待プレー一切ナシの手加減無用ね。レンタロ以外ボッコボコ」

「ははは、俺も？必殺死神の舞？がなけりゃ負けてたかもしれん」

ワインレッドのチューブトップにローライズジーンズという、ラフだが刺激の強い格好のサワハは、ーフサイドアップにして編み込みも入れた髪をくりくりといじくりながら、廉太郎を指差して軽快に笑う。

司より遙かに付き合いが長い以上、おそらくは口論義の不調に気付いているであろう廉太郎とサワハは、それでもなるべく普段のよう^にに接して^{いて}あまり不自然さがなかった。廉太郎は踊場と同じ理由で人一倍口論義のことを気にかけているし、サワハもふざけている^{よう}で人の心の機微には敏感である。誰も気負うことも気に病むこともなく、過^ごせている。良いメンツが揃っているんだな、と司は安心したような気がした。

「カミソリサーブだかなんだか知らないが、卓球の話はそこまでにして車に乗ってくれ」

運転席から顔を出してボディを叩く踊場は、藍色に空色のストライプが入ったポロシャツを着ていて、休暇を家族サービスに費やす父親のごとき雰囲気醸し出していた。せつかく悦に入ってエア卓球に勤しんでいた廉太郎は、鈍く押し潰すような視線で踊場に目を剥いた。

「んだよ踊場、俺の魔球技の前に為す術も無く負けやがったくせに、卓球王の俺に命令か？」

「消える魔弾、とか叫びながら撃ち返す振りして浴衣の袖口に球をデアフライシヨツ隠すアレを魔球と呼べるのかい？」

「消える魔弾だけじゃない。王子サーブもハイジャンプ魔球も隠し玉も使っただろ」

「……さて、隠し玉って……」

ひとつ明らかに卓球では反則と思われる技名をばやきながら、よっこいしょと廉太郎が後部ドアを開けて荷物と共に窮屈そうに収まり、司と小野とサワハが後部座席に乗り込む。踊場も追及が面倒になったのか前を向いてハンドルを握り、助手席が口論義となった。

「ふん。では出発するでしょう。丘を降りたら、橋を渡って道沿いに行けばいいのだったね？」

「ええ、バスの道のりはそうでした」

道の最終確認を受けながら、踊場は静かに車を発進させた。

走り始めてすぐに司は思ったが、速度こそ抑え気味と言えるものの揺れも少なく快適な運転で、とても免許を取りたてとは思えない技術だった。

「踊場さん、本当に取りたて？」

「らしーね。取れたて新鮮びちびちヨー」

「……にしては安定した、上手い運転というか」

「先月のあの運転で命が縮まる思いがしたからね。これくらい安全安心に運転したくもなるさ」

とほほと溜め息をついたのは、司と小野を除く四人だった。あの時、高速道路で接触して半壊したキャラバンを駆って、教習で路上を走ったことすらない踊場が雨の峠を追いかけてきたことは記憶に新しい。捕まる心配と事故を起こす恐怖とでいっぱいにもかかわらず、よくよく運転したものである。

「踊場のことは信頼してるけど、あれはじわじわと精神を削られる恐怖だったわ」

「会長、俺のことはどう思ってるんだ？」

「ん？ 廉太郎くんは信用、かしらねえ」

「……マルドメ、どっちが良い意味合いだ？」

「一長一短でしょたぶん」

口論義のセリフについて小声で尋ねてくる廉太郎に耳打ちして返し、窓の外を見た司は遠のく川浪の町が後ろに流れて行くのを確認して窓を開けた。静かだった車内に、アスファルトを踏みしめる車体が切り裂く風の音が流入した。

「今日つて、なに観に行く？」

「実際の祭事は明日だそうだから、準備風景を見ることがと寺社巡りが主となるかな。僕は色々聞いて回るつもりだがきみらに作業の手伝いを強制する気はないし、昨日のつづぎと違ってのんびり見て回れば良いよ」

「あたしは踊場について回るわ」

「おお、んなら俺も行こう」

「それならサワハも」

「ではわたしも」

「え、えー？ あー、うー……」

流れに乗せられるように全員一緒に行動することになってしまった。もう一度二人きりになれるチャンスだったのに、と歯噛みしながらも無理に小野を誘うのは悪い気がして、仕方なく司も賛同の意を込めて手をあげた。

「なんだよ結局全員一緒なのか。じゃ昼飯もみんなでとろうぜ」

「なにか食べたいものあるの人ー、挙手！」

「通り沿いで最初に見つけたお店でも構いませんよ」

寺社巡りをメインだと思っているらしい小野は食事にはさほど興味が無いようで素っ気ない返事だった。それを聞いて小野と司に挟まれて座るサワハは腕を振り上げ、狭いので二人の肩を弾いて、慌てて腕を縮めてから小さく指先をちゅちゅ、と振った。

「むー、小野ちゃんそれつままないノ。地元名産品食べるしなきや旅行寂しくなるでしょ？」

「なら最初から訊くなよお前。そもそも、ここの名産品はなんだっ
てんだ？」

「地名の由来になりました穂波田、つまり広い田んぼからとれるお米
がうまい！ とパンフレットには書いてあったネ」

「よほど書くことがなかったと見えるね……。でもたしか、油揚げ
など大豆製品も多いのではなかったかな？」

「あ、それも書いてあったのコト。畑のお肉はおそなえものってす
るみたいヨ。なむなむ」

「稲荷信仰だろうからなむなむじゃないわよサワハ」

「あは、タイは仏教の人多いのことだったからどーもクセが抜けき
らないネ」

蓮の花を模した合掌をしながらサワハはそんなことを言い、てひと笑う。

やがて車は田園地帯の中を進んでいく。そう言えば昨日はあまり村の人に遭遇しなかったことを思い出しながら司が窓の外を望むと、今日は幾らか人影が歩いていて。昨日は来訪した時間も午後遅くだったからだろうか、と適当に納得しながら、司は顔を引つ込めて窓を閉める。人影はあったが、走る車の方を見ている様子はなかった。

バスの通る幹線道路の左手に見えた穂波田食堂というところへ停車して、六人は引き戸を開けた。昼にもかかわらず少々薄暗い店内には四人掛けのテーブルが四つと、カウンター席が七つ。客の姿は自分たちの他になく、テーブル席に周囲の椅子を引き寄せて腰かけた六人は、あまり愛想のない店主が立つ厨房内の天井付近に貼り付けられたメニューを見た。

「穂波田定食六つ」

「あいよ」

注文を受けると裏手から店主の妻と思しき四十かそこらの女性が現れ、忙しなく二人で店内を切り盛りしはじめた。カウンターの端には大きな炊飯器が置かれており、白飯はおかわり自由であるとの旨が書かれていた。

水とおしぼりを持ってきた女性は司たちの風貌から年齢を読み取ったのか、「学生さんでご旅行？」と尋ねてくる。ええまあ、と踊場が返事をすれば「年長者の方は大変ね」と踊場の横に座る廉太郎を見た。踊場が目をぱちくりさせた。

しかし身長といい少々老けた見た目といい服装といい、確かに廉太郎の方が年上に見られそうではあったので仕方がない。すると上機嫌で廉太郎は女性に問う。

「いくつに見えます、俺」

「そおね、大学生くらい？」

「いやはは、くっくく」

首をかしげた女性が去つても、廉太郎は踊場を見下ろして笑っていた。踊場は不愉快そうに水を呑んで机に頬杖をついていた。

運ばれてきた定食は近くの川でとれたニジマスの塩焼きと、豆腐のステーキとやら言う品がメインとなるものだった。薄く切った豆腐の両面に出汁をとったとき卵を塗って焼くことで準備が整うといわれ、六人分の食事が揃うと食べはじめた。豆腐は味が濃く喉越し柔らかな品で、司は肉のステーキより案外こちらの方がいけるかもしれない、などと思った。

一緒につけてきた味噌汁に浮かぶ油揚げも分厚くて風味豊かな一品であり、もしサワハの説明通りお供え物として作られる品であるなら、それだけに留まるのはもったいないと思わせるだけのものがあった。

ところが肝心の米はというと少しばかり貧相で味の瘦せた、とても名産などとは呼べそうにない代物である。司が周りを見回すと皆も同じことを思っているのか、どこか物足りなさそうな顔で箸をつけていた。

奇妙なことは、そのあとに起こった。

食事を終えて会計に移り、店を出る前に踊場が「明日はお祭りだそうですが」と切り出した途端に、レジを打っていた女性が険しい面持ちで「あんた」と声を震わせたのだ。引き戸に手をかけ店を出ようとしていた四人も足を止めるほど、腹の底へ響く声音であった。

「あんた、祭りはよその人は参加できんよ」

一息に語られた言葉には妙な重みがあつて、踊場もその剣幕に押されたのかはあ、と曖昧に溜め息を返すしかなかった。女性は苦々しげな顔つきで、なるだけ顔をうつむかせて司たちの方を見ないようにして、吐き捨てるように続けた。

「この村には宿もないし、今日はお祭りの準備でみんな忙しくしてるから」

だからお帰り、と言外に示されている心地がして、司たちは落着かない雰囲気に呑まれる。行こう、と言いたげにサワハと小野が司の袖を引いていたが、司は女性の方から目を離せず、同様に踊場も固まっている。

「隣の川浪の方が、にぎわつとるから」

だから、お帰り。

急に妙な威圧感を発していた女性はそれきり、ふいとそっぽを向くと店の奥に消えて、代わりに店主がまた出てくると厨房に残ってぼんやりとアナログテレビを見つめていた。これを好機と見たらしい廉太郎に首根を掴まれ、司と踊場は店を出る。

「なに固まってるんだ、お前ら」

「いやなんか、急にこわい雰囲気になったから」

「……こうした村落ではよそ者は好かれるか嫌われるかどちらかだからね。祭りなどは踏み込まれたくない領域だったのだろう」

「でも、あの女の人嘘言ってたっぽいわよ」

先に店の外に出て引き戸の脇にある壁にもたれていた口論義が、慌てた様子の司たちに声をかけた。支払いの立て替えを踊場に頼みいち早く店の外にいた口論義は、女性の意識から外れていたために

虚言看破の発動条件が満たされていたらしい。

「え？ けど、うそってどこが」

「……祭りへの参加、できるかできないか。どういう理由で隠したのかは知らないけど、参加自体はできるみたいね」

よっと身体を起こしてカローラに近付いた口論義は、助手席に乗り込むと茫然としている五人を手招きした。

「なんだかわからないけど、変わったことが見られるといいわね」

少しだけいつもの調子を取り戻したのかにへら、と笑みを浮かべる口論義は、まぶたをそつと下ろして腕組みした。

十八題目 「田舎の旅情」と口論義が囁いた（後書き）

司だけ服装描写忘れた
たぶんダブルパーカー（適当）

Name : 赤馬実乃里^{あかばみのり}

Hobby : 焚き火、喫煙、花火

Weakness : 葉巻（特にポリバーの、と答えるがそれしか吸ったことがないだけ）

Specialty : 鉄切れと石と雑草で火熾しができる・狼煙の技能

Skill : ^{フラットピジョン}平和の絵柄。霊視能力。命名（例によつて廉太郎による）元はごくたまに吸っていたピースより。司のそれとは違い対話などもでき、また赤馬は神道をバックヤードに持ち防護策を施しているので憑かれにくい。

他にも自身が？穢れ火？と呼ぶ火炎により霊を追い払うことなども可能。さる神道思想においては火は情念の乱れを誘うものであり、浄化の意味合いだけではないのだという。

Notes : 高校入学時は化学部に入ろうとしていたらしい。そこから紆余曲折を経てきてれつ研へ。変な人脈を駆使して楽しく暮らしている。御手洗とも知り合いらしい。

Name : 御手洗御^{みたらいみお}

Hobby : 怪談集め、伝説や伝承の実体験

Weakness : 黄金糖

Specialty : 百物語しようとする和一話目で怪異を呼び寄せる（病のように避けようがないという意味で『職業病』だと司は

言う)

S k i l l : 霊視能力、被い、浄霊、結界、呪詛返し、式神、e t
c おおよそ世間で霊能力と呼ばれるものは大概行使できる。し
かし本業は臨床心理士で、霊能者であるにもかかわらず「この世の
不思議の大半は思いこみ」と断ずる。

N o t e s : 目取真祖父の旧友の子。なるだけ司が厄介事に巻き込
まれないようにと面倒を見ることを頼まれている。しかし仕事があ
るためなかなかうまくいっていない。事後処理担当の多い役回り。
本人のお人よしな性格も相まって苦労している。

十九題目 「穂波田村巫女考」と踊場が名付けた（前書き）

承が終わり。そろそろ転です

今回は巫女が純潔がどうかそんな話です

十九題目 「穂波田村巫女考」と踊場が名付けた

食堂を離れて動きだした車は一路、田淵神社を目指す。あのような対応をなされてしまうといくぶん村人に話を聞きづらい、と思ったらしい踊場はどうしたものかと頭をひねっており、そこで昨日のことを思い出した司と小野が神代なら話を聞けるのでは、と提案したのだ。

「悪い人じゃなさそうだったからね」

「いろいろと神社の由縁などについて教えてもくれました」

「ほう？ それは興味深いね。研究資料としてもぜひにお話を伺いたいものだ」

二つ返事で承諾した踊場は車を川の方へ向け、神社を目指し針路をとる。

すると先ほどあのようなことがあったせいで気になりすぎているだけかもしれないが、司が窓の外を見るとさっきまではこちらを見ることがもなかった村人が、じろじろとよそ者である司たちの方を見ているような気がしてならなかった。

サワハや口論義なども同じような視線を感じていたのか、身を固くしている。なにやら車内にこの先の散策での自分たちの身を案じる雰囲気漂い始めるが、退く気になっっている人間はまだいないらしかつた。

その中でただ一人、廉太郎だけが困ったように溜め息をついていた。

「……廉太郎さん？」

「なんだ、マルドメ」

「へんな溜め息ついてたから、どうしたのかと思って」
「なんでもない。どうせ俺が何か言ったところでなにも変わらないのだから、なんでもない」

不機嫌さを滲みださせながら、廉太郎は立たせた膝に頬杖ついて進行方向を睨んでいた。こう論議がやる気を出したことは嬉しい気持ちがあり、けれどまた事件に首を突っ込むことには難色を示している、そのポーズなのだろうと司は思う。

廉太郎の態度が目に入っていないのか、口論義はのんきに今の光景について推測する言葉を吐き出していた。

「村でも島でも同じだけど、閉鎖空間では独特のコミュニティができていたりするものよ」

「独特か。いいこともあるが、悪いことも無きにしもあらずだね。民俗資料を集めて比較し変化や伝播を推測する際にも、地域差などはかなり大きく出るものだ。そして特色、というのは排他的な要素になりがちというものだよ。孤立は孤独を深める」

「お祭りではありませんでしたが、冬の一件でも少し変わったコミュニティの祭事らしきもの、という点は同じでしたね」

「まあお祭りとは神の来訪であるとか精霊との交感であると考えられ、この世の秩序と異なる秩序に支配される時間だからね。諸外国で言うなればハロウィン、日本ならば近畿地方の地蔵盆や尾張などにあるお月見泥棒など、普段なら禁じられることが解放されるといふ形で秩序が崩れる。そうすることで疑似的に向こうの世界に近づく、なども考えられていたそうだ。あの一件も、そうした儀式の意味合いがあったのだろう」

向こうの世界、で異界を連想した司は、自らあのような場所に赴こうなどと考える人々の気がしれなくて不思議に思う。ふとミラー越しに目があった踊場は乾いた笑みを浮かべ、「特殊な凡人はえて

して特別なものに惹かれる」とつぶやいた。「もちろん、特別が差別につながることを知らないからだ」と付け足すのを忘れず、ミラーを視界から切る。代わりに移りこんだのは、司の後ろの廉太郎の眼鏡だった。

「はん、アイデンティティをそんなところに頼ってる時点で特別どころか特殊ですらないがな」

「……微妙なものとはいえ能力持ちのきみがそのように言ってもね」

廉太郎が反論すれば、踊場が反駁した。はまはく不愉快そうに、どこから取り出したのか竹とんぼを手の中でもてあそぶ廉太郎は、回しもせず手放したそれを己の微能により回転させ、落ちないが天井にも当たらない程度の回転数を保たせて空中で浮き沈みさせた。

「こんなことができようができませんが、俺は俺だ。こんなもん指の第一関節だけ曲げられるとか、ペンで指の間を突くのが速い特技と同じくらいどうでもいい。たとえば中学の時トランプタワーを立てるのがうまい奴がいたが、そいつは超人気者だった。比べて俺には、無風でも風車を回せるとかそれなんて永久機関、とか騒いでた科学部くらいしか友達いなかったぜ」

「いえ、そもそも廉太郎さんはあの頃反抗期の荒くれ者でしたから、友達がいただけ奇跡なのですよ？」

「……ちい、これだから後輩って奴は。へたにこっちの事情に詳しくて困る」

せせら笑いつつ後ろを見やる小野の視線から逃れるように肩をすくめ、どこかで聞いたようなセリフを言う廉太郎は運転席に向けて声を張った。

「とにもかくにも、変わるわけないんだよ。俺も、会長も、小野も、

サワハも、マルドメも。能力たったって目の届く範囲にしか効果が無い。それしきで変わるほど世界は脆弱じゃない。特技じみた能力の有無にひがんでんじゃねえよ、どうせ大したことじゃないんだよ、こんなもん。特別も特殊も信じなきゃ存在すらしてないんだ」

「じゃあきみは一体なにを信じているというんだい？」

普通、普遍、平等、一般。そんな言葉がよぎったのだろうか、踊場は苦々しい顔つきを眉根のわずかな動きだけに隠して運転しているように司は感じた。

廉太郎は実にあっさりと答える。

「手前と会長とお前ら。特別でも特殊でもない、俺の知り合いども……なんだよ、他に信じるべきものあるのか？」

「……いや、」

言葉を切つて、否、声に出さないようにだけ注意して。踊場の唇がたしかに「うらやましい」と動いた。口論義は真横にいたがその動きが見えていたのかどうなのか、身じろぎひとつしない彼女を見ても司には判然としなかった。

皆が黙つてからも進む田舎道は、車で走ると路面の凹凸や傷み様が直接に伝わってきて、ひどく乗り心地が悪かった。窓の外で昨日も見た道路脇の祠が後方に過ぎ去りゆくのを見て、司も小野も神社へだいぶ近付いてきたことを感じ取る。

しばらく道なりに進むと橋が見えてきて、渡りきった向こう側に開けた場所があったのでそこへ駐車する。窮屈だったのか肩を回しながら降りてきた廉太郎は軽く屈伸運動などをして身体を伸ばし、司を先頭に六人は神社を目指し始めた。

「この先の滝の向こうだよ」

「え！ 神社あるは滝の中通るノ！」

「……いや、RPGのダンジョンじゃないんだからさ。そんな面白いところはないよ」

サワハの見当違いな発言を流しつつ坂を登る。ところが滝の横まで来たところで、村人が三名たむろしているのを見つけた。中年男性と初老の男性、そして巫女装束に身を包んだ女性である。神代だと思ひ片手をあげて挨拶しようとする司だったが、よく見れば巫女は小じわの多い中年の女性だった。見知らぬ人々である。

無論、向こうからすれば自分たちが見慣れない人間なのだろうとは思ったが、失礼はないように軽く会釈して六人で通り抜けようとする。しかし一瞬だが司と目があつた中年男性が、去ろうとする司の背に脅しかけるがごとき声をかける。

「待て」

「はい」

足を止めると威嚇するように肩をいからせながら近づいてきて、中年の男は司の頭越しに奥の神社を見ていた。誰かいるのかと振り返るが、何も見えない。

「お前、この先に行く気か」

「ええ」

「なにがあるか知つとるか」

「お祭りかなにかじゃないんですか」

「知つとるのか」

加齢臭が感じられる程度の距離まで近づかれ、相手は完全に威圧の体勢に入る。昨日まではなにもなかったというのに、なぜ今日だけこつも厳しく追及されるのか。わけもわからず司はうなずき、その対応がますます相手の気に障つたとみえた。

いよいよ男の後ろにいた初老の男性と巫女からも厳しい視線が向けられ、明らかな敵意に司たちは囲まれた。男が一步踏み出し、齒をむき出した。

「てめえ、この先に通したるわけにはいかんぞ……」

「おうちよい待ったおっさん、荒っぽいことはなしにしてくれ」

と、司と男の間に廉太郎が割り込み、男の動きを制するように諸手を掲げて押し留めるような体勢をとった。小柄で背も低い司より、男は遙かにながしりとした体格と背丈の持ち主であったが、一八〇センチを越える巨躯の廉太郎のことはさすがに見上げざるを得ない。見下ろされて男は少しだけ気圧されたようだが、すぐに気を持ち直し、目前の相手を睥睨し、突然間合いに入り込んできた乱入者が自分を押し留める腕を払いのけようと、片手をあげた。

「おいてめえ、舐めた真似しとるんじゃねえ」

怒鳴りかけて、不意に動いた男の手が廉太郎の右腕を掴みにかかる。

「っと」

そこに捲きつけるような動きで廉太郎が腕を回すと、まるで擦り抜けたかのように男の手は遙か下方に流されていた。そして動かし、対応したにもかかわらず、相も変わらず廉太郎の両腕は前面に据えられており。腕を払われた男の正中線へいつでも打撃を加えられる位置を保持していた。その場の人間が全員、あつけにとられた。

廉太郎の体勢を見て「あ」と思った司が振り返ると、小野も少し身構えるようにしている。危険な雰囲気を感じ取ったためだろう。そう、体勢ではなく、それは身を「構えて」いた。

それが単なる体勢でないことを、司は以前小野から聞いて知っていた。一見ただ無造作に両手を突き出して「まあまあ」とでも言いたげに穩便に押し留めるだけの格好に見えて、相手の足下に右足を踏み込み左足は肩幅より少し狭い程度に開いて後方に置いている。

脇を閉め眼前と顎の前へ並べられ柔らかに五指を開いた掌は、そのまま掌底として打ちこむまたは指先を相手の衣服へ引っかけ崩し・投げ・極めへ瞬時に移行するためのもの。

歴とした、倉内流の構えのひとつであった。

「な、おっさん。やめてくれよ、な」

「てめえなに言つて、」

素早く、長いリーチを生かして廉太郎は男の肩に掌を置く。突き飛ばすでも殴りつけるでもなくただ置く、だけのように見えて、関節の動きを殺している。相手の拳が飛んでくる予兆を感じて、機先を制し相手の動きも制していた。

足をあげようとしても同じ。男の足下の間合い深くへ踏み込んでいる廉太郎の足が、動こうとする男の足より早く駆動し運動のエネルギー方向をずらし、崩すように払う。もんどりうって倒れた男に、廉太郎は手を差し出しつつ問いかけた。

「ああ悪い、立てるか？ いやホントすまないな、うちの師匠なら倒すようなヘタはしないんだが、なにぶん俺アまだ修行中の身でね。倒さず動かさず攻めさせず防がせず、ってなうちの流派の極意はただ使えないんだ」

それは相手に一切の自由を許さないということではないだろうか、と司は思った。なににせよ、そこまで熟達した域に達していないとはいえ、廉太郎と男の実力差は火を見るよりも明らかだった。

なおも敵意をむき出しにして氣勢の殺がれた様子のない男は、素

早く立ち上がって構えると、廉太郎に襲いかかろうとする。面倒臭そうに、廉太郎も構える。少し右拳を下げ胸元の前辺りに構えると、手首のしなりを利かせて鋭く風を切る音を立てた。

「止まれ」

だがともに廉太郎のジャブが決まる前に、制止の声がかかって男がびたりと止まる。先ほどまで怒りに駆られていた男は声の響きが消えるまでに青くなつて縮みあがっていたが、血の気が引いたのは別段廉太郎の拳が鼻先をかすめていたからではなさそうだった。声が出た方向は神社で、そこから廉太郎に負けにくいくらいに背の高い男が歩いて来ていた。

「祭事の前で気が立っているのもわからんではないが、そのように外部の人に接するのはいかなものかと思うが、どうだ」

「す、すみません」

「謝罪すべき相手は私ではあるまいに」

諭されて、男は口早に廉太郎と司たちに詫びるとそそくさとその場をあとにした。後ろに控えていた男性と巫女も気まずそうに顔を見合わせると、神社の方から歩いてきた長身の男の顔を見ないようにして頭を下げて、滝の前から離れると坂を下っていく。立ち止まっていた長身の男は、彼らが去り見えなくなるまで見届けてから、司たちに頭を下げた。

「やれ、参ったものだ。すまなかつたな、きみたち。こういうクソ田舎だとしても排他的になつて、外部の人間にはひどく接しがちのようだ。戒めるよう言い聞かせておかねば」

よれたワイシャツに黒のボトムス、下駄というひどくラフな格好

の男は、左手をポケットに入れたまま頭を掻いた。輪郭線を覆う無精ひげと短く刈り込んだ頭髮、薄く細められた瞳の下の皺が少々年齢を重ねていることを示していたが、正した背筋とワイシャツの上からでもわかる鍛え上げられた肉体が、そこへ若さも内包していることを認識させた。

低く落ち着いてはいるが張りのある声にも、まだ老いを感じさせることはない。弁解するわけではないが、と前置きしてから、男は彼らの対応の理由について話した。

「特に明日明後日にある祭事は干支の一回りごとにしか行わない特別なもの。外部の方には参加をご遠慮願っているもの故に、ついそのような対応になる。重ね重ね非礼を詫びなくては。申し訳なかった」

「いや、こつちこそすんませんね、村の人転ばせるような真似して」「ところで、ここの神社の巫女さんであるところの神代さんはいらつしゃいますか」

廉太郎の謝罪に続けて小野が問うと、頭を下げていた男は怪訝な顔をして六人に向き直った。

「はて、神代のご友人の方々かな」

「友人というほどではありませんが、先日ここで色々とお世話になりました」

「それはそれは。……ふむ、だが神代は明日の祭事のため楔みそぎを執り行つべく山の方へ籠っている。あいにくだが、余人を近づけるわけにはいかん。御用向きは祭事の終わりし明々後日以降としていただけるか」

「ああいえ、御用というほどではなかったのです。ただ、わたしたちは学校の合宿予定でこちらにうかがっているのです、明後日には帰らなくてはいけないんです」

「なるほど、では神代に逢うことも叶わんわけだな」

納得した様子でうなづく男は、少し考えてから司たちを手招きし、昨日も訪ねた拝殿横の階段を下りた先にある平屋の方を指した。

「せっかくこちらまでご足労願ってなにももてなさず返すのでは神代に叱られかねん。お相手が私のような男であることは申し訳なく思うが、茶でも出そう。神代の家を勝手に使うことになるが、まあ私も一応はこの関係者だ、さほど問題あるまい」

先導して歩く男は、振り返りざまに司たちに名乗った。

「ふるかわぎすけ古川義助。私も、神代の友人だ」

昨日もお邪魔した場所で今日は仲間と卓を囲み、もてなしてくれる相手も違つというのはどこか芝居じみた感じがして、司には奇妙に感じられた。

「少々待たせたかな」

お盆に載せたやかんと人数分のグラスはわりと重たそうに見えたが、左手をポケットに入れたまま右手だけで盆を持った古川は行儀の悪いことに足でふすまを開け部屋に入ってきた。

「いえいえ、お気づかいありがとうございます」

「家事接待は少々苦手なものでな。特に若い方々のお相手はなにを話せば良いのやら」

「なんでもいいですよ。たとえばほら……あなた、家事は苦手でも武

道の心得はあるみたいじゃないすか。それについてちょこつと教えてもらえませんかね」

なぜかちよつと嬉しそうな廉太郎がそんなことを言っただけで話題を振ると、座りこんだ古川はいやはは、といたずらを見破られた子供のようになつた。実年齢は三十そこそこ見えたが、笑うと少年のような印象に若返る。

「きみやきみのお師匠さんほどではないと思うがね」

「そうすか？ 体幹のしつかりした歩き方してるし、下駄の底も平らにすり減ってた。相当しつかりした重心をお持ちのようすで」

「そこまで称賛を受けるほどではない。その昔剣を、嗜む程度にな」

今も続けているとしか思えないほどに筋骨隆々とした男だったのだ、素人の司でも明らかかな謙遜だということがわかった。廉太郎はそれを聞いてなお興奮冷めやらぬ様子で、今にも舌舐めずりしそうな顔をしていた。

「……悪い癖ですね」

兄弟子のいやらしい表情に対して、小野は気持ち悪いものを見たような目でこそこそと司に愚痴を言う。言い咎められたことに気付くと、廉太郎は唾を呑みこんで、仏頂面で黙した。

「悪い癖ってなに？」

「あの人、倉内流の鍛錬のおかげでだいぶ更生して、自分より弱い人をあしらうことを覚えましたけど。未だに強そうな人とは戦いたがるふしがありますよ」

「……ああそういうこと」

戦闘を行う廉太郎を司が見たのはさっきの一回と犬神使いの時の一回、合わせて二回だけだが、その都度廉太郎は必要に駆られてしぶしぶという顔で面倒そうに戦っていたためつきり？修行の果てに戦いの虚しさを知った？とかそういう境地なのだろうと司は理解していたが。

単に自分より格下の相手では燃えない、と、それだけのことだったようである。

「ところでお祭りというのは、なぜ部外者は参加ができないようになっていたのですかね」

踊場は巫女がいなかったことを残念がっていたようだが、気を取り直して本来の目的だった民俗研究のための聞き込みをはじめた。

この話題に触れば古川でも先ほどまでの村人のように豹変するのでは、と危惧していた司はいきなり本題に入った踊場を見て驚いていたが、意外にも古川は気分を害することもなく、ああそれかと丁寧に応じる態度をみせた。

「かなり歴史のある祭事だが、元は男子禁制の祭事であったと聞いている。特に旅の男性、外部の男性は厳しく排除する傾向にあったそうだな。十二年ごとにもみ行う神聖で特異な祭事であることも排他性を強める一助となっていたと見えるが、いつからか排他性は強まり村人だけの行事となっていたらしい」

神聖、排他性、とつばやいた口論義はなにか思うところあったのか、まるで授業中であるかのように片手を挙げて古川の説明に質問を差し挟む。

「それ、巫女の神性を保つため、ってところから始まったのかしら」「巫女の……そうかもしれないな。少なくとも、一因ではあるだろう」

と私は思っている。神社の文献にもそのような記述は存在していた」

古川の答えに得心がいったのか、ふんふんとうなずき口論義はメモを取る。

口論義の質問の意味がよくわかっていない司、サワハ、廉太郎には、無理解を察した踊場が説明した。

「先ほども述べたが村や島といったコミュニティは閉鎖的になりがちだ。結果、身近な人とはかり契ることとなりその集落では血が濃くなる。要は徐々に、近親同士の行為に近付いていくわけだ。昔の人もそれが良くないものを家系に呼び込むことは知っていたからね、当然解決法を探し求める。……ところで全国に子宝の湯というのは存在するが、あれの由縁の一説は知っているかな」

温泉の由縁や由来など、動物が傷を癒しているのを見て浸かってみた、などという伝承ぐらいいしか知らない司は首を横に振る。横を見れば廉太郎とサワハもちんぷんかんぷんと口にしており、踊場は話を続けた。

「風呂屋であかすりや髪すきを行う職業を三助さんすけといつて、今では日本にも一人しかいないが昔は色々なところに居たそう。三助は男性の職種でその昔は遊女ゆなという女性の職もあつたのだが、こちらは途中から売春化していったため禁止された。そして三助に話を戻すが、まあ男性の職種なわけだが、かつての風呂屋は男女混浴も数多くあり、「いいネそれ」「いいなそれ」「黙れ話を聞け」

黙って聞いていたサワハと廉太郎がほぼ同時に下心丸出しの発言をしたため踊場は眉間に皺を寄せてぴしゃりとはねつけた。

「……数多くあつて、だ。不妊で後継ぎに恵まれない女性がそうい

うところへ来たでしょう。けれど不妊というのは男性側に問題があることもある。たとえば……機能しないとか、機能していると見えるが子種はないだとか。そういう場合でも、良家の場合は男の面子を立たせるために固く秘して、後継ぎを生ませるために画策する。その策のうちの一つが、三助による援助に頼るものだという説がある」

援助という言葉にもたせた含みは、さすがに全員理解した。一人くらいうぶな反応してもいいのに、と思った司は小野の方を見てみたが、澄ました顔をしていて特に恥じらったりする様も見られずがっかりした。

「だがんなもん、家の中の侍従なりに頼みゃいいんじゃないのか」
「後々使用人の子だなどと露見したらそれこそ大問題だろう。そして良家の娘など、外に出る機会はそうそう無い。旅先ならば知る人もなく噂の広まることもないと考えた、苦肉の策だったのだろうと思うよ。……偶然にあやかった子宝を宣伝文句とした看板が立つのが先か、裏ルートからそのような仕事を斡旋する人間が先か、はたまた真つ赤なウソなのか、判断はつかない一説にすぎないのだけけどね。ともかくも、後継ぎはどんな場所でも望まれる」

「ふえー、面子も機能もタたないはたいへんネー。それで、お話が子作りのなのはわかたから、それが巫女さんに繋がるする理由教えてヨ」

「……きみはもう少し言葉を選んでくれ」

さらりと下世話なセリフを言ったサワハに頭を抱えた踊場は、ようやく話を元に戻す。

「今のは良家の後継ぎの問題だが、村でも島でも同じように後継ぎは求められる。だがあまり村内で契る人々が多いと、血が濃くなる。

それを防ぐためにとつた方法は、先の子宝の湯と同じようなものさ。外部からの血を入れることだよ」

共感呪術、と呼ばれるものがある。接触したもの同士にはリンクがあり、なんらかの相互作用があるとするものである。たとえばとある狩猟民族では、獲物の足跡に矢を突き立てることで獲物の足へダメージを与えることができる、と考えられていた。他には類感呪術と呼ばれるものは似たもの同士に相互作用があるとすると、全世界至るところの呪術文化でこれらを重視してことを行うものが散見される。

そして豊穰とは、生まれること。その類感からかつての儀式において巫女は娼の役も担い、男性との契りにより豊作への道程を表したとも言われる。だが神に仕える巫女は神と契るべきであるとされ、次第にそのプロセスは失われ巫女は純潔を保つようになっていった。

「結果、その昔生じていた外部からの血を引き入れる行為が巫女に影響を及ぼすことのないように、特に祭事の間は外部の人間を入れない文化が生まれたってことかしらね」

口論義が締めくくり、踊場も同意を示すようにうなずいた。古川は感心したのか大きくうなずき、踊場と口論義を交互に見比べた。

「博学なものだなきみたちは」

「まだまだ浅いですよ。学ぶべきことは多くあります」

「いやいやそれだけ語れるのならば、神代がいたらさぞ喜んだことだろう。奴も民俗学などに多大な興味関心を持っていてな、常日頃から空いた時間には勉学に励んどった」

「僕も大学で研究の道に進もうと考えています」

「それは素晴らしい。神代は大学にこそ行かせること叶わなかった故、今も独学で学んでおるのでな」

「大学に、行かせる？」

まるで保護者じみた発言に、全員が首をかしげる。口を滑らせた風でもない古川はにこりと笑い、「歳の離れた妹のようなものでな」と言った。

「私は土地の管理で生計を立てているのだが、諸事情の下に神代の後見人のような立ち位置となっている。出来得る限り奴の願い通り大学へも通わせてやりたかったが、私にも奴にも為さねばならぬ職務がある故村に留まることと相成った。そのような経緯だ」

「地主ですか……」

「大したものではない」

地主は金持ち、という先入観から気後れした司が言うと、古川が右手で指差した窓の先、彼方の山のふもとにある乾いた色合いの大地が、司たちの視界の中央に映る。なにかが育てられている様子の無い、完全な空地であった。

「有効活用のできん土地を広く所有してしまっただけのこと。本業も他にあつたが」

「今はやめてるんですか」

「やめざるを得ん理由があり、やむなく。今の暮らしも悪くはないがね……ああ、そういうば祭事について聞きたいのだったか」

矢継ぎ早に司が会話を重ねたためについつい伸ばし伸ばしになっていた話によくやく回帰し、踊場がメモを片手に真剣に聞き入った。古川は顎を撫でながらぼんやりと窓の向こうを見据え、祭りの内容について語りだした。

「先ほどお話の中でもあつたが、ここでも巫女は豊穰を祈願するた

め人々から崇められてきた存在だ。稲荷大明神を祀る、ということ
は神代から聞いたかな」

「ええ一通り」

小野が答え、振り返るが、踊場も口論義もある程度の知識は持つ
ているようで続けるよううながす所作を見せた。廉太郎とサワハは
あまり興味が無いらしく、部屋の中を見渡したり携帯電話を取り出
して「圏外……」とぼやいたりしている。司は昨日説明を聞いたこ
ともあつてか多少なりとも興味は湧いたので、古川の話に耳を傾け
ることとした。

「左様か。では枝社の方へ祀るものが何であるかは知っているか」

「枝社……は、食べ物をお供えする際にそちらへ置く習慣があると
聞きましたが」

「その通り。あちらには本殿の祭神とは別のものを祀っておる。荒
魂みたまと言う奴であるな。神代はこれを鎮め、災厄なく事が運ぶよう祈
ることをお役目としている」

「基本的に巫女さん以外はお祭りに関われないのですか」

「ああ、そうだ。巫女と一部の村の上役のみで執り行われる儀であ
るよ。古来より身分の高い人間と謁見できるのは同様に身分の高い
者だけであつたように、巫女や狐も神と直接に相まみえることは無
礼にあたるとされて遣わされたものだ。そして人ならぬ者の跳梁跋
扈こはばする彼の世を見るべく、人の俗世を離れて山に環る。こうしてこ
の社が建つのも山だが、山麓というのはそれだけで神性の高いもの
と考えられ、神に繋がる場、はたまた山自体が神とする考えもあり、
この村にはそれが伝わっている」

「山岳信仰ということ？」

口論義の疑問に、古川の目尻が柔らかく垂れた。人にものを教え
るのが楽しいというのは、踊場にせよ古川にせよ知識人に共通の感

覚であるようだ。

「修験道ではないのでそこまで露骨なものではないがね。山裾から広がるこの村一帯の土地の神の祠が置かれているのが山というだけのこと。そも、崇めるといふ字にも山という字は入っている。山々は高く、人の下界を見下ろす場。壮大な自然に対し畏敬の念を示す、山以外も対象に含む自然崇拜ということだろう。その内から出ずる動物もまた、人間にとっては脅威であり、畏れるべき対象だ。動物は人間の本能と情念を現し、かつて居た自然の在り様を人に思い出させる」

古川は窓の外の眺望に思いをはせていると見えた。それにしても、ただの土地管理者にしてはいやに詳しいと司は思う。

「ひょっとして、古川さんが神主かなにかですか」

「いや、いや。私は単なる土地の管理者、神社とは一切の関係が無い。むしろ、実のところ私も外部から来た人間なのでね。なにやら語ってしまったが、祭事への参加が許された人間ではない。実情や詳しい内容については伝聞でしか知り得ておらんだ」

「外から、来たんですか」

「……遠い、昔のことだ。何世代も前に先祖が住んでいたこの地に帰ってきたというだけのこと。今や出て行く気も起ころん、この地で生涯を終えるだろう」

古川は西日の差しこむ部屋の中で、静かに笑った。

#

「神代さんとやらに会えなかったのは残念だったが、古川さんからのお話も僕には十分に興味深いものであったよ」

一時間ほどお邪魔していくつか話をうかがってから、司たちは田淵神社を離れて村の方へ戻るべくカローラを停車したところまで帰ってきた。古川によれば狭い村落特有の情報伝達速度で今頃は古川・神代の知人であることが伝わっているから、村の散策に際しても特に問題は起こらないだろうとのことである。

ただ念を押すように、明日明後日の祭事には来ないようにと言われた。踊場は残念がっていたが、口論義は一度トイレに立って戻ってきてから、考え込んだ様子で黙り込んでいた。

「どうするノ踊場サン、あとの今日のご予定はー」

「問題がないのであれば他の神社を見て回りたいところだね。伝承などについてももう少し詳細なデータを集めた上でこの辺りの地域の他の伝承と比較検証して、レポートにまとめる」

「終わったら帰りに川浪で道の駅に寄ろうぜ。ワサビアボカドアイスっての一度食べてみたいと思ってたんだ」

「なんですかその食物兵器」

小野が不気味な食べ物想像してしまったのか吐き気を催した顔で廉太郎から距離を取る。当の本人はというと聞いていないフリをして意にしない様子でがま口財布の中身を確認している。前納と趣味が合いそうだと、司は友人の天然パーマを思い出す。

「しかし喉が渴いてきたのだけ」

「さっきお茶飲まなかったの？」

「他人の家の茶は微妙に口に合わん」

「レンタコ、あつこに滝あるヨ滝」

「生水はよせよ」

「あ、ならちようどいいものあるよ」

「ごそごと、フラップバッグに入れたままだった缶ジュースを取り出して廉太郎に渡す。司はわりと勢い強く投げたが、さすがに鍛えた反射神経で受け取った彼はやきいもジュースというその奇怪な飲み物を手に硬直し、司に投げ返そうと構えを取る。」

「お前これ冷えてないだろうが」

「えー、もっと他に言うことあったと思うんだけど……あと口さみしいならこれもあげるよ」

「絶対そのチョコ菓子溶けてるだろ。だいたいそういう菓子食うとさらに喉乾くだろ」

呆れたような廉太郎だが一応貰えるものは貰っておく主義なのか、ごそごとポケットにしまいこむ。余計に菓子が砕けると思ったが、どうせこれ以上状態が劣化することはないと判じて黙っておいた。

「甚平ってどこにポケットがあるのか、構造がよくわかんないな」

「男子にとって制服のスカートのどこにポケットあるのかわからんのと同じようなもんだ」

なるほど、と納得する司に、運転席に座った踊場が呼びかけてくる。そろそろ出発のようで、小野とサワハと口論義も車に乗り込むところだった。

「明日は来られない以上今日中にできることはしておきたい。そろそろ出発させてもらうよ」

「あつと、出発するんならその前にちよつといい？」

「どつたんマルドメくん、忘れ物置いてくるでもしたカナ？」

「えと、ちよつと……華摘みに」

「キジ撃ちとも言つな」

廉太郎に妙な注釈を付けられながら、駐車した位置から離れて木の陰のあたりにある公衆トイレへ歩いて行く。古川の話聞きながら話の合間にお茶をいただきすぎたせいである。会話で置いてきぼりを喰らうとどうにもグラスに手が伸びるクセをどうにかした方がいいと思った。

公衆トイレは少し曲がって車からは見えない位置に入口があり、影にあることもあってひんやりと沈んだ空気が溜まっていた。そこからへと進み、わりと小奇麗な場所だったことにほっとしながら男女のマークの区別をつけようとする。ところが田舎のおおらかさというものが、特に男女で分かれているわけではないようだった。

「……まあ誰も来ないよね」

ちょっと迷ったもののそろそろ限界に近かったため、急いで中に入ろうとする。後ろから他の皆が連れ立って来たりしないことを願いつつ、司の足は勝手に進む。

ぐにやり、景色の一部がひんまがって、その位置を透した先が塵気楼に包まれたように、ふやふよと頼りなげにゆれる。あれ、と異常に感じて戻ろうとした時には、既に遅い。ぐわぐわと異空間が広がりを見せ、司の右側を塞いだ。

一か月前の峠での出来事がフラッシュバックして、感覚の中に既視感が攻め入る。この？歪み？により異界へ消えた加良部のことか頭をよぎり、近づいてはならないと身をすくませた。……第六感直前まで何も感じ取っていなかった。つまりこの異常は今この時に発生したものだ。理解がそこまで及んで、ようやく退避しようとするが、歪みの数が急速に増えて行き、へたに動けば中に呑み込まれそうだと思つと足が動かない。

おまけに。

空中に、亀裂が入る。黒いマジックですうつと線を引いたように、

そしてそこからぬめぬめと這いだすように、塗りつぶす黒の色合いが空間の色彩比率を傾かせていく。はじめて見る事象に驚いていると、その塗りつぶされた陰のようなものも、数を増やして司に迫る。

その存在は影を剥い出た人間のごとき異形で、第六感の警報と霊視による判別は可能だったが、声も聞こえず臭いはなく触れることもできない。これら特徴から、霊体なのだと思い付いて対処すべく小刀を抜こうとした時、司の腹部へ鈍痛が走り、指先からも力が抜けて痺れに表皮の感覚が囚われる。

こんな、急に。

「……………や……………ば……………」

言葉が形をなさず、助けを呼ぶことも叶わない。呆気ないほどの短い時間で全ての気力を根こそぎ奪われた司は、自分を取り囲む異形と異常から身を丸めようと構えて、そこで意識を失った。

十九題目 「穂波田村巫女考」と踊場が名付けた（後書き）

廉太郎が言っている「下駄のすり減り方」は格闘技漫画とか古武道の出てくる作品とかでよく言われてますよね

むろん倉内流は実在の流派とは一切関係ありません。戦闘方式は極めてファンタジイ。一打必倒ではなく手の届くところから攻撃して徐々に内側へ攻め込む戦法。ただ七話で使ったのと似た技は友人にやられた覚えがある……

豊作を祈願する場合には田畑で舞い、踊り、奏で、さも豊作があつたかのように振る舞う。これがおでんの語源でもある田楽（田楽は曲芸見せのような側面もあり、その中で高い一本足の竹馬のようなものに乗る芸がありそれが串刺しのおでんに似ていた）のはじまりであり、次第に田楽は田畑の中から出て大自然と人の世界との境界たるひもろぎなどに位置する神社にて行われ、より直接的に「祀る神様」へ祈るようになった。

以上、補足説明。だれも読まないよこなんん！

というわけで前回今回となにやら神社とか信仰とか村々とか風呂屋とかの話が多くてちんぷんかんぷんだったことと思いますがもう少し三章は続きます。風呂屋のくだりは作中で踊場もいっておりますが、あくまで一説ですので鵜呑みになさらぬよう。

んではまた。

二十題目 「奇祭の中で」と小野が怯えた（前書き）

二十話目。

二十題目 「奇祭の中で」と小野が怯えた

#

気がつくくと、現実を認識させる疼痛が腹部に突きたてられていた。

「ぐぐぐ……」

「まだ起きるには早いと思うよ。血压が元に戻るまでは寝ていた方がいい」

踊場に押し留められ、上体を起こすのを止められる。一体なにがあったのか、と周りを見ると、カローラの後部座席に寝かされた司を、開け放たれた両側のドアから五人がかわるがわるのぞきこんでいた。

「……あの、これは」

「いいからこの菓子食って、ジュース飲んで、少しでも血压をあげておけよ」

ほれほれと押し付けられたのは先ほど廉太郎にあげたはずの品で、最初は食ってなどいられるかと思っていた司だが、しばらくして腹部の感覚に慣れてきたころ、どうやらそれが空腹を原因としているらしいことに気付いて、少しずつ口に含ませてもらうことにした。

どろりとしたジュースも砕けた菓子もお世辞にもおいしいとは言えないものだったが、胃にものが落ちたことを自分で認識した途端、手足のしびれるようなだるさも腹部の疼痛も、かなり薄まって楽になった。すると血压の上昇に伴い顔色もよくなってきたのか、司をみていた小野の顔もほっとした表情に変わる。

「ごめん、心配掛けて」

「いえ、やはりついていくべきだったかと思い、むしろわたしの方こそ反省しています」

用もないのについてきてもらうのもそれはそれで嫌かな、と思う司ではあったが、気持ちだけ受け取っておくつもりで笑顔を浮かべておく。身体を起こすと、外に立つ口論義と踊場はさっきあとにした神社の方をじっと見ていた。

「ダリ、かしらね」

「さるばどる？」

「ちがうちがう。地方によってはひだる神とも呼ばれている、飢餓の亡霊よ」

サワハの珍解答を聞いて首を横に振った口論義は、なおも神社というより、その枝社に向かって目を凝らし、当然だがなにも見えなかったのか、ふうと一息司に向き直った。

「人の形だった？」

「え、その亡霊、みたいなものこと？」

強くうなずく口論義に、つられるようにうなずいてから、司は思い返す。空中に浮かんだ線から滲み出るように這いだすように姿を現した異形のものどもの、形。それは少なくとも人間を大きく逸脱したものではなく、なにをされるでもなく近づかれただけで自分は気絶していた。

「人間、だったよ」

「鬼になってはいないというのなら、そこまで心配せずともよさそうだね。さあ司くん、残りもすべて食べ終えてもらえるかな」

「ええ？ あの、これ、すごいまずいんだけど」

「飲食しないと回復しない。ダリは飢餓の亡霊で、自分たちの味わった苦しみを通りすがりの相手に与えていくたちの悪い霊だと聞くからね。対処法はうまく過ぎ去るのを待つか、でなければなにかを口にして空腹を満たすか、このふたつしかない」

「フーかマルドメ、お前自分が食えないようなもん人によこすなよ」

嘆く廉太郎の意見は無視して、司はしばしジュースの缶を見つめていたが、耐え難い空腹にまた襲われるのもごめんだだったので一気におおつて咳きこんだ。すると少し視界がはつきりしてきて、だいぶ症状が収まつてきたことに安堵した。

持ち直したことに口論義も安心した様子だったが、車体にもたれてまた神社の方を見ている目は厳しい鋭さを保っており、その姿勢のままに五人へ呼びかける。

「気分がよくなったとしても油断は禁物ね。今日のところは探索もとりやめにしましょうか」

「とりやめ！？ それは、ちょっと」

「？ なにか問題でもあるの」

枝社から目を離れた口論義は不思議そうに振り返った。その反応から、おそらく自分が助けられた時にはすでに？ 歪み？ もダリも消えていたのだと司は気付いた。話すべきなのか迷う問題ではあったが、歪みはその存在自体が危険な、異界への扉である。看過できる問題ではないと思い、結局説明することとした。

「さつき倒れた時に……？ 歪み？ をみた」

「歪み、ですか？ あのフォッグマンの一件の時の？」

「なんでかわかんないけど、確かにあった。そんであそこに落ちるわけにはいかないと思って立ち往生しているうちに、空間をマジッ

クで塗りつぶしたシルエツトみたいな人の形、ダリに囲まれたんだよ」

「しかしあの？歪み？とやらはそう簡単に出てくるものなのですか」「赤馬さんが言ってたように、御手洗さんも言ってた。大きな気の溜まり場からなら？歪み？はいつでも起こり得るらしいよ。どこかへ方向を定められて、同時に誰かの思念に染められれば、力の行き先は異界になるって」

「てことはなになの？ ここでも誰かが人呪うしたってコト？」

「どうだろうね。人の思念が気を染め指向性を持たせるといっても、呪いだけとは限らないのではないのかい？」

「のろい、ではないにしても。まじない、なら今この村に蔓延してる思念だものね」

踊場の言葉を受けて、口論義が推察した。漢字にすれば同じでも、読みを変えるだけでいささか印象は変わる。害意でない思念も、それはそれで力のあるものではある。

けれど司は否定した。

「異界に流れる気、っていうのは水が低きに流れるっていうか、マイナスの指向性を持たないと生まれにくいんだよね。前向きな思いは異界には流れない」

「ならどこへ向かうのですか」

「異界なんかに流れる前に、ぜんぶ消費され尽くす。プラスの思いは、せいぜい一人に少し影響する程度だ、って言われたよ。夢が無いよね」

夢が無いと言うよりも、この世はマイナスの力の方が比率が高いように思える話で、空笑いしながら話す司もどことなく気落ちした様子で肩をすくめた。

「いずれにせよ？歪み？の出現は看過できない問題ね」

「だよ」

「だからこそむしろ、ここは撤退するわよ」

「え？ いや会長、それはちょっと、ってさっき言ったじゃ、」

「……古川さんもあたしたちをマークしてるの？」

司の耳元でぼそぼそとつぶやいた口論義の言葉に、司は飛びあがりそうになった。

「……へ？」

「あたしも廉太郎くんと同じでお茶の類には手を出してなかったの、気付かなかった？ それなのにトイレに立つ理由って言ったら、発動条件整えるために決まってるでしょ」

べ、と舌を出した口論義は虚言看破の使用を匂わせる発言をして、改めて周囲を見回してから車に乗り込んだ。司を挟むようにしてサワハと小野も乗り込んできて、廉太郎も荷物と共に車の後部へ入り込む。

「廉太郎くん、どうかしら」

「殺気ってほどじゃないが、いくつか気配を感じるな。こっちの出方待ちってとこだろ、つかず離れずの距離を保ってるようなのだぜ」

「やっぱり、か。村人に警戒しないよう知人だと伝えた、とかいうセリフの時、嘘だって感じたのよね。お祭りに外部の人が参加できないってのも嘘だったし、ここの人たち嘘まみれよ」

「一体、なにがどうなって」

「まだわかんないの？」

あぜ道を転がり出した車輪により、司たちは田淵神社から離れてゆく。飛ばしぎみで幹線道路へ辿りつくくと、急いで川浪のキャンプ

地へ向けて走り出す。

「あの村全体がグルになってお祭りに備えてんのよ。加えて？歪み？が出現したとなれば、なにか怪しいことをしているのは確定的。それなのに相手に見つかつたまま相手の陣地にいるなんて危険極まりないでしょ？一旦退いて体勢立て直して、お祭り本番がはじまる前にもう一回忍び込むわよ」

すっかりやる気を出した様子の口論義は意気込んでおり、まだ少し頭が重たい気がする司にはその元気が羨ましく思えた。

車は勢いに乗り、一路川浪を目指して戻り始める。村の人々がこちらを見る視線については、廉太郎のように特別に敏感なわけではない司でもちらほらと感じるようになっていた。最初に訪れた時に感じたのどかな雰囲気は、今や雲散霧消している。村全体に不穏な空気が感じられて、どうにも気分が悪くなりそうだった。

そうして走る帰り路の途中、車は何も植物のない荒れた土地の横を通った。距離と方角から、そこが先ほど古川と話していた際に彼が示していた土地だろうとあたりをつけた司は、身を起こしてどのような場所になっているか見る。

別段？歪み？のようなものを感じとつての行動ではなかった。ただ近くを通るだろうという思いから、好奇心で見ただけだったが

「？」

首をかしげることとなった。

荒れて、砂利にまみれたひどい土地にしか見えないそこには、なぜか地鎮祭でも執り行ったあとのように、供物がささげられ祭壇が作られていたのだった。

「なんだ、あれ」

司の言葉を受けて小野やサワハも外を見るが、その時には車体が林の中へ進み出ていたため何も見えない。後ろに車の影があったため停まるわけにもいかず、そのまま六人は進んでいく。

「なにかあつたのですか？」

「えっと……あの土地に、お供え物がしてあつたよ」

「お供え？」

小野の声で、踊場もミラー越しに司の方を見ていた。うなずく司の態度に疑問符を浮かべる五人は、しかしその供物の理由に思い当たるところあるはずもなく、ただ過ぎてゆく林の向こうを眺めていた。

#

穂波田村は、司の探し求める村ではない。

だが呪術師がはびこり奇妙な風習に支配されている、という点においては共通項があり、それがなんらかの形で繋がりをもたらす可能性は十分にあつた。

村を探せ、と言つたのは、祖父だった。己の過去と向きあい、記憶の底を見据えて、かつて住まいを得たあの場を探せ と。ただそれだけを命令し、祖父はこれより自分は失踪すると続けた。村を離れて八年、久しぶりの連絡がそのような突拍子もない言葉だったことに動揺した司は、当然理由を問う。けれど祖父は答えることなく、通話を切ろうとしている雰囲気を感じた。

『ばあちゃんに関係あるの？』

口をついて出た言葉は確信があつたのことではなく、ただ通話を

続けるには二人に共通の何かで揺さぶりをかけなくては、と思つての発言だった。ところが祖父は黙って、その沈黙の空気は司に自分の問いかけが祖父の琴線に触れたことを悟らせるには十分だった。

『ばあちゃんが死んだのと、目取真の家のことと』

『お前にはア関係ない』

『関係あるでしょ？』

『お前にはア関係ない』

『ばあちゃんの孫であるこっちにも関係、あるんでしょ？！』

『お前には関係ない！ …… 関係を …… もたせるつもりは、なかった ……』

食いしばった歯の隙間から漏らすように告げた祖父の震える声を、司は忘れられない。

『 …… お前に関係させんように、わしゃアお前を息子たちから引き離し、七年間手元に置いて連中から守ることにした。それで終わったと思つてたんだが …… 連中、見つけちゃまったんだなア』

半端な覚悟がお前を傷つけることになりそうだ、と祖父は司に謝罪した。

『お前を救うにはア今のわしじゃ力不足だ。手前で身を守る意味でも、あの場所は重要な意味を持つ。だから探せエ。場所を教えることアできんが、お前が望み呪いの痕を辿れば、どこからでもいずれあそこに行き着くだろうよ』

どこなのか、と問うても無駄だということを暗に示して、最後に祖父は言った。

『すべての呪いの出づるところ、身に行く呪いが通りしところ、人が生む呪いの源のところ。心にほど近くゆえにこの世になく、身の内に籠りて見えず見透かす目にてもまた視えず』

お前の眼のみが瞰通す場所だ。

「……起きてらっしゃいますか」

うつうつとまどろんでいた司が最初に見たのは、空にのぼる黄色い月の形だった。

「ん、と、寝てた？」

「少し」

目をこすって横の小野に焦点を合わせる。きっと森の中で眠るといふ経験が過去のあの村の記憶を呼び覚まし、ついで祖父との会話を思い起こさせたのだろうと司は判断した。

儀式などは深夜にはじめるものも多いため、日付が変わった直後からなにかある可能性もある。各地の祭事などにも精通する踊場がそう主張したことにより、司と小野は深夜のキャンプ地を抜けだしてカローラに乗り込み、村の近くまで再度移動してきていた。

地鎮祭のあとのようなものが気にかかり、その手前に車を停めたのでずいぶんと長い距離を歩くこととなったが、安全に越したことはないと廉太郎が主張したため夜の林をライトも極力つけずに行くことになった。そして、暗く静まった村の様子をしばらく観察すべく、距離をとった森の中に潜伏していたのである。

「なんか動きはあった？」

司の問いに、腕組みしていた口論義は自分の下で体育座りしているサワ八を指差す。

「田淵神社来るする人と、供え物祭壇行くする人とに分かれてるヨ
」

「サワ八早く眼鏡返せ」

去り際にレンズを置いてきたらしく、片目を閉じて顔をしかめるサワ八は両手で作った遠眼鏡をのぞくような格好をしていた。眼鏡がないため周りがあまり見えず不安そうに手を上げ下げする廉太郎は、不用意に踊場の背中を押したせいで蹴られたりしていた。

その間も構えたままのサワ八はむむむつと眉間にしわを寄せて観察を続行しており、遠隔視が捉えた情報をそのまま司たちに話して、現状把握を済ませんとしていた。

「神社来るする人はみんな、手ぶらぶら。祭壇の方はちよとよくわかんないネ、レンズ置くしたのは神社と、あの食堂とこだから」
「だがルートのにはそつちしか行き先はないだろうしね、暗いからわかりづらいが、人影も確かにそちら方面へ移動しているようだよ」
「ってことは、祭壇にはまたお供えをするってことかしらね……？」
「んー、んー？ えとネ、食堂前通るする人は手ぶらとちがうけどね、紙袋とか持ってて……空っぽ？ 風吹いただけでゆらゆら」
「空の袋？ 軽いなにかが入っているわけではないのかい？」
「そこまでわかんないヨ。ワタシ視力二・〇だけど透視むりだモノ」
「いまの俺なんざ〇・〇以下だからなんも見えんぜ」

わいわいと話しあいながら観察を続ける。まだ半分寝ぼけている司は話半分に聞き流しながら自分も村の方を眺め、どうやら？ 歪みやダリなどは視えないらしいことにほっとする。

「みんな目的はなんなんだろうね」

「さてね。ともかくにも人の移動が少なくなってきたら頃合いだ。もうしばし待って、それから移動するでしょう」

「どっちの方へ行くんですか？」

「三人ずつで二手に分かれよう。見つかると即時締めだされる可能性が高いし、慎重に行動するにあたり大人数では目立ちすぎるといふものだしね」

「じゃいくわよ。ぐーとつぱーでー、あーわーせつ」「せつ」「もっかい」「せつ」「もっかい」

グーとパーで振り分ける例のじゃんけんを繰り返し、司は小野と廉太郎と共に神社へ向かうこととなった。残りの三人はサワハのレズで随時進行方向を視ながら、注意していくと言つて祭壇の方へ向かった。口論義と別行動になったことについて思うところあるらしい廉太郎はしばし彼らのあとを見送っていたが、やがてかぶりを振るとスペア眼鏡を取り出し、先頭を率先して歩き出した。

「俺たちも行こうぜ」

廉太郎にうながされて、うなずいた司は森から出ると田畑を横切るあぜ道を歩き出す。背の高い雑草に身を屈めて隠れながらの道のはけつして容易いものではなかったが、小野と廉太郎が敏感に人の気配を察して見つからないルートを選択してくれたため、不都合な事態が生じることもなくすんなり進むことができた。

とはいえ、スムーズだとしても暗がりの中を人目につかないよう迂回したり立ち止まったりいろいろと気を張り続けることには集中力と根気が必要とされる。距離にすればさほどでもない、一昨日は小野と談笑しつつ歩んだ道であるはずなのに、目的と状況の違いが足を動かさにくくする。

頭の先だけ草むらからのぞかせて、辺りをうかがいつつ少しずつ道を辿っていき、やっと司たちは橋脚の下に到着した。あとは河を越えて対岸に渡れば、坂を登って滝の前を通り神社へ行ける。

「もう少しですよ、司さん」

「わかってるよ。……ていうか、なんでこっちにだけ言うの？」

「息を切らしてらっしゃるので」

「小野と廉太郎さんはなんで、余裕そうなの……」

「足腰鍛えてますし。特に廉太郎さんは介者剣術の修行もしてましたから、腰を落として重心低く歩くのもお手の物です」

どのような剣術なのか司は理解していなかったが、適当に相槌だけ打って膝に手をつき、呼吸を整えるよう意識しながら頭上の橋げたを見た。ぱたぱたと駆ける音がして、上を誰かが歩いていることを知った。

「上は村人の往来が激しくて通行出来たもんじゃないな」

司の視線を追った廉太郎が結論付け、三人は針路を上ではなく直進、河の中へ採る。小野も司も一旦川浪に戻った際にジャージに着替えてきており、その他のメンバーも動きやすい服装にしていたため浅い河を進む程度ならば問題はなさそうであった。

「でも河は急に深くなることありますよ」

「流れの勢いと岸边での渦の巻き方と周りと比べて色が濃いとことか見てりやある程度予想はつく、俺の後ろついてこい」

野生の勘に近いものへ頼りきった発言をしながら、廉太郎は甚平の裾をまくって静かに水の底へ足を下ろした。続いて小野も短パンの裾をめくり、殿を司が務めた。しばらく進んでも司の膝上五センチ

手以上の深さにはならないようで、廉太郎の読みに感謝する。

だが勢いある流れと藻の生えた川底に足をとられないようにすることもそれはそれで集中力の必要な作業で、先ほどまでの疲労が抜けきらない司は足が重たくなっていた。

そして集中力というのはどれほど意識しても切れてしまう瞬間が訪れるもので、もたついた足が先に出した足に引つ掛かるという平凡なミスのため、司はつんのめって倒れそうになった。

「っつ」

支えたのはとっさに腕を背後へ出した小野で、自分よりいくらか重いはずの司を安定した重心によりしつかり踏ん張った下腿で押えこみ、ぐらついた姿勢を元に戻してくれた。

「あ、ありがとう」

「司さん、やはり昼にダリと出遭った時のダメージを引きずっているのでは」

「そんなことないよ。少しもつれただけだから」

心配する小野の表情を片手をあげて制し、ざぶざぶと先を急ぐ。

少し立ち止まっていた廉太郎も歩き出した司の様子を見て進行を再開し、対岸につくと濡れた足をハンカチでぬぐって靴を履き直した。

「さつて。ここからは山ん中通り抜けていくぞ」

滝の前へ続く坂の脇にある林を指差し、廉太郎は茂みへ潜り込んでいった。横を見れば橋の上を通って坂を登っていく人の列がとぎれとぎれに連なっていて、街灯の白い光の下にて照らされた彼らの表情が奇妙に虚ろで、おぼろげに闇に溶けそうなものであることが視認できた。

「なにやってるんだろ」

「あんま嬉しいもんじゃなさそうってのは確かだな」

林の中を、人の列に並行していく。暗い色彩の服装にしたためそう簡単にバレるとは思えなかったが、ゆっくり移動し神社の拝殿が見えるあたりまで這うように動いた。すると拝殿の方にはなぜか人がほとんどおらず、皆一様に奥の枝社を目指していることが見てとれた。

「拝殿を左に大きく回り込んで、神代さんの家の傍を通って枝社へ行きましょう」

「うん」

こそこそと相談を終えて林をさらに分け入って進み、拝殿の回廊に並行するように裏へ回り込む。本殿の脇を抜けて枝社へ向かおうと、茂みより顔を出した司だが、廉太郎に首根をひつつかまれていきなり後ろへ引っ張られた。息が詰まって咳こみそうになるが口も掌で塞がれ、ごぶごぶとくぐもった音が小さく漏れる。涙目で顔をあげると、本殿近くの神楽舞台に、神代があがってきたところだった。

「……あれか？ お前らが言ってた巫女ってのは」

「そう、だけど。なんか」

「なにやら、雰囲気違いますね」

舞台にあがり、傍から見ているだけでも神聖さを感じられる要素が整ったからだろうか。静謐な空気の中でたえずむ神代は、先日会った時のような気さくな印象は一切失せており、ただただ人間味を薄めて場の一部と化そうとしているがごとき無機質さを振りまいて

いた。

司たちとは舞台を介して対称の位置を通る、枝社へ向かう途中の人々も、その不気味な印象に彩られた神代を盗み見ては身震いして奥へと去っていく。やがて観客もいない中で神代はとん、と一歩軽く踏み出し、その場で舞をはじめ。

音はない。鼓も笛も、音色を奏でるものは一切ない。本殿の奥に梓弓と思しきものを弾く巫女の影こそ一瞬見えたものの、すぐに扉が閉ざされた。

そのあとは無音の世界で神代の歩調だけが音なき律動を刻んでいた。奥へ進まんとしていた司たちも、思わず呆け見惚れる。けして躍動的ではないゆったりとした動きの中に秘められた力強さと、荘厳な雰囲気とに気圧されてしまったかもしれない。

「舞、か。いつたいこりやどついう儀式なんだろうな」

「わかりません。が、なんだか、ざわざわします」

寒いかのように腕をこする小野は、自分でもその動作の意味がわからない様子で神楽と思しき舞を食い入る目で見つめる。

「肌にスチロールでもこすれているような……まとわりつくような……重苦しい」

口にした途端に小野は身を固める。寒風が横切ったようなその反応に一拍遅れて、司の肌にもざらついたなにかで撫でられる感触が広がる。たまらずうつむいて自らの身体を抱きしめると、次いで草いきれに塩素系洗剤の臭いを混ぜ込んだような悪臭が鼻につき、第六感の昂りが収まるまで動けなくなる。

顔をあげると、果たして。？歪み？やダリこそいなかっただが、司から見える神代の横顔の向こうから、同じく横顔の大きな狐が、ずるりと鼻先を押しだすようにして姿を現す。黄色と茶色のまだ

ら模様が全身を覆う狐はがっしりした体格で、ゴールデンレトリバーの成犬くらいはありそうだ、と司は思った。

気付けば舞は終わっていた。どれほどの間見ていたのかはわからないが、それが終わったことを契機として、あの狐が出現したのだということはわかった。神代の周りを回る狐は、人々には視えていないらしい。ただ、あの舞がやはり重要なものだったのか、動きを止めた神代を見る人々の目が変わっていた。

動揺と切望を浮かべていた顔が、諦念と絶望の色に塗り替えられている。

「では」

口をほとんど動かさずに発した神代の低い声の後に、人々の中に震えが起こる。そして人々の内側に囲われていた一人が、舞台の方へ重たい足取りで近づく。

神代はその青年を見ることなく、踵を返して本殿の前へ移動する。扉に開けられた、投函口のようにわずかな隙間から、なにかを受取る。

「ではこれより儀を執り行う」

すい、と捧げ持つように両腕の上に載せられたのは、稲穂だった。葉が枯れ全体にひどい色合いのものだったが、見間違えることはない。

舞台にあげられた青年は身震いしながら神代に近づく。一步接近する度に狐が青年の方を向き、ためつすがめつ見ていると司には感じられた。

「諸手を」

命じられ、青年は両手を差し出す。神代はそこへ捧げ持っていた稲穂を載せ、一步退いた。青年はしどろもどろになりながらもその稲穂を胸の前で、花束のように構えた。瞳には怯えがこぼれ落ちそうなほど溜めこまれ、わなわなと震える腕は稲穂の重さにすら耐えきれないように思われた。

「狐を」

淡々と、神代は続ける。

青年の目が見開かれ、恐怖の下に行き着き、行き過ぎてしまった表情が広がる。

死の直前の顔。あの加良部のように、最期の時が来たことに安堵してしまった表情。

捧げ持った稲穂が少し、持ち上げられた瞬間に、狐の姿が掻き消えた。

「狐よ」

膝を屈した青年は、すぐさまその他の神職の格好をした二人に両脇を押えられ、舞台から引きずりおろされて奥の枝社へ連れて行かれる。人々の間に広がる、悲嘆と絶望の感情を見ていられなかったのか、小野が目を逸らした。

舞台の上で冷徹にそれを見据えていた神代は、本殿へ向き直り、青年が落とした稲穂を再び扉の向こうへ渡していた。

「……おいマルドメ、小野。なにが起こったってんだ」

ただ一人、何も視ることも感じることもできない廉太郎に問われて、司は忌々しげに答えた。

「憑き物筋って奴だと思う」

「つきもの？」

「小野は、今どついう風に感じた？」

うつむいてしまった小野に司が問うと、口元を押えて吐きそうな顔をした小野は青ざめた唇をのぞかせて、自分の感じたものを正確に伝えようとした。

「どつ、と言われましても。とてもいやな、嫌な空気が神代さんの周りに集まって……それが行き場をあの男の人に定めたように、ぱつと入り込んだような」

「だいたい合ってる。こつちに視えたのは、狐だった。それがあの男の人に取り憑いたんだよ」

「とり憑くつたつて、狐なんざどつから持ってきたんだよ。犬神使いの時みたく、殺して霊を連れてきたつてののか？」

「ううん、そんな必要ないんだよ、憑き物筋ならね。憑き物筋つていうのは、一種の祟られてる人たちで、常になにかを宿してるんだから……」

猫を殺さば七代祟る、などという伝承のように。祟られたり、自ら術を成して憑けるなどして霊を宿した人間の中で、特に強く何代にもわたり呪われ続ける血筋を、憑き物筋と呼ぶ。彼らの中で憑依した霊の使役に特化すれば呪術師となることもあり得るが、そうした事例は極めて稀である。

だが恐れられた。その理由は、祟る霊は本質的に無差別に周囲へ霊障を振りまくため、近づいただけの者にも危害を加えられる恐れがあったからだ。そのため村落などの小規模社会においては様々な迫害を受け、居場所を失くすことも多くあったという。

もちろん中には単なる妬み嫉みから有りもしないそうした噂を流し、自分の嫌いな人間を追いやるなどという話もあったそうだが。

神代のそれは違えようもなく本物、しかも呪術師と呼べる域にまで到達した代物と思われた。

「儀式つて、人を祟ることだったんですか？」

「今の光景のみから考えるとそうなるよね。ただ、理由が判然としない」

「理由もクソも、これ見りゃわかんだろ。村人を呪いで威圧して、恐怖政治やってるとしか思えんぜ」

反吐が出る、と言う廉太郎の苦い顔に同調してか、司も曇った表情で考える。

日付が変わったので昨日、ということになるあの時。ダリと？歪み？の出現に際して神代は山籠りをして身を清めていたという。ならば今現在行使された憑依の術とダリ・歪みは無関係なのだろうか？しかしこの近辺では、他に術を行使するような何かがある様子は無い。そも、そんなものがあれば村人たちもやられ通しではないだろう。

ではなにが歪みを招いたのか、と考え始めて、廉太郎に肩を叩かれる。周囲を警戒して見回していた彼は、司の耳元で真剣な声音で囁いた。

「しばらく待機して、人がひいたら逃げるぞ。とにもかくにもとり憑くとかなんとか、そういうのは危ねえしな。俺と小野は霊体に関しちゃ門外漢だし、マルドメ、お前は憑依とか、されやすいんだろ？」

「今は他に狐も見えないからしばらくは大丈夫だと思うけど……」

「なににせよただ単に閉鎖的な儀式、つてわけじゃなかったのだけ？ 呪術師が出てきて宗教色があるとなりゃ、お前や小野や会長が黙ってられないのも仕方ないけどよ」

「宗教色？」

反射的に尋ねると、廉太郎は口を滑らせたという顔をして司から目を背け、「いろいろあるんだよ」と答えた。司と小野は少なくとも宗教に関わりのあるものを追っているわけではないので、残るのは口論義しかないのだが

「会長？」

「だから、いろいろあるつつつたる。突っ込んで聞くなよ野暮だな
お前、」

「ちがう」

司は真正面を見つめ、ぼつりと漏らしてかぶりを振った。

小野が司の視線を追い、また彼女も驚愕に目を開く。

「あの……向こうの、村人の中連れていかれてるの……会長ではありませんか？」

「なんだと!？」

身を乗り出した廉太郎が司の頭越しに舞台の向こうを見やる。そこにいたのは、屈強そうな男に手首を掴まれ歩かされている、口論義、踊場、サワハの三人だった。

「つ、つかまったの？」

「みたいですけど……いくら排他的な行事とはいえ、あそこまで」

よたよたと、捻り上げられた手首の痛みを逃がすようにしながら歩く三人。彼らを見る周囲の目は冷ややかで、先ほどまでの恐れや痛ましさは微塵も感じられない。嗜虐的な笑みを浮かべている者さえいて、司の方が怖気を感じた。

「やばいよ、いったいどこに連れてかれるのか、こっからじゃよく見えない」

「……お前ら、先逃げとけ」

心配のあまり立ち上がりそうになった司を押しこんで、靴ひもを結び直している廉太郎は冷静に告げた。きよとんとして膝を地面につけ直した司は、廉太郎の肩を揺さぶって問う。

「逃げるって、廉太郎さんは？」

「止めてくる。話を通じねえなら殴ってでも、な。だがマルドメは戦力にならんし、それなら小野に守ってもらいながら逃げる方がいい。河くだって走って川浪まで行ってくれ。さすがに隣町の連中なら、助けてくれるだろうよ」

「……わかった。でも、勝算あんの」

「現状ならなんとかな。一番強そうなの倒せばかかってくる奴はそんなにいないだろ」

派手にやってくるから、注意引いてる間に行け、と言い残して廉太郎は茂みから飛び出す。

土足で神楽舞台にあがり、踏み抜きそうな勢いで床板を蹴り飛ばして、三人を連れていこうとしていた男たちの前に躍り出た。

「おいテメエら、俺の大事な人になにしてやがる？」

周囲にどよめきが走った。お構いなしに廉太郎は語り続け、もし害意あつての行動なら警察に連絡した上で俺もテメエらに敵意を向ける、だのと人差し指を突きつけた。だが男たちは廉太郎の演説にも驚くことなく、静かに口論義たちから手を離すと、三人で廉太郎の前に進み出た。携帯電話を握っていた廉太郎は、一瞬眉をひそめたがすぐに画面に目を戻した。

「……………なんだ。無傷で返すから許してくれっただけ？　もう遅いのだぜ、警察に電話……………」

そして固まる。どうしたのかと思っただけで司は目を凝らす。さすがにこれだけ距離があると画面が見えない。しかし小野は見えたのか。なんなのか、あ、と嫌な予感しかしない低い一音を司の耳に届かせた。

「……………圏外じゃねえか」

廉太郎の寂しげな言葉で、司も思いだした。

昼に古川と茶を呑んでいた際に、話に興味が無いため携帯電話をいじりはじめたサワハはすぐに空中に愛機を投げだし「圏外」とつぶやいていたのだ……………。

「圏外じゃねえか！」

二度目は叫んで、廉太郎は携帯電話を勢いよく折り畳むとポケットにしまう。口論義たちにも失望の色が広がった。進み出てきた体格の良い三人の男は表情を変えることなく、それぞれに構えをとり、廉太郎に近づいてくる。

「んだよ、結局闘るしかないのかよ。ああ面倒くせえ」

廉太郎も眼鏡を外すと左半身になり、左手を顔の前より少し下げた構えでステップを踏み構えているが、三人の男は動かないのを幸いとばかりに三角形を模り、廉太郎を中心に囲む。互い言葉は無く、もはや穏便にことが済まないことは明白だった。

すぐさま一人目が飛びかかり左の拳を打ちますが、決着もまた、

すぐだった。

素早く横に動いた廉太郎の左掌底が拳の軌道をずらし、さらに勢いのままに繰り出された廉太郎の肘打ちが喉に当たって倒れ込む。ほぼ同時に襲いかかっていたもう一人も、仕掛けたタツクルの勢いを利用され、カウンターの膝を顔面にかぶせられる。加えて後頭部に、拳の小指付け根から手首までの肉厚な部分を用いた打撃？拳槌？を受けて後ろに吹き飛ばされ、うろついていた村人の中へ突っ込んだ。どよめきに悲鳴が混じった。

「……で、なんだな。やっぱ最後の一人は、あんたかよ」

つまらなさそうに片づけた二人から視界を切り、構えをとり直しながら残る一人へ向き直った廉太郎は、犬歯を剥いて身を強張らせた。

残る一人は、ここまでとは格が違うらしい。ちょうど舞台の影になって司と小野からは見えなかったが、廉太郎から距離をとるように相手が円を描いて動いたため、姿が視認できた。

昼とは違い簡素な袴姿になった古川が、構えもとらずに廉太郎と相対している。

「だから 来るなと言ったのだ」

「来るなと言われりや来なくなるし、それ以外にもいろいろ事情があるんだよ」

「我々にも事情はある。故にこそ放っておいていただきたいと願ったのだが、こうまで関わることとなってしまっただけは最早そのまま帰すわけにはいくまい」

「面倒くせえなあ」

「戦いは望むところではなかったのかね」

「俺にとっちや戦闘は趣味なんだよ。必要に駆られてやるもんじゃ
ない」

「ほつ」

納得したのか、会話を放棄したのか。古川は吐く息ひとつで呼吸を整えると、右半身に構えて、左手側をあまり廉太郎に見せない構えをとった。ボクシングに近い構えだった廉太郎と比べてみると、空手などを思わせる構えである。

「あなた、剣を嗜んでるとか言ってたろ。素手でいいのか」

「戯けめ。神聖な社の中へこれ以上の血穢を持ちこんでなるものか」

周囲の人波が、戦いの氣勢を感じとったのか一歩ひく。

皆の目が一点に集中している、今が好機と判じた司は小野の肩を引いて茂みから抜け出そうとする、が、動けない。動かない。遠くを見ていたために、近くをすっかり見落としていた。舞台から降りて茂みに近付いてきていた神代が、斜め前方の木の陰から、明らかに司たちの方を見ている。

ただ見ているだけか。否、廉太郎が走り出してきた方向だということを見ていたとするなら 思考の切り替えは、小野の方が速かつたらしい。大声を出されるなどして他の人に知られる、その前に低く身を構えたまま跳躍するように三步で間を詰めた小野は、内腿に引っかけられるように右脚で内回し蹴りを喰らわせると、痛みには顔をしかめて動きが鈍った神代の右肩を、左掌底で突き飛ばす。

先の内回し蹴りで神代の左足には小野の右足が引っかけたため、踏ん張りが利かなくなった彼女はとうとう倒れる。その間も押し込み続けていた左掌底と地面に挟まれた肩は、脱臼したらしき音を立てた。激痛からの悲鳴をあげられないよう、右の前腕部を口元に押し付け神代を黙らせた小野はそのまま右腕に体重を預けて左手を振り上げ、拳槌で鳩尾へ一撃を打ちこむ。

急所への攻撃で今度こそ神代は失神し、がくりと首がうなだれた。

「……容赦ないね、小野」

「人を傷つけることには、慣れてますから」

「慣れたらダメなことだよ」

「慣れなきゃ復讐なんてできないでしょう」

ぼそりと、本音としか思えない言葉を投げつけて、小野は神代を茂みに引つ張つてろうとしていた。司も手伝って足の方を持ち、舞台の方に背を向けながらちらと小野の顔をうかがう。慣れた、という割には沈痛な面持ちだった。だが指摘すると、「殴った手が痛かったです」だけだと返された。

「さあ、今のうちです」

「……今とは、どの今かね」

問う声が、司の背後から轟いた。

小野の顔に影が差し、足音が近づく。

まさか、と思い振り向こうとした時には、捻り上げられた手首の痛みが悲鳴をあげる以外の行動選択を許さない。純粹な握力による力技で、司の身体は持ち上げられそうになっていた。

「あつづ、いつてえええ！ く、そつ！ れ、廉太郎、さん、は、」

確認しても仕方ないことを、それでも司は口に出す。正面の小野には、司の問いに対する答えが得られていたのだろう。同時にそこから、自分が戦うしかないという未来が、見えていた。

瞬時に茂みから出ると、司の右手首をつかんでいるために相手が腕を使えない右側へ回り込む。そしてガラ空きの間、背面から腎臓めがけての左回し蹴りを、爪先を立てた状態で放つ。先ほどに引き続き、遠慮も良心の呵責も感じられない急所狙いの一撃だった。

だが外れる。正確には、うまく打てなかった。片腕だけで司を持

ち上げるように盾にされたため、軌道をずらさざるを得なかったのだ。単純な臂力の強大さに、驚き連撃の機を逸する。瞬間。両腕を縮めて防ぎはしたが、それでも臓腑へ響く、撞木のごとく重たい左中段蹴りをもらってしまい、小野は吹っ飛んで地面を転がった。起き上がることは、できない。

「……小野っ！　おい、小野っ！　しっかり！」

呼びかけても返事は無い。呼吸を整えるのに必死なのか、肩を震わせて腹部を押えている。怒りに駆られた司は反撃すべく小刀を抜こうとしたが、右のポケットに入っているため左手では抜きづらい。身をよじるだけで右手首に激痛が走り、反撃に転じることはできなかった。

「……騒ぎすぎだな。そして、よくも神代を傷つけてくれたものだ、儀も台無しだ。お前たち、代償は、高くつくぞ」

叫ぶ司の声より遙かに小さいが気迫に満ち満ちた声で恫喝し、古川は転がる小野、次に司を睨みつけた。齒噛みして真っ向からその視線を受ける司だが、為す術も無い。

地面に押えこまれ、ぜえぜえと肩で息をしている小野と、その向こうで抱え起こされて今まさに運ばれようとしている廉太郎のぐったりした様子を見て、自分たちの苦境を思い知らされた。

二十題目 「奇祭の中で」と小野が怯えた（後書き）

次回、穂波田村の合宿因習編完結。

四章は夏休みの海おくり編です。

年内完結は無理そうか……

二十一 題目 「呪いの残響」と廉太郎が歯噛みする（前書き）

三章 終幕

三万文字少々です長いです
戦闘シーン長し！

二十一 題目 「呪いの残響」と廉太郎が齒噛みする

#

枝社の裏手にあつた岩牢に押し込まれた司たちは、閉じた鉄柵の向こうに見える扉が閉まる音と共に、見通せないわけではないがかなり深い闇の中へ落とされた。揺らぐ松明の焰に照らされて、司は五人の顔を見比べた。小野は蹴られた腹部をさすっていたが、その他のメンバーには大きなダメージはないらしい。

ただ、廉太郎は完全に気絶させられていた。開いた口の端に血がついていたので顔を殴られたのだろうが、とどめを刺されたのはこめかみなどの急所だろうと小野が推測を語る。

「会長たち、なんで捕まったの」

囚われの身となった以上どうしようもなく、司は自分の横で鉄柵に背をあずけていた彼女に問う。口論義は捻りあげられていた手首を押えながら、司の方を見ずに答えた。

「祭壇の傍に近付いて、なにが行われてるのか探ろうとしたのよ。そしたら急に村人がパニックに陥って、慌てふためいているんなとこを走りまわってね。その途中で隠れてたあたしらを発見して、なんだか知らないけど大騒ぎ。逃げ足には自信あつただけど、あの荒地じゃうまいこと走れなくてつまずいたとこで捕獲、終了」

「だが祭壇に供物などひとつも見えなかつたよ。まっさらな白い段のみが残っていた」

「人もはけてたしネ。サワハたち運悪いー」

言って、サワハはレンズを使う体勢をとった。眉根を寄せて閉じ

た扉の方を見やり、鋭い視線は扉を射抜いて向こうを透かし見ているのではないかと思わせる。

「引きずられてるの途中で、神社周り何ヶ所かレンズ置くしといたよ。これで外はばっちり視えるのコト、でもどーにか脱出するの方法考えるしないと」

「現状、外はどうなっているんだい？」

「んんーんー、さっきとあんま変わんないノ。古川サンと神主サン、ぶつぶつなにか話すを続けてるケド」

「儀式を続行するか否か、って話し合いじゃないかな」

「そーネ、たぶんそんな感じ。うう、読唇術覚えるしとけばよかたヨー」

なににせよ外の状況は硬直しているということがわかり、時間にもまだ余裕があることに気付いた司たちは、ここから脱出する方法について模索しはじめる。

牢屋の中にあつたのは、椅子が一脚とトイレ、洗面台のみ。司の小刀や全員の携帯電話、その他踊場の持っていたペン型スタンガンや催涙スプレーや十徳ナイフも取り上げられてしまっており、檻の外、松明の下に鍵と共に放置されていた。

「南京錠のようだね」

「ヘアピンは取られなかったけど、誰か錠開けできる奴いる？」

「無理無理」

口論義の掲げたヘアピンに食いつく者は一人もいなかった。仕方なさそうに「やるだけやってみましようか」と口論義は自分で鍵穴に二本のヘアピンの先を差し込み、かちやかちやと弄りはじめる。他にやれることもないので、司たちは岩壁のどこかに穴がないかなどを探し始め、それぞれ作業に没頭するためか牢屋の中には足音と

鍵を弄る音しかしなくなる。

ふと奥の方から唸り声がして、司はそちらを見やる。薄闇の向こうへ目を凝らしてやると、どうやらそこにも牢屋があるようだった。鉄格子の影がうつすらと見えて、背を丸めた人影もそこに落ちていた。

「あ。他の人もいるんだ。おーい、すいませ……って、さっきのあの人が」

できれば捕まっている者同士協力したいと思っていたが、それは叶わないようだった。呼びかけている司の方へ一度だけ目をやって、また手元に視線を戻した口論義はさほど興味なさげに問う。

「なに、あの人」

「さっき会長たちが来る前に、儀式のせいで狐にとり憑かれた人」
「とり憑く、って」

「犬神みたいに霊を使役して憑依させる呪術師が、ここの巫女だったんだよ。憑き物筋って奴」

「狐憑きの家系かい。しかし、そうした異能の一族というのは、裏で力を握ることはあれど表の儀式などに関わる事例は稀だったと記憶しているけれども」

「あるところにはあるみたいだね」

「ふむ。なるほど。呪術師が表立つ、か」

「……表立とうがなんだろうが、現実には現実でしょ」

踊場と話す司から意識も外して、明らかにトーンが下がった口論義の背中には、なにやら不快そうな感情が垣間見えた。そして彼女の背を見つめる踊場の目には憂愁の念が感じられたが、司に見られていると気付くとすぐに心の奥底に感情を引っ込め、なんでもないうように取り繕った。

しかし廉太郎の話から、口論義が宗教に関わるものについて不快感を抱くらしいことに司も思い当たってしまった。

そして口論義が不安定になったのは今この時この事態だけが原因というわけではなく、先月のフォッグマン事件のことも関わっていたはずで。あの事件には宗教色のある事例はなかったというのに、なにが彼女を追い詰めたのか。司は考えたが、把握できたところで無意味だと思つてすぐにやめた。

「それにしても、みんなあんまり怯えたりしないんだね」

黙り込むと岩壁からの圧迫感に耐えられなくなりそうので、多少は会話を続けたいと望んだ司は話題を振ってみる。濡れた岩壁の亀裂をなぞっていた小野は、端正な横顔を見せながらも司の方は見ずに気の無い返事をした。

「司さんもあまり怯えたりしていないじゃないですか」

「慣れてるから」

そんなつもりはなかったが、先ほどの小野のセリフをまぜっかえすような形になってしまったため、むっとしたらしい小野は肩をぴくりと震わせて完全に司に背を向けた。セリフを間違えたと思つて頭を掻きながらも、牢に慣れていることは事実であつたため撤回のしようもない。

「おう、サワハたちも危ない状況慣れてるヨ」

「慣れてると言つても冬の一件だけだけれどね。あの時もまあ、大変だった」

空笑いを浮かべる踊場。たびたび話にあがる冬の一件というのがどういふものか未だ知らない司は、話の環に入れないことに不満を

覚えた。するとその表情を読み取ったのか、サワハが軽く説明をいれた。

「冬の一件というのはネ、サワハたち巻き込まれたおつきな事件。妙な大学サークルやつてるの奴らが、ぼつちども集めて心理学で動き操るして、犯罪起こさせたのトトよ」

「正確には行動分析学と社会心理学による限定的な働きかけだったがね。簡単のところから言うと、訪問販売や詐欺で多用されるフツトインザドア、小さな要請などを用いていた」

フェアリー、と思い浮かんだがすぐに要請だと認識し直して、司は聞き覚えのある話だと思いだした。

「すぐクリアできる簡単な要請をしてから本題の要請をすると、断られにくいって奴だっけ」

「そう。例えるなら部費もいらさないから名前だけ貸してほしい、と部員を集めて、後に部費ではないが備品代に二百円の融資を頼む、などといった形式だね。無論ここまで露骨であるとさすがに拒否されるだろうが、こつした会話技法をうまくやって少しずつでも多数の人間を動かせれば、それだけで大きな力になる」

冬の一件は、ボランティアサークルだと謳い文句を掲げたある大学生五人が名義だけ借りた十数人の人間と繋がりを持ち、彼らに噂を流した。最初は、サークルの一員だったある女性の実家たるそれなりに名の知れた企業が危ない、という程度のものだった。

だがそこから飛躍させて五人は親会社の危険にまで噂の規模を拡大させ、就職難への危機感を抱かせる。そしてボランティア経験は就職に有利だという釣り餌を浮かべ、まんまと人員を増やすことに成功した。この段階で最初の十数人から人数はだいぶ増えて三十人を超えて、人員が集まったことからいよいよ五人は本題に入る。

学んだ知識を悪用し、配下の人間を得たことから、徐々に行動はボランテニアから外れたものとなっていき、社会への敵対行為となつていった。そして大人数の悪い気が溜まつた場が偶然にも鬼門、丑寅の方角であつたために増幅された思念が悪いものを呼び、事件の真相に気付いたきてれつ研、当時の会長だつた赤馬を含めた五人が駆けつけた時には思考がマイナスへと振りきつた人々が仲間以外への敵対意識を持つており、倉庫に監禁されることとなつた。

「なんとか天窓から抜け出した時には、サークルの集会所は集団幻覚に苛まれる人々から実際に憑依されて暴れる人間までおり、阿鼻叫喚の地獄絵図となつていたよ。実際に憑依された人々には赤馬さんがお被いのような術をかけ、残りの襲いかかつてくる連中はあとから助けに来た廉太郎が殴り倒した」

そのような経験があるゆえに、今こうして囚われていることについても冷静な対応ができるのだという。壮絶な経験に、司は感嘆よりも呆れが大きい溜め息をついた。

「よくそんな危ないところに関わる気になつたもんだよね……」

「今回の潜入について異を唱えなかつた司さんに言われたくありませんね」

「それはまあ、そうだけど」

「学んだことはひとつ。慌てても仕方ない、ということさ。今回は廉太郎もへたばつているし赤馬さんの助けはまず期待できない状況だが、だからといって悲観的になつたところで意味は無い」

「……悪いわね、みんな」

踊場の言葉尻にかぶせるように、口論義がぼそりと言つた。いつの間にか手を止めていた彼女は、大きく肩で息をひとつすると、向かいにある鉄格子の先にいる青年の光る瞳の方へ顔をあげてまた肩

を上下させた。

「毎度のことになっちゃったけど、また巻き込んだわ。ごめん」

「気に病むな。きみの望むことを実現すべく、僕は傍にいようと
思ったのだから」

「べつに、協力関係なんだから気にすることないよ」

声をかけて司がじっと口論義の背を見ていると、その視線に気づいたのが彼女は向き直って司と相對した。謝るわりにはずいぶんと遠い目に見えたが、恐らくは自分ではない誰かを見ている、そう思わせる目だった。それもそれで謝る際には不適切な顔だろうとは思ったが、無意識のことであるうから司も何も言わない。

「みんなの厚意に甘えてるように思えるのよね」

「全員そうなんじゃないの。持ちつ持たれつってやつ」

「そうなのかな……そうなのかしら」

うやむやなまま、形だけでも迷いを振り切ったらしい口論義は、また南京錠に向きあうとかちゃ、かちゃ、と音を立てた。室内に他に音は無く、あらかた壁も調べ終わってしまったため司たちにはもう為す術も無い。檻を壊せないかと司は椅子を叩きつけてみたが、びくともしない上にうるさいからやめると口論義に叱られた。壊れた椅子を投げだすと、司はへたりこむ。

下をくぐれないかとも考えたのか、サワハは地面を椅子の破片でほじくりながらつぶやく。

「これからワタシたちどーなるだろネ」

「まずいことになるのは確実だろう。僕らはこの村のシステムに干渉してしまったのだから」

「システム？　なんかわかったの、踊場さん」

「……ああ、先ほど祭壇を見に行つて、きみから狐憑きの話を聞いて、大方この村の仕組みはわかつた」

岩壁にもたれて座り込んだ踊場は、ゆらゆらと頼りない光を投げかける松明を一瞥してから、重く、ゆっくりと息を吐いた。踊場は村についての推測を語り始め、あとは鍵を弄る硬質な音だけが耳に残る。

「あの祭壇には多くの人が押し掛けていたが、持ち寄つた紙袋がからっぽであるらしい、ということは先ほど別行動をとる前にもサワ八君から聞いていただろう？　そこで引つかつたのがまず一点。そしてあの祭壇のあつた古川の土地、ここが稻荷を祀る意味、ならびに枝社というものの役割、それらを材料に考えると　この村は、かつて食糧難だつたと推察される」

「食糧難、ですか」
「昔の話だろうがね。相当な大飢饉に見舞われたことがあつたのだらうと思う」

「結果、ダリのような飢餓の亡霊が多く存在するようになったと？」
「おそらく。そしてその苦境を脱すべく、人々は一層豊穡の神、宇迦之御魂^{うかのみたま}へ祈りを捧ぐようになった。だが神道の教義では神には二面性を認めており、そのうちの穏やかな方^{にほやかな}は和魂、恵みなどの在り様を表すが、もう一方の荒魂^{あらいたま}という面においては逆に災いを表すとしている。人の意思を汲んでくれるばかりではないという、極めて厳しい考えを秘めた教義であるが、詳しく語る暇も無いね。とにかく、災い為す面も認められているということだ。そして本社で祀る神の荒魂とは、本殿ではなく枝社へ祀ることとなっているのだよ」

枝社。そのワードが、司に神代から聞いた話を想起させた。供物でも食事は、枝社へ多く置くこととしている、ということ。そしてそこへ祀るのは本殿の神とは違い、昔からの神がいるのだと。

司と同じことに思い当たったのか、壁を探っていた小野が踊場に異議を唱えようとしていた。

「ちがう、違いますよ踊場さん。あそこへ祀つてあるのは土着の神様だと神代さんは」

「地主神というものだろう？ 重ね合わせてあるのさ、たぶんね。」

「……サワ八君、外の様子はどうだい？ 特に、すぐその枝社についてだが」

「やしるー？ んと、そうネ……人いるいっぱい。さっきの紙袋持つてて……お供え？」

「やはりか」

一人ごちて、一人納得した様子で踊場はほうと息を吐いた。なにがなんだかわからない司たちは説明を求め、踊場はおもむろに顔をあげると、要望に応じた。

「枝社に祀りし神というのは、ダリだ」

「ダリ……？ だって元をただせば、神じゃなくて人だよな」

「神道は祖霊崇拜の考えも強く持つ。天神信仰などもあるだろう、菅原道真のあれだよ。元より神道は氏子などを大事にし、地域に深く根ざすものだ。長くひと所にあれば、当然祖霊などへも色々考えるところがある。神代とやらの言葉を鵜呑みにするならば、先にあったのは祖霊への恐れからくるダリを鎮めんという信仰で、それが豊穰祈願と混ざった際に豊穰の神の荒魂と重ね合わせて捉えられたのではないかな」

「じゃあ紙袋つて、行きはからっぽでも帰りは祭壇の供物を持ってきて、枝社に供え直すためのものだったんだ」

「あの荒地へ一度供えるプロセスにどういう意味があるのかはわからないけれどね。ただ僕らを見つけた時の反応から察するに、あれも重要な儀式であり他者の介入は喜ばしくないというのはわかる」

「なにも介入はしてないじゃん。見てただけじゃないの」
「いいえ、お腹すかしたサワハが落ちてたまんじゅうを包み開けて食べちゃったから、介入したといえればそうかもしれないわ」

飢餓の亡霊がいるかもしれない場で、しかも本来彼ら亡霊に供えられるべきものに手を出したとなればそれは大変な無礼にあたるというものだ。村人が慌てたというのも納得できる気がして、司は冷たい目でサワハを見た。サワハは不思議そうに後ろを振り返った。司は「あんだだよあんだ」と言いそうになった。

「……つててて、ああだるい、頭ん中ぐるんぐるんしてたのだけ」

と、間の抜けた声を発して、隅に転がって気絶していた廉太郎が目を覚ます。

「無事だったか」

「当たり前だろ。だが首の関節は凝り固まってんぜ、正直そつ首吹っ飛ばされたかと思ったほどの威力だったしな。どついう腕力してやがる、あの古川とかいう奴」

痛みであまり回せないのか、左右に小さく首を振りながら廉太郎は身体を起こした。小野の見立て通り、顔面への一撃の後に急所へ一撃もらったらしく、頭痛でもしているかのように手でこめかみをさすっていた。

「吐き気などはないかい？」

「問題ねえ。完璧にはできなかつたがある程度ダメージを受け流したんでな。で？　ここは牢屋の中ってわけか？」

「そつなるね」

踊場と少し話ただけで状況はだいたい把握したようで、立ち上がった廉太郎は鉄格子へ近付く。口論義の方を見て南京錠を弄る様子に興味は示したが、自分に解錠は無理だと片手を振って辞退した。次いで、松明の方を見て、鍵を発見した。

鉄製の格子の前に立つと、居並ぶ棒のうちの一本を全力で引つ張り、ほんの、ごくごくわずかにだがたわんだことを知ると、にやり、不敵な笑みを浮かべる。

「縦横に走る格子じゃなくてよかった。これならまあ、なんとかなる」

「はい？」

先ほどの司の攻撃で砕けた椅子の足のうち一本を拾い上げると、脱いだ甚平の上着をトイレの水に浸す。そして鉄格子のうち二本に巻き付けるようにして強く縛ると、縛った中にできる輪へ椅子の足を突っ込んだ。

「昔見た映画でこんなことをして、脱出するってのがあった」

そして椅子の足の両端を握り、ぜんまいでも相手取るかのように左へぎりぎりとは回り始めた。結んだ輪の中にあるため、椅子の足にはねじり上げられた甚平が巻き付き、それに引っ張られる形で鉄格子が、ほんの少しずつだが歪みはじめた。

「きぎぎぎ、きつぎぎ、んぐぐ」

休み休みだが渾身の力を込めて回し続けた結果、鉄格子の間にあつた十センチ少々しかない隙間が、徐々に開いていく。起き上がったすぐに古川の腕力について何事か言っていたが、廉太郎の臂力も相当なものだった。

隙間が広がると、結び目を解いて隣の鉄格子に移る。茫然と司たちが見るうち、隙間はもはや穴と呼べるだけのものになっていく。ものの一時間弱で、小柄な小野ならば横ばいに抜けられそうなほどにまで開いた。それでも少々胸の辺りが通りづらそうであったが、廉太郎と口論義に押し込まれて、なんとか抜け出る。

松明の下に投げだしてあった鍵を手に入れると、錠前を外して五人を外へ出した。

「あたしが錠開けに費やした時間はまったくの無駄だったわね」

「次の機会には経験を生かせばいいんじゃないか」

「次なんて無い方がいいわよ」

廉太郎のとんちんかんな返答に苦笑しながら、六人はそつと扉を開け、外へ出る。

ずっとレンズを発動し通しであるサワハから指示を仰いで、薄暗闇の中で村人にバレることなきよう静かに移動する。幸いにも岩牢から出てすぐ左手に林があったため、そこに潜んでまっすぐ進むこととした。しばらく歩いた先に、枝社の後ろ側が見えている。

だが司たちはこの時、かなりシビアなタイミングを制していた。ふと気にかかつて振り返ると、自分たちが先ほど出てきた扉の中へ、数人の村人が入っていくのが見えたのだ。

「どうしたマルドメ」

「やばい、もう脱走がバレた」

言い終わるか否かのうちに、血相変えて飛びだしてきた村人たちが、社の方へ駆け戻っていく。遠くて内容は聞き取れなかったが叫び声があがり、村人たちは騒乱に覆われ始めた。

「どうする？ みんな探し回ってるよ」

「さすがにこの人数を俺と小野だけで切り抜けるのはきついぜ……さっきの作業で両腕とも疲れ切ってるしな、今しばらくは戦力低下中だ」

「わたしも蹴られたせいで少々動きは悪そうです」

「林をこのまま下るのではダメかい？」

「ダメネ。この先行くすると崖つぶち、下の沢まで十メートル以上」となると、下が無理なら……上ね」

司同様に振り返る口論義は、林の先にある山裾を見やる。低い山とはいえ、なんの装備もなしで登ることには若干抵抗があったが、このまま進んで見つからずに社の中を通り抜けるよりは山の中を迂回して川浪を目指す方がまだマシとも言えた。いやいやながらも全員で来た道を引き返し、藪を掻き分けて傾斜のきつい坂道へ踏み込む。

「っと、それにしても人数多いわね」

追っ手も山の中へ逃げることは考慮していたらしく、懐中電灯の明かりがちらほらと行く手を遮るように振りまかれていた。その光の方向と自分たちの針路を見てなにやら考え込んだ廉太郎は、突然先頭を口論義から交代してもらおうと先導し始める。

「こつちだ」

「廉太郎さん道わかるの」

「わからん。だが歩きやすく、人の通った形跡のある道を選ければ、奴らとぶつかる可能性は低くなる」

要はけもの道を歩くということだ。後続の連中もいる状況では足を止めるわけにもいかず、細い枝先やいばらでひっかき傷を作りながらも司たちは少しずつ進んだ。時折振り返ると、社のあった辺り

が明るいため、進行方向も見失わずに済んだ。

今はもう、丑三つ時といったところだろうか。山という人の世界から離れた場に来て、緊張を強いられることで、司は妙に鋭くなった神経が闇の中に人ならぬものを捉えてしまいそうであるだけうつむいて歩いた。小野も第六感になにか感じるところあるのか、時折身をすくませたり妙な反応を見せている。

次第に藪が深くなるにつれて、懐中電灯の光も遠ざかっていく。早く逃げたい気持ちで無闇に早鐘を打つ胸を押えながら、周囲に人の気配がしなくなるまでしっかり気を張り、やがて開けた場所に出ると六人は一息ついた。

「ようやく……ある程度、距離を引き離れたようだね。ここらで、息を整えよう」

「少し休憩にしましょうよ。さすがに、たいして鍛えても無いあたしたちには、トレッキングはちよいときついわ」

うろろるとゆっくり歩いて呼吸を整えつつ、踊場と口論義は口ぐちに休憩の必要性を説いた。廉太郎と小野は問題なく歩けそうであったが、司もばててしまえばらく歩きたくないと思っていた。なので、横のサワハを休憩組に引き入れようとする。

「サワハさんも、休みたいでしょ？」

「あは、レントロと一緒にされるはたままないネ。ワタシずっと能力使ってるいうのに」

閉じた片目がウインクのように見える表情のまま口をとがらせ、サワハは近くの木にもたれた。少し移動するたびにレンズを設置して、常に後ろからの追っ手がいないかを確認してくれていたのだ。その甲斐あって、今の六人の無事があると言ってもいいかもしれぬ。

「サワハ、追っ手はどうだ」

「まだ全然。だいぶ前に置いたレンズも映す人影ないよ。ちよつと休むした方が、あとの道のりちようどよくする力モ」

「んじゃ、休憩しよう。少し休んだら再出発だ」

均された地面の歩きやすさに感じ入りながら、司は疲れが溜まらないようにうろろとその辺りを回った。小野や廉太郎も少しだけ気を緩めて休息に入り、サワハだけはレンズの発動を続けて警戒を怠らない。だがその分歩いている最中は廉太郎と小野でサワハのサポートをしているため、けっして誰かのみを頼りとしているわけもない。良いチームワークだった。

うまく切り抜けられるといいな、と司は空を仰いで、疲れの溜まった足をもんだ。するとその際に下がった視界の向こうに、なにやら丸っこい影が見えた。

「石ころ？」

てくてこと近づく。すると足がぬかるみの感触を覚えて、司は近くに水源があることを感じとった。が、山を登ってきて今さらぬかるみ程度を気にすることもなかったので、躊躇わず歩を進めた。そこには丸く削られた石が二つきり、鎮座している。その先の茂みの向こうには二つどころかいくつも転がっており、石に占められた場は今五人がうろろしている場と同じく地面が均されている。

なんか不規則な並びだな、と思って石をしげしげと眺めてみた。石と言っても赤子の頭ほどはあるそれは、乱雑にだが確かなんらかの意味をもって丸く作られていると見えた。どうにも気になって、司は眺めるだけでなく、回り込んで後ろからも観察した。

裏面には、名前が彫り込んである。いくつもの石があつたがどのひとつにも欠けることなく彫り込まれていることから、この石群がただの偶然で為されたものでなく、なんらかの意図をもってして作

られた石碑なのだろう、ということがわかった。

「あ、石碑っていうより、墓碑かな……」

しかしこんな山奥深くで苔むした石のみを墓碑とするというのは、どうにも普通の墓らしからぬ印象がある。それに、しばらくその場を回ってみて気付いたことだが、先に司たちが辿りついた開けた土地とこの墓碑のある場は似通いすぎていた。そして戻って見てみると、最初に見つけた二つの石碑だけが比較的新しい。

おそらくは石群のある場は昔からあるもので、司たちの訪れた場は最近作られた、新しく石群を置く場なのだ。どのような目的で設置されているかは、わからなかったが。元の場所に戻ろうと最初の二つの石を何気なく見た瞬間に、目的については少しだけ、把握できた。

刻まれていたのは「古川仁美」「古川公子」二つの名。

そして古川仁美の方には、『神代家に依る狐の下へ召され逝去』とある。

「狐に、召されて……?!」

まさか。まさかここは。嫌な予感に背筋が粟立ち、背後の石碑の数を確認する。三十はゆうに超えている。つまり　それだけの人数が。牢に捕えられた青年の、人間から外れてしまったあの様子が脳裏をよぎる。

廉太郎は直感で言ったのだろうが、呪いによる恐怖政治というのは的を射た発言だったのだ。想像していたよりもなお、状況は悪い。自分たちが踏み込んだ村の恐ろしさに改めて感じ入って、司は今すぐこの場を離れたくなかった。

その時、石群の奥に在る草むらがゆらり、風も無いのに静かに揺れた。横薙ぎに吹き付ける風に晒されたかのような不自然な動きが

目にとまり、司はとつさに木の陰へ身をひそめる。

少しだけ顔をのぞかせてそちらの方を凝視するが、見ることも視ることもない。過敏になりすぎているのかもしれない、と思いがながら元の場へ戻ると、司を探していたのか小野が駆け寄ってきた。

「どちらにいらっしゃったのですか」

「いや、ちよつと」

「危うい天気になってきましたから、あちらへ行きましょう。廉太郎さんが小さい社を見つけたそうです」

言われて見上げると、薄曇りの空からほつほつと、霧雨よりは強く小雨というほどでもない雫が降りてきていた。司は後ろを振り返り振り返り、小野に手を引かれるまま広場の先へ進んだ。

社はごんまりとしたもので、室内には六人も座り込む余地がなかった。扉は開放しており、太い螺子で大きな鈴が下げられた軒下に口論義と踊場が座っている。外からうかがう司は、中でうろつく廉太郎がごそごそと奥を漁っているのを見つけた。

「懐中電灯やらロープやら、山を下るのに使えそうなもんがないかと思っただがな」

狭い社の中に収納スペースがあるはずもなく、見つかったのはお供え物と思しき食事のみだったが、供物にサワハが手を出したために追われることになったのを思うと口をつける気にはなれなかった。綺麗に掃除された社は静謐な雰囲気を満たされていて、居ずまいを正した廉太郎は祭壇と、そこに並べられていた道具類を元の位置に戻すと外へ出た。入れ替わりに口論義に中へ入るよう促し、司の隣で彼方へ向けて目を細める。霧に霞みはじめそうな様子を見て、あからさまな舌打ちをかました。

「霧にまかれちゃ移動できなくなる。コンパスもないってのに、厄介なもんだぜ」

「なんにもないの?」

「本当にただの社のようだからね。まあ、雨露が凌げるだけよしとしよう」

軒下をぐるぐると回って調べているのか、踊場の声が司の周囲を巡る。司はちらりと先ほどの石群を思い出してこのこと関係があるのかと疑ったが、憶測で話しだしてもきりがないと判じて黙った。

しとしと、湿る空気が沈み、誰ともなく無言になる。静まった空気に耐えられなかったのか、廉太郎が壁に背をもたせかけて司の方を見た。

「……古川、巫女さんのこと妹みたいに思ってる、つつつてたよな」

「なにさ、突然」

「単なる雑談だ。あと、言い訳つてのかな」

眼鏡を外して着ていたシャツの裾で拭い、曇りをとってかけ直す。今度は小野を見て、へっと口の端を歪めた。

「俺がやられたの、そっちに氣い取られたせいなんだよ」

「わたしですか?」

「巫女さんがそっちの方いったから、まずいと思ってな。ちよいと目を逸らしたら、顔面に一撃喰らった。あいつは、古川は、巫女さんに氣付いても氣にも留めなかったようだがな」

「信頼してたんじゃない」

「かもな。呪いの恐怖政治に関しても、共犯であるようだし」

口では納得した素振りを見せながらも、表情は硬くどこか釈然としない心情を示している。

「だとしても、もうちょい思いやりつてのがあってもいいと思うのだけ。お互いによ」

「信頼してるのが思いやりではないのですか」

「その言い方じゃ俺がお前を信頼してないように聞こえるぞ」

「ちがうんですか？ だってわたしを心配したということは、信頼に足りない人間だと判断したということでしょうに」

少しすねたように、小野は下唇を噛んだ。廉太郎は歪めていた口の端を正すと膝に手を当て腰を屈め、小野と視線を合わせて続けた。

「心配くらいさせる。お前も、会長と同じで危なっかしいんだよ」

「昔の廉太郎さんほどじゃありません」

「そりゃまあそうだが。俺がこうして落ち着いたのも、お前が俺を心配してくれたからだろ」

「お返しなら結構です」

「馬鹿いえ、俺は借りたもんは言われなきゃ返さん。だが目の前歩いてた奴の落し物くらいは、届けてやるんだ」

ひひ、とまた犬歯を剥いて彼は笑い、小野は噛んでいた下唇を突き出す。

「良好な関係なんだろうな、と思えばその分、どこか胸にこみ上げる薄黒い感情があつたが、司はおくびにも出さず努めて冷静に二人を見ていた。」

外の霧雨は濃くなることも薄まることもなく、ゆらゆらと漂い続けてその場に滞留している。蒸される心地がして襟元をはたはたと煽いだ司は燻る心中に蓋をして、煙る屋外に目の先を寄せた。サワハが司の動きに感づいて、舐めた指先を外へ向けると風の具合などを確かめる。

「んふー、霧でもややもやするでも、それは追って来るの人も同じコト。迷ってるしてるのか、だいぶ足止め喰らってるみたいヨ」
「そっか……ん？」

軒下へ出て、水気に取り巻かれはじめて、足下のぬかるみのこともあつてか司は水の中に浸りこんでいる錯覚を覚えた。いやそうではないのか。

肌に染み込む感覚が、ここが異常な場であることを告げる。
第六感が、司に身震いさせて、語りかけてくる。

「なんか、嫌な感じがする」
「急に、ですね……背筋に粟立つ感触が」

同様の感触を共有できる小野とつなずきあうが、他の四人は何もわからないため司たちを見て首をかしげる。またなにかいるのか、と辺りを見回すが、これといって目につくものもない。加良部の時と同じ山の気だろうか、と？歪み？の出現に備えようとしたが、それにしては周囲の様子に変化がない。

ただ、雨のにおいがする方向、湿気た空気の淀みがある方を、敏感に捉えて。司は軒下から出ると、月下に照らされてまばゆい石群を見やった。

叢が、揺れる。
大きく、一部が薙ぎ払われる。

「そこは楔ぎの場。慮外かつ無関係の者に貸せる屋根ではない。表へ出よ」

空気も、雨も、断ち割って。

古川が右手にて鞘に納めたままの大太刀を振るい、石群の彼方からやってきた。

「追い、つかれた……！」

「先に出た者たちで追えなかったということは、常ならぬ道を通つたと考える。同様に私も獣道を歩んできたまで」

地鳴りのごとく低い声でうなり、手にした刀を腰だめに構えた。

そして理解する。彼の背に二つの人影が映り、そこから司は悪寒を覚えさせられたのだと。すると自身の感覚と、司の視線から感じるところがあつたのか、小野が恐る恐る司へ問う。

「司さん、あちらに、なにか居るんですか……？」

「う、ん」

二つの人影が、目を剥く。持ち上げられた面は、二つが二つとも女性の面立ちを示していた。古川仁美と古川公子だ、と直感的に思った。

が、二人の霊がいるのだとしても、こちらに危害を加えられる様子は無い。むしろ今警戒すべきなのは確実な凶器を手にしている古川の方で、彼は社から動けない司たちへと、一歩ずつ止まりながら、着実に進んでくる。

大太刀は、右手一つで振るわれた先程の一瞬にしか拝むこと叶わず今は腰に差され後ろへ回っている。しかしその一見での印象を信じるならば、地面から古川の肩までの長さがあると思われた。廉太郎ほどではないにせよ、一七〇センチ代後半はあるだろう古川の身長で、である。刃長だけでも、一メートル少々はあると思われた。白木拵の柄と鞘に覆われた、鏢の無い刀身は湾れの刃紋が美しく、樋と呼ばれる、強度を保ちつつ重量を削るための溝が入っていた。

「野太刀って奴か」

右半身、徒手空拳の時に同じく左手側を見せない構えで侵攻してくる古川へ、社から姿を現した廉太郎が鋭く、研ぎ澄ました視線を向ける。

「だがなんであんなもん……おい小野、あの古川つてのは、お前が見たところ異能者じゃないよな？」

「え？ ええ、まあ。司さんによると、なにか霊は視えるそうですが」

「ならマルドメ、ポルターガイストとかって今ここで起こるか？」

「いや……あれは閉鎖された場所で、その個人の念に染めあげられた空間だから起きる現象。だから今すぐなにか起こることはないと思うけど……なに？ なんの確認？」

司の問いには答えることなく、廉太郎は毅然たる態度を見せつけた。

半歩、ぬかるみに踏み出して古川に問う。

「おい、一応俺は表に出てきたぞ。これで許してもらえるのか」

丸腰であることをアピールするかのごとく、大仰に諸手を挙げて古川に訊ねた。しかし古川から放たれる殺気は小揺るぎもせず、彼の面差しに宿るのは邪魔者を排除する鉄の意志だった。

刀の鯉口を切ったのか、わずかに古川の右腕が蠢く。その所作だけで感じとれた攻撃の意思にて気圧され、廉太郎は無意識に後ろ足のかかとを地面にこすりつけてしまった。後退せんと、身体の方が反応させられた。

「……ならん。儀を遮られ、神代が倒れた今。貴様らを生かして逃すことは祖霊にかけて許されない。ここで死ね」

「やっばそうなのか……あー面倒だ」

廉太郎はじりりと退いた踵の動きのまま、後ろへ歩きだすと社の中へ戻った。そして懐中電灯などを探す際にどけた品々の中より一振り、御神刀と思しき刀を取り出した。すらりと鯉口を切って、左親指の腹で微かに刃に触れる。

「こりや刃が研がれてねえな。やってもまあ正当防衛だろうが、斬り殺さず済むな」

「若造が。容易く殺すなど、よく口に出来たものだ」

「先に言ったのそつちだろ、ここで死ねってよ。……まあ、確かに容易くはなさそうだけどな、……あんたを、斬るのは」

先刻徒手の格闘では負けたためだろうか、廉太郎は嫌な汗を流しながら納刀し、右の腰にて構える。それに合わせて司たちは引き、社の方へ退避する。社へ背を向ける廉太郎は、心なしか司には小さく見えた。

最後まで近くに立ち尽くしていた踊場は、舌を嚙んだような顔のしかめ方をして、たまらず声をかけた。

「廉太郎」

「最悪でも奴の足は砕くつもりだ。だが真剣の立ち合いなんぞ初めてだ、どう転ぶかはわからねえ。会長を逃がす役割は teme に任せろ」

「だが全員でかかって投擲などで攻撃すれば、」

「四方切とか惣捲ソウマキって技、知ってるか？ 知らねえよな。とにかく、剣術にや一対多を想定して多人数側の心理の隙を突くよう開発された技がいろいろある。訓練された多人数ならともかく、素人のお前からじゃ全滅が落ちた。……早く行け、もたもたしてたらやられる」

がちん、と歯を食いしばる音がして、廉太郎はもう一切司たちに

意識を向けていない。たじろぎながら戸惑いながらも踵を返した踊場のことも、もはや気配すら感覚の勘定に入れていないだろう。

司も遅れるわけにはいかず、小野の前に行くようにして社の裏を通り抜けながら、そつと廉太郎に向かって頭を下げた。

「……なあ、なんであんたら、呪いで統治なんぞしようとしてるんだ」

仲間を逃がしたことで少しだけ安堵した廉太郎は、口の端を開くと問いを漏らした。

大きく口を開けなかった理由は武者震いなのか揺れ震える歯の根を意識しなくなかったためで、問いの意図を見抜きなおかつその震えにも気付いたらしい古川は、笑みを表したのか腹を揺すった。

「逃走の時間稼ぎのつもりかね」

「まあな。あと、考える時間がほしい」

「何についてだ」

「あんたがどう、戦うのか。厄介な相手だったのは先の一太刀で十分見せてもらったが、まだ足りん。それだけじゃ……片腕での、野太刀戦術が掴めねえ」

片腕。

それこそが、先ほど廉太郎が小野と司に確認をとった、理由だった。

古川は頬をひくつかせたがそれ以上表情に変化を示すことはなく、ただおもむろに、半身にして隠していた左の袖の内を表へ出す。その左手は、本来あるべき指の数に足りない。親指を除き、四本の指が、欠けている。

唯一残る親指でさえ、第一関節の部分で指先が抉り飛ばされてお
り、月明かりの下シルエツトを短く変貌させている。古川は、腰に
差した刀の鞘の鯉口辺りを右手のみでつかみ、構えている。彼の剣
にその片腕という枷をもつともしない何かがあるとすれば、異能力
か、はたまた霊能力かのいずれかではないかと、廉太郎は疑ってい
たのだ。

「そもそもそんな長物、普通は片腕で振りまわすわけない。だがさ
っきの一太刀で、あんたがそれを可能としている奴だというのはわ
かった。さて、ここからどう攻めたものかな」

「……口ではそうほざきつつも、既に対処は幾つか考慮の上である
う。貴様の構えも、古き剣の術理を色濃く残したそれであると見え
るぞ。長物への対処も教えには含まれているはず」

「歴史だけは長い流派だからな」

だがここまで規格外に長い太刀への対処は、さすがに慮外のもの
である。彼我の距離は現状五メートルといったところであるが、詰
めるに難く空けるに惜しい。ならば打開策は、と思索して、すぐに
いくつかの技は候補としてあがっていた。

倉内流には右の腰に差した刀を右手で抜く？八咎やっがめ？という抜刀術
がある。相手方の抜刀による切り上げなど己の右半身を狙う攻撃に
対応する技で、その要諦は相手へと前進しつつ素早く鞘ごと腰から
刀を抜き、鞘で相手の太刀を受け止め、食い込んだ相手の太刀に鞘
を押しさせたまま前進の勢いに乗せ右逆手で刀身を抜き放ち、相手
の頸動脈を狙うことだ。

刃が立っていない刀を扱う今は、柄頭で鳩尾または喉仏、人中な
ど正中線の急所を突くことを狙う。古川の扱う得物が長物である以
上は廉太郎の斬撃より少々初速の遅れもあることだ、相手の攻撃
を見切り捉えて使うこの技は発動するに易し、と思われた。

だが古川の長大な刃による圈内の広さは遅れを補って余りある。

不用意に間を詰めることは自らを刀下の鬼と成すに等しい。しかも一見した古川の臂力に刀身の重さを考慮に入れると、右腕のみの下手な防御では切り破られる可能性が高いと見えた。

では回避してからの後の先はどうか。倉内流の技ではないが、低姿勢から跳躍し相手の横薙ぎをかわしてから空中で抜刀し、相手のこめかみなどを狙う？ 抜附之剣？ という技を廉太郎は習得している。跳躍の軌道を確認しようと古川よりわずか、目を外すと、頭上には森の木々がアーチをかけるように、鬱蒼と生い茂っていた。これでは飛べない、と廉太郎は心中で舌打ちする。おまけに、廉太郎が目を離れたその瞬間を違えることなく、古川は前進の機と見て一步踏み出す。慌てて視線を下げた廉太郎は、策を弄しすぎるこの愚かさを呪った。

「来ないのなら私から向かおう」

続いてまた一步。刃の圏内が近づいてきて、廉太郎の心中に焦りの波を呼び起こす。力負けすることだけは避けねばと、逆手で抜刀した廉太郎はすぐさま太刀を持ちかえ、順手で脇構えに移行した。

動きを見て取って、もはや廉太郎に思考の間を与えないことにしたのか、一気に古川は距離を詰めた。足袋のまま素早いすり足で、徐々に古川の影が大きくなっていく。淡い月明かりの下彼の瞳孔は見開いて輝きを放ち、右腕も力なく柄に手をかけているように見えてその実活気に満ちた、いつでも飛びかかれるだけの瞬発力を秘めて筋肉が軋む。廉太郎は、臆した。

「死して安寧の時を待て」
「ぐ、」

思わずうめいてしまいその情けなさに自分で自分を嫌悪し、技の選択の有余さえ奪われた永い瞬間のあとには、

不可思議な迄に静かできて猛々しい、
圧倒的な、斬撃が過ぎる。

「火箸？」

かろうじて回避できたのは、ひとえに幸運の賜物であった。

跳躍が枝葉に邪魔されると知った廉太郎は飛ぶことができず、実際その判断のおかげで命を繋いだのだが、果たして判断と呼べるほど彼に理性が残っていたのかどうか。生存のための防衛本能に負けて膝を屈した廉太郎は、抜いた膝からの体重移動で前進、小さく身を丸めて、後ろに刺さった刀を引っ張ろうとしているような体勢で倒れ込んだ。

その上を過ぎ去る暴風が、古川の剣だった。

見えたのは、抜き打ちの瞬間。

捉えると言うほど正確には記憶に残らないはずが、ぎりぎりの死線で脳がそれを認識した。

そう、抜き打ちだった。あれほど長大な刀を、片手で抜いていた。長すぎる刀は腕だけで抜こうとしてもままならない。腰を切るようにして、左手で「鞘を刀から抜くように」動かす補助があつてこそ、ようやく刀身は姿を顕せるのだ。

ところが古川は、右腕のみで鞘より抜き放つことを可能としていた。柄頭が、鞘の鯉口辺りを握る古川の右手が、親指で鯉口が斬られるのが、見えて　そこで時間が凍結する。

そも、古川の抜いたタイミングは、廉太郎に刃が届く距離にあと一步満たないところであった。だというのにそこで鯉口を斬りはじめ、動きは止まる。柄頭から切っ先までが廉太郎の視線と一直線になり、そして次の一步の間に時が解凍されたかのように、点となっていた剣の柄頭の陰より、刀身が顕れた。溶け出した氷が滑るように、速度を増し、切っ先が叫ぶように、疾く風を切り、一条の銀の光が頭上を駆け過ぎた。

横薙ぎ、抜き打ち一閃。

技の名は 火箸。

「……っがつ！ が、はっ、」

走馬灯を眺めかけたが、死地をくぐつてくることに成功した自分の幸運に感謝し、引き伸ばされていた時間感覚が元に戻る前に廉太郎は転がって古川の後ろへ抜けた。その間に血振りのような所作をしていることがかろうじて目の端に映ったが、向き直った時には鏢の無い野太刀は納刀されていた。

「よくぞかわした」

「本当にあんた、片腕かよ」

「……、忌むべき傷を受けたがための隻腕だ。私が村を呪うに足る理由のひとつで、神代と私が共謀するに至る理由である」

「村を、呪う？」

「統治などとは勘違いも甚だしいものだ。私は神代に賛同し、この村を潰さんとする彼女と共にあるべく、こつして剣を振るってきたのだよ」

再び右半身にて構えをとり、躊躇の無い接近を見せつつ古川は言った。

「ああ？ あんたはともかく、神代つてのは巫女さんだろ？ 村で大事にされてきた奴が、どうして村を呪うんだよ」

「巫女として自由を奪われ、他者との差により分けられた。外部から参入した古川一族がすべからく差別の憂き目に遭ったことと、方向は違えど結果は同じ」

「ってことは、そうか。祭事に外部の人間でも参加できるってのは、あんたら一族の参加を認めるルールだったんだな」

「その通り。神代よりこの村へ復讐を果たさんとの旨を打ち明けられ、私がそれに賛同した」

「妹みたいなもんだ、つつつてたな」

「ああ。だからこそ聞き届けた。これ以上無き利害の一致の下、私が神代を守り、神代が狐の力を振るうこととした」

「……妹みたいなもんなら、そういうの止めてやるべきじゃねえのか」

「なぜ止める？」

「俺は止めてもらった側だから、あんまり大きなことは言えないが、明らかに間違った方へ進んでたら、後ろから声かけてやるのが筋つてもんだ」

「間違いかどうかなど、やり遂げるまではわからん」

「わからない？ 嘘つけ。予想はつくだろ」

曇り顔で言う廉太郎に、古川は殺気を向けた。廉太郎は構えを解き、少し剣を持ち上げる。左肘を突き出すようにして、右手の握りは柔らかく。剣を鳩尾の前に地と水平に構え直した。倉内流では斜はすの構えと呼ぶ、脇構えの派生形である。

「なんと言われようと、何人たりとも私たちは止められん。思い遂げる日まで私たちは止まらん。予想などどのような形にも、いくらでも拳がろう。だが私たちの望む先は、ひとつの形でしか有り得んだ」

「聞く耳持たずか。行動力のある奴同士がくつつくと、面倒臭えもんだ」

「行動を促す力など、行動を助する力など、存在せぬ。理由だけが人を突き動かすのだ」

ひたりと、静かに踏みしめる足が廉太郎に向き、近づく。多少の時間稼ぎにこそなったが、このままこの男を逃して皆を危険に晒す

わけにはいかない。そも、背を向けて逃げれば、追いつかれて命を絶たれる。そう判じた廉太郎は震える歯の根と足とを、地面に向けて強く脚を踏み込むことで律する。

息を吐き、丹田に意識を集中。相手の視線を中央に捉えつつもフエイントなどに対応できるよう、視界を広く取る。相手の全体を目に収め、動きだしを探り最初の起こりを待つ。

もはや言葉は要らない。進み来る古川には揺らぎも淀みもなく、ただ歩くのみにして隙を見つけさせない、ひとつの至極の域に達していた。次第に、道場にて師と対峙した時に似た、圧倒的な実力差を空気の中に嗅ぎ取る。しかし、廉太郎は引けない。

正真正銘、最後の一合。廉太郎は、咆える。

「初太刀で、終わらせてやるよ」

「
、
」

古川、無言の一喝。引き絞られた矢が飛び出すように、彼は二歩で己を最高速に載せた。迫る凶刃に慄きながらも、廉太郎は迎え撃つ。

斜め右前方への、左足の一步。低い姿勢からの踏み込みが、廉太郎の剣を変貌させる。地に与えた作用反作用で生じた上方向への運動エネルギーを、続く後ろ足の蹴りだして前へとベクトル方向を変え、立ち上がる時に勢いをつけると同じ自然さでその力を腰から肩、腕へと連動させ、奇しくも古川と同じ横薙ぎの斬撃を、こめかみに向けて放つ。

だが、遠い。一步の踏み込みでは、まだ古川の領域へは届かないのだ。身体に触れるには至らない。一番近い位置に在る古川の右腕にさえ、掠めることすらない。

だからこそ。だからそこで、軌道が変化する。

廉太郎は左足を右斜め前に踏み込むことで相手に肩甲骨を向け、右腕と左手首の動きの起こりをぎりぎりまで隠し通した。すると古

川が来ると思ったこめかみへの斬撃は、寸前で切っ先をずらした。隠し通した動きが、古川の判断を寸毫すんこう、狂わせた。

さらに廉太郎は右手を筒のように構えて手の内を左手に近づけるよう滑らせ、左手だけが柄頭近くをしかと握り締めていた。これによりわずかながらリーチを伸ばし、斜めがけに振り下ろす。前述の軌道変化と合わせて、これが倉内流の？尾背廻おそがし？という技である。廉太郎から一番近い古川の右腕にならば、これで届く。

しかしそれは届くというだけで、薄皮一枚に触れるかどうかということ。振り下ろした太刀の行く末を見届ける前に、廉太郎の身体に古川の一撃が食らいつくだろう。

刹那の間に終局までの読みを終わらせたらしい古川は、躊躇わず片手野太刀抜刀術？火箸？を発動する。神速と呼べる動きには繋ぎ目が一切なく、廉太郎に見ること適ったのは、鞘の鯉口付近を握る古川の右親指が、柄を弾いて刀身が飛び出てくるところまでだった。なぜなら刀身は、それ以上姿を晒すことがなかったからだ。

「っ？！」

残響。

硬質な音が古川の時間を止める。

凍結。

剣が動かない。

解凍。

金縛りが、解ける。

瞬間の出来事の間、驚愕に目を見開いた古川の鳩尾へ、廉太郎の返す刀がめり込む。圧力に筋力が競り負け、声では無い、空気と唾液と胃液の混ぜ物を吐きだすだけの音をぶちまけて。

古川は、膝を屈して倒れ伏した。

「……………ああああっ！ つぶねえ！ 死ぬところだったっ！

うげえほっげはっ」

古川の叫びと同じくらい大きく咳こんで、屈みこみ、廉太郎は生きている実感を噛みしめた。

傍らには、柄頭に斬り込まれた痕を晒して転がる野太刀。切っ先の少々欠けた御神刀が、廉太郎の右手の中に残っていた。

最後の斬撃、廉太郎は最初から一の太刀のみで仕留めるつもりはなかった。打ち合いの前に発したセリフはあくまでも古川に「次の一撃」を意識させるための言葉で、だからこそあえてわかり易く、急所のこめかみを狙うように見せかけたのだ。

そして横薙ぎから袈裟切りへと変化させ、間合い騙しの技で右手を滑らせリーチを伸ばし、一番届きやすく戦力を削ぐことのできる右腕を狙うように思わせ、柄頭に当てることを狙っていた。

なんとということはない。古川の身体よりも、長大な刃に合わせて長く作られた柄の方が、刃を届かせるには容易い。居合いでくることがわかっていいるのなら、刀身が完全に鞘から抜ける前に止めてしまえばいい。そうして攻め手を塞いでから、二の太刀で仕留めればいい。

「……柄を弾いて刀身出して、刀身が半分くらい出たらそこを掴んで残りの切っ先までを抜く。その上で樋に爪立てて？^{すは}までスライドさせ、最後に柄を握り直して振り抜く、ってな技か。どんだけの指の力と精密な動作が必要なんだよ、それ」

古川の技を分析し、嘆息してへたりこみ、改めて恐るべき使い手との戦いだっただことに感じいり、身震いする。ともかくも廉太郎は古川が起きてきては敵わないので鞘と刀を奪い取り、御神刀の下緒で手足を縛ると野太刀は霧の向こうへ投げ捨てる。これで見つかるまい、と思っただが、ぎゃあと悲鳴が聞こえてきた。

「あん？」

「いったた……あのさ、不用意に物投げないでよ」

霧の中から姿を現した司は、涙目で頭を押えて廉太郎に文句を垂れた。

「なんで戻ってきてんだ、お前」

「霧で迷ったのか、ぐるっと回ってきてやったんだよ。でも廉太郎さん、時間稼いだら逃げるつもりなんだと思つてたけど、きっちり倒したんだ」

「逃げられる相手じゃなかったからな……会長たちはどうした」

「少し下ったところで待つてもらつてる。廉太郎さんの叫び声が聞こえたから、どうなったのかと思つて。サワハさんのレンズだけじゃ角度的に見ることできなかったから、一人で様子見」

「そうか」

霧の中をさまよい帰ってきてしまった司は、うつぶせに倒れてぴくりともしない古川に一瞥くれてから、社の方へ歩く。廉太郎はその後ろからついて進んできて、御神刀を社に投げた。軒下で二人並び、壁に背をもたせかける。そのままずり落ち、廉太郎は立ち上がれない。死戦を抜けた安堵と仲間の無事が確認できた安心とで、一気に緊張の糸が途切れてしまったらしい。

「だ、大丈夫？」

「平気だ。少し、疲れただけだ。真剣で立ち合いなんざ一生無いと思つてたしな。やつててよかった倉内流、つてか」

「まず、剣も使えたことに驚いたよ」

「武芸十八般とまでは言わないが、体術の他に剣術、槍術、十手術、

鎖分銅術、弓術、馬術、泳術、くらいまでは一通りやらされた。最初は体術以外どうせ日常じゃ使えんだろ、と思つてあまりやる気なかつたんだが、一回剣道やつてる奴にボコられたから剣だけはまともによつてたんだ」

指折り数えつつばやいて、廉太郎は遠い目をした。そもそも日常で体術を要する場面が多いことも問題だろうと司は思ったが、助けられた以上今日のところは何も言わないことにする。

「負けることも、あるんだね」

「当たり前だろ。俺だつて人間なのだけ。真剣の扱いを学んで、刃と向きあうことを知つてたから動けた。それだけだ。でなけりゃ、人生五度目の敗北と共に生涯に幕を下ろしてるとこだ」

「ていうか、四回しか負けてないんだ」

「道場稽古で師匠に負けたことは数限りないが。……道場で習い始めて慢心装備で剣道野郎に喧嘩ふっかけて一回。その前に師匠の娘と手合わせしてトンファーでボコられて一回。さらに前に師匠に道場連れてかれる時に抵抗しようとして一回。で、一番さかのぼった最初の一回は、鉞姫だ」

もつとも当時はそのあだ名じゃなかったが、と笑いながら言つて、廉太郎は古川の方をじつと見据えた。

「もつと言え、その時のあいつはまだ武術のぶの字も知らなんだがな」

「え？ 有り得ないでしょ」

「俺はあいつの兄弟子だと言つたろ。あいつ、俺より後に倉内流入つたんだよ。理由は、まあなんだ、話しにくいから割愛な」

下手くそな切り方であつたが小野についてはこれ以上語らず。そ

の配慮に、司は廉太郎と小野の間にある付き合いの長さを感じとった。遠慮も屈託も無いやり取りの源が、垣間見えたように。代わりにと思ったのか、話題を逸らすためか。廉太郎は自身のことを話した。

「ま、どーせそのうち踊場辺りが笑い話にして語っちまうだろうから、今俺自身で話すか……多少触れたことはあつたろうが、俺は中学ん時荒れててな。どーしようもなく屑だった。そもそも、暴れた原因が外見のことだからかわれただけって辺りも、また屑さに拍車かけてて。ところが中二の頃にはもう俺この身長だったからよ、単純に腕力と体重でこり押しすれば、勝てない奴がいなかった。二つ歳上の兄貴も倒して、いつの間にもやら猿山の大將気どりだ」

過去に自分が行ったことについて語る廉太郎は、自慢げにするどころか、恥じ入る様子も無い。もうそんな境地は通り過ぎてしまっているのか、ただただ深く暗く落ち沈んだ表情で、苦々しげに眉をひそめていた。

「成績も下がる一方、もうどこの高校も入れない状態で三年になってたな。そしたら、とうとう見かねたらしい小野が、ある日登校中……つつつても三限のチャイム鳴ったあとだが、通学路の途中で座り込んでた。俺が無視して通り過ぎたら、背後から一撃」

「蹴られた？」

「当時はまだ倉内流習ってないんだ、あいつも鍼のごとき蹴りなんて使えないぜ。辞書三冊入った通学カバンで、後頭部に向けてフルスイングだよ」

「うわあ」

「その後は踏まれまくった。『ちよつと強くたつてこれでおしまいじゃないですか』って言われたなア……あいつのニュアンスとしては、この程度でダメエも負けるじゃねえか、ってことだったんだろ

うが。あいつ加減せず踏みつけやがったから、俺は真剣に死ぬかも
って思った。で、家帰って、引きこもって、女に負けたことに苛立
って、暴れて、疲れて寝ようとした時にふと思ったんだな。俺も誰
かに『死ぬかも』と思わせたんじゃないかと」

少々やり方は過激であるが、放っておけなかったからこそ小野は
そういう行動に出たのだろう、と司は思った。

人を傷つけることには慣れている、と小野は言った。だが本
当は。人を傷つけるということがどういふことを知っている、そ
れだけなんじゃないのか、とも思った。

「でもしばらくは自己正当化に忙しく、まだ周りにあたり散らして
た。そんなある日に師匠に逢って、ボコられて、仕返しにいつて、
また女に負けた。そっからだよ、ようやく俺がまともになるうと思
ったのは。いや大人になるうと思ったのか。とにかく、小野に止め
られたおかげで俺は、少しだけマシになれた。それでもなお、取り
戻せないもんはあったが。……こいつにはいなかったのか、止めて
くれる奴。もしくは、止めようと思える相手」

悲しげな顔を見せる廉太郎だが、自分がその感情を表すべきでな
い、現してはならないと思ったのか、わずかな間に自制して無表情
を保つ。司も古川の方を見たが、同情ではない、なにか諦めに似た
心地を湛えて、自分の視線が向いていることを自覚した。

「……少し休んでから、戻ろう。向こうの石群の方がぬかるんでた
んだけど、どうも近くに水源があったみたいでさ。探したらここ戻
って来るまでに川を見つけたから、辿っていけばそのうち下の川に
降りて、川浪まで戻れると思う」

「石群？」

「あっちの、古川の来た方向にあった石碑群。狐になにかされて死

んだ、って彫ってあって、その被害にあっただらう人の名前も彫ってあった。中には、古川仁美、公子ってのがあったんだけど……」

「古川の、血縁者だったのか？」

自分の頬に廉太郎の視線が向いたのを感じたが、司はそちらに目をやることなく答える。

「……たぶんね。今も、倒れてるあの人に寄り添ってる。湿地とか湿気た場所っていうのは、霊を呼び易い場所だから。普段は憑いてなくても、こういうところだと出てくるんだよ」

「なんだよ、それ。じゃあこいつは、自分の血縁を神代に殺されたのに、妹だのなんだのって言うってたのか。……騙されてたってことかよ、それ」

司にはなんとも答え難い。霊が視えても声は聞こえないこの身では、向こうから口寄せをしてくれない限り死者の思念を読み解くことはできないのだ。

「騙されていたわけでは、ない」

答えたのは、当人。

うつぶせで伏していた古川が意識を取り戻し、縛られて動けないまま、口だけを動かす。

「何も知らず語るな。私を騙していたのは、古川公子。我が母だ」

身体を起こせないと知ると転がって横を向き、司たちに身体の正面を見せる。後ろ手に縛られた手首はどうにもならないのか、咳こみながらきつと司たちを見据えた。

「母親に騙された、ってなに。どういふことなのさ」

「元来この儀はごく平穩に、五穀豊穰を願うものだった。しかし二十六年前、神代が生を受けた年度より儀は変質し、巫女たる神代一族を虐げるものとなった。当時の儀式においてなんらかの不備があったためなどと言われているが、その頃より神代は縛られた生を歩むことを義務付けられた。その後神代の両親は、神代に同じく巫女であつた母親が山に入り焼死したのち、夫もあとを追ひ自殺した」

より激しく咳をして、反吐を吐き散らしながら古川は大きく身をよじる。

「その前年に村に入った我々、古川家も余所者ということあつてか待遇が悪化した。……七年ほど、耐えた。だが神代の母が亡くなる以前に我が父も失踪し、耐えきれなくなつたのだらう母は、ある日こんなことを言いだした。『神代家に呪われた、うちの子供が呪われた』」

次いでぐにやりと、齒を食いしばりすぎて歪んだ唇を持ち上げた。

「私の、妹が、だ。腹痛や嘔吐、発熱は常のこと。次第に言葉を上手く話せなくなり、せんもう譫妄や意識混濁に悩まされた。これらを『呪われた、狐を憑けられた』とした。……実情は、我が母が食事に混ぜていたヒ素による中毒だつたというのに」

代理ミュンヒハウゼン症候群。周囲の人間の関心を引きたいがために、自分の身近な人間を病人や怪我人となるよう仕向ける精神疾患である。間接的に自分に人の目を向けるために、同情を煽るような状況を設えることが多々あるという。

「見当違いに神代へ怒りを燃やし、私は奴に取り入り殺そうとした。

そして、神代と接するうちに事実を知った。だが遅かった。妹の食事を私が管理し、母の食事にヒ素を混ぜるようにし始めてすぐ、妹は、仁美は、この世を去った。程なくして母もな。あの石群は、それで降狐の害にあったとされた者たちの慰霊碑だ」

「じゃあ、狐は、存在しないってのかよ」

「……さてな。具体的な実例として仁美と公子が死したことで、皆神代を恐れすぎるあまりおかしくなったのではないかね。信じるから、そんなものがあると思いきむから、畏れる。馬鹿馬鹿しい話だ。儀式など、祖霊を思い敬う程度で良いはずだ。……神などと、曖昧模糊とした偶像に縋るから人は弱くなる！」

腹の底から息を鋭く吐いて、激しく肩で息をして、徐々に凄まじくなくなっていく叫びをあげ。古川は身体をねじ切りそうなほどよじった。常軌を逸した行動にぎよっとした司が思わず軒下から離れて駆け寄ろうとすると、ぐるり、古川の傍で固まっていた二人の首がこちらを向く。

ぞわり、背筋を撫ぜる黒い風。感覚が引き伸ばされ、研ぎ澄まされ、大気に張り巡らした細い糸が肌に絡みついていてるかのようになり、びりびりと表皮に震えが走る。後ろを振り向き、霊が見据えた方向を見定めると、

「？歪み？だ」

ダリは、いない。おそらく、一応は空き地で為された供物の儀によって還されたのだろう。しかしそれ以外は昼に倒れた時とまったく同じで、社を囲むように？歪み？がいくつも生まれている。身の危険を感じて、司は廉太郎に振り返った。

「廉太郎さん動かないで！」「司、後ろだ！」

二人が、同時に叫ぶ。

司がもう一度古川の方へ首を向けると、そこに彼ははいない。

真横からの衝撃。首がへし折れそうな痛みにもがいて、自分が喉を掴まれていることを知覚する。拘束を解いた古川が、右手で司の喉を握りつぶさんとしていた。

「つつ司、」

「動くな。そこになおれ」

引きずるように、古川は動く。今にも意識が飛びそうな司は、かはこほと乾ききった咳を漏らして視線を下げる。古川の手首には、赤く皮膚が抉れた痕が残っている。左手は特にひどく、恐らくは自ら体重をかけて関節を砕いて引き抜いたのだから、手首と親指の付け根が本来可動してはならない位置にまで折れ曲がっていた。

「油断が死を招く。教訓にはなるまいが、それだけのことだ」

ずるずる、爪先が地面を擦る。視界の端から霞がかってきて、唾液と涙で顔を濡らす司は、右手でポケットの小刀を握る。しかし力が入らず、もう手をポケットから抜くこともできない。

社の中へ入り武器を取ろうと後ずさりした廉太郎を追い詰め、古川は司を盾に一步一步段を登る。意識にも霞が浸食し、思考が形をなさず、考えを認識できず、眼球が上向くままに頭を反らした司は、社の入口にかかる鈴を見上げた。

見上げて、その留め具となっているものに気付き、枯れかけた喉が、思いついた単語を叫ぶ。

「　　　　　」

「この後に及んで戯言か」

締めあげる万力じみた握力から逃れ得ず、司の喉が最後の二音を振り絞る。

「……ジャい、ろ」

廉太郎は、一瞬で理解したと見えた。

素早く視線を上げると、古川が鈴の下に踏み込んだ瞬間。

回転の微能力？オートジャイロ回天竺？により、鈴を留める太い螺子を、緩め、外す。

途端、真鍮製の重い鈴は落下し、ぼぐりと音を立てて古川の頭頂部に当たった。突拍子もないできごとに不意を突かれ、わけもわからぬまま意識が飛んだ好機を廉太郎は見逃さない。司を構えているために防御もできない右側へ回り込み、ガラ空きの胴体、皮膚下の腎臓へ右フックを打ちこみ、司を放すまでに左肘を後頭部に刺しこむ。最後にダメ押しの右膝を腰骨に叩きつけられて、古川は吹き飛ばされた。

「おい、しつかりしろ！ 意識はあるか！」

急ぎ、倒れた司を抱え起こすと、廉太郎は頬を叩いて意識の有無を確かめようとした。幸いなのか不幸なのか意識のあった司は頬の鋭い痛みに顔をしかめ、ゆっくりと通常の視界が取り戻されてゆくのを他人事のように眺める。

「……生き、てるよ」

「そ、そうか。よかったぜ」

「それ、より……れんたるさ、ごじ、歪み、が」

「結局、ここまでなのね」

司の決死の言葉を遮るように、凍えた声が社の外から響いた。

まだぼやける目をしばたかせて司がそちらに首を傾けると、白と赤の対比が目飛び込んでくる。巫女装束だ、と認識して、そこで続けて声がかかった。

「どいとおつてくれる、その二人」

「テメエも、俺たちを追ってきたのか」

「いいからどいとおつて」

神代は、まだ小野に殴られた胸が痛むのか、懐に手をいれ胸を押えながらゆっくりと、段を登ってきた。廉太郎ですら雰囲気威圧され動くことかなわず、司を抱えたまま社の端へ退く。二人の眼前を何するでもなく、ゆっくりと、過ぎ去り、神代は古川の傍へ屈みこんだ。

神代の歩いたあとに、？歪み？が現れる。否、まるでそれがみえているかのように、自然に神代は？歪み？を避けて進んでいた。

「古川」

「……………かじ、ろ、か」

「ここまで、かもしれんわね」

「なにを、何を言うのだ、神代……………」

鈴が当たって血を流している古川の頭を、左腕でそつと神代は抱えた。しどろもどろになって困惑の表情を浮かべる古川は、行動の意味を理解できないのかさらに問う。

「なに、を言うのだ、神代。まだ終わりなどでは、ないだろう。何故、終わりのようなことを」

「終わりなの、もう」

「だからお前は、なに、を」

「死んで」

ず。

クッションを裂いたような音がした。

神代に抱えられた古川の首が、ことりと横に崩れる。

ずっ。

二度目の音で、古川の中から光が消える。剥製のように、闇が閉ぢず。

「……終わりなの、もう。終わりなの、やっと」

立ち上がり、振り返った神代は、凄絶な美しさで緋の衣をまとっていた。からり、懐から短刀の鞘が落ちる。廉太郎は、その音で目が覚めたように、わなわなと腕を震わせて叫ぶ。

「おい、あんた、何やってんだ。なに、やってんだっ！」

「終わっとるのよ。だから、後片付け」

壊れたスピーカーのように終わり終わりと言いつける神代は、そのまま社を出た。？歪み？は彼女の周りでも揺らぎ続けていたが、不思議とそこに落ちることはない。本当にみえているんじゃないのか、と司は疑う。

「終わりね、もう……いつか、来るとは思ってたけど」

社から十メートルほど離れて、神代はこちらを見た。

「一緒に行く？」

まるで生きていない目で、平然とそう問うた。

そして、司の横を過ぎ去る二つの影。すなわち、古川仁美と公子が、猛然と。先ほどまで古川に寄り添っていた時の大人しさが嘘だったように、襲いかかる動きを見せていた。

だが届かない。

神代に近づく前に、二つの影は 焔に捲かれた。

「…………え…………？」

白色、黄色、橙色。どの色も省いた、ただ紅蓮だけを滲ませた炎が、仁美と公子を焼く。当然廉太郎に反応は無いが、司は確かに視ていた。霊が、焔にその身を焼き焦がされるところを。

「そ。先に行つとるのね、わかった」

明らかに仁美と公子が焼け、身悶えしてのたうち回る位置を見据えて、神代は笑う。

「あ、あんた。視えてるのか、その二人」

「うん。よく覚えとるから見間違いない。自分で殺した二人の、りょうこんだもの」

「殺、した？ りょうこん？」

「あーあ。ここまでか…………まあ、十九年も力をお借りしとったんだし、十分か。仕方ないよね、借りたら、返さんと」

「借りるって、なにが」

話しかけても、もう神代は答ええない。ただ？歪み？だけが爆発的に増殖して行つて、辺りの景色がたわんで映る。いつの間にか仁美と公子は消えていて、焔の残り火もない。突然ふつてわいた展開に

ついでにせず、司はふらつく頭を押えて立ち上がるうとした。と、視界の端の茂みが揺れて、見覚えのある顔が飛び出す。小野だった。

「司さん、嫌な感じがしたので来たんですが、これは、」

「小野、動くな！ そこら中？ 歪み？ で満ちてる！」

枯れた喉で叫ぶ司がせき込むと同時に、神代の近くにもう一つ人影が姿を現す。

しかし、割と開けた場所であるここにやってきたにしては、出現は唐突過ぎた。まるで空から落ちてきたか 歪んだ異界の向こうから、やってきたかのように。

「これで、終わり、ね」

神代は、自分と同じくらいの目線の高さを持つその相手に、こりと微笑みかけた。人影は、ぴくりともしない。司からは顔は見えないが、長い黒髪をひとつに束ねていて、白いシャツに黒いロングスカートという質素な服装であることはわかった。

「なんか、すっかり心が空っぽになった感じよ。結局、それしか持つとらんかったのね、私。憎悪と怨嗟だけで、生きとったのね 呪科人、つてとこか」

けらけら、血濡れの巫女は笑う。揺らめく？ 歪み？ に邪魔されて小野も司も廉太郎も動けず、時間だけが過ぎていくことに異常な焦りを覚える。なにかを。なにかを、取りこぼしそうな気がしていた。

「じゃ、終わりにしとく。長い間ありがと、つて八尾の七無さんに伝えといて。つても、あんたじゃ伝えんの無理か。まいいわ。さつさとやって頂戴、カノエ」

「カノつ……?!」

小野が、絶句し。

神代もまた、紅蓮のみに彩られた。

だが叫び声をあげることもなく、ただ疲れたようにしゃがみこんで、膝を抱えるように肘を丸めて凄まじい早さで燃焼していく。緋色に染まった巫女装束も、長い黒髪も、全てが火に捲かれて焼け落ちていく。

皮膚とまぶたが爛れ落ちて剥き出しになった眼球が、表面で体液を沸騰させながら司を見つめた。乳房や皮下の黄色い脂肪が崩れ焼け独特の悪臭を辺りに漂わせ、耳が焦げ欠け、鼻が削げ消え、唇が燃え抜け、頬が火に貫かれた。

髑髏に近付いてゆき、喉の肉が焼け、首がごろりと前方に落ちかけたその時、カノエと呼ばれた女が？歪み？の向こうに消え、神代の身体と全ての？歪み？も同時に消え去った。

あとには、焼け落ちてただの炭と化した神代の身体の一部が、黒く溶け残った場所しかない。すべて悪夢だったかのように現実に返され、異界から取り除かれた三人は言葉を失い、すくむ。

「なんですかこれ」

理性を保った言葉は、小野の漏らした一言だけだった。

あとは、今見た光景が頭に焼き付いて離れず、壮絶な吐き気に襲われ、三人ともが嗚咽の中に自分を取り戻そうと躍起になった。

しばらくして、地獄のような惨状を知らぬ会長たちが駆けつけ、心の折れた三人を抱えながら下山の運びとなった。

だが山を無事に下りることができて川沿いに川浪に戻っても、神代の念に染められたのか、最悪なまでに黒く塗りつぶされた山の気が、いつまでもいつまでもまとわりついていると司には感じられた。カノエの火が、まぶたの裏でちらつく。

なんとかバンガローに戻り、翌朝から一日、司と小野はまったく動くことができず教師に体調を崩したと告げて眠り続けた。けれど眠りの中でも焔にうなされ、二人はロクな睡眠を取ること叶わず、なんとか最終日に動けるようにはなったもののキャンプ地を大きく離れる気にはなれなかった。

廉太郎も同じような状態であるらしく、昨日は宿にこもりきりだったという。

「……あ」

「小野も来てたんだ」

近くにある道の駅へ、せめて土産物でも買おうかと司が訪れるとソフトクリームを舐めていた小野に遭遇した。顔色は悪かったが、指摘したところで自分も同じような顔だろうと思えば開きかけた口を閉じた。そして同じソフトクリームを買ってくると隣に腰かけて食べ、唇がコーンに達した辺りで会話を試みる。

「会長たちは先に帰るって。さっき国道走ってた」

「そうですね」

「うん、土産もいらなみだったね」

「そうですね」

「……うん」

会話は、続かなかった。

あの時神代が焼け消える直前に古川が刺殺されたことや、古川の妹と母だという霊の存在、古川の語った真相と神代の発言の食い違いなどについては、小野にもすでに話してあった。だがそれら全て

は過ぎたことで、また加良部の時のように犯人は手の内をすり抜け、異界に消えたのだ。

ゆえに考えても詮無きことだが、司は考えずにはいられなかった。ともすればあの惨状を思い返してしまいそうになる頭の中を、どこかひとつの考えなどに向け続けていたかった。

『 神代も、古川も、悪いわけではないのかもしれないね』

踊場は最後にそう言い残して、キャンプ地から立ち去ろうとした。言葉の意味が知りたくて司が問うと、やっぱりと自分の考えも推論に過ぎないことを示唆して語りたがらなかったが、なおも食い下がると仕方なさそうに話し始める。

『 きみたちから聞いた話をまとめると、神代の発言は古川を、むしろ古川家そのものを憎んでいたように思えてならない。最後に古川を刺殺したこともそうだが、彼女は古川仁美、公子の二人も己が殺したといったのだろうか？』

確かに、その通りだった。おまけに霊体であるはずの二人が視えているとしか思えない言動と所作を繰り返していた。

『 そう。それらの点から、彼女は古川の推測のようにペテンと集団心理による恐怖を村人に植え付けていたのではなく、実際の霊能力を保有していたのだと考えられる。そして恐らくはその異能により、本当に古川仁美を呪った。口車に乗せてうまくペテンにかけられていたのは、古川の方だったのではないかな。証拠物品などを挙げ連ねられ、ただ子を心配する親の様子をさも疾患によるものであるように囁かれて』

だから、最期。霊も焼き尽くす焔に捲かれる寸前、二人は神代に襲いかかった。

真の元凶に思いを還すべく。巡り続ける怨嗟の円に、乗ってしまった。

『山の気も、彼女の思念にあてられて染まり？歪み？を生んだりしたのだと思うね。きみがダリに遭遇した際は既に彼女は楔ぎに行っていたというが……あの社の周辺が、田淵神社および近辺を流れる川の水源だろう？ 気が流れてくる、ということはあるのではないかな。水気は霊を呼び易い、というしね』

あの？歪み？の数の多さと範囲の広さは、つまりそれだけ彼女の憎悪が凄まじく、山の膨大な気を利用して己の呪に還元したがためだと。

『で、肝心のその恨みの根源だが……古川曰く、彼の父親は失踪したのだそうだね』

『うん。風当たりがきつくなってから、って言ってたかな』

『……そうかい。では、やはりそこが、一番の元凶かな』

『どうということ？』

『元は、男子禁制にして巫女の神性を保ちながら行われる祭事だった、と彼は言った。そして変質し、よそ者を遠ざけるものとなったと……この「元は」というのが幾分ひつかかってね……つまり、よそ者を遠ざけざるを得ない、そんな変化を要される事態が、起きたのではないかと。僕は、そう思うのだよ』

儀が変質し、神性を持つはずの巫女が虐げられるようになった理

由。

神代の母が「りょうこん」へ至り焼かれた理由。

古川の父が消え、余所者への風当たりが強くなった理由。

神代が焼かれ、異界に去った理由。

古川が消え、異界に去った理由。

「外部の血、か」

考えるほどにえぐみを増していく物語に、司は気持ちの悪さを感じて思考を止めた。呪い呪われるというおぞましい関係性が織りなす世界は、あまりにもグロテスクで受け入れがたい。

祖父の残した「呪いの痕を辿れ」というのは、これから先もこうまで恐ろしいものを見続けることを強要される道なのだろうか。自分で考えて、この先の苦難に対して司は怖気を覚える。今まで何度も見てきたものであっても、深く関わることは直に接することだからだ。

けれど受け入れがたいその先に進もうとする人ばかりが、司の周りを囲んでいる。難儀な場所に来てしまった、と思いはするもの、不思議と止まる気にはなれない。

横を向けば、小野が居る。

「……だから、やらなきゃ、か」

「なにをやるんですか、司さん」

「いや、特に変わりなく。今までと同じことを、同じようにやるだけさ」

「そうですか」

静かに、足下の水路を眺めて小野はうなずいていた。しかしよく見ると表情は、沈んでいるわけではなく、

「でしたら、わたしもまた。今までと、同じく」

定まった目標に猛進しようという、気概の感じられる瞳で、前を見つめていた。

……あの日、神代を焼き焦がした焔。死に際に神代がその相手と呼んだ「カノエ」という名。なんらかの手掛かりとなりそうな、神代が力を借りたという相手「やおのななし」。これだけの材料が揃って、いつまでも小野が沈んでいるはずがないのだった。

「あれが、あいつが、カノエかもしれないのなら」

獰猛な獣のごとく犬齒を剥いて。

「やっと、尻尾をつかめたというのなら」

暗く薄闇に閉ざされた目をして。

「止まってなどいられません 奴を、呪うまでは」

叫ぶ小野の言葉を耳に通して。
司は、ゆっくりと面をあげる。

「なら、小野のあとを追うよ」

「止めるためですか」

「止めない。ただ、呪うことの意味を教えるだけだよ。小野が全てを行う前と、行ったあとに」

「……それ、意味無いですよ、きっと。わたしは、神代さんの末路を見てもなお、止まるうとは思えなかったのですから」

「だろうね。だからこれたぶん、自己満足だ」

司が笑いかけると、小野はにこりとししないで司を見ていた。

「意味無いですよ、絶対」
「うん」

ざわりと風が揺らめく。水路でしづきが立ち、水気が頬をかすめる。

そろそろ梅雨が明けるだろうかと考えながら、司が先に立ちあがった。

二十一題目 「呪いの残響」と廉太郎が歯噛みする（後書き）

というわけで合宿因習編でした。

かなり長く間を空けてしまいました。しかも長いです。

ともかくもこれで折り返し、あとは下るだけです。テンション的な意味でも話の暗さ的な意味でも。

では次の四章でまたお会いしましょう

以下どうでもいい解説

火箸：「火」が転じて「槌」。そこに爪立てて「つまむ」動作から連想しての「箸」。重心が普通の刀とだいぶ違う特殊な野太刀で、古川の強靱な膂力・握力・精密精緻を極めた指の動きが可能とする技。たぶん練習してもできません。こんな技あるわけない

牢屋の脱出方法：たぶん絶対できません。元ネタは上海……ムーラ
ンかナイトかどっちかだった気がする。少しずつ格子をひんまげて、
さんざ苦労して「開いた！」と思ったら仲間が後ろの壁をぶつ壊し
て助けにくるといふ素敵展開の映画。

二十二題目 「学期のおわりと夏のはじまり」と司が意気込んだ(前書き)

この作品はフィクションです。実在した風習などを参考にしていますが地名、人名、団体名、事件名などはすべて架空のもので

では四章開幕。

二十二題目 「学期のおわりと夏のはじまり」と司が意気込んだ

わずかな湿り気を帯びた風が教室の中を吹きぬけて、窓際の席に座る司の鼻先をくすぐって過ぎていった。正面の前納まえのはうだるような暑さにやられてか机と同化せんとする勢いでへたれており、天然パーマにも心なしが艶がない。黒ずんだスチールウールを思い浮かべて、司は火を点けたらどうなるだろうと夢想した。

「目取真くん」

「あ、はい」

見慣れているが聞き慣れてはいない己の名を担任に呼ばれ、司は少し嫌な気分になりつつも顔には出さず、すつくと席を立ち教卓へ向かった。

友人や知人はともかくとして、教師からは苗字で呼ばれることを余儀なくされる。いい加減これにも慣れなくてはならないのだろうが、幼少期から七歳までの間に一切、名を呼ばれることのなかった司には、未だ違和感をぬぐい去ることのできない事柄である。

司とさして身長の変わらない物理教師、牛勿理久うしもちりくは夏にもかかわらず分厚い白衣を着こんでおり、ミヨウガの千切りのようで色素の薄い髪の間隙から伏し目がちに司を見て、通知表を手渡してくれた。

「ま、まあ、なんです。期末で多少挽回できた、というところでしょうかね。ぶ、部活動に精を出すのも大事ですが、勉学にも励んでくださいね」

「はい。どうも」

おどおどとしているのは別段司に怯えているわけではなく、もとの性格であるらしい。そのことで生徒からもいじられている牛勿だが、教え方は良いので人気はある。物理実験準備室を活動場所として提供してもらっている手前、忠言もむげにはできない。素直に頭を下げて、司は下がった。

「あ、あああと」

「はい？」

「れ、廉太郎くんによろしく、お伝えください。追試、受かってよかったね、と」

「……ああ、やっぱり期末ひっかかってましたか」

ぶ室では『今回赤点はなかった』と豪語していたのだが。怒る気力も湧かず、ただただ呆れて司は首をうなだれた。牛勿は眉を八字にしながらかみ笑み、もうひとつ付け加える。

「それと、きよ、今日は六時で、完全下校ですので。きてれつ研のみなさんにも、そのように」

「わかりました伝えておきます」

通知表を開きながら席に戻る。するとなるほど、中間の時にまずいかもしれないと思った科目がわずかに上向きになっており、そのおかげか全体として四と三が多い、まずまずの成績となっていた。

ノ木斗目高校ではよほどひどい成績でなければ部活動停止処分は下されないが、元から外聞の悪いきてれつ研のメンバーである司たちでは、睨まれて風当たりが強くなる可能性はある。

先月の穂波田村での一件も、前納と蓮向はまむかいが小野と司の不在を誤魔化し、踊場おどしばが情報を隠蔽することでなんとか尻尾はつかまれずに済んだのだが、怪しまれはしたのだ。グレーゾーンを走る司たちを、レッドカードに手をかけながら教師陣が見張っている形であった。

無論夏休みに入るので監視はなくなるといってよいのだが、まだ油断できないな、とどこか気を引き締める。

司がそんな物思いにふけりながら椅子に腰かけると、牛勿がしげしげと教室の中を見回していた。終業式も終わり、ホームルームも終わり……もはや、やることはひとつしか残されていないのである。牛勿はごほん咳払いひとつ、そわそわとしている生徒の氣勢を感じとったのか。

「……ええ、では、通知表も配り終えました」

破顔一笑、高らかに宣言した。

「晴れてみなさん、お、お待ちかねの 釈放です！」

すぐにも教室外へ駆けだそうとしていた数人がずっこけた。

「釈放ってなんだよ牛勿せんせー」「あ、ままちがえました」「ママ違いました？」「まちがえ、です、間違いました！ 釈放もとい解放です！」「どつちにしてもあんましイイ意味じゃねーよう」「え、ええい！ いいんですこんなもの！ 定型文などくそくらえです！ そ、それでは皆さん、登校日まで、さようならっ！」

顔を真っ赤にして、最初に教室を出ていったのは牛勿だった。教室中がどつと笑いの渦に取り込まれ、ひとしきり笑ってその熱が冷めてきたところに、ぞろぞろとクラスメートは出て行った。

静まり返って、遠く他の教室から漏れた音が響く室内へ残されたのは三人。小野が来るまで時間を持て余している司と、成績を見てから起き上がらない屍と、昼からの部活動に備えて昼食をとり始めていた、スポーツ刈りで背の高い男、蓮向である。

いかり肩でどこもかしこも太くたくましい体型の彼は、一番大き

いサイズのシャツを着ているらしいが、腕も胴周りもパツツンパツツンになっていた。そのくせボタンはきっちり襟元まで留めているため、いつか頸動脈が締まって倒れるのではないかと司は密かに心配している。

「蓮向もこれから部活？」

「……夏は、耐える季節だ。応募していた懸賞が当たっていれば、知人に誘いをかけて谷峰やほうという海沿いの町にでも赴こうと思っているのだが……残念ながら私の夏は、部活一色のようだ」

誰と行こうと思っていたのか、蓮向は深く沈んで落ち込んだ。恨みをぶつけるように、アルマイト製の弁当箱（推定縦幅十五センチ、横幅十センチ、深さ五センチ）に詰め込まれた大量の白米を梅干しひとつと海苔卵ふりかけのみで食していく。彩りの少ない食事だが、見ていてどうにも空腹を覚えた司はお腹を押さえて椅子にもたれかけた。

「こつちも部活だよ」

「……お前の部活は、フィールドワークを主としていたのだったか。夏は、どう過ごすのだ」

「今日ミーティングして、細かい行き先決める。先月行った宿を拠点にするとか言ってたかな」

「……だが、三年生もいたはずだな？」

「いるよ、会長と副会長。でも素行不良でも成績優良だからそんなに問題ないみたい」

「……素行不良。知っているぞ。たしか眼鏡で、長身の。誰かに似ていた……」

「ああ、滝廉太郎に似てると思ったんなら間違いなく該当する人いるけど、その人は三年生じゃないし眼鏡だけでも頭は良くないよ。でもなんでもあの人のこと知ってんの？」

「……少し前、ふらりと組手をしに柔道部じゅうどぶに来た。私もやりあつたが、三十秒も保たなくてな。レギュラー全員勝ち抜きされて意気消沈だ。変則的な動きが目立つものの、柔術使いのようだったが、何者だ？」

強者への憧憬などが感じ取れる目を向けながら問われて、司は少々困る。強さはそれこそ折り紙つきの男ではあるが、とても憧れや尊敬の念を向けるべき相手とは認識できないような思い出が多すぎるためだった。……先日も、真剣でスイカ割りをしているのを目撃したばかりだ。

「えーと、歴史があつて実戦的な、武芸十八般修められそうな古流武術をやつてるとか」

「……なんと。形骸化せずに残っている古流の継承者か。しかも幅広い分野に手を出しつつもあれほどの使い手足り得るとは、すばらしい御仁だな」

「え、いや……」

「……きつと武に対して真摯に向き合うが故の組手だったのだろう。ただの素行不良殴り込み野郎かと思つていた。認識を改める」

「え、あの……」

なるべく夢を壊さないように、廉太郎個人については触れず説明をしたのだが、あらぬ誤解を招いてしまったようだった。少なくとも司の知る廉太郎は真摯と呼べるような精神性はなく、ただただ強者との戦いを求めるだけのバトルマニアである。馬鹿が力を持つとああなるという典型例だ。

「……てめーら、いいよな。部活、行けるんだもんな」

と、ここで屍が声を発した。思わず左を向くと、机に突っ伏して

いた前納がふふふと笑いながら起き上がる。手には、汗と涙でふやけた通知表が握られていた。

「どうすりゃいいんだっ！ おれ部活動停止処分だぜ！ 赤点は回避したつてのに、なんだつてんだこの扱いはよ！」

「いやだつて前納、中間で半分くらい赤点だつたじゃん」

「終わり良けりゃすべて良しだろうがよー！」

「……悪^あしだ、馬鹿め」

「おお、言ってくれやがったなこんちくしょう！ 蓮向、お前とはいつペン決着つけなきゃと思つてたぜ。おれはまだ合宿ん時締め落とされたの忘れてねっかな！」

びしりと指を突きつけ、天然パーマの髪をかきあげてから前納はワイシャツを脱ぎ棄てる。いつも通りにド派手な柄物のシャツが現れ、より一層、前納の小物感が増した。

面倒臭そうに箸を止めていた蓮向は、片手で口元を隠しながら司に耳打ちする。

「……司、こいつ女湯のぞきにいこうとしていたのだ」

「うわ最低だね前納しねばいいのに」

「司ー！ 今おれ成績のことが響いててメンタルが豆腐並になつてつから！ あんま罵らないで！ そんな目でこつち見ないで！」

「そして蓮向偉い。よく止めてくれたよ」

「……なに、大したことはない」

「罵倒からの無視かよー！ もういやだ、おれ成績親にも見せらんねーし、どこにも行き場ねえよ！」

また突っ伏して、むせび泣く。だが司は成績表を親に見せたことがないので、そういうところの機微がいまいちよくわからなかった。ちなみに蓮向はこつこつ勉強していたのか、成績は司よりも上位を

キープしていた。

「つーか司も中間はそんなによくなかったじゃんかよ。なんで期末上がってんだ」

「成績良い人に教えを請うたんだよ」

「は、蓮向！ テメエか！」

「……私も教えようかと言ったが、その時には他に教師役を見つけていた」

残念そうにしょぼくれた様子で箸の先をかじる蓮向を見て、前納は胸をなでおろしていた。どちらの反応もいまいち意図するところがわからず、しかし司は特に理解しようともせず、勝手に話を続ける。

「小野のの方が蓮向より成績よかったから、あつちに頼んだんだ」

「……勉強は負けたが、体力ならば負けていない……！」

「？　なんで怒ってるのさ。それに意外とわかんないかもよ、小野もさつき言った流派の弟子だった時あったらしいし」

「……前納、私は、生きている価値があるのだろうか。死ねばプラマイゼロだろうか」

「しっかりしろっての蓮向！　おまえでプラマイゼロってんじゃおれは死んでもマイナスになるだろうか！」

前納は自分で言って自分でダメージを受けていた。

「……お前には笑いがあるだろう」

「なに言ってるんだ、おまえがおれをいじってくれてっからこそその笑いだろ！」

「……いじりか。ふ、それも、いいかもしれない。私と組んでくれるか、前納」

「あたりめーだ、テメエ以外と組んでられつかよ！」

またも前納はおいおいと泣き始め、蓮向がそれをなだめていた。二人がなにをそんなに盛り上がったままになっているのかわけがわからず、司は首をひねらざるを得ない。

「や、生きてて誰かの傍にいられる以上のプラスなんて、あるわけないでしょ」

ぼそりと自論を述べると、二人は励まし合いをぴたりとやめた。あまりにも唐突すぎて司の方がびくついてしまったほどだが、二人はふんふんとうなずきあって、やがて二人同時に、笑顔で司の肩を叩いた。さっぱりわけがわからなかった。

「司さん、おまたせしました」

そうこうしていると、背後から、涼やかな声があがる。司がそちらを向くと、司の目線くらいの高さに頭頂部が見え、小野香魚香おのあゆかが立ち尽くしていた。いつ入ってきたのやら、だ。

初めて会った時より幾分伸びて、肩を越えるくらいの黒髪。その下にある整った面立ちの中、半分閉じたように眠たげなれども大きな双眸めくろは、十二分な目力を感じさせる。また白磁のように白い肌も表情と合わせて弱弱しげな印象を映すが、病的ゆえのきわどく危うい美しさも含んでいるため、妖しい輝きが増すばかりだ。

夏になって暑いだろうが服装は変わることなく、男子のシャツにカーディガン。下はプリーツスカートに日避けのオーバーニーソックスだった。

過去に負った右腕の火傷痕を隠すべく半袖を着ることのできない彼女は、しかしその事情を周りに話すわけにもいかず、校内で浮いた存在となってしまうている。今も、額につつすらと汗をかきなが

ら、きよときよと三人の顔をかわるがわる見比べていた。

「おう、小野ちゃん。いまちよーど、小野ちゃんの話してっぜー」

「……来たか、プラスの女」

「な、なんですか？ 特に蓮向さんの発言」

だがそれで区別することもなく、突っ込んで理由を問うわけでもなく。

ごく普通に接している前納と蓮向を見てみると、なんだか司は温かい心持ちになるのだった。

「なんでもない、と思うよ。じゃ、ぶ室行こう」

#

「やあ二人とも。前回の会議で僕は夏のフィールドワークを、先月僕らの訪れた宿屋を始めとしてN県の方へ出向こうと言ったが……あれはなかったことにしてくれ」

暑苦しいぶ室の奥で会長椅子の横に立っていた人影は、二人の姿を認めると開口一番そのようなことを言った。くせのない柔らかそうな髪は襟足を少し伸ばしており、背が低く小柄なことと相まって性別の判断を誤らせてしまいそうな外見となっている。その人影、踊場おどりば小太郎はつぶらな目を細めて、シャツの襟元をぱたぱたと煽っていた。この暑い中でなぜか少し青ざめており、唇を歪めて苦笑いを浮かべていた。

「え、いい宿だったからまた行きたいと言っていたではありませんか」

「なに、ひよっとしてまた知り合い割引やってもらおうとして拒否

られたの？」

「そういうわけではなくてだね……その宿自体が、なんというか、ないというか」

むにやむにやとぼやく踊場は「まさかあれがマヨイガか」などとよくわからないことをつぶやいていた。横で渋面を浮かべて椅子に座っていた人物は、「とにかくそっち方面はやめよ」と宣言し、話題を打ち切った。

椅子を回転させて司たちに向き直った人物は、肩に届く辺りで緩くウエーブした薄茶色の髪をかきあげて耳の後ろへ流し、大半の男子ならばどきりとするような、物憂げな表情を浮かべてみせる。彼女が立ち上がれば、グレーのハイソックスに包まれた、すらりと長い脚が机の陰から露わになった。司とさして変わらない身長はおそらく一六五センチほどで、わりとスタイルも整っている。立派に美人である。

しかし服装は、上は薄緑のジャージに下は濃紺のスカートというどうしようもない組み合わせだった。ジャージは袖をまくっており、もはや羞恥など捨ててしまったかのようだ。

この女、口論義風鈴くわんぎふうかかづりについて唯一評価できそうな点は、ジャージのジッパーが少し下がっており、胸元がはだけかけているところだ……とは、知人の弁である。司の言葉ではない。

「しっかし今日もあつついわね。物理実験室の冷房温度もつと下げてこようかしら」

口論義は、司たちがいましたがた入ってきた扉の方を睨みつけてそう言った。普段閉じられているはずの扉があげ放たれていた理由は、冷房設備が扇風機しかないが室内に隣から冷気を導くための動線を確保しようとの目論見があったらしい。

「昨今のエコブームに押されてか、これ以上設定温度は下げられないようになっていたよ」

「じゃあなんか怖い話でもしましょうか」

「きみをビビらせることができるような話を知る者がいるとは思えないけれどね。心頭滅却したまえよ」

「そんなこと言っても暑いものはあついのよ。そうだ司くん、牛の首の内容詳しく知ってたりしないの？」

「あれ都市伝説でしょ。というかビビるどころじゃ済まないじゃんアレ」

「うう、わかったわよ、もういいわよ。洒落にならないくらい怖い話でも探してやるわよ」

不貞腐れた口論義はかちかちと携帯電話を操作しはじめ、なにやらホラーサイトなどを廻ろうとしているようだった。

「廉太郎さんやサワハさんはまだ来ていないのですか？」

お茶を淹れつつ小野が問うと、定位置に腰かけて頬杖ついた踊場が、自分の茶碗を受け取って答えた。

「サワハくんは家の手伝い、廉太郎は先日ので生徒指導部だ」

「え、それって」

「近所の庭先で刀振り回してる青年がいるんですがアレおたくの生徒じゃありません？ との連絡が来たらしい。まったく馬鹿な奴だよ、だから僕は木刀にしておけと言ったのに」

にやにや笑いをまったく隠せていないまま、踊場はさもつまそうに煎茶をすすった。暑いからこそ熱いものを呑むと、気分がすすきりすることだった。

「スイカ割りの件か……」

「いや、今回は流しそうめんをするために竹を割ろうとしていたらしい」

「どっちにしても情けないというか、なんというか。じゃあ四人で決めるの？」

「一応、きみたちが来るまでにスクラップから行き先を漁っておいた。海から山まで色々だね」

どさりと机に広げられたスクラップには、行方不明の事件や、変死体の事件だとか、いかにも口論義が好みそうなものがピックアップされていた。司もじつくりと見てみるが、呪いなどに繋がりそうなものがどれか、と言われると、なかなか選び出すことはできない。ふと正面を見ると、小野は行方不明事件ばかりをより分けていた。

「なんでそういうのばかり？」

「先月の一件で、わかったばかりではないですか。？歪み？へ落ちれば、人は消えるようにその場からいなくなるということが。まあ歪み？がああした呪いの念による人為的なもの以外で発生するのはわかりませんが、それでも他の事件よりは、近づけるはず」

せつせと腕を動かして作業を続ける小野は、静かに瞳を燃やしていた。

あの夜、神代かしろと共に歪みの向こう、異界へと消え失せた女性。古川仁美と公子の霊を、おそらくは呪いによる焔を操って焼き尽くし、罪深き巫女をも焼き殺した彼女を、殺される前の神代は「カノエ」と呼んだ。

その名は、被い屋の仕事の最中全身に火傷を負い死亡した小野の母、山女魚やまめが、今際の際に口にした名である。なにか関係があると思ひ、必死になって探すのも無理からぬ話だった。

「つていつても、年間数万人規模で行方不明者っているだろうし」

「あ」

「しかも大抵は一時的に家出した女の子とかで、深刻なのはそこま
で多くないんじゃない」

「あつ」

閉口して、しょんぼりと小野は手を止めた。悪いことを指摘して
しまったようで、少し罪悪感が芽生えた。

「ところで踊場さん？やお？つて地名のところて事件あったりとか、
？やおの？または？ななし？つて名前の人が事件起こしたりとか、
なかった？」

「やお？ ああ、先月の事件で、最期に神代が言っていたという言
葉かい。そちらは別にして分けてあるが」

「ありがと」

司は、小野の横に積まれたスクラップから、踊場がより分けてく
れた分を探す。

あの一件から、？やおの？そして？ななし？という言葉が気にな
っていた。偶然か必然か、ゴールデンウィークの事件で加良部を追
い詰めたスレッドに出た人物の名が？七無？。ななし、と読めなく
もないのだ。

事件の終息時、加良部は歪みの消失と共に消えた。神代が消えた
時と、状況が似通っている。そこに繋がりそうな名前が出てきたの
だから、調べざるを得ない。ひよっとしたら、四月の犬神事件の最
後で死体が消えたのも、あの場にあった気が術者の負の念に染めら
れた結果歪みとなり、呪詛返しのことであって犬神使いを呑みこん
だのではないかとさえ思えた。

ではその呪詛返しを行ったのは これも、？やおのななし？な
のだろうか？ 考え過ぎだ、と司は頭を振る。

「しかし考えてみれば、あの事件には不可解なことがあるね」

「なに、踊場さん」

「いやね、最終的にあの一件では、神代が狐を憑依させたり、霊を視たりしたわけだが。……小野くんは、最初会った時になにも言わなかったのかい？ 異能察知の微能力は、発動しなかったのかい？」

「あ。そういえば」

霊を視ていたにせよ、狐を操ったにせよ、それらの異能が備わっていたのであれば、小野は反応したはずなのだ。神代に引きあわされてしまったこともひよつとすれば、異能察知の副次的効果である危険域誘因体質によるものかもしれないが、それにしたところで、異能に接して小野がなにも言わないわけがない。

二人が彼女を見据えると、作業の手を止めた小野は、じつと己の片手を見つめて、なんと飲みこめないものを口内に抱えたような顔をした。

「最初に出遭ったのは、司さんと一緒にあの神社を訪ねた時ですが、なにか察したのであればもちろん言いますよ。少なくともあの時は、神代に異能は備わっていませんでした。しかし。次に出遭った時、社の舞台に立つあの人には、確かに異能が感じられました」

「それ……神代が言ってたことと関係あるのかな」

「なんのことです？」

「カノエに向かって言ってた、あの言葉だよ。『十九年も力をお借りして』ってさ。もしかしたら、あれは借り物の力だったんじゃない？ だから小野も反応しなかった」

「十九年間借りていたのなら、前日に会った小野くんは察知できるだろう」

「じゃあ十九年借りてたけど、力を使える周期が決まってて、あの儀式を執り行う間だけ使えた、とか」

古川は、あの祭事を干支一回りごとにしか行わない特別な物だと語った。同様に、神代の異能も儀式に合わせた周期ごとにしか発生しない、借り物の力だったのだとすれば、辻褄は合うように思われた。

「考えたって仕方ないわよ」

唐突に口論義は携帯電話を閉じると、誰にともなくぼやいた。

「どうせ奴は死んじゃってるんだし。霊体さえ焼き払うような呪術師、カノエが相手だったっていうんじゃ、司くんの霊視があっても意味ないし。ひとつにこだわりすぎると、大局見失っちゃうわね」

「……そう、ですね。もう神代からは、何も聞き出せないのですしね」

もっともな意見である。ただ、それ以上に、神代の名を口に出す小野にひやりとさせるほど冷徹な意志が感じられて、司たちは黙らざるを得なかった。

話題を切り替えて、司は小野から視線を外す。

「そういえば二人は今年、受験生の夏って奴だよ。そんなに長期間フィールドワークとかしてていいの」

「もちろん夏期講習とかはあるわよー。でもこれで最後の夏っていうなら、きてれつ研での思い出なんかも作るときだよ。夏が終われば、実質あたしもお役御免だしね。そだ、もう次期会長決めところか。小野ちゃん」

「はい」

「決定」

「いまのは呼ばれて返事しただけなんです……それにわたしはま

「だ一年なのですが」

「だって廉太郎くんもサワハもそういうの苦手そうですね」

なんだか以前もこんな会話をしたような気がした。実際のところ、踊場の次に多く雑務処理を担っているのは小野なので、そうした観点からもこの決定はしごく当然の流れとも言えた。

「……まあ、二年生のお二人から反対意見が出なければ、引き受けますよ」

「あらそう。意外とすんなり決まったわね。じゃあまずは形式から、この椅子座ってみる？」

「結構です。そこ窓際ですし、一番暑いじゃありませんか」

「ち。うまく交代してもらおうと思ったのに。ま、今しばらくはあたしが会長やつとくから、踊場から流れ教わるなりなんなりして心構えから固めといてね」

「言われずとも」

簡単に過ぎる気はしたが引き継ぎを終了し、小野はまたスクラップに目を落としていた。司も手元の山を次々に消化していくのだが、なかなかよさそうな場所は見つけられずにいた。事件にどれほどの奇妙さがあるか、そしてここからの距離はいかほどか、といったさまざまな要因を考慮にいれると、許容できる幅は狭まってくるのだ。

「宿泊費用を考えると、それこそ長期間は難しいよね」

「十人乗りくらいのレンタカー借りたりネットカフェとかで寝泊まりするつもりだから、あんまり宿泊費用はかかんないわよ」

「いやレンタカー、って、男女一つ屋根の下で寝るの……」

「そりゃオープンカーで十人乗りはないでしょうよ。花形満じゃないんだから」

「そうじゃなくて倫理的な意味でどうなのかなって」

「あのねえ司くん。三カ月も一緒に過ごしてるんだからわかるですよ。」

呆れたような声音で口論義は窓べりに腰かけ、唇をとがらせた。司もさすがに気にしすぎたか、と思い、反省の色を見せる。

「そんなことになったら、小野ちゃんが蹴っ飛ばしてなんとかしてくれるわよ。」

「信頼とか信用はないの?!」

「業務面とかではもちろん信じてるけど、それとこれとは話が別よ。」

踊場がしょげた面持ちで茶碗の底を見つめ始めた。

つかつかと横に歩いて来て司の耳元に口を寄せた口論義は、ぼそぼそと続ける。

「……でも、仕方ないわねー。そんなに司くんが気になるなら、私がない時に全員に尋ねてみなさいよ。機会があったら誰か襲おうと考えたことありますかー? って。こっそりあたしが隠れて、虚言看破したげるから。」

「やめたげてお願いだから。」

一度か二度は考えたことあるかもしれない人間がいるのだから。人間関係が複雑になるから。そんなことが頭をよぎり、冗談でも口論義の姿が見えない時にはそれ系統の話をしないように心に誓う司だった。

……考えてみれば踊場は口論義と幼少期からの付き合いなのだから、これまで十年以上もそうした思考を隠し通してきたのだろうか。そうだとすればある意味で尊敬に値する功績だ、と司には思えた。当然なにも聞こえていない踊場は、茶碗を片手に首をかしげて司を見ている。

なぜか、哀愁が漂っているように感じられた。

「と、とりあえず日数から決めた方がいいんじゃない？ そうは言っても予算は限られてるだろうし、日数決まれば滞在時間の基準ができるだろうし」

「そうねえ……日数は、五日か六日でいいんじゃない？ それ以上伸ばすと八月の夏期講習にかぶるし。今月末から来月頭まで、って感じ。里帰りとかで月末ダメって人いるかしら」

「僕と口論義はもともと祖父母と暮らしている」

「実家に家族居ないしどこだかわかんない」

「母の件の後親族つきあいは父方のみになりましたが、彼岸の頃に会うのでいいです」

「サワハんところは両親が駆け落ちでタイに移り住んだ時に親族と縁が切れたそうだ。で、俺は因業ジジイに会いたくないから実家は行かね」

しれっと参加してきた廉太郎は、さも暑そうにシャツのボタンを外して風通りを良くしていた。さすがの彼でも生徒指導部の前では身なりを整えることを知っているらしくった眼鏡を外して額をぬぐう彼を見て、踊場は我今愉悦にまみれたりという顔を向ける。

「やあ廉太郎。息災かい」

「んだよシヨタ郎、嬉しそうにしてるとこ悪いが別段今日は叱られてただけじゃねえぞ」

「いちおう、叱られることは叱られたんだね」

「おうよ、だが褒められもした。空き巣をとっ捕まえたんだよ。どーだ、表彰もんだろ」

ワイドショーとかでネタになりそうな話を引っ提げてきたものである。得意げに笑う廉太郎に反比例して、踊場の愉快そうな表情が

なりをひそめていった。

「というのも昨日も素振りしようと思ったんだが、いつもの時間にやるとまたお隣さんに文句言われると思ってな。半ドンで終わったからお隣が留守の昼間に庭先出てったわけだ。そこで、お隣に忍び込もうとしているの見つけて、あつと思つたから刀を振って、払つた鞘でずがと殴りつけたつた。んでもまだ逃げようとするから鞘を足下に投げつけ下緒さげおを絡ませてな、見事な大捕り物つて次第なのだぜ」

机に腰掛け振り向きざまに言う廉太郎は、鼻高々である。たしかに、危ういところを救われたのでは、お隣も文句ばかり言うわけにはいかなくなったのだろう。世の中はどう転ぶかわからないものだ。

「ところで廉太郎くん、その左手に持つてるのはなによ？」

「ん、これか？　これな、さつき生徒指導部で叱られ褒められしてきたわけなんだが、お隣さんもお詫びとお礼の品を持ってきてくれたらしいんだ。なんでも海沿いの町にある宿屋の、豪華宿泊券らしいぜ。なんだつたか、たしか、たにみね？　そんな感じの地名だとか」

「……谷峰やほつじゃないかい？　たしかそちらには、座棺ざかんなど興味深い風習の残る土地があつたと記憶しているが」

「ほう、そうかそうか。んなら話は早いな、全員でそこ行こうぜ。実はこれ使用期限が来月末までなんだよ。まあ一泊二日だけなんだが、その分の宿泊費も食費も浮くからいいだろ」

廉太郎の中ではすでに行き先はここへ決まってしまうているようで、うきうきした様子が全身から滲み出していた。司が口論義にその町までの距離を問うと、これがまた都合のよい位置にあるらしかった。半日もかければ到着できるので、帰りのことを考えても三、四

日は調査などが可能だろう。

「で、そこは奇怪な事件とかは起こってるの」

「ええと……ああ、ありましたよ。今まで確認した新聞のスクラップには大してなにも載っていませんでしたが、奇怪事件展覧列挙集のデータベースに記録があります」

携帯電話を使ってデータベースに検索をかけた小野は、ふむふむと自分で読んでいる。司はしばし自分の前にあるスクラップの山から谷峰の地名が書かれた記事がないかを探すが、どうもこちらにも見当たらないようだった。せいぜい、長寿のご老人が多いという地方新聞の切り抜きくらいである。

と、読み終わったのか小野が画面を見せつけてくる。そこには『谷峰怪事件』とある。

「なになに……一九八二年、町のはずれで、十数年前に死亡したはずの老人を見たという噂が流れ、その後目撃証言が相次ぐ……」

「ちなみにこんな話も」

一旦司から取り上げて、再度手渡されると谷峰の町についての説明が表示されていた。

「谷峰とは昭和に入ってからつけ直された名で、それ以前は……四つの支流を持つ河川と、町を取り囲む山からの出入りに用いられた四つの道。町から飛び出たそれらを動物の尾になぞらえ、二つの数を合わせて八つの尾。つまり、やほうではなく、八尾やほというのが元々の名だそうです」

意味深に微笑み、小野は口許に手を添えすぐに笑みを隠した。

二十二題目 「学期のおわりと夏のはじまり」と司が意気込んだ(後書き)

とついでに四章開幕。海へゆく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9962q/>

百奇夜行で鬼天烈な。

2011年12月3日23時50分発行